上の平遺跡

——平成６年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1995. 3

茅野市教育委員会

UENOTAIRA SITE

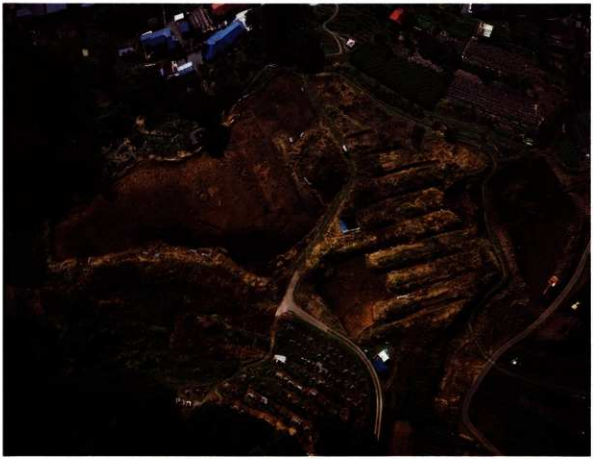
上の平遺跡

——平成６年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1995. 3

茅野市教育委員会

遺跡遠景



遺跡全景

序　文

上の平遺跡は平成６年度県営圃場整備事業米沢地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

上の平遺跡は昭和27年に小規模な発掘調査が行われただけで、その内容は不明な部分が多い遺跡でしたが、今回の発掘調査によりその全容が明らかになりました。

発掘調査では53軒にも及ぶ縄文時代中期前半から後半にわたる竪穴住居址と、これらに囲まれた中央広場と思われる位置に方形柱穴列や墓壙が、また、台地内に入り込む谷部には縄文時代中期前半から後半にわたる土器の廃棄場も確認され、ほぼ縄文時代中期の環状集落の全容を把握することができ、縄文時代集落研究に貴重な資料を提示することができました。これらの遺構群に加えて時期は不明ですが、縄文時代の落し穴と思われる坑が規則的に検出され、当時の狩猟活動の状況を復元する上には重要な資料を得ることができました。

本遺跡の立地する霧ヶ峰南麓地域は、大正13年に鳥居龍蔵博士等により編纂された『諏訪史第１巻』当時から、黒曜石製の石鏃等の石器が多数採集される地域として注目されていた一帯で、〝縄文のビーナス〟を出土した棚畑遺跡や市域最大の湧水地である大清水を控えた駒形遺跡、特異な形状を呈する双口土器が出土した一ノ瀬遺跡等の大規模な遺跡が密集する地帯であります。黒曜石の原産地である和田峠を背後に控えている地理的環境を踏まえ、当地の遺跡群の性格について黒曜石製石器を専ら製作した遺跡群ではないかと推察され、八ヶ岳西南麓遺跡群とはやや性格の異なるものではないかと考えられています。今回の上の平遺跡における調査所見によっても黒曜石との関わりをつかむことができ、従来から考えられてきた遺跡群の性格について貴重な所見を与えることができました。

今後今回の調査により得られた成果や、今年度長野県教育委員会が主体となって行われた八ヶ岳西南麓遺跡分布調査の一環である駒形遺跡分布調査の成果も加えて、今後この地域の遺跡群の特性が解明され、地域の歴史研究に裨益することでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成７年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　昭二

例　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成６年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う、長野県茅野市米沢上の平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金・市費等の公費により、茅野市教育委員会が平成６年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅱ章第１節４．調査の体制として記載してある。

3．登録遺跡名は上の平遺跡であるが、同一名遺跡が市内に所在し、混同をさけるため諸事務関係については地区名を冠し米沢上の平遺跡と記載してある。

4．発掘調査は平成６年５月24日から12月22日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成６年12月から平成７年３月まで茅野市文化財調査室において行った。

5．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅱ章第１節２・４に記してある。

6．本報告書に掲載の遺構実測図は竪穴住居址・土坑等は1/60の縮尺とした。

7．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

8．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管されている。

目　次

序　文　　茅野市教育委員会教育長　両角 昭二

例　言

第Ⅰ章　遺跡の概観……1

第1節　遺跡の位置と環境……1

1．遺跡の立地と地理的環境……1

第2節　遺跡周辺の歴史的環境……3

1．遺跡周辺の遺跡……3

2．遺跡周辺の歴史的環境……5

3．遺跡の研究史……5

第Ⅱ章　発掘調査の概要……6

第1節　発掘調査に至るまでの経過……6

1．調査に至るまでの協議……6

2．発掘調査の方法とその経過……6

3．調査日誌（抄）……8

4．遺物整理・報告書の作成……9

5．調査の体制……10

第2節　発掘された遺構・遺物の概要……11

1．遺構の概要……11

2．遺物の概要……12

第Ⅲ章　遺跡の層序……14

第1節　調査区の基本層序……14

1．土層の基本的な堆積状況……14

2．土層の成因と性格について……14

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物……16

第1節　先土器時代の遺物……16

1．先土器時代の石器……16

第2節　縄文時代の遺構……18

1．竪穴住居址……18

2．円形柱穴列……90

3．方形柱穴列……94

4．土坑・ピット状遺構……100

5．ピット状遺構……107

6．独立土器・集石・遺物破棄場……108

第3節　中世・近代の遺構……109

1．地下式坑……109

2．地下室……110

第4節　縄文時代の遺物 ……111
1．縄文土器の概要 ……111
2．石器の概要 ……114
第Ⅴ章　調査の成果と課題 ……118
第1節　上の平遺跡の縄文時代中期集落の概要 ……118
1．住居址の構造 ……118
2．集落の形態と規模 ……121
3．周辺遺跡との相互関係と本遺跡の性格 ……123
第2節　上の平遺跡の落し穴状土坑について ……125
1．検出された土坑の概要 ……125
第Ⅵ章　結　語 ……132
図　版

第Ⅰ章　遺跡の概観

第１節　遺跡の位置と環境

Ⅰ．遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置　上の平遺跡は長野県茅野市米沢7678番地他（塩沢）に所在する。霧ヶ峰山塊は市域の北西隅に占地し、調査地のある米沢塩沢上の平遺跡はJR中央本線茅野駅から北東方向に約6.5kmのちょうど霧ヶ峰南麓のほぼ中央部よりやや東側にあたり、遺跡の位置する台地直下に米沢塩沢の集落が位置する。

遺跡の地理的環境　上の平遺跡の位置する霧ヶ峰南麓には永明寺山・朝倉山・カシガリ山が位置し、これらの山裾からは東より藤原川・前嶋川・檜沢川・横河川等の小河川が流れ下り、山裾に扇状地を形成する。また、これらの地形に加えて山裾には小規模なテラス状の張出しも認められる。

この霧ヶ峰南麓地域を巨視的に見ると、大きく内彎し霧ヶ峰南麓から流下する河川により浸食され、大きく３ブロックに分かれ、分断された地域内は河川による扇状地が発達し、扇状地単位で遺跡が群となる傾向が見受けられる。これらの扇状地に接する形で上川による沖積地が発達しており、扇状地と沖積地との接する部分に、東より塩沢・一本木・北大塩・鋳物師屋・埴原田の集落が展開する。霧ヶ峰南麓を流下する河川により浸食されている谷を遡ると、その源流は霧ヶ峰池のくるみにまで至り、霧ヶ峰のなだらかな丘を進むと、黒耀石の原産地地帯である和田峠に至り、本遺跡からの直線距離にして約13kmを測りその距離は約１日行程の範囲にある。

本遺跡は霧ヶ峰南麓に多い扇状地地形とはやや異なったテラス状台地に立地する。本遺跡の立地する台地と、南側に接する上川の沖積地との比高差は約28mを測り、一見すると本遺跡は孤立した状況を呈している。本遺跡のような立地条件を有する遺跡は八ヶ岳山麓では見受けられず、霧ヶ峰南麓特有の立地条件で同様なテラス状の台地に立地する遺跡としては棚畑遺跡などがある。

台地先端は崖状の急傾斜となり、テーブル状の孤立した台地を形作っている。このテーブル状の台地の範囲は割合広く、長さ約130m、幅約80m、面積約10,400㎡を測り、その平面観は不整形の台形状を呈する。台地上部の標高は940mから930mで、台地上において10mの比高差があり、東側が高く西側が低い起伏を有している。台地の上部の現況は東側が高く、西側へ傾斜する傾向を示し、台地中央部に浅い谷状地形が入り込み、台地上部を二分割し、そのため台地上は複雑な起伏を有している。

本遺跡の立地する台地北側は幅の狭い谷が入り込み、本遺跡が孤立したテーブル状を呈する一つの要因となっている。台地の斜面部は方角により異なり、塩沢集落と接する南側斜面は急斜面で崖状を呈するのに対して、谷に面する西側斜面部は南側斜面に比べてやや緩やかな傾向を示し、台地上に上って来る際には、こちらの方角が入り易い位置にあたり、西側に湧水が位置する点などを考慮すると、遺跡の正面は西側の谷を望む位置に想定することができよう。

霧ヶ峰南麓は市域において湧水の豊富な地域で、市最大の水源である大清水などがある。本遺跡に関わる湧水は台地の約110m西側、ちょうど霧ヶ峰山塊の山裾と上川沖積地の接する部分に位置する瀬神社境内に大きな湧水がある。湧水の特徴は八ヶ岳山麓の湧水が小規模な湧出なのに対して、霧ヶ峰南麓の湧水は規模が大きく、その様相は泉の状況を呈しており、絶えず良質の水がこんこんと湧き出している。この湧水は現在上水道塩沢宮の下水源として利用されている。

第1図　上の平遺跡位置図（1／37,500）

第２図　遺跡周辺の地形と発掘区（1／2,000）

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

１．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

周辺の遺跡の地理的位置　霧ヶ峰南麓は霧ヶ峰山塊の支峰である朝倉山から永明寺山までの約3.6kmに亘る。この地域は大きく弧状となり、藤原川・前鳴川・檜沢川・横河川等の河川が流れ下り、これらの下部には扇状地が発達する。これらの扇状地や崖錐地等には遺跡が展開する。これらの遺跡は大きく扇状地単位に大きなグループを形成している。また、扇頂部にあたる藤原川・前鳴川・檜沢川・横河川の沢筋の一部には、黒曜石が散布する地点が認められ、黒曜石の運搬ルートに関わったと想定されている。

藤原川・前鳴川による扇状地のグループ　藤原川・前鳴川により形成された扇状地は割合細長い扇状地を形成しており、このような細長い地形に牛ノ児遺跡・鳥の窪遺跡・一ノ瀬遺跡・芝ノ木遺跡が立地している。これらの扇状地端部はやや特異な孤立台地状の地形が形成され、よせの台遺跡・丸山遺跡が立地する。また、扇状地を望む山裾のテラス状の台地には上の平遺跡が占地する。

藤原川・前鳴川による扇状地グループの代表的な遺跡は次のようである。

よせの台遺跡　藤原川と前鳴川に挟まれた扇状地の末端に占地する孤立した台地上に位置し標高は920mを測る。昭和27年に諏訪考古学研究所[1]が、昭和51年に工場建設に伴い茅野市教育委員会により発掘調査[2]が行われ、縄文時代の集落であることが判明している。昭和51年の調査により縄文時代前期前葉竪穴住居址３、前期終末竪穴住居址１、中期後半竪穴住居址９、土坑22が検出され、遺跡の立地する台地の規模や検出された住居址等より、本遺跡は隣接する一ノ瀬遺跡の支村と性格付けがなされている。

丸山遺跡　上の平遺跡と同様に霧ヶ峰山塊より派生する小規模なテラス状台地に遺跡は位置し、標高は

第3図　周辺の遺跡とその地理的位置（1／20,000）

920mを測る。その内容については不明であるが、立地等より考えると本遺跡やよせの台遺跡と同様な傾向にある遺跡と考えられよう。

瀬神社遺跡　瀬神社は塩沢集落の産土社で、本殿は江戸時代末期に大隅流の矢崎房之助、矢崎善司により建造され、現在は茅野市有形文化財に指定されている。この神社の境内に位置する宮の下水源造設の際に水源地内より縄文時代前期前葉諸磯b式の土器片が得られている。同様な水源地内より縄文時代の遺物が検出されている個所は北大塩大清水にも見ることができ、溶ヶ峰南麓に展開する湧水地は縄文時代より重要な水場として利用されていたことが窺え、瀬神社内の宮の下水源は本遺跡や丸山遺跡・よせの台遺跡の重要な水場として利用されていたものと思われる。

一ノ瀬・芝ノ木遺跡　本遺跡や丸山遺跡・よせの台遺跡のような台地に立地する遺跡ではなく、藤原川により形成された扇状地に立地し、標高は930mを測る。遺跡の立地する扇状地は河川の侵食により南東に細長い尾根状地形となっている。遺跡は古くより知られ、米沢地区の考古学的調査を精力的に行った田実文朗氏も常に実踏に来ていたようである。本遺跡からは大量の黒曜石製の石鏃等の石器が採集されており、地元にはこれらの資料が保管されている。また、石器の他にも双口土器という特異な形状をなしている土器が耕作中に得られている。(3) 現在までに耕作や表面採集により得られている資料より見ると、縄文時代草創期有茎尖頭器から縄文時代後期加曽利B式深鉢、平安時代後期灰釉陶器、中世後半大窯期陶器まで幅広い時期の遺物が採集され、長期に亘る複合遺跡であることが判明している。本遺跡の特徴は長期に亘る遺跡である点と、黒曜石製石器、剥片が大量に得られる点にあり、これらの点を考慮すると本遺跡は黒曜石の加工等に関わっていた拠点的な集落であると考えられる。

鳥の窪遺跡　藤原川により形成された扇状地の西側に接するように伸びる、尾根状の山裾に形成された屋

錐地に位置する遺跡で、黒曜石剥片や石槍・石鏃、縄文時代前期・中期土器片が得られているが、その実態については不明な部分が多い。

藤原川線沿に黒曜石を散布する地点　一ノ瀬遺跡等が展開する扇状地より、霧ヶ峰南麓の枝峰であるカシガリ山まで延びる藤原川に沿った谷間に、黒曜石剥片や石器、縄文時代早期押型文土器、平安時代後期褒が採集されている。この沢を詰めて行くと黒曜石原産地の和田峠周辺に至るという地形的な特性等を考慮して黒曜石の搬出ルートがこの沢を通っていたものと考えられている。(4)

槍沢川による扇状地のグループ　槍沢川により形成された扇状地には米沢地区を代表する遺跡である駒形遺跡を中心に、藤原川による扇状地グループ同様に数個所の遺跡が点在し群を構成する。やはりこれらの遺跡も黒曜石製石器や剥片が大量に得られている。特に駒形遺跡は古くより石鏃の生産工場に例えられるが如くの大量の石鏃が得られており、米沢地区の遺跡群の特性が八ヶ岳西南麓とは異なるのではないかと考えられる根拠となっている。また、駒形遺跡は一ノ瀬・芝ノ木遺跡と同様に旧石器時代から長期に亘って存続する遺跡であり、旧石器時代から平安時代・中世・近世まで連綿と続く長期継続型の遺跡の少ない八ヶ岳西南麓の遺跡群とは対照的である。

なお、槍沢川扇状地グループの槍沢川に沿う谷には、藤原川沿いの谷に見られたような黒曜石を顕著に散布する地点は検出されてはおらず、藤原川沿いで想定されているような原産地から沢沿いに黒曜石を搬出したルートがあったと想定するために、今後の詳細な調査が必要である。

霧ヶ峰南麓遺跡群の展開　米沢（塩沢・北大塩地区）において遺跡が地形的な制約等から大きなグループ形成していたことを記述してきたが、これらの遺跡はその位置関係や遺構の時期構成から看ると、縄文時代中期において大きな遺跡群を形成していたと考えることができ、単に本遺跡だけの在り方だけではなく他の遺跡の在り方も含めて遺跡の内容の構成を考えることで、この地域の持っている歴史的な背景が鮮明になると思われる。また、先学によって多く述べられているように、縄文時代の生業を黒曜石を媒体とし解明できる地域としての重要性も踏まえて霧ヶ峰南麓の遺跡について考えなければならない。

2．遺跡周辺の歴史的環境

塩沢集落の歴史的な環境　縄文時代を中心とした遺跡の展開について前項に記述したが、本遺跡では縄文時代の遺構だけではなく、中世に帰属する遺構が検出されているために、この時期を解明することを踏まえて若干塩沢集落の中世の歴史的な環境について述べてみたい。

塩沢には朝倉城や塩沢寺等の中世の史跡が立地している。これらの詳細について不明な部分が多いが、朝倉城は16世紀中頃武田信玄に属する塩沢安兵衛が居城していたとされている。また、塩沢寺には天正５年（1577）銘を持つ舟型光背の墓石があり、「天正五歳　塩沢院殿藤原前入道臺譽光山現哲居士」の墓碑銘が残されている。

3．遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査　本遺跡は古くより周知されていた遺跡で、『諏訪史』(6)第１巻(1924)「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」には上の山として記載され、石斧・珠・土器（厚）が田賀文朗氏により採集所蔵されていることが記録されている。宮坂英弐氏(5)著『原住民族の遺蹟』(1948)「石器時代遺蹟及び遺物発見地名表」によると上ノ山として厚手式・打石斧・珠の記載がある。本格的な発掘調査は、1952年に諏訪清陵高校地歴部の部員であった地元の菊川唯彦氏を中心に行われ、縄文時代中期の竪穴住居址２ヶ所を検出している。住居址には方形石囲炉とその北側に敲石が認められ、中央に有頭石棒が検出されている。(7)今回の調査において埋土の状況より昭和27年に調査されたと思われる住居址が検出されている。

第Ⅱ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

１．調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過　米沢地区の遺跡は古くから地元の研究者を中心に研究が進んでいる地域で、遺跡の存在は古くより確認されていたが、その規模や時期等について不明で特に遺構の広がりについては不明な部分が多かった。

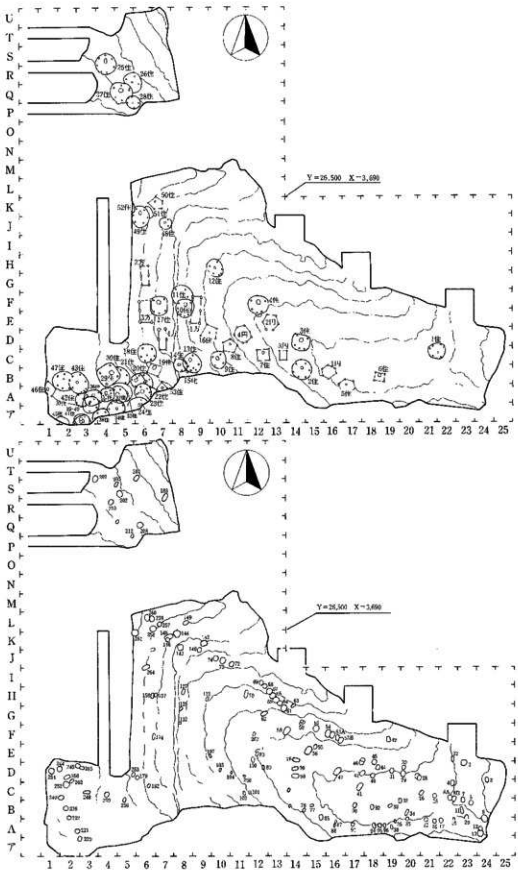
本遺跡が県営圃場整備事業米沢地区の対象となった時点に表面採集を実施した。その結果、縄文時代中期後半の土器片が台地南側、西側の縁辺を中心に稀薄に散布していたが、台地中央部は耕作による撹乱が著しく、また、桑等の耕作物の関係から遺跡が台地全体にどのように展開するかを予測することができなかった。遺跡の広がりを明確に把握し、遺跡の保存方法を考えるために試掘調査を実施する必要性が生じた。

試掘調査とその成果　本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。地形的な観点から考えると、同様なテーブル状の台地に位置する棚畑遺跡と類似していたために、大規模な集落址である可能性が高く、圃場の計画段階においても切り土部分を最小限とし、地形を大きく改変しない設計を基本として長野県土地改良課等と協議を行ってきた。試掘調査区は地形に沿った形ではなく本調査時に設定するグリッド設定軸と同一にし、試掘結果を本調査結果に反映させ、埋土保存部分に埋蔵されている遺構を含めて、台地全体にどのように遺構が展開していたかを得ようとした。試掘調査の結果遺構の広がりは台地ほぼ全面に広がることが判明した。また、高い部分の畑地部は耕作の攪乱や畑地造成による撹乱が至っており、遺物の包含層の摘出、生活面の把握を行うことはできない状態であることが判明した。

本調査に至るまでの協議経過　平成５年９月30日に行われた平成６年度県営圃場に関わる埋蔵文化財の保護協議において、平成６年度の全体調査総量との関連等より本遺跡を調査することができるかどうかが懸案事項となった。１月18日に再度協議を行い、他の遺跡調査との調整を付け急遽事業計画に入れることとした。この協議結果に基づき、平成５年２月14日付５教文第７-12-57号、県営圃場整備事業米沢地区にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。その内容は事業に先立ち6,000㎡以上の発掘調査を実施し、記録保存を図る。発掘調査にかかる経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち12%については文化財保護側が負担する。この計画は総額18,000,000円（農政部局負担15,840,000円、文化財負担2,160,000円）で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。この計画に基づき、平成６年４月20日付６諏土地事務連絡をもって「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を取り交わした。

２．発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法　試掘調査により遺構は台地全面に満遍なく広がるのではなく、一定の形、環状集落を呈していることが把握された。試掘トレンチにより確認された遺構の分布を基に、現地において切り土部分と埋土部分の範囲確定が５月26日に長野県土地改良課と文化財調査室により行われ、切り土部分について面的な調査を実施する部分とし調査区を設定し、表土の除去を重機により行った。台地頂部に遺構が散在していたために、当初予定していた調査範囲約6,000㎡より調査区は広がり最終的には6341.8㎡の調査となった。



第4図　遺構配置図（1／1,000）

発掘区内のグリット設定は、公共座標 x＝3,650、y＝−26,500を基準軸とし、この交点より5mピッチのグリットを設定した。ベンチマークはBM 4 −21より引き公共座標 x＝3,645、y＝−26,445の交点に939,937mを設定した。

発掘調査の方法と経過　試掘調査により遺構は台地頂部に土坑が群をなし、台地の外縁部に住居址が環状に沿うように存在することが確認された。台地頂部は耕作等により撹乱を受け、掘り方が浅い遺構は平面プランに不鮮明な部分があった。また、台地縁辺には遺構が密集し重い重複が認められた。調査は工事工程等や、台地頂部に点在する土坑が住居群より離れるためにこの範囲より調査を開始した。今年の夏期は厳暑に見舞われたが、天候的には安定しており作業は進展したが、遺構の密集状況が激しかった点や、土坑・ピット状遺構が大量に検出されたこともあり、最終的に現場における作業が終了したのは12月22日で、発掘作業の延人員は750人となった。

航空写真測量の実施　遺構の図化作業の短縮や省力化、遺跡全体、周辺の鳥瞰写真の必要性から航空写真測量を実施した。航空写真の撮影により台地内で遺構がどのように展開するのかが視覚的に把握でき、集落構造を考える上に重要な見地を与えてくれた。航空写真測量の実施は圃場の施工予定の関係、遺構の保全等の問題もあり2回に分けて行った。遺物の出土状況や、炉址や埋甕・伏甕等については平板測量により補足して写真測量図と合成した。なお、発掘現場における記録は守矢昌文、田中慎太郎、桃崎秀二、塩原博子、篠原リカ子、平尾弘子、三宅三重子、宮坂ちよ江、宮坂ひとみが携わった。

発掘体験学習会・遺跡見学会の実施　茅野市八ヶ岳総合博物館の要請により、遊学教室の一環として発掘体験学習会が、地元小学校である米沢小学校6年生を対象に7月13日に行われた。学校周辺の遺跡の状況や縄文時代の暮らし等の学習の後、竪穴住居址をグループごとに調査し、実体験してもらった。

11月13日には塩沢区の協力のもとに茅野市教育委員会が主催で遺跡見学会が開催された。前日より見学通路の整備や落とし穴等の遺構の復元を行った。当日は事前の告知も余りなされなかったのにも関わらず、地元を中心に約100名にも上る見学者が訪れ、縄文時代のムラの様子を学習した。

調査期間中には多くの方が見学に訪れた。7月28日には長野県遺跡指導委員会の委員諸氏が来跡し、貴重なご意見を賜った。また、テレビや新聞等の取材も数回行われ、広く遺跡の状況を知らしめることができた。

3．調査日誌（抄）

5月24日　本日より遺構確認を目的とした試掘トレンチを重機を用いて行う。

5月26日　東側の限界を確認するために試掘トレンチを継続して開ける。長野県土地改良課古畑技師と切り土部分と埋土部分の確認を行い、調査区範囲の確定を行う。

5月30日　調査区範囲の表土除去作業を開始。調査区東側に黒色土の落ち込み内より天目茶碗片が出土する。

6月1日　本日より作業員を導入して遺構確認作業を本格的に実施する。

6月6日　地元塩沢区からの作業員が本日より加わり作業が捗る。調査区北側の谷に面して落し穴状の土坑が規則的に検出される。茅野市文化財審議委員五味和男氏来跡。

6月15日　本日でほぼ調査区全域の遺構確認を終了する。遺構分布は土坑群域と住居址群域が分別できる。

6月20日　調査区東側に確認された落ち込みが天井部の陥没した地下式坑であることが判明する。

6月23日　検出された土坑は落し穴状のものと深い巨大な柱穴状のものがある。県土地改良課山本補佐来跡。

7月13日　梅雨が開け終日暑く作業が大変である。茅野市八ヶ岳総合博物館遊学教室の一環で、地元の米沢小学校6年生による体験発掘教室が実施される。

7月28日　第3号住居址の掘り下げを実施する。長野県教育委員会遺跡指導委員会の長峯光一・戸沢充則・

宮坂光昭・樋口昇一の諸先生方が来跡。指導を賜る。

8月11日　第6号住居址の清掃作業と写真撮影。午前永明中学校3年生遺跡見学に来跡。

8月23日　第10～13号住居址の精査を実施。テレビ東京「町おこし、村おこし」の番組取材のために俳優村野武範氏来跡し、調査風景等を撮影する。

10月4日　圃場整備工事の工程より北側調査区を先行させることとなり、S-7周辺をB区とし調査に入る。

10月25日　天候に恵まれ第1回目の航空写真測量を実施する。

11月12日　尖石遺跡整備委員会のために来市した東京工業大学清水擴教授(建築工学)、来跡し竪穴住居址、方形柱穴列等について視察。

11月13日　午前10時より地元住民を対象とした遺跡見学会を実施する。約100名の参加者がある。また、信越放送取材に来跡。

11月14日　大変寒い日で、八ヶ岳・守屋山山頂・入笠山山頂が初冠雪。寒さのために図面作業が捗らない。

11月15日　昨日の寒気のために霜柱が立ち、除去作業に手間取る。午後長野県立歴史館宮下健司氏PRビデオ取材のために来跡。

11月22日　調査区西側の土坑群の掘り下げを実施する。253号土坑内よりヒスイ製垂飾が出土する。武藤雄六氏、県土地改良課山本補佐・牛山係長・古畑技師・峯村主事来跡。

12月6日　第2回目の航空測量を実施する。昨日の寒気団により八ヶ岳は真っ白で、現場にも薄く積雪。

12月22日　本日で現場における作業を終了し、機材等の撤収を完了する。

4．遺物整理・報告書の作成

遺物の整理　遺物整理が本格的に開始となったのは、発掘調査が終了した12月末から年が新たまった平成7年1月に入ってからである。土器等の遺物の洗浄については発掘作業と並行して行われていたが、遺物の分類等については未着手であり、遺物の復元作業は遅れた。今回の調査により得られた遺物はコンテナ34箱、重量にして約594kgで、その大半が土器により占められている。遺物の注記は本来ならば全ての遺物について実施しなければならないが、時間的な制約により遺構内遺物・復元可能な遺物を中心に行った。注記の略号は遺跡番号の26を冠し、遺構名、地点・層位の順とした。土器の多くは復元できない破片であったが、遺構の時期決定資料については、器形復元が可能なものは接合作業を、破片については拓本作業を実施した。土器の接合作業・復元は牛山・堀内が主体となり塩原、篠原、平尾、三宅、宮坂、宮坂(ち)が補助した。

遺構平面図等の整理　遺構平面図は航空写真測量により得られた1/20の原図を、現場において遺構と対照し校正を行い、また、埋甕や伏甕、石囲炉、集石等の施設については平板測量図を作成し、航空写真測量図と合成して遺構平面図を作成した。1/100の全体図は1/20の原図を基に作成した。遺構断面図については遺構のレベル測量成果を基に作成した。セクション図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握等を目的に行った。なお、ピットについては規模や著しい重複関係より全てについてセクション図を作成することはできなかった。航空写真測量の導入により測量の省力化は図れたが、撮影から校正、納品までに期間を有する点等に問題を残した。

報告書作成の方法と経過　土器実測図の一部は写真測量により実施した。報告書の作成・原稿の執筆は守矢が行った。遺物整理期間や報告書作成期間、頁数等の制約により全ての遺構・遺物を資料化することができず、遺構の内では竪穴住居址や土坑の一部を中心に報告した。そのために詳細に資料を分析し総括するまでには至ってはいない。今後検出資料を再検討して、周辺の遺跡の状況等を踏まえて総合的に考える必要があろう。

5．調査の体制

調査組織

調査主体者　両角昭二　（茅野市教育委員会教育長）

事務局　宮下安雄　（茅野市教育委員会教育次長）
両角英行　（茅野市教育委員会文化財調査室長）
鵜飼幸雄　（茅野市教育委員会文化財調査室係長）
守矢昌文　（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
小林深志　（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）
大谷勝己　（茅野市教育委員会文化財調査室指導技師）
功刀　司　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
小池岳史　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
百瀬一郎　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
小林健治　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
柳川英司　（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
大月三千代　（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）
調査担当　守矢昌文　（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

調査補助員　牛山徳博　小松とよみ　関　喜子　原　敏江　堀内　潭　矢崎つな子

発掘調査・整理作業協力者

帯川くに　帯川さと志　帯川藤夫　帯川すみ子　金子治春　小平里美　五味ラク　塩原博子　篠原リカ子　白籏スエ子　関秀樹　田中くにせ　田中慎太郎　立岩貴江子　平尾弘子　三宅三重子　目黒恵子　桃崎秀二　宮坂ちよ江　宮坂ひとみ　矢島のぶ子　吉田米巳　吉田淑子

基準点測量委託：入原測量有限会社　遺構測量委託：株式会社東京航業研究所　遺物測量委託：株式会社東京航業研究所

発掘調査期間中、諏訪地方事務所土地改良課におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解と絶大なご協力を賜った。調査の実施に当たっては地元塩沢区、塩沢区圃場整備委員会を始め地権者の方々また、工事施工区請負業者にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。尚、調査等に当り長野県教育委員会事務局文化課小平和夫氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

戸沢充則　長峯光一　宮坂光昭　武藤雄六　樋口昇一　小林秀夫　宮下健司　三上徹也　五味和男　五味裕史　小安和順　中西真也　斎藤　弘　田中　総　田中洋二郎　宮坂　清

第２節　発掘された遺構・遺物の概要

１．遺構の概要

検出された遺構の概要　本遺跡から検出された遺構は縄文時代前期初頭、中期前半・後半に帰属するものと、中世に帰属するものだけであり、縄文時代中期の遺構が主体を占める。中期の遺構は数段階の欠落はあるものの前半から後半に亘る変遷が窺え、集落の変遷を考える上には重要な資料が得られている。

検出された遺構の時期　検出された遺構は縄文時代前期初頭竪穴住居址１、中期前半竪穴住居址　、中期後半竪穴住居址　、円形柱穴列４、方形柱穴列４、土坑269、ピット状遺構　、集石１、遺物廃棄場（遺物集中ブロック）６、中世地下式坑７、近代地下壕１で、遺構の大半を土坑・ピット状遺構が占める。土坑内に遺物を含まず時期を明確にすることができなかったものもあるが、覆土の状況、分布の状況等より縄文時代に帰属するものと思われる。なお、調査時に第35号・第44号住居址の番号を付した遺構は検討の結果いずれも住居址の拡張部を誤認して重複住居址としていたために、この２ヶ所については欠番とする。

これらの遺構は単独で存在するのではなく、ある程度の群を形成していたことが窺え、これらの遺構が組み合って「ムラ」を形作っていたものと考えられる。

遺構の時期決定は、竪穴住居址の場合は埋甕や代甕等の竪穴住居址に付属する施設に用いられている土器を基本的な資料としたが、このような施設を持たないものについては床面直上資料等に主眼を置いた。また、重複関係や炉址や住居址構造なども加味し時期決定の資料とした。土坑の場合は覆土内からの遺物を時期決定資料としたが、覆土内に遺物を含まないものが大半を占め、時期を決定し得ていない土坑が大半を占める。特に落し穴と思われる土坑は遺物を含有していない例が多く、積極的に時期決定をし得てはいないが、重複関係や落し穴のタイプより考えると、かなりの時間幅があるものと考えられる。

中世に帰属すると思われる地下式坑が７基検出されている。本来の本遺構は、天井部を持つ横穴であるが、今回検出された地下式坑は、天井部が陥没した状態のものが全てで完存したものはないが、堆積土層内に天井部の崩落と思われる土層が観察されていることより本遺構と取扱った。遺構内より直接帰属時期を示すような資料は得られてはいないが、天井上部の埋土に中世の陶磁器片が認められるものがあり、この資料に基づいて、本遺構を中世に帰属させた。なお、同様な構造を持つ横穴が１基検出されたが、近代に掘削されたものであることが判明したために、地下室として分離した。

遺構名の取扱い　竪穴住居址は本来なら地上を掘り窪めて構築されているのが一般的であるが、耕作により削平を受け掘り方が検出されず、柱穴と炉の焼土が検出されただけのものもある。これらについても竪穴住居址として取扱った。しかし、柱穴配列は竪穴住居址と同様な傾向を示すが炉構造（焼土等や炉址の掘り方等）の検出されない遺構が検出され、便宜的に柱穴の配列より円形柱穴列として取扱ったが、茅野市立石遺跡[8]・横浜市山田大塚遺跡[9]等に疑認されているものとは柱穴配列等に相違がみられることなどより、これらと同等の遺構とは考えにくく、柱穴配列や遺構の分布等より考えると竪穴住居址と同期の可能性が高い。

土坑については地下に掘り込まれた「穴」を指し、小竪穴・土壙と総称されている遺構である。土坑と一括した内には落し穴、竪穴住居址の柱穴、方形柱穴列を構成する柱穴等が含まれており、単純に土坑＝墓穴ではなく、土坑は多岐に亘る「穴」を総称している。落し穴については土坑群内より踏属性より分類し、土坑とは分離して取扱うべきかもしれないが、今回は現場での遺構の取扱いに準じた。

ピット状遺構についても土坑と同様に地下に掘り込まれた「穴」を指し土坑と重複する概念を持つが、その規模に特徴を持ち、視覚的に観て土坑よりも規模的に小規模な一群をピット状遺構として取扱った。なお、

ピット状遺構内には竪穴住居址の柱穴が含まれている。

遺物廃棄場（遺物集中ブロック）は遺構外に廃棄されたような状態で遺物が集中する個所で、調査区の北側に位置する谷状地形内より検出された。遺物は土器片を中心に石器や礫が雑然とした状態で検出されている。これらの遺物は大きく見ると数個所のブロックを形成している。ブロック内には焼土範囲を伴うものもある。

2．遺物の概要

検出された遺物の概要　検出された土器・石器等の遺物は総量にして593.8kg、整理用のコンテナにして34箱を数えるが、遺跡の規模・遺構数に比べるとその量は膨大なものとはいえない。これらの資料の大半は縄文時代中期に帰属するものであるが、これらの資料に混在して先土器時代・平安時代・中世の資料が得られている。

先土器時代の遺物　先土器時代に帰属すると思われる石器１点、黒曜石剥片１点が検出されている。石器は頁岩製の彫器で、この彫器は特徴より見ると、他地域からの搬入品である可能性が高い。黒曜石製の剥片は冷山・麦草峠産の黒曜石を用いたもので、大きさや特質より縄文時代の黒曜石剥片より分離できたが、この資料の他にも詳細に分類、観察を加えると先土器時代の剥片が含まれている可能性がある。

縄文時代の遺物　遺物の主体をなすものは縄文時代の資料である。縄文時代の遺物は早期から晩期のものが全て連綿と検出されているわけではなく、断続的な状況で資料が得られている。

縄文時代の土器で初源のものは前期初頭の資料で、断続的ながら前期中頃、前期末、中期初頭から中期末までの土器が得られている。全体的に遺構の数に比べて供伴する土器の量は多くはなく、遺構の時期を特定するのに苦慮するものもあった。土器を量的にみると中期後半の資料が主体をなし、中期最終末の資料がやや少ないものの、中期後半の資料はほぼ出揃っており、唐草文系の資料が主体を占めることに特徴を持つ。

時間的な制約等から検出された資料の全てを資料化し得ていないが、最低限復元した資料は遺構の時期を確定するものである。

黒曜石・チャート・頁岩以外の石材を用いた道具として認定し得る石器は263点が検出されている。石器内で注目したい資料は、胸形遺跡や棚畑遺跡などの霧ヶ峰南麓の遺跡を中心に検出される円盤状礫器が点検出され、霧ヶ峰南麓地域の特色的な石器として位置付けができそうである。この他に石器生産に関わる狭義の搬入礫・剥片・砕片が67点認められ、その量より考えると石器生産が遺跡内で行われていたことが想定できよう。

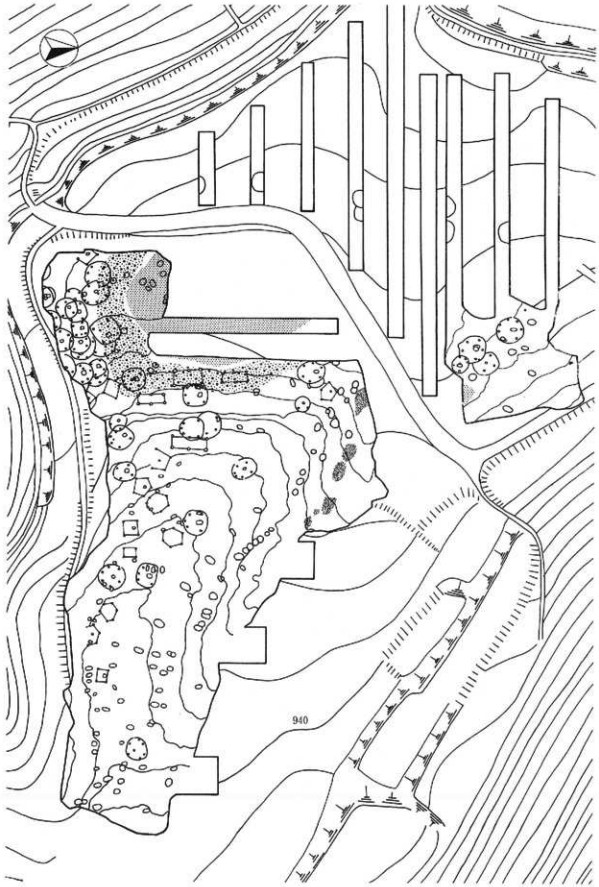
最も石器内で注目したいものは黒曜石製石器である。霧ヶ峰南麓の他の遺跡と比較するとその量は多くはないが、剥片内には石器生産が想定できる資料が多く含まれ、霧ヶ峰南麓一帯を黒曜石石器の生産地と考えるには貴重な所見を得ることができた。

石器の他にも土坑内よりヒスイ製の垂飾りが検出され、同様な資料は近年規模の大きな縄文時代中期集落でかなり検出されており、遺跡の性格をさぐる上にも興味深い資料である。

平安時代・中世・近世の遺物　平安時代に帰属すると思われる須恵器片が１片得られている。

中世の遺物は天目茶碗片１点、白磁器碗片１点、砥石１点が得られている。特に白磁はその特徴より柩府磁かと思われ、山麓地帯の中世を考える上に貴重である。

近世に帰属する資料は肥前系染め付け磁器と瀬戸系染め付け磁器、鉄釘が得られている。



第5図　遺構分布図（1／750）

第Ⅲ章　遺跡の層序

第１節　調査区の基本的層序

１．土層の基本的な堆積状況

本遺跡の立地している台地は、箱ヶ峰火山岩類に帰属する角閃石斜方輝石単斜石安山岩・斜方輝石単斜輝石閃石ガラス質安山岩・凝灰角礫岩等を基盤としており、この上部に火山堆積物・黒色土が堆積し台地を形成している。台地の南側・西側斜面部では上部に堆積している黒色土、ローム層が流出しており、ローム層下部に堆積する軽石を含むハードローム層が露出している部分が見られた。

調査区全体は耕作による攪乱がいたる部分に亘っており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけで、下記に図示説明を加えてある地点は試掘トレンチの南側壁のもので、この地点は竪穴住居址の掘り込みが割合明確に把握できることに着目して選定した。発掘調査において中世と縄文時代の遺構が検出されているが、生活面の分層には至ってはいない。しかし遺構の覆土の色調は時代によりある程度の識別が可能であった。

Ⅰａ層	耕作土	軟質で内部に根が入り込み、全体的に締まりがない。現在耕作されている畑の耕土。
Ⅰｂ層	黒色土	Ⅰａ層に比較すると締まりが割合あり、硬質な傾向を呈する。内部には畑の肥料として用いられた右灰の粗粒が混入する。
Ⅰｃ層	暗褐色土	量的には多くはないが内部に３㎜から５㎜大のローム粒子を混入する土層で埋土的である。地形の低い西側に堆積が確認されていることより、畑を平坦にするために埋め戻した土層であると思われる。
Ⅱａ層	黒褐色土	色調は黒色土に類似するが、内部に含有されているローム細粒子より黒色土と分離した。含有されているローム細粒子は１㎜以下の微細なもので、その量も多くはない。層全体は若干の締まりを持つだけである。
Ⅱｂ層	暗黒褐色土	Ⅱａ層よりも締まりがあり、割合硬質である。内部には微量ではあるが炭化物細粒子や１㎜以下のローム細粒子を含有する。また、土器片や黒曜石剥片等を含有する。
Ⅲａ層	茶褐色土	堆積していた土層の中で最も締まりを持ち硬質であった。内部には１㎜から２㎜大のローム粒子を若干含有する。

２．土層の成因と性格について

遺跡に堆積する土層を大きくその性格よりⅠ層からⅢ層の３群に分類した。

これらを土層の状況より概観して見るとⅠ層群は現在の耕作や畑造成に関わる土層群で、Ⅰａ層・Ⅰｂ層がその状況より耕土と思われ、Ⅰｃ層は畑地を平坦にしようとして埋め戻した土層と解釈できよう。Ⅰ層群を所謂耕作土と解釈すると、Ⅰａ層からⅠｃ層までは攪乱を受けているものと考えられ、かなり深い部分まで攪乱が及んでいたことが窺える。

Ⅱ層群は土層内に遺物を含有するⅡｂ層のあり方等から、遺構覆土と考えられる。

Ⅲ層群はこの上面より遺構が掘り込まれていたことが確認されており、当時の生活面を本層の上面と想定

することができよう。

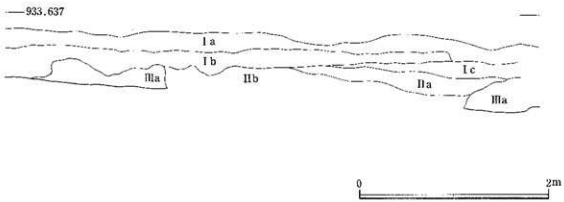
耕作による攪乱等を省いて基本的な層序を模式的に示してみると、黒色土、黒褐色土、茶褐色土、ソフトロームとなるものと思われる。これを基本層序と対比してみると、黒色土（Ⅰａ層・Ⅰｂ層）、黒褐色土（Ⅱａ層）、茶褐色土（Ⅲａ層）となろう。

基本的には上記した層序を基本層序とするが、地形の相違により若干の変化を持つ。特に台地の東西方向に入り込む小規模な谷状地形においては黒色土（Ⅰａ層・Ⅰｂ層）と黒褐色土（Ⅱａ層）の間に漆黒土層が厚く堆積していた。また、層厚も地形に左右されており、台地の頂部においては黒褐色土（Ⅱａ層）、茶褐色土（Ⅲａ層）が流出しており、耕作土下はすぐにハードロームといった状態であった。また、台地の南・西側縁辺は傾斜が著しいこともあり、Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層、ソフトローム層が流失し、スコリアを含むハードロームの基盤が露出している状況の部分が観察できた。

特徴的な土層の堆積状態が台地の頂部より低く平坦となった範囲に認められた。この範囲は地山面が若干皿状に窪み、この範囲に茶褐色土（Ⅲａ層）がレンズ状に堆積していた。同様な傾向は茅野市棚畑遺跡にも認めることができ、この範囲に土坑群やピット状遺構が構築されており、この傾向は両者の遺跡に共通しており興味深い事象である。

遺物の包含層はⅡ層であると思われるが、時期差により分別することはできなかった。谷状地形に形成されていた遺物廃棄はⅡ層内に認められたが、下層に至るにつれ遺物量は減少し、Ⅱ層下層では無遺物層となった。これらの点より縄文時代この谷はある程度埋もれていたことが窺える。

なお、調査の都合上重機による表土の除去はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層としたために、Ⅲ層内に浅い掘り込みを持つ遺構については、その掘り方に不明瞭な部分が生じてしまった個所もある。



第６図　遺跡の基本層序（1／40）

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　先土器時代の遺物

Ⅰ．先土器時代の石器

出土石器の概要　今回の発掘調査により先土器時代に帰属すると思われる、頁岩製の彫器１点と黒曜石剥片１点が検出されている。これらはローム層中からの出土ではないが、その形状や黒曜石の場合その質等より先土器時代に帰属するものとした。

遺構覆土内や遺構外より得られた黒曜石剥片内にも、詳細に観察を加えると縄文時代の黒曜石製石器・剥片類とは分離でき得る資料が混在していると思われるが、時間的な制約や担当者の識別力の不足などがあり、全ての資料を選別しきっているとは言い難い。

先土器時代の遺物の出土状況　先土器時代の遺物包含層を確認することはできなかった。黒曜石剥片が検出されたC－18グリッド周辺は耕作による削平が著しくハードローム層が露出しており、彫器が検出された38号住居址にしてもハードローム層を深く掘り込んでおり、また、周辺は著しい遺構の重複等もあり、遺構構築時や耕作時に遺物包含層が撹乱を受け検出されたものと考えられ、周辺を精査したが遺物ブロックを確認することはできなかった。これらの点から考えると先土器時代の遺物は遺物ブロックを形成せず、散発的に遺存していたものと考えることができようか。

彫器（第７図１）

彫器が第38号住居址覆土内より検出された。光沢のある茶褐色の色調を呈する頁岩の縦長剥片を素材としている。長さ7.4cm、幅3.3cm、厚さ0.8cmの縦長剥片を素材とし、主要剥離面の打点部にはバルブを残している。縦長剥片の先端部には掻器としての調整剥離がなされ、鋸縁にファシットが行われていなければ、典型的なエンド・スクレイパーの形状を呈する。彫器打面は剥片先端のエンド・スクレイパー刃部に調整加工を加え、この部分を平坦な調整打面としてファシットが行われ、グレイバーファシットは素材剥片の長軸と平行する。

黒曜石剥片（第７図２）

C－18グリッドより検出された。内部に球顆や気泡を多量に含む麦草峠・冷山産と思われる黒曜石の剥片で色調はやや白灰色を帯びる黒灰色を呈し、全体的に風化を受けている様相を呈する。大きさは8.4cm×8.1cmで一般的な縄文時代の黒曜石剥片よりも大型で、やや貝殻状の形状に類似し横長の剥片である。バルブを残す主要剥離面を持ち、表面には自然面を残留する。打面は潤合平坦な調整打面である。

遺物の時期について　出土層位や供伴遺物が不明のために２点の石器・剥片より、本資料の帰属時期を特定することはできないが、黒曜石剥片の場合剥片が一定の剥片生産技術に則って規則的な剥片を生産しない点、球顆や気泡を含む麦草峠・冷山産と思われる黒曜石を用いる点などを考慮すると、市域においては対山館遺跡の資料に類似する点が多く、茅野市第１期（対山館期）[注10]に帰属させることができようか。

彫器は特徴的な資料で、その形状や材質等から当地域の資料とは考えられず、千曲川下流域等に見られる神山型彫器に類似しており、当地域へ搬入されたものと考えられ注意したい資料である。

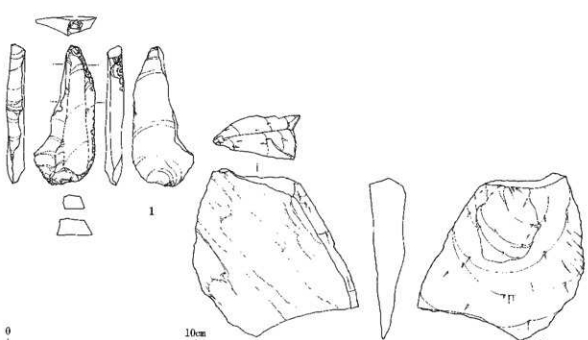
先土器時代の遺跡について　市域において現在先時代の遺跡は対山館遺跡・南岸遺跡・御座岩遺跡・御小屋之久保遺跡・栃窪遺跡（池ノ平周辺遺跡群）、渋川遺跡・十文字平遺跡・城ノ平遺跡（参科山麓遺跡

群)、芝ノ木遺跡・駒形遺跡・大久保遺跡・棚畑遺跡（霧ヶ峰南麓遺跡群)、古田城址・北山長峯遺跡・北山芦蒲沢B遺跡・広井出遺跡・北尾根遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡・上見遺跡・夕立遺跡（八ヶ岳山麓北西台地遺跡群)、広畑遺跡・長峰遺跡・上御前遺跡・御狐岩遺跡・八ヶ岳農場遺跡（八ヶ岳山麓南西台地遺跡群）の26ヶ所が知られている。従来八ヶ岳山麓は環境条件が不安定であったために先土器時代の遺跡が希薄であるとする考え方や、北八ヶ岳火砕流の山麓台地形成に起因しているとの考え方があるが、近年の広域に亘る調査の結果八ヶ岳山麓も先土器時代のフィールドとして利用されたことが捉えられている。

これらの遺跡を遺物の出土傾向からみると、A群　渋川遺跡や御小屋久保遺跡に代表される黒曜石原産地直下に位置し、石器製作を中心とした拠点的なムラ。B群　八ヶ岳山麓に立地し規模の大小があるものの石器製作を示す遺物ブロックを有するムラ（夕立遺跡・上見遺跡等)。C群　遺物ブロックを形成せず少量の剥片・石器が散在的に検出される散布地（棚畑遺跡・古田城址・広井出遺跡・稗田頭A遺跡・稗田頭B遺跡）に分類することができ、本遺跡の状況を照らし合わせて見るとC群に帰属し、立地等を考慮すると棚畑遺跡とその状況は類似している。

本遺跡の立地する霧ヶ峰南麓は、市域において最も生活環境の安定した地域であり、背後に霧ヶ峰を母体とする奥深い山塊を控えており、動物・植物の豊富な地域であったと考えられ、このような環境が遺跡を展開させた大きな要因であったと考えられる。少ない資料より類推すると、本遺跡はA・B群のような石器製作に関わったムラとしてよりも、むしろ霧ヶ峰山麓をバックボーンとする狩猟を中心とした生活址的なムラとして捉えることができようか。

近年広範囲に亘る調査が実施され、その結果として今まで未所見であった先土器時代の遺跡が検出されつつある。これらの遺跡に対して重要性を認識し、原産地直下の遺跡とセットとして分析することにより「黒曜石原産地あるいは黒曜石原産地域の本来の姿が見出される」[11]との提言もあり、本遺跡の在り方はそのような面からも重要である。



第7図　先土器時代の石器（1／2）

第２節　縄文時代の遺構

１．竪穴住居址

縄文時代の竪穴住居址の番号は第53号まで付されているが、精査の結果重複部分を除くと51基が検出された。時期より見ると縄文時代前期初頭１、中期前半16、中期後半29、不明６の中期の継続集落として捉えることができる。竪穴住居址内には耕作等の攪乱のために掘り方等を削平されているものもある。

第１号住居址（第８図・図版４）

検出状況　本址は調査区の東側Ｃ－21・22、Ｄ－21・22グリッドで確認されたものである。住居址は台地のほぼ中央に占地し、隣接する住居址はない。西・北側のプランは地形の関係より検出されなかったが、検出し得た南・東側のプランや柱穴配列よりほぼ住居址の平面形プランを把握することができた。

遺構の構造　検出された平面形プランより見るとやや南－北方向につぶれる不整円形を呈し、また、やや東側プランの一部が張出し全体的には歪んだ平面プランを呈する。規模は長軸4.38m×短軸4.07mで規模的には一般的な住居址である。東西方向に長軸を持ち長軸方向はＮ－88.5°－Ｅを示す。

壁の立上りは西・北側は地形の関係より流出して検出はされてはいないが、南東、東側が最も明瞭である。南側は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な東側で16cm、南側で14cm、不明瞭な西側で５cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

周溝や壁際を巡る小孔は検出されていない。

直接ローム面床としているが、全体的に床面は軟弱な傾向を示し、特に西側は地形の関係より床面が流出しており検出することができなかった。住居址の東側約半分の範囲は床面状に硬化し、特に東側に帯状に硬質な床が検出された。この床は小さな凹凸を呈する。住居址中央の範囲に2.25cm×1.43cmの不整形な浅い皿状の凹みが検出されている。この部分に向かって床全体が若干の傾斜を持つ。

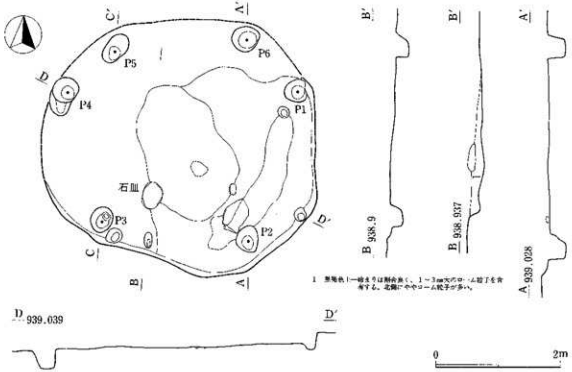
主柱穴は配列や深さよりＰ₁、Ｐ₂、Ｐ₃、Ｐ₄、Ｐ₅、Ｐ₆の６本が該当するものと思われる。これらには大きな建替えは認められないが、唯一Ｐ₃は南側に付随するような形でピットが検出され、このピットが建替え等に関わった可能性もあり得る。これらの柱穴は壁際に寄った位置に検出され、Ｐ₁は東壁と重複する。掘り方はＰ₁20.7cm、Ｐ₂19.2cm、Ｐ₃17.6cm、Ｐ₄29.2cm、Ｐ₅21.5cm、Ｐ₆19.5cmで平均21.3cmと概して浅く、底が不明瞭で丸底となり、断面形はU字形を呈する。

炉と思われる焼土の範囲が住居址の中央部よりやや東側によった位置に１ヶ所検出された。焼土の範囲は東西27.4cm×南北24.3cmの不整楕円形で、その厚さは3.5cmを測る。石囲いや土器の埋設痕などは認められず、地床炉であったと考えられる。炉周辺の床面は加熱による硬化や炭化物等の散在は認められず、炉が割合短期間の使用であったことが窺える。

覆土は黒褐色土の単一層である。土層の状況は締まりが良く１㎜～３㎜大のローム粒子を含有し、特に北側範囲に集中する傾向が観察できる。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址の中央部より南東側に寄った範囲を中心に検出され土器片0.205kgが検出されている。その量は大変少なく、全て同一個体の資料である。住居址の中央部より南西に寄った位置の床面上5.5cmに浮いた位置に逆位で石皿が遺存していた。また、この石皿に並ぶように板状の安山岩が遺存し、礫の北側には磨石が遺存していた。板状礫の西側周辺には３cm～４cmの安山岩小円礫が８個集中して検出された。この礫は大きさが揃っており最大で113ｇから最小47ｇで、平均は72ｇである。これらの礫

を詳細に観察すると、加熱による赤変現象や煤状の黒色変化を起こしている部分が認められ、この礫の用いられ方を暗示している。その他に黒曜石砕片・剥片等総点数6（23g）が得られ、その内訳は砕片1、ピエス・エスキーユ1、剥片Ⅰ類1、剥片Ⅰ類2、石鏃1で、その他の石器は凹石Ⅱ類1、石皿1が検出され、石器組成は貧弱である。本址は唯一検出された含繊維縄文施文土器より前期初頭に帰属すると思われる。



第8図　第1号住居址（1／60）

第2号住居址（第9図・図版4）

検出状況　本址は調査区の南側B－14・15、C－14・15グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側の緩斜面が始まる肩部に占地し、西側に第3号円形柱穴列が東側に第1号円形柱穴列が隣接する。地形の関係や耕作により南・西側のプランを把握することはできなかったが、検出し得た北・東側のプランや柱穴配列よりほぼ住居址の平面形プランを把握することができた。本址は東側を77号土坑と南側を78号土坑と重複する。

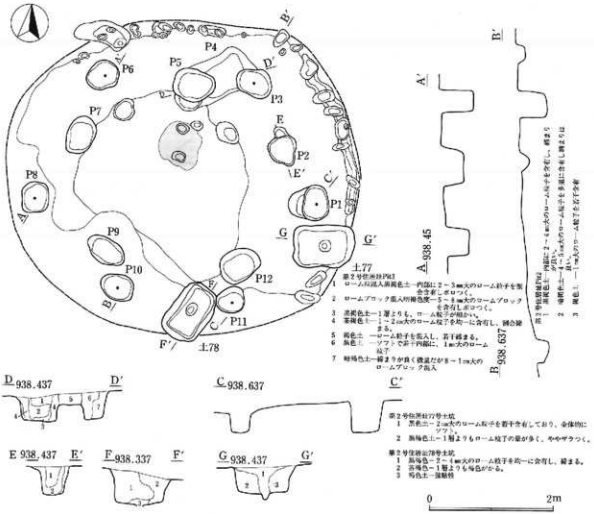
遺構の構造　基本的な平面プランは円形であるが、南側が地形の関係より流出し判然としないが、検出された北・東側の平面形プランより見るとやや南－北方向につぶれる不整円形を呈したものと考えられる。規模は長軸5.67m×短軸5.07mである。東西方向に長軸を持ち長軸方向はN－90°－Eを示す。

壁の立上りは耕作のために住居址全面が削平を受け、そのために確認することはできなかった。

周溝は北西・北・北東の範囲、住居址の約1/3を巡る。周溝は小孔が連なる形のものが1条巡る。北東側は小孔間が溝により連結し周溝状になっている。周溝内には茶褐色土が堆積し、検出するのに困難を来した。

直接ローム面を床としている。面的に硬く明瞭である部分が東側範囲に認められるが、床上面はやや小さな凹凸を呈する。中央の炉を囲むように3.15m×2.44mの範囲が浅い皿状の凹みとなり、この部分が若干他の部分より軟弱な傾向を示し、炉に向かって皿状に緩やかな傾斜を持っている。

主柱穴は配列や深さよりP1(P2)、P3(P4、P5)、P6(P7)、P8、P10(P9)、P11(P12)の6本が該当す



第９図　第２号住居址(1/60)

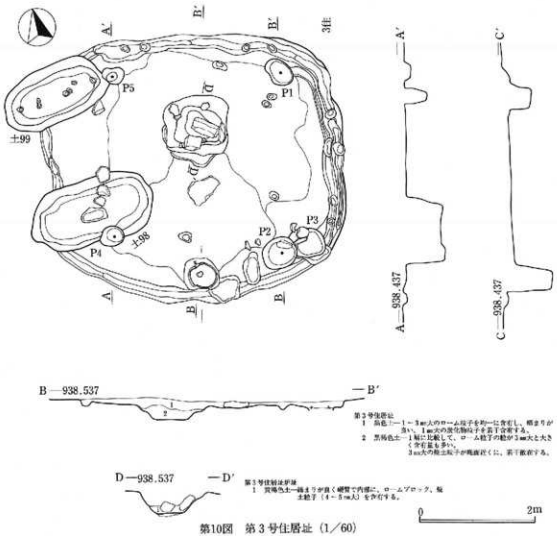
るものと思われる（括弧内に記したピットは埋め戻し等が行われていた旧主柱穴。特にP_8はローム・ブロックを混入する明褐色土により埋め戻されている状況が観察できた）。主柱穴はP_8を除き建替えによる移動が認められた。また、P_1、P_9には重複が認められた。主柱穴は壁際に寄った位置に配され、柱穴配列は６角形を呈する。P_6-P_8間がP_6-P_3よりも短く、柱配列の６角形が東西方向に長いことなどを加味すると、東西方向に棟軸を持っていたものと考えられる。柱穴の平面形はややつぶれた円形を呈し、掘り方はしっかりしている。明瞭な主柱穴の補助と思われる柱穴は検出されてはいない。主柱穴の深さは$P_1$52.6cm、$P_2$65.5cm、$P_6$62.5cm、$P_8$41.3cm、P_{10}47.9cm、P_{11}46.4cmで平均52.7cmと削平を受けている割には概して深いが、南側のピットは地形の関係から他のものに比較して浅い。柱穴内の埋土に柱痕と思われる黒色土の垂直層がP_2、P_3に認められた。この層が柱の太さとすると、柱は14cm～18cmの太さを持っていたものと考えることができよう。

炉と思われる焼土の範囲が主柱穴に囲まれた範囲の中央部よりP_6側に寄った位置に１ヶ所検出された。焼土の範囲は61cm×75cmの不正形でその厚さは３cmを測る。炉体土器の抜取り痕や石囲いの痕跡などは検出されなかったが、住居址の時期などや焼土中央部が皿状に窪み周縁を石で囲んだとも考えられるような状況を加味すると、炉の構造は石囲い炉であったと思われる。

本址に第77号土坑と第78号土坑が重複関係を持つが、これらの土坑上には貼り床や埋め戻し等の痕跡が確認できず、本址の周溝を切るように第77号土坑が構築されていることなどより、これらの土坑は本址よりも新しい段階に帰属する遺構であると考えられる。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は大変少なく柱穴内や炉内より土器片0.402kgが検出されているに過ぎない。本址はP12や炉内よりの土器片より見て中期後半曽利Ⅰ式期に帰属すると思われる。

第３号住居址（第10図・図版４）



第10図　第３号住居址（1／60）

検出状況　本址は調査区のC－14・15、D－14・15グリッドで確認されたものである。住居址は台地の中央部の平坦な部分に占地し、南側に第２号住居址、南西側に第３号円形柱穴列が隣接する。西側に第98号土坑・第99号土坑と重複するが、土坑上に貼り床がなされていたことより住居址全体の範囲を把握することができた。また、全体が耕作により削平されていたが、周溝が全周することより平面プランの全容を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは南西－北東方向につぶれる隅丸長方形を呈する。南辺が北辺に比較してやや外反する傾向が見られ、入り口部が張出すプランに類似する。規模は長軸4.8m×短軸4.26mで南東－北東方向に長軸を持つ。南側長辺中央張出し部に埋甕が埋設されており、埋甕と奥壁中央を通す線上に炉が構築

される。この線を主軸とすると、主軸方向はN－19°－Eを示す。

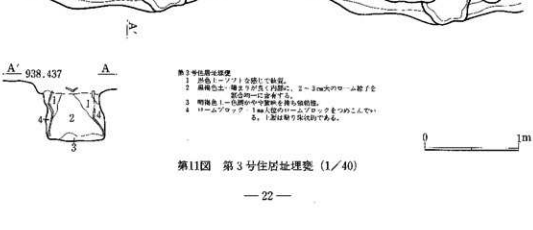
住居址上面全体が、削平を受け壁の立上りは不明瞭で、特に南・西・北は壁の立上りを検出することはできなかった。壁の一部が遺存していた東側を観察すると、掘り方がしっかりし、直線状に立ち上がる。遺存している東側で8cmを測る。

周溝は重複する上坑上の除き全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し、浅めであり北側6cm、東側3cm、南側4cm、西側2cmを測り、西側が最も浅く不明瞭である。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められる。東側には2条の周溝が認められ、内側溝上部に部分的に貼り床がなされていたことより東側に拡張が行われたことが窺える。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2(P3)、P4、P5の4本が該当するものと思われる。南東側のP3は重複が認められ、旧柱穴と思われる東側の柱穴内には礫による埋め戻しが行われている。この柱穴以外には大きな立替えは認められない。P1、P2の柱穴は壁際・住居址のコーナ部に寄った位置に検出されるのに対して、P3、P4はやや内側に寄った位置にある。柱穴の掘り方はしっかりしているが、P3を除いて径が割合小さい。主柱穴の深さはP1 22cm、P2 52.4cm、P4 63.2cm、P5 35.8cmで平均すると43.4cmであるが、P1、P4の北側柱穴は南側に位置する柱穴（P2、P4）に比較して浅めであった。また、P1はP4との深さを調整するために、底の部分に粘性の強い黄褐色土が埋められていた。P2新の北側脇には板状の安山岩を斜状に据えており、柱を固定するために詰め込んだものであろうか。

炉は炉石の抜き去られた石囲い構造の炉が住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西1.02m×南北0.94mの不整形な隅丸方形を呈し、南側前庭に不整形の張出しを持つ。炉内の掘り方は2段構成となっているが、炉石を掘えた際の掘り方等は確認されていない。炉石は抜き取られた後に再度一部を炉内に投げ込んだような状態で安山岩角礫と板状礫が検出されている。炉底には42cm×38cm、厚さ5cmで焼土が確認された。炉址に直接関われものか不明であるが、炉南西側17cmに板状の礫が床上に据えられていた。

埋甕は南壁の張り出す部分に、胴部下半を取り去った大型X字状把手付深鉢が逆位で埋設されていた。埋甕の掘り方は径59cmの不整円形を呈し、この掘り方はちょうど埋設される土器の口径と大差ない。埋甕上面の脇はロームにより貼り床がなされ、掘り方と埋甕の間はロームブロックが詰め込まれている。埋甕内には黒色土・黒褐色土が充満し、掘り方底には埋甕の高さを調整するためか粘性の強い明褐色土が埋められていた。埋甕上面には土器底部破片が、北側脇には埋甕の把手部が遺存していた。埋甕の北側は板状礫と横刃型



第11図　第3号住居址埋甕（1／40）

石器が土器を補強するように詰められていた。埋甕の南東には深さ13.2cmの不整形な掘り方、東側には楕円形乗さ15.9cmの掘り方が検出されこれらが埋甕・入り口に関わるものと考えられる。

直接ローム面を床としているために、検出は容易であったが外帯を除き、炉を中心とする範囲はやや外帯から緩やかな傾斜を持ち浅い皿状に窪んでいる。外帯は内帯に比べ硬化し、小さな凹凸を有する。入り口部に2.63m×1.73mの範囲が不整形な窪みとなっている。

覆土は黒色土の単一層である。土層の状況は締まりが良く、1㎜～3㎜大のローム粒子を均一に含有し、また、1㎜大の炭化物粒子も若干含有している。遺物はI層より若干検出されている。P_4の西側より土器底部が正位で遺存し、また、北東側には小型深鉢が横倒していた。P_2北東側脇には黒曜石塊が2点並んだ状態で検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は1層より土器片2.031kgが検出され、その量は多いとは言えない。土器の傾向は曽利系が中心となり、唐草文系・加曽利E系が同程度従属的に伴う。その他に黒曜石砕片・剥片等総数46（334g）その内訳は、素材粒3、砕片11、裂片9、ピエス・エスキーユ4、剥片I類3、剥片II類5、剥片III類9、石鏃2で、その他の石器として打製石斧2、横刃型石器1が検出されている。本址は埋甕よりみて中期後半曽利III式期に帰属しよう。

第4号住居址（第12図・図版5）

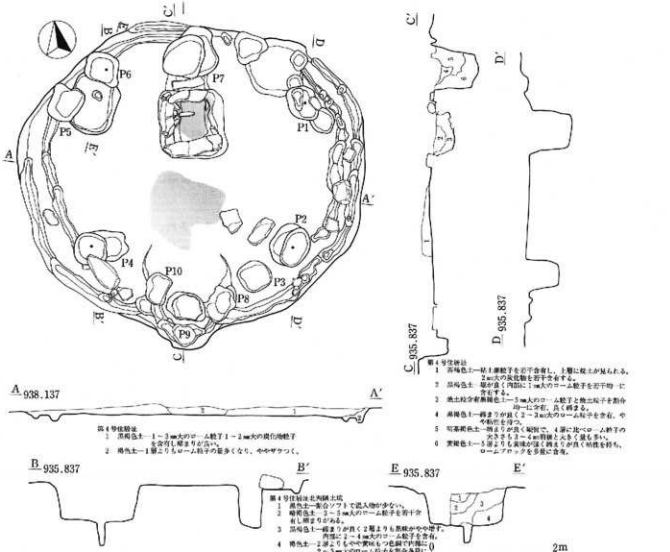
検出状況　本址は調査区のE－11・12、F－11・12グリッドで確認されたものである。住居址は台地の中央部の平坦な部分に占地し、南東側に第2号円形柱穴列が隣接する。北西側を土坑と重複するが、土坑上に貼り床がなされていたことより住居址全体の範囲を把握することができた。また、第3号住居址と同様に全体が耕作により削平されていたが、周溝が全周することより平面プランの全容を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは南－北方向につぶれる不整円形を基本とするが、南辺が北辺に比較してやや外反する傾向が見られ、入り口部が張出すプランとなり、また、やや南東・北東・北西・南西コーナー部が角張る傾向があり、これらの点を加味するとコーナーの丸い5角形とも捉えることができる。規模は長軸5.57m×短軸5.2mで南－北方向に長軸を持つ。南側辺中央張出し部に埋甕が埋設され、埋甕と奥壁中央を通す線上に炉が構築され、この線を主軸とするが、炉の軸線はこの線よりやや南東方向にずれている。主軸方向はN－4°－Eを示す。

住居址上面全体が削平を受け壁の立上りは不明瞭であるが、南・東側に壁の立上りが若干確認された。この範囲を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる。遺存している東側で15cm、南側で22cmを測り、入り口部が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は北西・北側の一部を除きほぼ全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し、幅に対して割合深く北側7cm、東側8cm、南側7cm、西側4cmを測り、西側が最も浅く不明瞭である。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は東側の周溝に著しい。東・北・西側には2条の周溝が認められ、東内側溝上部に部分的に貼り床がなされていた。周溝が同心円状に2条検出されたことより本址は同心円状に拡張が行われたものと思われる。

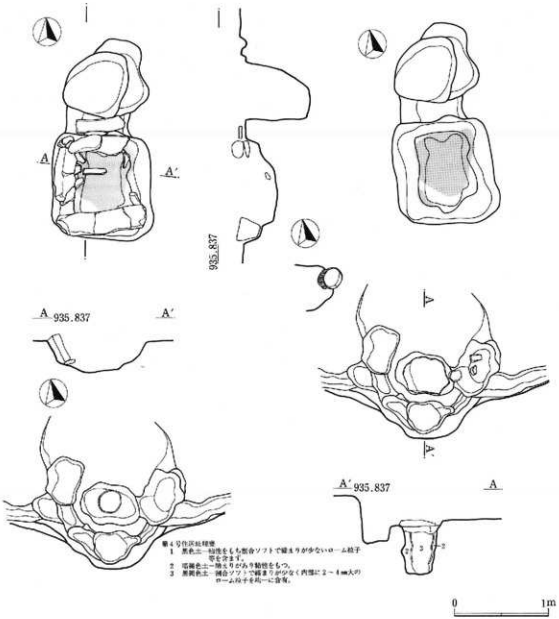
主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2(P_3)、P_4、P_5(P_6）の4本が該当するものと思われる。P_1・P_2・P_4には重複が認められ、P_2・P_3、P_5・P_6のように移動し建替えが行われているものもある。P_1南東側、P_2北西側、P_3、P_4東側、P_5は上面に張り床や埋め戻しが認められ、旧柱穴と思われる。主柱穴の建替え等の状況から大きな建替えが2回行われ、部分的に建替えが行われたことが窺える。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナー部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さは$P_1$59.6cm・39.1cm、P_2



第12図　第４号住居址（1／60）

70cm・54.6cm、$P_2$45.6cm、$P_3$76.9cm・58.1cm、$P_5$35.7cm、$P_6$65.8cmで平均すると約56.2cmであるが、P_1、P_3、P_8の北側柱穴は南側に位置する柱穴（P_2、P_3、P_4）に比較して浅めであった。奥壁側には所謂石壇ピット（P_7）が認められる。この柱穴は不整形な掘り方を呈し、深さは68.6cmを測る。柱穴内はロームブロックを混入する黄褐色土等で埋め戻されている。

炉は一部の炉石の抜き去られた石囲い構造で、住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西1.04m×南北1.06mの隅丸方形を呈し、北側奥壁側に浅い掘り方があり、石壇ピットと連結する。炉内の掘り方は２段構成となり、炉石を据えた際の掘り方が見られる。炉石は東辺が抜き取られている他はほぼ完全に遺存していた。炉石に用いられている礫は安山岩角礫で、その据え方は焚き口と思われる南辺は平坦に礫を据えるのに対して、他の辺は板状の角礫を斜状にしている。これらの礫の下部には10cm～15cm大の楕円形の安山岩を詰め込んで、上部の礫を固定している。奥壁側炉石に接するように長方形をした板状の安山岩が敷かれていたが、位置関係や礫の形状から見て石壇に関わるものと考えられる。また、北側炉石上に棒状の安山岩が倒置していたが、炉石のように安定性がなく炉石より５㎜程度浮き上がっていたことなどより、この礫は炉石とは考えられず石壇に関わるものと思われる。炉底は窪み61cm×53cm、厚



第13図　4号住居址炉址・埋甕（1／40）

さ4㎝で焼土が確認された。

埋甕は南壁の張り出す部分に、胴部下半を取り去った中期後半唐草文系深鉢が正位で埋設されていた。埋甕の掘り方は径44㎝の不整円形を呈し、埋甕上面には板状の安山岩礫が平坦に据えられている。掘り方と埋甕の間は締まりがある粘性を持つ暗褐色土が詰め込まれている。埋甕内には黒褐色土が充満している。埋甕の西・南・東を囲むように溝とP_8（深さ55.7㎝）、P_9（深さ17㎝）、P_{10}（深さ28㎝）が検出され、これらは入り口部に関わる対ピットであろう。入り口部は埋甕を中心に1.64m×1.48mの範囲が浅く窪みP_{11}に向かって緩やかに傾斜する。本址の入り口部は検出された住居址内で最も整った形を呈している。

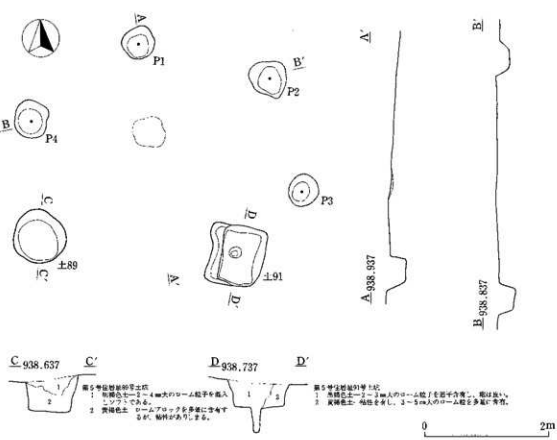
直接ローム面を床としているために検出は容易であり、西側の一部を除き全体的に堅緻で特に炉址南側範囲が顕著であるが、小さな凹凸を呈する。

覆土は3層に分層できる。東壁側に三角堆土（褐色土）が堆積し、住居址の中央部1.16m×1.07mの範囲

に焼土を含む茶褐色土が検出されている。この層内からは中期中葉や中期後半曽利Ⅲ式・唐草文系土器片が混在する状態で検出されている。遺物は1層を中心に出土し、胴部下半を人為的に欠く唐草文系深鉢がP4の東側に横倒し遺存し、また、入り口部対ピットP8上に上半を人為的に欠く唐草文系の小型深鉢が横倒していた。この他にP1、P2間の床面の若干上より黒曜石砕片・剥片が集中して検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は1層より土器片6,392kgが検出されており、その量は幾合多い。その他に黒曜石砕片・剥片等総量258（5559ｇ）が検出され、その内訳は素材粒3、砕片11、製片26、ピエス・エスキーユ18、剥片Ⅰ類49、剥片Ⅱ類55、剥片Ⅲ類55、剥片ⅣA類13、剥片ⅣB類5、石鏃12、石鏃ブランク5、スクレイパー5、石匙1と多く、その他の石器では打製石斧1、磨製石斧1類1、砕片1、剥片3が検出されている。本址は埋甕よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第5号住居址（第14図・図版5）



第14図　第5号住居址（1／60）

検出状況　本址は調査区のA－16・17、B－16・17グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部に占地し、西側に第1号円形柱穴列が隣接する。南西側に第89号土坑、南東側に第91号土坑と重複し、土坑上に貼り床等がなされていないことより、これらの土坑が本址を切るものと考えられる。
全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。
P_1と炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－13°－Wを示す。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP1、P2、P3、P4の4本が検出されているが、柱穴配列等から考えると第89号土坑と重複する位置に、また、南東側斜面に柱穴があったものと思われ、6本柱構造を想定できよう。柱穴の掘り方はしっかりし径は50cm前後である。主柱穴の深さはP1 27.7cm、P2 28.6cm、P3 19.9cm、P4 23.2cmで平均すると約24.9cmであり、削平されているためか全体的に浅い。

主柱穴に囲まれた範囲中央部に加熱を受け硬化し、やや赤変しているローム面が検出された。この部分が炉址であると思われ、これは削平を受けたために炉底が辛うじて残った結果であろう。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　土器片は0.122kgが検出され、その量は少量である。その内容は中期前半狢沢式土器片、中期後半唐草文系土器片である。その他に黒曜石砕片・剥片等の総量は36（22g）でその内訳は、剥片II類1、剥片IVA類27、剥片IVB類7、スクレイパー1が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期前半狢沢式期に帰属しよう。

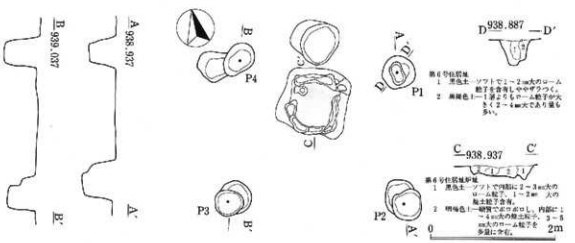
第6号住居址（第15図・図版5）

検出状況　本址は調査区のB－18・19グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや中央部に寄った位置にに占地し、東側に第33号土坑、西側に第92号土坑が隣接する。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかった。奥壁に位置していると思われるP3と炉址を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－12°－Eを示す。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP1、P2、P3、P4の4本が検出され、4本柱構造を想定できる。P2、P3、P4には建替えによる重複が見られる。これら柱穴の土層観察よりP3は南東方向にスライド、P3は北東方向に、P4は北東側にスライドさせており、これらの点より建物軸が東側にスライド移動していることが判明した。柱穴の掘り方はしっかりし径は50cm前後である。主柱穴の深さはP1 60.9cm、P2 52cm、P3 48.4cm、P4 56.2cmで平均すると約54.4cmであり、削平されている割には全体的に深く、直に近い掘り方を有する。P1には柱痕と思われる径13cmの黒色土の垂直層が認められ、この層に沿うように磨製石斧が遺存



第15図　第6号住居址（1／60）

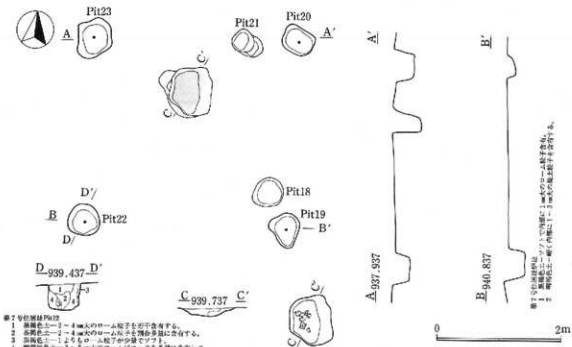
していた。P_4旧内からは土器底部と未焼成粘土塊が検出されている。炉址北側には石壇ピットが確認され、深さは62.6cmを測り深いものであった。

炉は炉石の抜き去られた石囲い炉で、P_1、P_4間の中間の南側住居址中央部より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西1.02m×南北1.08mの隅丸方形を呈し、5cmしか離れず石壇ピットと接するように構築される。炉壁際には炉石を据えた際の掘り方が見られる。炉石を据える掘り方より炉石の状況を想定してみると、炉石は壁に直に立てられていたものと考えられる。炉底は若干の凹凸があるがほぼ平坦で、55cm×58cmの範囲に厚さ6cmで焼土が確認された。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　土器片は0.02kgが検出され、その量は少量である。その内容は中期後半曽利Ⅱ～Ⅲ式土器片である。その他に黒曜石砕片・剥片等の総量は1（6g）でその内訳は、剥片Ⅰ類1点だけである。その他の石器では磨製石斧Ⅰ類1、磨製石斧Ⅱ類1、横刃型石器1が検出されている。本址は主柱穴配列や炉等の構造や検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅲ式期に帰属しよう。

第7号住居址（第16図・図版6）



第16図　第7号住居址（1／60）

検出状況　本址は調査区のC－12・13グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや内側に寄った位置に占地し、東側に第3号円形柱穴列が隣接する。南側に第97号土坑が構築されているが、土坑上面に貼り床等は検出されてはいない。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。Pit20、Pit23を通す線と炉址の位置関係から主軸方向はN－5°－Wを示すものと考えられる。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるPit20、Pit19、Pit22、Pit23の4本が検出されており、4本柱構造を想

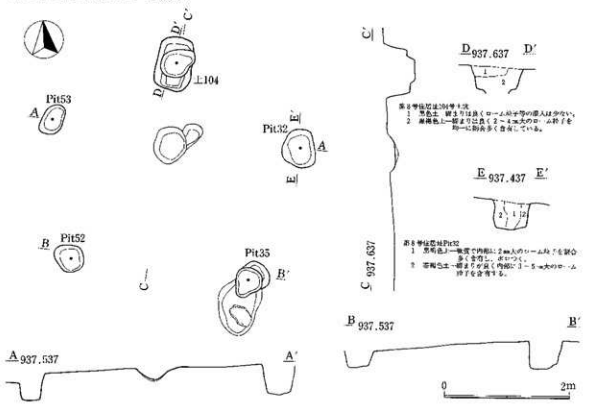
定できる。建替えによる重複は認められない。柱穴の掘り方はしっかりし径は50cm前後である。主柱穴の深さはPit20 55.5cm、Pit19 44.6cm、Pit22 45.4cm、Pit23 44.6cmで平均すると約47.5cmであり、削平されている割には全体的に深く、底に近い掘り方を有する。Pit22土層には柱の抜き取りがなされたと思われえる痕跡が認められる。

炉は炉石の抜き去られた石囲い炉で、Pit20、Pit23間の中間の南側住居址中央部より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西65m×南北75mの不整隅丸方形を呈する。炉内には石囲いに関わる掘り方等は検出されていない。炉底は若干の凹凸があるがほぼ平坦で、64cm×47cmの範囲に厚さ3cmで焼土が確認された。また、炉址内には黒褐色土、明褐色土が堆積し、黒褐色土には一括性のない中期後半の土器破片、割れた安山岩礫が廃棄されたような状態で検出された。炉址内に遺存した土器片は曽利IV式4個体分、加曽利E式系2個体分、中期前半狢沢式に帰属するもので、小片が全てで接合関係等は認められない。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　土器片は1.79kgが検出された。その内容は中期前半狢沢式、中期後半曽利IV式、加曽利E式系土器片である。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期後半曽利IV式期に帰属しよう。

第8号住居址（第17図・図版6）



第17図　第8号住居址（1／60）

検出状況　本址は調査区のC－10・11、D－10・11グリッドで確認されていたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや内側に寄った位置に占地し、北東側に第4号円形柱穴列が南西側に第9号住居址が隣接する。北側柱穴が第104号土坑と重複しているが、土坑上に貼り床等がなされていないことより土坑が本址を切るものと考えられる。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主

柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられ、炉址と北側柱穴を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－6°－Eを示す。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP$_1$(第104号土坑と重複する柱穴)、Pit32、Pit35、Pit52、Pit53の5本が検出されており5本柱構造を想定できよう。柱穴の掘り方はしっかりし径は60cm前後であり、平面形状は楕円形を呈するものが主体を占める。P$_1$63.2cm、Pit32 52.3cm、Pit35 45.9cm、Pit52 44.2cm、Pit53 40.7cmで平均すると約49.3cmであり、削平を受けている割には全体的に深い。

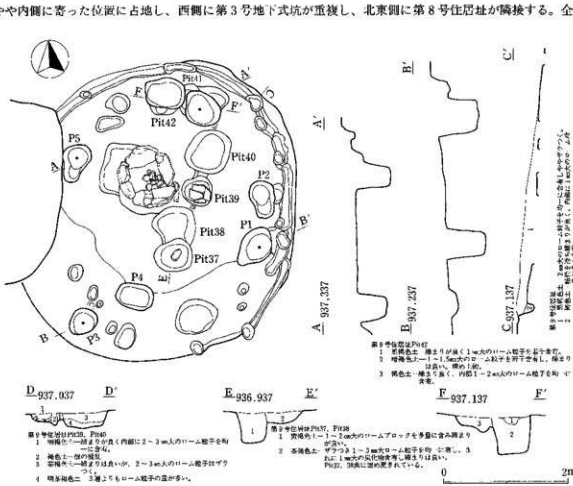
主柱穴に囲まれた範囲中央部よりやや北側に寄った位置に60cm×54cmの不整円形を呈する焼土範囲が認められ、この部分が炉址となろう。上面が削平を受けているために石囲いの有無、構造等は不明ではあるが、焼土外縁に炉石を据えた掘り方等が検出されなかったことより、割合簡易な構造であった可能性が高い。

床面全体は耕作による削平を受けており、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　本址よりの土器片の検出は極少量で、0.022kgが検出されている。その内容は中期前半阿玉台式土器片、中期後半唐草文系土器片である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数が1（0.5g）で、その内訳は石鏃1が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片より中期前半阿玉台式期に帰属しよう。

第9号住居址（第18図・図版6）

検出状況　本址は調査区のB・C－10グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや内側に寄った位置に占地し、西側に第3号地下式坑が重複し、北東側に第8号住居址が隣接する。全体



第18図　第9号住居址（1／60）

が耕作により削平されていたが、周溝がほぼ全周することや残っていた東側壁より平面プランの全容を把握することができた。

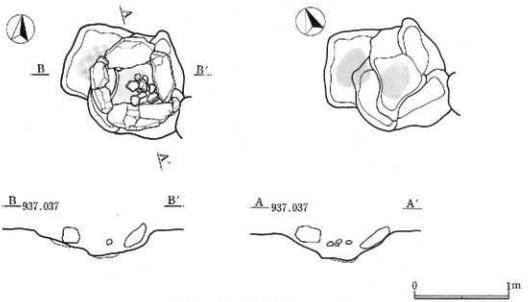
遺構の構造　平面形プランは不整円形を基本とする。規模は直径4.62mである。埋塞の埋設は確認されてはいないが、所謂埋塞ピットが入り口部に検出されており、この埋塞ピットと奥壁中央を通す線上に炉が構築されていることよりこの軸線が主軸と思われ、主軸方向はN－16°－Eを示す。

住居址上面全体が削平を受け壁の立上りは不明瞭であるが、北東・東側に壁の立上りが若干確認された。この範囲を観察すると、掘り方はしっかりしやや斜状に立ち上がる。遺存している東側で11cmを測る。

周溝は南・南西・西側を除き他はほぼ全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し幅が狭い。深さは北側17cm、東側10cmを測り北側が最も明瞭である。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は東側の周溝に著しい。

主柱穴は配列や深さよりPit41(Pit42)、P_1(P_2)、P_3(P_4)、P_5の4本が該当するものと思われる。P_2・P_5には重複が認められ、Pit42→Pit41、P_1→P_2、P_3→P_4のように移動し建替えが行われているものがある。Pit41、P_2、P_3、P_4には張り床や埋め戻しが認められ、旧柱穴と思われる。主柱穴の建替え等の状況から大きな建替えが2回行われ、部分的に建替えが行われたことが窺える。主柱穴の位置は壁際に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはPit41 50.4cm、Pit42 54.1cm、$P_1$59.6cm、$P_2$61cm、$P_3$13.1cm、$P_5$67.7cm、$P_4$44.5cmで平均すると約50cmであるが、P_2は他の柱穴に比べて浅かった。住居址内にはPit37、Pit38、Pit39、Pit40が構築されていたが、Pit40を除き埋め戻しが行われており、本址に伴うかは不明である。Pit39内には板状の安山岩を縁状に組み合わせた特異な構築物が確認された。

炉は石囲い構造で、住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西85cm×南北98cmの隅丸方形を呈し、西側に旧炉址の掘り方が重複する。炉石は完存していた。炉石に用いられている礫は安山岩礫で、南・西側の辺に据えられている礫は棒状礫を用い、北・東辺には割合板状の礫を用いている。炊き口と思われる南辺は平坦に礫を据えるのに対して、他の辺は板状の角礫を斜状にしている。これらの礫の北西・南東隅には10cm～15cm大の安山岩を詰め込んで炉石を固定している。炉内には10cm前後の安山岩礫が10個集積されていた。これらの礫は加熱による赤色変化や破砕は見られず、炉址廃棄の段階に炉内に集積



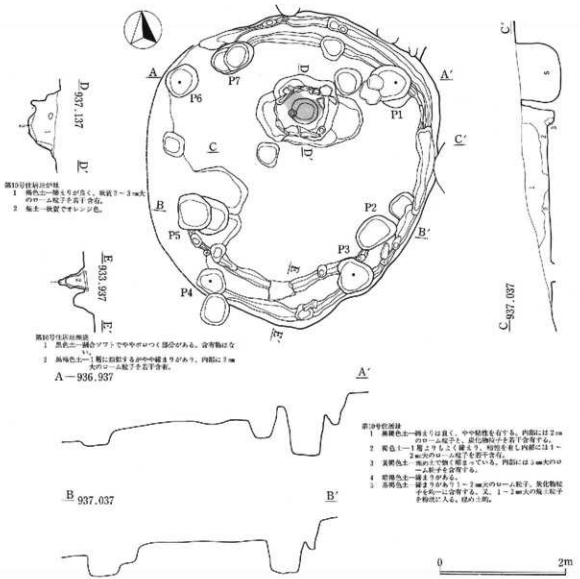
第19図　第9号住居址炉址（1／40）

したものと考えられる。炉底は深み21cm×18cm、厚さ4cmで焼土が確認された。

直接ローム面を床としているために検出は容易であったが、南側は地形の関係より流出し、検出できなかったがこの部分を除き全体的に堅緻で特に炉址南側範囲が顕著であるが、小さな凹凸を呈する。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は1層より土器片0.5kgが検出されており、その量は多いとは言えない。その他に黒曜石砕片・剥片等総量15（60ｇ）が、その内訳は素材剥1、砕片2、剥片Ⅰ類1、剥片Ⅱ類4、剥片Ⅲ類1、剥片ⅣA類4、スクレイパー1が検出されている。本址は住居址構造よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第10号住居址（第20図・図版7）



第20図　第10号住居址（1／60）

検出状況　本址は調査区のE－8・9、F－8・9グリッドで確認されたものである。住居址は台地のほぼ中央部に占地し、北側に第11号住居址と東側を第1号方形柱穴列が重複し、西側は畑地造成のためにカットされているが、全体の約3/4が遺存しておりほぼ住居址の全容を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは南－北方向に長い不整円形を基本とするが、南辺が北辺に比較してやや外反

する傾向が見られ、入り口部が張出すプランとなる。また、不明瞭ではあるがやや南東・北東・北西コーナー部が丸みを持ち張る傾向があり、これらの点を加味するとコーナーの丸い5角形とも捉えることができる。西側が造成のために削り取られているが、他の辺から想定すると規模は長軸50.3m×短軸4.64mで南－北方向に長軸を持つ。南側辺中央張出し部に埋甕が掘設されており、埋甕と奥壁中央を通す線上に炉が構築されており主軸方向はN－12°－Eを示す。

住居址西側を削り取られているがこの部分を除き壁の立上りは明瞭で、本址周辺では最も堅固な壁構造を呈する。特に南・東側に壁の立上りは明瞭でこの範囲を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる。遺存している東側で41.5cm、南側で25.7cmを測り、地形の関係からか東側が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は削り取られた一部を除きほぼ全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はコ字形を呈し、幅に対して割合深く北側15.1cm、東側21.4cm、南側15.6cmを測り東側が最も深く明瞭である。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は北・南側の周溝に著しい。南・北側には2条の周溝が認められ、北内側溝上部に部分的に貼り床がなされており、内側の周溝が古いものであることが判明した。周溝がほぼ同心円状に2条検出されたことよりより本址は同心円状に拡張が行われたものと思われる。

主柱穴は配列や深さよりP1、P3(P2)、P4(P5)、P6(P7)の4本が該当するものと思われる。P3・P7には重複が認められ、P2－P3、P4－P5、P6－P7のように移動し建替えが行われているものがある。主柱穴の建替えの状況をまとめるとP1・P2・P5・P7が旧住居址に伴うもので、柱の建替えによる小さな拡張が行われた後に、P2→P3、P4→P5、P6→P7のように柱が移動し建替えられ大きな拡張がなされている。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナー部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりしており、深さはP1 74.2cm、P2 58.6cm、P3 28.7cm、P4 28.2cm、P5 64.6cm・42.8cm、P6 45.3cm、P7 61.4cm・60.4cmで、旧住居址に伴う柱穴の方が新住居址に伴うものに比べて深い。

炉は3辺の炉石の抜き去られた石囲い構造で、住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西1.04m×南北1.06mの不整隅丸方形を呈し、西・東側に旧炉址の掘り方が重複している。炉内の掘り方は2段構成となっており、炉石を掘えた際の掘り方が見られる。炉石は南辺が遺存しているだけで他は抜き取られている。炉石に用いられている礫は安山岩角礫でその据え方は斜状にしているが、炉石と思われるこの礫は床面より11.4cm低い位置に据えられている点などよりみて、この礫は石囲い用のものでなく炉石下部の組石の可能性が高い。北側辺の掘り方中段には詰め石と思われる10cm前後の礫が遺存していた。炉底は浅い皿状に窪み56cm×40cm、厚さ6cmで焼上が確認された。

埋甕は南壁のやや張り出す部分、旧周溝重複する形で、口縁部を若干欠損する中期後半曽利III式深鉢が正位で埋設されていた。埋甕の掘り方は径35cmの不整円形を呈し、埋甕上面には板状の安山岩礫が平担に据えられている。掘り方と埋甕の周は割合ソフトな黒色土が堆積している。埋甕内には2mm大のローム粒子を混入する黒褐色土が充満している。埋甕の周辺には対ピット等は検出されてはいない。

直接ローム面を床としているために検出は容易であり、西側の一部を除き全体的に堅緻で特に炉址南側範囲が顕著であるが、小さな凹凸を呈する。床は全体的に入り口部に向かって緩やかな傾斜を持ち、埋甕周辺が最も低い部分となる。

覆土は3層に分層できる。東壁側周溝内には埋め戻したと思われる黄褐色土が認められた。1層は凸レンズ状に黒褐色土が堆積し、この層内を中心に若干の遺物が得られている。2層は粘性を有し締まりのある褐色土が堆積している。この層内から中期中葉や中期後半曽利III式・唐草文系土器片が混在し検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は１層より土器片8.013kgと割合多くの土器片が検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片の総量は138（586.5ｇ）と割合多く、その内訳は素材粒４、砕片21、裂片11、ピエス・エスキーユ７、剥片Ⅰ類17、剥片Ⅱ類33、剥片Ⅲ類31、石鏃３、石鏃ブランク２、ドリル１、スクレイパー８と種類に富んでいる。その他の石器は打製石斧４、磨製石斧Ⅱ類１、凹石Ⅰ類１、剥片２が検出されている。本址は埋甕よりみて中期後半曽利Ⅲ式期に帰属しよう。

第11号住居址（第21図・図版７）

検出状況　本址は調査区のＦ－８・９、Ｇ－８グリッドで確認されたもので、南側を第10号住居址と重複関係にある。住居址は台地の中央部の平坦な部分に占地している。東側を第１号方形柱穴列と、住居址内北西側には第132号土坑と重複関係を持つ。西側が畑地の造成によりカットされ、また、南側が第10号住居址に切られているために住居址の全容を把握することはできなかった。

遺構の構造　住居址の全容を把握できなかったために平面形プランについては不明な部分が多いが、検出された東側壁より想定すると、不整円形を基本とするものと考えられる。

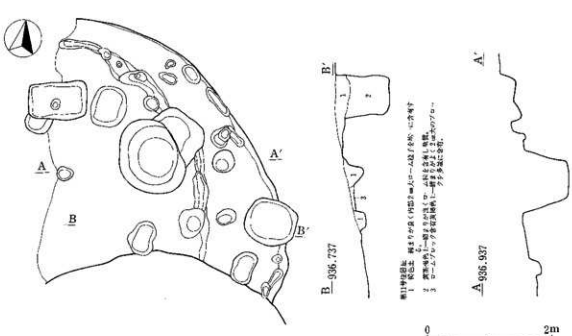
住居址上面全体が削平を受け壁の立上りは不明瞭であるが、東側に壁の立上りが若干確認された。この範囲を観察すると、掘り方は不明瞭で斜状に立ち上がる。遺存している東側で15cmを測り地形に沿って西側に至るにつれ低くなる傾向が見られる。

周溝は壁より内側に約80cm入った位置にほぼ全周する形で巡る。周溝の断面はＵ字形を呈し、幅が広くその形状は不規則で地点によって深さに異なりがある。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は北側の周溝に著しい。

主柱穴の配列を明確に把握することはできなかった。

直接ローム面を床としているが、全面が軟弱で凹凸を呈しそのために検出には困難を来した。床面は小さな凹凸を呈し、西側に傾斜している。

覆土は２層に分層できる。全体的にローム粒子を含有する土層で、床面との識別に苦慮した。



第21図　第11号住居址（1／60）

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は１層より土器片0.191kgが検出されており、その量は多いとは言えない。その他に黒曜石砕片・剥片等総数４（19ｇ）が検出されており、その内訳は翌片１、剥片Ⅰ類２、剥片Ⅲ類１である。本址は検出遺物も少なく、時期決定資料を欠くが第10号住居址との重複関係より中期後半曽利Ⅲ式期以前に帰属しよう。

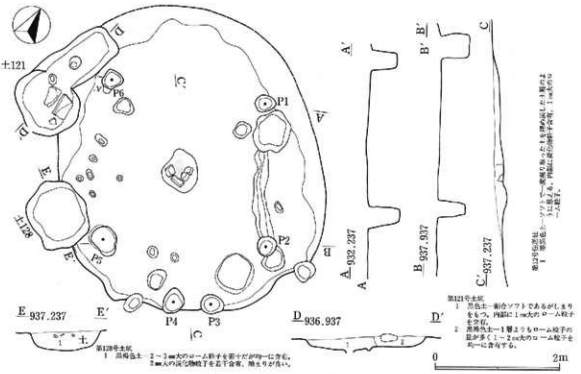
第12号住居址（第22図・図版７）

検出状況　本址は調査区のＧ－９・10、Ｈ－９・10グリッドで確認されていたものである。住居址は台地の中央部よりやや北側に寄った北側谷部の肩部分に占地している。南西側に第128号土坑が重複し、西側に第121号土坑が隣接する。本址全体が攪乱を受けていたために土坑との重複関係を把握することはできなかった。また、地形の関係上や、耕作による削平のために遺存していた部分は全体の約2/3で、本址の全容を把握し得てはいない。

遺構の構造　検出された南東側プランと床面範囲から平面プランを推定すると、平面形プランは南西－北東方向につぶれる不整楕円形を基本とするものと思われる。柱穴配列と炉址の位置関係から見ると、北西－東南方向に長軸を持つものと思われ、P_3・P_4を棟軸に関わる柱穴と仮定すると、この中点と炉址を通す線が主軸線と考えられ、主軸方向はＮ－32.5°－Ｗを示す。

住居址上面全体が削平を受け壁の立上りは不明瞭であり、若干不明瞭に南・東側の一部に壁の立上りを検出することができた。この範囲を観察すると、掘り方は不明瞭で立上りもしっかりせず、緩やかな傾斜を持ち床面と接する部分は皿状の曲線上をなす。遺存している東側で８cm、南側で７cmを測る。

周溝は間仕切りに関わると思われるものが、主柱穴のP_1・P_2を繋ぐように検出されている。また、周溝ではないが、P_4・P_5間にも小孔が認められ、これらが対辺の周溝と同様な役割を果たしたものであろうか。周溝の断面は幅の広いＵ字形を呈し、最も深い部分で11.9cmを測る。



第22図　第12号住居址（1／60）

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4、P5、P6の6本が該当するものと思われる。P3には重複が認められ、建替えが行われたものと考えられる。南西側に位置するP5、P6は位置関係等より棟軸に関わる柱穴であろう。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナー部に寄った位置に構築されており、柱穴の掘り方はしっかりし、直径の割合に比べて深いものが主体を占め、P1 59.7cm、P2 46.3cm、P3 44.6cm、P4 54cm、P5 48.3cm、P6 56.4cmで平均すると約51.6cmであり全体的に平均している。北西方向にP3、P4の対となるピットは検出されてはいないが、他の主柱穴配列より見て6角形の主柱穴配列となろう。

炉は一部の炉石の抜き去られた石囲い構造で、ほぼ住居址の中央に構築されている。炉の掘り方は東西56cm×南北60cmの不整円形を呈している。炉内の掘り方はやや円錐形に近い構造となっており、この掘り方を囲むように炉石が据えられている。炉石は北東辺が抜き取られている他はほぼ完全に遺存していた。炉石に用いられている礫は安山岩角礫で、その据え方は平坦な面を立てるように据えているが、詳細に観察すると後世に動かされた痕跡が認められ、原位置で遺存していたとは考えがたい。しかし、検出された石囲いや掘り方の状態より想定すると、小型の石囲い炉構造を考えることができる。炉底の窪み30cm×26cm、深さ30cmを測り、厚さ4cmで焼土が確認された。

直接ローム面を床としているために検出は容易であったが、地形の関係や耕作による攪乱の影響を受け、西・北・東辺付近は検出できなかったが、検出できた中央部等より観察すると全体的に緩慢で、炉址を中心としてやや皿状に窪む傾向を看取することができた。なお、床面は小さな凹凸を呈する。

覆土は漆黒色土の単一層で、詳細に観察すると一度掘り返された土が埋め戻されているような状態で、柱穴等の覆土はフカフカの状況で締まりがなかった。また、一度掘った柱穴を埋め戻すために安山岩礫を詰め込んでおり、礫間に隙間が認められたことや覆土中にビニール片などが混入していたことを考慮すると、近代に発掘調査が行われたものと考えられ、1952年に諏訪清陵高校地歴部によって行われた調査個所に該当しよう。再調査のために小片の遺物が少量埋め戻しの土に混入して検出されたに過ぎない。

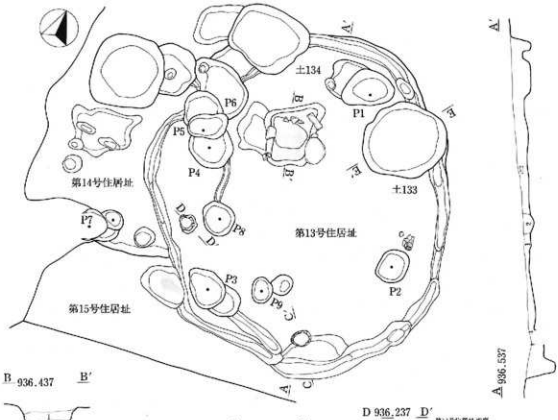
遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は1層より土器細片が微量検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総量29（123g）、その内訳は砕片11、裂片4、ピエス・エスキーユ4、剥片II類5、剥片III類4、石鏃1で、その他の石器では凹石I類1が検出されている。本址は住居址の構造や微量ながら得られた遺物よりみて中期前半井戸尻式期に帰属すると思われる。

第13号住居址（第23図・図版8）

検出状況　本址は調査区のB－8・9、C－8・9グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部に占地し、西側に第14号住居址、南西側に第15号住居址が、北東側に第133号土坑、北西側に第134号土坑が重複している。重複関係が著しい割には本址が最も最終に構築されていた関係より住居址全体の範囲を把握することができ、また、周溝がほぼ全周することより平面プランの全容を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは南西－北東方向に若干つぶれる不整円形を基本とするが、南東辺が北西辺に比較してやや外反する傾向が見られる。また、やや南東・北東・北西・南西コーナー部が角張る傾向があり、これらの点を加味するとコーナーの丸い5角形とも捉えることができる。規模は長軸5.55m×短軸4.8mで南東－北西方向に長軸を持つ。南東側辺中央のやや強く張出し部と思われる部分には埋甕が埋設され、埋甕と奥壁中央を通す線上に炉が構築されておりこの線を主軸とするが、炉址の掘り方の軸線は主軸線よりやや西方向にずれている。主軸方向はN－27.5°－Wを示す。

住居址上面全体は削平を受けているが、南側の斜面部に構築されているために壁の立上りは明瞭である。特に北西・東側の壁の立上りは明瞭に確認された。この範囲を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立



第23図　第13号住居址・第14号住居址・第15号住居址（1／60）

ち上がる。最も明瞭に遺存している東側で16cmを測る。

周溝は土坑の重複している部分を除きほぼ全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し、北側6cm、東側16.1cm、南側3.5cm、西側13.9cmを測り、東側が最も深く明瞭である。周溝底には若干の凹凸が認められ、特にその傾向は東側の周溝に著しい。南西側には2条の周溝が認められたことなどより、南西側にに拡張が行われたものと思われる。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4（P6）の4本が該当するものと思われる。P3には重複が認められ、P4・P6のように移動し建替えが行われているものもある。主柱穴の建替え等の状況から西側に拡張が行われたことが窺える。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナ部に寄った位置に構築されることを基本とするが、P2は他とは異なりやや内側によった位置に構築されている。柱穴の掘り方は様々で東側に位置する主柱穴はしっかりしているが、西側の主柱穴は不整形な形状を呈する。深さはP189.8cm、P240.3cm、P325cm・12.7cm、P435.7cm、P646.4cmで平均すると約47.4cmであるが、P3、P4、P6の西側柱穴は東側に位置する柱穴（P1、P2）に比較して浅めであった。

炉は一部の炉石の抜き去られた石囲い構造で、住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西80cm×南北90cmの不整方形を呈し、西側に浅い掘り方がある。

炉内の掘り方は2段構成となっているが、炉石を掘えた際の掘り方等は見られない。炉石は全ての辺が抜き

取られていたが、炉石下部に結め込んだと思われる10cm～15cm大の安山岩が北辺に検出された。また、炉址掘り方東側に直径32cmの球状礫が遺存していたが、この礫は炉石の抜き取り後に置かれたものと考えられる。炉底は窪み焼土が厚さ6cmで確認された。

埋甕は南壁の張り出す部分に、完形の加曽利E系深鉢が正位で埋設されていた。埋甕の掘り方は径30cmの不整円形を呈している。掘り方と埋甕の間には割合ソフトな茶褐色土が詰め込まれている。埋甕内に暗褐色土と黒褐色土が充満している。埋甕の南側に不整形な掘り方が検出されたが、埋甕に関わるかは不明である。

基本的にはローム面を床としているが南側は地形の関係より床面が流出しており検出は容易ではなかった。住居址中央部には東西に横断するように耕作による攪乱が認められ、また、覆土との識別が難しい個所があり床面の把握には困難を来した。床面は全体的に軟弱で小さな凹凸を呈する。

覆土は攪乱層を除くと明茶褐色土層の単一層である。覆土は締まりが良く硬質で、内部に2mm大の炭化物や2mm～4mm大のロ・ム粒子を含有しており、埋め戻したような感触であった。
この層内からは中期後半の曽利IV式・少量の唐草文系・加曽利E系土器片が混在する状態で検出されている。奥壁側床面上から両耳壺底部、P_2北側床上にはつぶれた状態で曽利　式深鉢が検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は1層より土器片5.251kgが検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数37（123g）、その内訳は素材粒1、砕片2、裂片8、ピエス・エスキーユ3、剥片I類4、剥片II類7、剥片III類7、石鏃1、石鏃ブランク1、スクレイパー3、その他の石器では打製石斧1が検出されている。本址は埋甕や床面上の遺物よりみて中期後半曽利IV式期に帰属しよう。

第14号住居址（第23図・図版8）

検出状況　本址は調査区のB－8グリッドで確認されたもので、第13号住居址の検出に伴ってその存在が明確になった。住居址は台地の南側斜面部に占地し、東側に第13号住居址と南側を第15号住居址と重複する。また、北西側に第135号土坑が重複する。本址の周溝上に第13号住居址の貼り床がなされていたことより、本址は第13号住居址より古いものと考えられる。西側が畑地の造成によりカットされ、北西側を土坑と重複するために平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址掘り方より住居址であることが確認でき、その概要を把握することができた。

遺構の構造　全体が耕作により削平され、西側をカットされているために平面形プランの全容を把握することはできなかったが、主柱穴配列や周溝より考えると円形プランを呈するものと考えられる。入り口部に検出された埋甕と、炉址の掘り方を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－70°－Wを示す。

住居址上面全体が、削平を受けているために壁は南側の一部を除き遺存しておらず不明であるが、遺存している部分より想像すると、かなり明瞭なものが構築されていた可能性が高い。

周溝は東辺部分の一部が検出された。周溝の上面は第13号住居址の貼り床がなされており、検出には困難を来した。周溝の構造は幅9cmと狭い割には深さが11.2cmもある明瞭なもので、断面形はコ字形を呈する。

配列や深さより主柱穴と思われるP_5、P_7の2本が検出されている。住居址構造や時期的な問題を加味すると4本柱の主柱穴構造を想定できよう。柱穴の掘り方はしっかりしているが、平面形は不整形である。主柱穴の深さは$P_5$73.8cm、$P_7$60.7cmであり、割合深さのある柱穴である。

住居址中央部に炉址の掘り方と思われる不整形な掘り方が検出された。深さは5.6cmと浅く、加熱を受け硬化した部分や焼土等は検出されてはいないが、位置的関係を考慮すると炉址に関わる掘り方と思われる。

埋甕は南東側の住居址の平面プランがやや張り出した部分に中期後半縄文施文深鉢胴部が正位で埋設されている。埋甕の掘り方は径25cmの不整円形を呈し、この掘り方はちょうど土器の大きさに合うように構築さ

れている。埋甕内には褐色土と暗褐色土が堆積している。

床面全体は耕作による削平を受けており、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　土器片は少量で0.9kgが検出されている。本址は住居址構造や埋甕、第13号住居址との重複関係よりみて中期後半曽利Ⅲ式期に帰属するものかと思われる。

第15号住居址（第23図）

検出状況　本址は調査区のB－8・9グリッドで確認されたものであるが、第13号・第14号住居址の検出に伴って掘り方を持つ焼土範囲が認められその存在が明確になった。住居址は台地の南側斜面部に占地し、北東側に第13号住居址と北側を第14号住居址と重複する。本址の柱穴等に第13号住居址の貼り床がなされていたことより、本址は第13号住居址より古いものと考えられる。他の遺構との重複や畑地の造成等により攪乱されているために平面プランの全容を把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址掘り方より住居址であることが確認でき、その概要を把握することができた。

遺構の構造　遺構全体が耕作等により削平され、西側をカットされているために平面形プランの全容を把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。

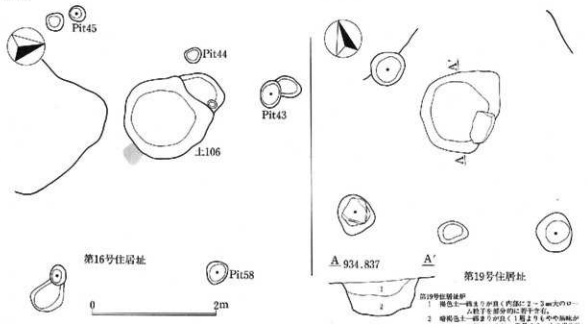
住居址上面全体が、削平を受けているために壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_8、P_9の3本が検出されている。住居址構造や時期的な問題を加味すると7本柱の主柱穴構造を想定できようか。柱穴の掘り方はしっかりしているが、平面形は不整形である。主柱穴の深さは$P_1$56.5cm、$P_2$51cm、$P_4$18.6cmであり、割合深さのある柱穴である。

住居址中央部に炉址の掘り方が検出された。深さは2cmと浅く、掘り方の中央部40cm×22cmの範囲に厚さ3cmの焼土が検出された。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　土器片は細片が少量検出されている。本址は住居址構造や第13号住居址との重複関係、覆土内から得られた土器よりみて、中期前半井戸尻Ⅲ式期から中期後半曽利Ⅰ式期に帰属するものかと思われる。



第24図　第16号住居址・第19号住居址（1／60）

第16号住居址（第24図）

検出状況　本址は調査区のD－9・10、E－9・10グリッドで確認されたものである。住居址は台地の中央部よりやや南西寄りに占地し、南側に第4号地下式坑、住居址内には第106号土坑が重複している。土坑上に貼り床がなされていないことより、土坑が本址を切るものと考えられる。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるPit58、Pit54、Pit45、Pit43の4本が検出されているが、柱穴配列等から考えると第4号地下式坑と重複する位置に柱穴があったものと思われ、5本柱構造を想定でき、主柱穴構造は5角形を呈していたものと考えられよう。柱穴の掘り方はしっかりし、径は20cm～30cm前後である。主柱穴の深さはPit58 64cm、Pit54 46.4cm、Pit45 14.6cm、Pit43 36.6cmで平均すると約40.4cmであり、平面規模に対し割合深く、掘り方がしっかりしている。

主柱穴に囲まれた範囲中央部に焼土範囲が検出された。焼土範囲は第106号土坑に切られており明確ではないが、遺存している範囲は25cm×30cmと狭い。石囲い等の施設は見られない。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物はない。本址は主柱穴配列等よりみて中期前半に帰属しよう。

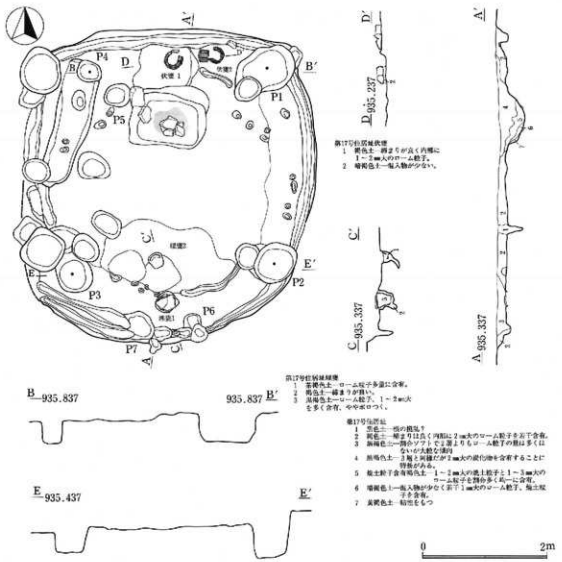
第17号住居址（第25図・図版8）

検出状況　本址は調査区のE－6・7、F－6・7グリッドで確認されたものである。住居址は台地の中央部より西側に寄った位置に占地し、西側に第2号方形柱穴列、第174号土坑が重複する。第174号土坑土坑の上面には貼り床がなされ、第2号方形柱穴列を構成する第168号土坑上面南側にも貼り床が認められたことより新旧関係を把握することができた。本址の上面は畑地造成の際に削平を受け、また、西側は地形の関係等により壁が流出し検出することはできなかったが、周溝がほぼ全周して検出されたことより平面プランの全容を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは不整隅丸方形を基本とするが、北辺が直線上であるのに対して南辺はやや外反する傾向が見られ、最も張り出した部分は南辺の中央部で、この部分が入り口部に関わる張出し部に該当するものと考えられる。やや南東・北東・北西・南西コーナー部が角張り、入り口部が張り出すことを加味するとコーナーの丸い5角形を基本的な平面プランと捉えることができる。規模は長軸5.06m×短軸4.69mで南－北方向に長軸を持つ。南側辺中央張出し部に埋甕が埋設されており、埋甕と奥壁中央を通す線上に炉が構築されておりこの線を主軸とすると、主軸方向はN－0.7°－Eを示す。

住居址上面全体が削平を受け壁の大部分は遺存してはいないが、南・東側に壁の立上りが若干確認された。この範囲を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる。遺存している東側で20.8cm、南側で14cmを測る。

周溝は西側に重複する第2号方形柱穴列の範囲を除きほぼ全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し、幅に対して割合深く北側15.4cm、東側13.6cm、南側20.2cm、西側4.5cmを測り、地形の関係から西側が最も浅く不明瞭であるが、他の部分は明瞭でしっかりしている。周溝内はやや凹凸があるものの小孔等は穿たれてはいない。南・北側の一部に2条の周溝が認められ、南・東・西には内側の周溝と連なるように小孔が穿たれている。南内側溝上部に部分的に貼り床がなされていたことや、周溝が同心円状に2条検出され



第25図　第17号住居址（1／60）

たことよりより本址は同心円状に拡張が行われたものと思われる。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4(P5)の4本が該当するものと思われる。P1・P2・P3には重複が認められ、P4・P5のように移動し建替えが行われているものもある。P1南西側、P2西側、P3北東側には上面に張り床が認められ旧柱穴と思われる。主柱穴が外側に建替えが行われている点や、周溝の状況から、同心円状に拡張がなされたたことが窺える。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナ部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP1 42.1cm・48.7cm、P2 53cm・42.5cm、P3 41.3cm・45.8cm、P4 50.5cm、P5 31.4cmで平均すると約44.4cmであり、全体的に平均している。

北側奥壁には炉址掘り方と繋がる不整形な掘り方が認められる。この掘り方は深さ10cmの浅い皿状を呈し、掘り方中央部より北東側に寄った位置に伏甕が検出された（No.1）。伏甕に用いられている土器は中期後半加曽利E系深鉢口縁部で、掘り方底より4　浮いた状態で逆位に設置している。この伏甕東側にも掘り方を有しない伏甕が検出されている（No.2）。伏甕No.2も伏甕No.1と同様に加曽利E系深鉢口縁部が用いられ、伏甕上に曽利Ⅳ式深鉢胴部破片が倒れかかるように遺存していた。石壇等の施設は構築されてはいないが、これらの伏甕は奥壁祭壇に関わるものと思われる。

炉は炉石の抜き去られた石囲い構造で、住居址中央より北側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は東西1.23m×南北0.83mの隅丸長方形を呈し、北側奥壁側に浅い掘り方がある。炉内の掘り方は2段構成となっているが、炉石を掘った際の掘り方等は検出されてはいない。

炉石に用いられていたと思われる板状の安山岩礫が掘り方北西脇に遺存していたが、この礫は炉石を抜き取った後に掘り方内に投げ込んだものである。炉底にも同様な礫が遺存していた。

炉床は径55cm×42cmの範囲で、厚さ7cmで焼土が堆積していた。

埋甕は南壁の張り出す部分に、新旧の埋甕が検出された。埋甕No.1（新）は胴部下半を取り去った曽利IV式深鉢が正位で埋設されていた。埋甕の掘り方は径31cmの不整円形を呈し、埋甕上面には板状の安山岩礫が平坦に据えられているが、蓋石は若干南側にずれている。掘り方と埋甕の間は締まりがあるローム粒子を大量に含有する茶褐色土が詰め込まれている。埋甕内には褐色土が充満している。埋甕No.2（旧）は埋甕No.1の北西側39cm内側に入った位置に検出された。埋甕No.2は曽利IV式深鉢胴部を正位に埋設する。埋甕上には明瞭な貼り床等は検出されてはいないが、位置関係よりみて新旧関係を把握することができた。埋甕No.1に比べて甕の遺存度が低く、掘り方なども径20cmの不整円形で、埋甕No.1よりも簡易な構造である。埋甕No.2の周辺には浅い皿状の窪みが認められる。埋甕No.1南側の周溝部にはP_6（深さ14cm）、P_7（深さ24.6cm）のような対ピット状の柱穴が検出されている。

直接ローム面を床としているために検出は容易であり、西側の一部を除き全体的に堅緻で緻密であるが小さな凹凸を有する。外帯は特に堅緻で内帯に比べてやや高い。埋甕の北側範囲は他の部分に比べてやや低く浅い皿状となる。

覆土は3層に分層できる。入り口部に黒褐色土（3層）が堆積し、住居址の中央部には褐色土（2層）が堆積する。特徴的な土層堆積は炉址上に認められた。遺物は2・3層を中心に出土した。入り口部3層内床上13cmに中期後半曽利IV式深鉢底部が横倒し遺存し、また、入り口部対ピットP_8上にも曽利IV式深鉢大型破片が横倒していた。この他にP_1、P_2間の床面の若干上より黒曜石砕片・剥片が集中して検出されている。

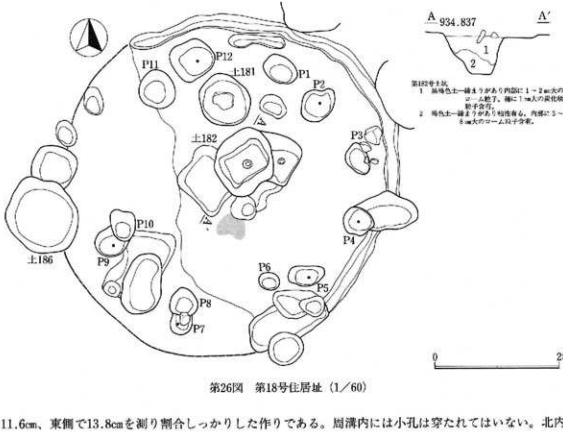
遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は曽利系と加曽利E系の土器片5,055kgが検出されているが、唐草文系土器は希少である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数79（245g）、その内訳は素材粗1、砕片13、裂片11、ピエス・エスキーユ2、石核4、剥片I類5、剥片II類18、剥片III類13、剥片IVA類10、スクレイパー1で、その他の石器は磨製石斧I類1、凹石I類3、磨石1が検出されている。本址は埋甕よりみて中期後半曽利IV式期に帰属しよう。

第18号住居址（第26図・図版9）

検出状況　本址は調査区のC－6・7、D－6・7グリッドで確認されたものである。住居址は台地の中央部よりやや南側斜面部に寄った位置に占地し、南側に第19号住居址が東側には第186号土坑、東側には第189号土坑、内部には第181号・第182号土坑が重複し、南東側には第6号地下式坑が隣接する。第182号土坑を除き土坑上に貼り床等がなされていないことより、これらの土坑が本址を切るものと考えられる。全体が耕作により削平されていることや、西側が流出する点、多くの土坑と重複することなどより、平面プランの全容を把握することはできず、辛うじて検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作による削平、西側斜面に沿って壁や床が流出している点より平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より円形プランを呈するものと考えられる。主軸方向は不明である。

住居址上面全体が、削平を受け壁の立上りは検出されなかったが、周溝は西側を除き他の部分では遺存しており、その様相を観察することができた。周溝は25cm前後の幅を持つ割合幅広のもので、深さは北側



第26図　第18号住居址（1／60）

11.6㎝、東側で13.8㎝を測り割合しっかりした作りである。周溝内には小孔は穿たれてはいない。北内側に短い周溝が検出され、この周溝より考えると同心円状に拡張が行われた可能性が考えられる。

配列や深さより主柱穴と思われる柱穴は$P_2(P_1)$、$P_4(P_3)$、$P_8(P_6)$、$P_7(P_8)$、$P_9(P_{10})$、$P_{12}(P_{11})$の12本が該当するものと思われる。検出本数が多い点や位置関係より考えると、検出された柱穴は新旧のもので、6本柱構造を基本とすると考えられる。位置関係やP_3、P_{11}に貼り床が認められたことなどよりP_1、P_3、P_6、P_8、P_{10}、P_{11}が旧柱穴配列と考えられ、P_2、P_4、P_5、P_7、P_9、P_{12}が新柱穴配列と考えられる。柱穴の掘り方はしっかりし径は50㎝前後である。旧主柱穴の深さは$P_1$57.5㎝、$P_3$52.2㎝、$P_6$30㎝、$P_8$39.4㎝、P_{10}42.1㎝、P_{11}48.5㎝で平均すると約44.9㎝である。新主柱穴の深さは$P_2$47.8㎝、$P_4$36.2㎝、$P_5$53.5㎝、$P_7$35.2㎝、$P_9$23.9㎝、P_{12}49.4㎝で平均すると約41㎝であり旧主柱穴より浅めである。主柱穴の建替えには$P_8 \rightarrow P_7$、$P_{10} \rightarrow P_9$のように位置を若干外側に移動しただけのものと、$P_1 \rightarrow P_2$、$P_3 \rightarrow P_4$、$P_6 \rightarrow P_5$、$P_{11} \rightarrow P_{12}$のように横にスライドするものが認められる。

主柱穴に囲まれた範囲中央部より南側に寄った位置に45㎝×35㎝の範囲で焼土が検出された。石囲いや掘り方等は認められなかったが、この焼土範囲が本址の炉址であろう。これは削平を受けたために炉底が辛うじて残った結果であろう。

床面全体は耕作による削平を受けて、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　遺物はP_4内より中期後半曽利Ⅰ式土器片が得られている。土器片は総量で0.51kgが検出された。その内容は曽利Ⅰ式（梨久保B式系）である。その他に黒曜石砕片・剝片等総数5（101g）、その内訳は素材粒1、楔片2、剝片Ⅱ類2が、その他の石器では打製石斧1、磨製石斧Ⅰ類2、横刃型石器1、凹石Ⅰ類3が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。

第19号住居址（第24図・図版9）

検出状況　本址は調査区のB－6・7、C－6・7グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや中央部に寄った位置に占地し、北東側に第6号地下式坑が北西側に第18号住居址が重複する。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかった。入り口部に位置していると思われるP4と炉址の掘り方を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－17°－Eを示す。住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP1、P2、P3、の3本が検出され、重複する第6号地下式坑の位置に主柱穴が存在したとすると、4本柱構造を想定できる。主柱穴には建替えによる重複や移動は認められなかった。柱穴の掘り方はしっかりし径は55cm前後である。主柱穴の深さはP131.6cm、P232.1cm、P322.5cmで平均すると約28.7cmであり、削平されているために浅い。

P1、P2間のほぼ中央に50cm×35cm、深さ7.5cmの不整楕円形のピットが検出された。ピット内には中期後半唐草文系深鉢胴部大型破片が遺存し、位置関係やピットの状況より埋甕に関わるものと考えられる。

炉の掘り方と思われる土坑状の掘り方が主柱穴に囲まれる範囲中央に検出された。掘り方は東西1.21cm×南北1.37cmの不整円形を呈し、深さは45.3cmを測り内部には焼土等検出できなかった。炉石は全て抜き去られていたが、掘り方内に投げ込まれた形で板状安山岩礫が検出されている。

床面全体は耕作による削平を受けて、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　検出された土器片はP4内より得られた唐草文系深鉢胴部大型破片1.63kgだけである。その他に黒曜石砕片・剥片等総数3（60g）、その内訳は砕片1、剥片Ⅲ類2が検出されている。本址は主柱穴配列や炉等の構造や検出された七器片よりみて中期後半曽利Ⅲ式期以降に帰属しよう。

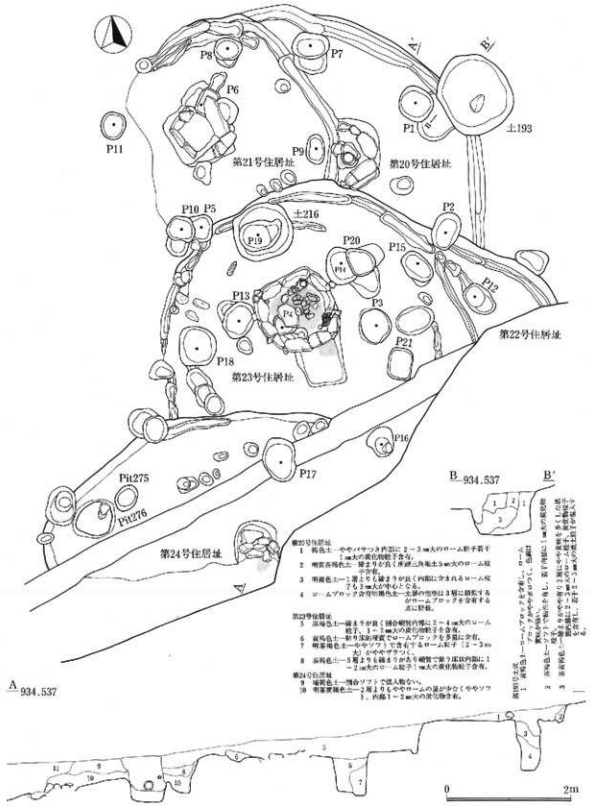
第20号住居址（第27図・図版9）

検出状況　本址は調査区のB－6グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部よりやや中央部に寄った位置に占地し、南側に第22号・23号住居址、西側に第21号住居址、北東側に第193号土坑が重複し、東側には第53号住居址が隣接する。重複する第21号・第22号・第23号住居址上に本址の貼り床等が認められなかったことより、これらの住居址が本址を切るものと考えられる。また、第193号土坑の上面は本址により埋め戻されており、本址よりも古いことが確認された。

遺構の構造　上面が若干耕作により削平され、西・南側を他の住居址により切られているために、平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。主軸明確には不明ではあるが、検出された棟軸に関わると思われるP2、P3、P6、P7の柱穴方向に主軸方向を求めると、主軸方向はN－10.5°－Wとなる。

住居址上面全体が、削平を受け壁の立上りは検出されなかったが、周溝は重複により切られている部分を除き他の部分では遺存し、その様相を観察することができた。周溝は25cm前後の幅を持つ割合幅広のものが1条巡る。深さは北側12.1cm、東側で7cmを測り割合しっかりした作りである。周溝内には小孔は穿たれてはいない。

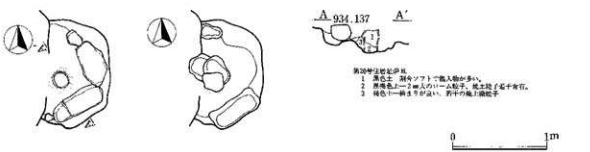
配列や深さ、重複関係より主柱穴と思われる柱穴はP1、P2、P3、P4、P5、P6、P7の7本が検出された。P3には埋め戻しが、P5には第23号住居址の貼り床がなされ、P4は第23号住居址の柱下に掘り込まれていた。また、P5、P6は第21号住居址により貼り床がなされていた。本址の主柱穴の掘り方が深いことが



第27図　第20号住居址・第21号住居址・第22号住居址・第23号住居址・第24号住居址（1／60）

辛いして重複が著しい側には全ての主柱穴を把握することができた。

柱穴の掘り方はしっかりし直に近い掘り方を有している。径は40cm～50cm前後である。主柱穴の深さはP_1 85.5cm、$P_2$85.6cm、$P_3$69.3cm、$P_4$26.3cm、$P_6$46.9cm、$P_7$75.3cmである。重複している部分に検出された柱穴は概して浅かったが、P_1、P_2、P_7の深さが平均的なものであると思われる。主柱穴の著しい建替えを認めることはできなかった。



第28図　第20号住居址炉址(1／40)

主柱穴に囲まれた範囲中央部よりやや東側に寄った位置に土器埋設の石囲い炉址が検出された。炉址の西側は第21号住居址により破壊されており、炉址の全容を把握することはできなかった。炉址の中央部より南側に若干寄った位置に、中期後半曽利Ⅰ式胴部上半を正位で埋設する。土器内には焼土は認められず、土器を囲むように31cm×30cmの範囲で焼土が検出された。この土器を囲むように石囲いがなされる。炉石は南東・東・北東側のものが遺存していたが、北側のものについては検出できず、第21号住居址により削除されたものか、廃絶の際に抜き取られたものか判然としなかった。炉石は炉体土器を囲むように平坦な面を有する安山岩礫を水平に据えている。炉址の掘り方は径1.1mの不整円形を呈しているが、詳細に観察すると、6角形に隅が張る傾向が窺え基本的な形は6角形を呈するものと考えられる。掘り方の南東・北外周に炉石を据えるのに用いたと思われる溝状の掘り方が検出された。約半分を第21号住居址により切られているが、掘り方等より石囲いの状態を推定すると、平面形が6角形を呈するお化型の石囲いを想定することができる。

床面全体は割合堅緻であるが、小さな凹凸を有し、南側に傾斜する傾向が窺える。

覆土は2層に分層できる。壁際周溝上には三角堆土が認められる。覆土は褐色土で内部にローム粒子と炭化物粒子を若干含有する。P_1内の土層堆積状況が観察できた。それによると柱穴内には締まりの良い明褐色土と柱穴底部にロームブロックを含有する明褐色土が見られ、この両者共にその層性より埋め土的で、住居址廃絶時に柱が抜き取られ柱穴が埋め戻されたことが想定できる状態であった。遺物は1層を中心に中期後半曽利Ⅰ式（梨久保B式）、曽利Ⅱ式（曽利系と縄文系が混在する状態）土器片が出土している。また、炉体土器として用いられている土器は曽利Ⅰ式深鉢である。

遺物の出土状況　遺物は覆土内より曽利Ⅰ式に混在して曽利Ⅱ式土器片が得られている。土器片は総量で1.23kgが検出されている。その内容は曽利Ⅰ式（梨久保B式系・曽利系）、曽利Ⅱ式（曽利系・縄文系）である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数10（36g）、内訳は砕片2、裂片1、ピエス・エスキーユ1、剥片Ⅰ類2、剥片Ⅲ類3、石鏃プランク1が検出されている。その他の石器では凹石Ⅰ類1、剥片1が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。

第21号住居址（第27図・図版10）

検出状況　本址は調査区のB－5・6グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南傾斜面に面した緩斜面に占地し、東側に第20号住居址、南側を第23号住居址が重複する。第20号住居址を切っていたこと

より新旧関係を把握することができた。本址の西側は畑地造成の際に削平を受けており、また、南側は第23号住居址の覆土内であったために検出することはできなかったが、周溝が約1/2検出され、主柱穴配列が明確になったことより平面プランの全容を把握することができた。

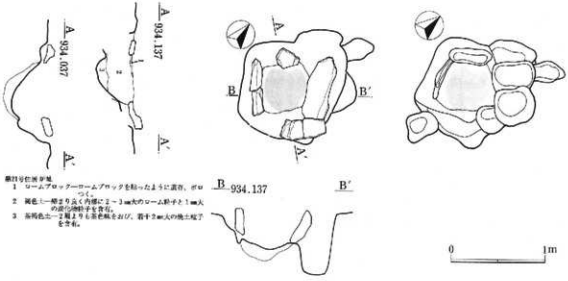
遺構の構造　平面形プランは西側が流出し検出できなかったが、北東・南西側コーナーのあり方より不整隅丸方形を呈するものと思われる。規模は主柱穴配置等から推定すると、長軸3.76m×短軸3.45mで北西－南東方向に長軸を持つ。奥壁と思われる北西壁中央を通す線上に炉が構築されておりこの線を主軸とすると、主軸方向はN－31.5°－Wとなる。

住居址上面全体が削平を受け壁の大部分は遺存してはいないが、北東側に壁の立上りが若干確認された。この範囲を観察すると掘り方はしっかりして直線状に立ち上がる。遺存している北東側で16.6cmを測る。

周溝は平面プランの確認できなかった西・南側を除き、東・北側を全周する形で壁際を巡る。周溝の断面はU字形を呈し、割合幅が広く東側で22cm、北側で20cmを測る。深さは北側2cm、東側12cmを測り東側の周溝が割合明瞭な作りをしている。周溝内はやや凹凸があるものの小孔等は穿たれてはいない。北側の一部に2条の周溝が認められたことより、本址は北側に拡張が行われたものと思われる。

主柱穴は配列や深さよりP$_8$、P$_9$、P$_{10}$、P$_{11}$の4本が該当するものと思われ、基本的には4角形の主柱穴構造を有していると考えられる。P$_8$・P$_{10}$には重複が認められ、P$_8$南西側、P$_{10}$北東側にはロームによる埋め戻しが認められ旧柱穴の部分と思われる。主柱穴が外側に建替えが行われている点や周溝の状況から、北東－南西方向に拡張がなされたことが窺える。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナ部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP$_8$40.3cm、P$_9$53.1cm、P$_{10}$58.1cm・49.2cm、P$_{11}$41.4cmで平均すると約46cmであり、全体的に平均している。

炉は炉石の一部が抜き去られた石囲い構造で、住居址中央より北西奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は南西－北東0.93m×北西－南東1.02mの隅丸長方形を呈する。炉内の掘り方は南西側に浅い掘り方を有する2段構成となっている。炉石を据えた際の周溝状の掘り方が北西側辺・南西辺に検出されいる。炉石は南西辺・南東辺の一部・北東辺に板状の安山岩礫が遺存していた。炉石の据え方は南西辺・北東辺が斜状であるのに対して、南東辺は平坦な面を出すように浅い掘り方内に炉石を据えておりこの辺が炊き口に相当しよう。北西辺にも板状の礫が認められたが、この礫は炉石を抜き取った後に掘り方内に投げ込んだよ



第29図　第21号住居址炉址（1／40）

うな状況を呈していた。掘り方や石囲いの状況から炉の形状は切り炬燵状の炉址を復元できよう。炉底は窪み55cm×62cmの範囲で、厚さ10cm～13cmで焼土が堆積していた。

直接ローム面を床としているために検出は容易であったが、流出している西側範囲においては床面を検出することができなかった。床面は全体的に堅緻で緻密であるが小さな凹凸を有し、南西側に緩やかな傾斜を持つ。なお、重複関係より本址が第23号住居址覆土状に貼り床をなしていなくてはならないが、明確な貼り床を検出することはできなかった。

覆土は黒褐色土の単一層である。遺物は覆土内から散在する形で検出されているが、一括性の高いものは検出されてはいない。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は中期後半曽利系と唐草文系の土器片0.705kgが検出されているが、曽利系土器は希少である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数19（70.5g）、その内訳は素材粒3、裂片6、剥片Ⅰ類2、剥片Ⅱ類6、石鏃ブランク1、スクレイパー1が、その他の石器では凹石1類2、剥片1が検出されている。本址は住居址構造や重複関係よりみて中期後半曽利Ⅲ式期に帰属しよう。

第22号住居址（第27図・図版10）

検出状況　本址は調査区のA－7グリッドで第23号住居址の精査に伴って確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部に占地し、住居址構築は南斜面を階段状に切り行われている。西側側に第23号住居址、北側に第20号住居址が重複する。南側には現代の水道管が埋設されており攪乱されている。なお、本址の大半は第23号住居址に切られたような形で重複している。本址の主柱穴上に第23号住居址の床なされていることより、本址との重複関係を把握することができた。全体が第23号住居址により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された主柱穴、北東側壁、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が第23号住居址により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列や唯一検出された北東側壁より東西方向にやや長い不整円形プランを想定できようか。

北東側に唯一壁と周溝を検出できただけである。壁は地形的な要因より北壁側を高く掘り込める特徴有し、壁高は41cmを測りその状況は、台地南側斜面を階段状に切り立てたような状態を呈する。壁の掘り方は丹念で直線状に立ち上がる。周溝は壁脇に1条が巡る。周溝は幅が15cmとあまり広くはなく、深さが6cmと貧弱な傾向を呈する。

配列や深さより主柱穴と思われるP_{12}、P_{13}、P_{14}の3本が検出されているが、柱穴配列等から考えると第23号・第24号住居址と重複する位置に柱穴があったものと思われ、検出された3ヶ所の主柱穴配列より想定すると6本柱構造を考えることができ、主柱穴構造は6角形を呈していたものであろう。柱穴の掘り方はしっかりし径は45cm前後で、平面プランは楕円形を呈する。主柱穴の深さはP_{12}83.7cm、P_{13}56.3cm、P_{14}54.4cmで平均すると約64.8cmであり、平面規模に対し割合深く掘り方がしっかりしている。

主柱穴に囲まれた範囲中央部に方形の掘り方を持つ焼土範囲が、第23号住居址の炉址南側に重複して検出された。焼土範囲は第23号住居址炉址に切られて明確ではないが、遺存している範囲は27cm×30cmと狭い。掘り方は85cm×74cmの隅丸不整長方形で、深さは7.6cmと浅い。石囲い等の施設は見られない。

床面は東側に遺存し、それによると床面は堅緻で緻密で、小さな凹凸を有する。

遺物の出土状況　本址よりの出土土器はない。その他に黒曜石砕片・剥片等総数10（59.5g）、その内訳はピエス・エスキーユ1、石核1、剥片Ⅰ類2、剥片Ⅱ類5、石鏃ブランク1が検出されている。本址は主柱穴配列等よりみて中期前半に帰属しよう。

第23号住居址（第27図・図版10）

検出状況　本址は調査区のA・B－6グリッドで確認されたものである。住居址は台地の南側斜面部を切るように構築され、ちょうど台地南側斜面の屑部に占地している。東側に第22号住居址、北側に第21号・第20号住居址、第216号土坑が、南側には第24号住居址が重複する。第24号住居址と接する部分に現代の水道管が埋設されておりそのためか南側は攪乱された状態を呈している。重複する第22号住居址の主柱穴や炉址上に貼り床がなされ、第24号住居址上も本址により埋め戻されていた点などを考慮すると、第22号・第24号住居址は本址よりも古いものと考えられる。また、第216号土坑は本址により埋め戻され、本址よりも古いことが確認された。

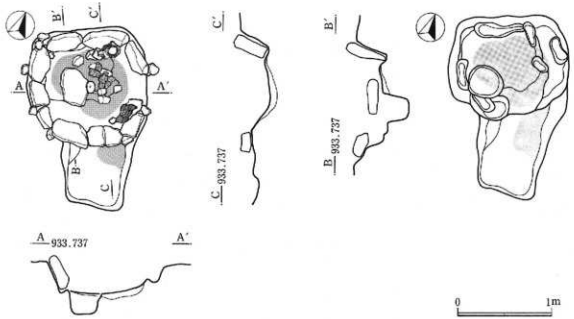
遺構の構造　西側が若干耕作により削平され、南側が第24号住居址内に構築されていることもあって平面形プランの全容を把握することはでず、検出された部分だけをみると魚鱗形を呈する。主柱穴配列や周溝より推定すると平面形プランは不整円形を呈していたものと考えられる。主軸方向は明確には不明ではあるが、検出された棟軸に関わると思われるP18と炉址中央部を通す線を主軸方向とすると、主軸方向はN－27°－Wとなる。

住居址西側は地形が傾斜する関係や削平を受けている関係より壁の立上りは検出されなかったが、北側壁は地形的な要因より高く掘り込めてあり、壁高は28.6cmを測りその状況は、台地南側斜面を階段状に切り立てたような状態を呈する。壁の掘り方は直線状で直角に近い立上りを持つ。

周溝は壁際を巡るように検出されたが、東側第22号住居址と重複する部分はやや判然としていない。この範囲内側に方向が不規則な周溝がもう1条認められた。この点より若干ではあるが東側に住居址が拡張されているものと考えられる。また、主柱穴P17、P18、P19、P18を繋ぐように途切れながら不明瞭な溝が検出されている。この溝はその位置から考えて間仕切り等に関わるものであろうか。壁際に巡る周溝は18cm前後の幅を持つ凹台幅広で、深さは北側8.2cm、東側で6.6cmを測る。周溝内には小孔は穿たれてはいないが、西側の周溝は短い溝の連続により周溝が形作られている。

配列や深さ、重複関係より主柱穴と思われる柱穴は新旧合わせてP15、P16、P17、P18、P19、P20、P21の7本が検出されているが、調査区外に位置すると思われる柱穴や新旧関係を考慮して主柱穴構造を推定してみると、6角形構成の柱配置を想定できようか。P20、P21には埋め戻しが認められP19には重複がみられる。位置関係からみてP19西側、P20、P21は拡張以前の旧住居址に伴うものと考えられ、主柱穴の配列よりP20→P15、P21→Pへと主柱穴が移動し建替えられP19は同位置で建替えが行われたものと理解できよう。柱穴の掘り方はしっかりし直に近い掘り方を有している。径は様々であるが、平面プランが不整楕円形を呈するものが大半を占める。主柱穴の深さはP15 66.2cm、P16 21.3cm、P17 72.2cm、P18 63.6cm、P19 75.7cm・68.2cm、P20 54cm、P21 54.5cmであり、平均すると約58.3cmとなる。

主柱穴に囲まれた範囲中央部よりやや北西側に寄った位置に石囲い炉址が検出された。炉址の南側に第22号住居址の炉址掘り方と重複するが、炉址の全容を把握することができた。炉址の掘り方は1.25m×1.06mの胴張りの隅丸不整方形を呈し、北東側の掘り方が2段構造となり、北西辺と南西辺に炉石を据えるために掘られたと思われる溝状の掘り方が検出された。石囲いは掘り方の縁辺に沿うようにほぼ全周する形で据えられているが、北東側の一部は礫が1個分抜けておりこの部分に嵌まると思われる礫が炉内に遺存していた。炉石に用いられている石は板状の安山岩礫で、これを北西・南西・北東側は炉内に傾斜を持ち斜状に据え、南東側は平坦に据えている。炉石の間には10cm前後の小礫が詰め込まれ炉石を固定し、炉址構築は丹念に行われている。南東側の炉石が平坦に据えられていることよりこの部分が炊き口かと思われる。炉石の掘り方の上面観はお花型と切り炬燵型の中間的な形状を呈する。炉底は第20号住居址の主柱穴が重複しており、こ



第30図　第23号住居址炉址（1／40）

の柱穴を掘めて皿状に炉底をしている。炉底には82cm×63cmの範囲に厚さ7cmの焼土が検出された。

床面全体は割合堅緻であるが、小さな凹凸を有し、南側に傾斜する傾向が窺える。第24号住居址と重複する部分は硬質の茶褐色土を用い貼り床としている。また、第22号住居址の炉址掘り方上には黄褐色土による貼り床がなされていた。第24号住居址と重複する部分に84cm×65cmの範囲で焼土範囲が検出されているが、焼土の状態等から炉址等に関わるものではなく、焼土ブロックを住居址内に投げ込んだものであろう。

覆土は黒褐色土の単一層である。遺物は1層を中心に中期後半曽利Ⅱ式（唐草文が主体）土器片が出土している。特に炉内には投げ込まれたような状態で約4個体以上の土器が廃棄されている。炉西隅には台付き土器の台部が正位で、北隅には胴部下半を欠損する唐草文系深鉢が逆位の状態で検出されており、これらの土器の出土状態を考えると単に炉址内に土器を廃棄したと安易に解釈するのではなく、何らかの意図の基に廃棄行為が行われたものと考えられようか。

遺物の出土状況　遺物は覆土内より曽利Ⅱ式土器片が得られている。土器片の総量は21.925kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約18個体分）とその量は多量である。その内訳は唐草文系の土器が主体となり曽利系のものは従属的な立場を取っている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数73（267.5g）、内訳は素材粒3、砕片4、裂片16、ピエス・エスキーユ4、石核3、剥片Ⅰ類9、剥片Ⅱ類16、剥片Ⅲ類12、石鏃1、石鏃ブランク1、ドリル2、スクレイパー2が、その他の石器では打製石斧1、横刃型石器1、礫器Ⅰ類2、凹石Ⅰ類1、凹石Ⅱ類1、砕片1が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第24号住居址（第27図・図版11）

検出状況　本址は調査区のアー6グリッドで確認されたものである。第23号住居址の精査に伴って検出された住居址である。住居址は台地の南側斜面部に占地し、北側に第23号住居址が重複し、北東側には第22号住居址が隣接し、南側の約半分を調査区外に位置するために住居址の全容を把握することはできなかった。また、住居址内を横断するように現代の水道管が埋設され、南側斜面部は畑地造成の際に削平を受けていたが、しかし、北壁・炉址の検出等により若干住居址の内容を把握することができた。

遺構の構造　全体が耕作による削平、南側斜面に沿って壁や床が流出している点などより平面形プランを把握することはできなかったが、検出された北壁より考えると円形プランを呈するものと考えられる。主軸方向は不明である。

北側の壁面を除き他の部分の壁は検出されなかった。北側の壁を観察すると、壁の立上り方は直線状に外斜する傾向が窺え、割合明瞭な掘り方で高さ17cmを測る。周溝は北側の一部に浅く不明瞭なものが検出されているが他の部分では検出されてはいず、周溝は全周していたものとは考えられない。

配列や深さより主柱穴と思われる柱穴はPit275が該当するものと思われるが、他の部分については検出できなかった。主柱穴であるPit275の深さは60.1cmを測る。柱穴の掘り方は点に近い掘り方で、径の割に深いものである。Pit275の南西脇には深さ72.9cmの袋状土坑（Pit276）が構築されている。これはその位置や形状より中期前半の住居址内にみられる屋内貯蔵穴に該当するものであろう。この坑内からは打製石斧２、剥片３が検出されている。

住居址の中央部と思われる位置よりやや東側に寄った位置に炉址が検出された。炉石が掘り方内部に投げ込まれたような状態で検出されている。炉址の掘り方は65cm×70cmの隅丸方形を呈し、南側に焼土範囲が認められた。

床面全体は耕作による削平を受けているが、北側範囲を中心に硬化した面が若干検出された。

遺物の出土状況　遺物は中期前半藤内Ⅱ式・井戸尻Ⅰ式土器片が得られている。土器片は総量で5.103kgが検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数21（135.5ｇ）、その内訳は素材剥３、砕片４、ピエス・エスキーユ３、石核２、剥片Ⅰ類１、剥片Ⅱ類４、剥片Ⅱ類２、石鏃１、スクレイパー１が、その他の石器では打製石斧５、礫器Ⅲ類１、凹石Ⅰ類１、凹石Ⅱ類２、石皿１、剥片６が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期前半藤内Ⅱ式から井戸尻Ⅰ式期に帰属しよう。

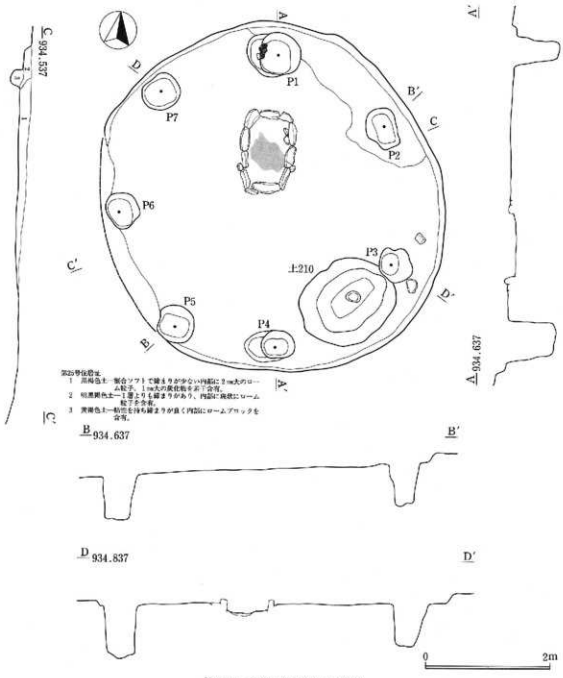
第25号住居址（第31図・図版11）

検出状況　本址は調査区のＲ－４・５、Ｓ－４・５グリッドで確認されたもので調査区内で最も北側に位置する住居址である。住居址は台地の派生する山際斜面部が緩斜面となり始め台地の平坦面へと移行する部分に占地し、南側に第26号・27・28号住居址が隣接し、住居址内には第210号土坑が重複している。重複する第210号土坑上には顕著な貼り床等を確認することはできなかったが、上面がやや硬化していたことなどを踏まえると、第210号土坑が本址よりも古いことが確認された。

遺構の構造　上面が若干耕作により削平され、また、西側が傾斜面となっていることにより平面プランの一部が流出していたが、遺存していた部分や主柱穴配列等よりほぼ平面プランの全容を把握することができ、北東側がやや歪む不整円形プランを呈するものと考えられる。検出された棟軸と入り口に関わると思われるP$_1$、P$_4$、P$_5$のあり方から主軸方向を求めると、主軸方向はＮ－4.5°－Ｗとなる。

壁は地形に沿い傾斜している西側を除きほぼその約3/4を検出することができた。壁の立上りは概ね明瞭で、やや外斜する傾向で直線上に立上る。北壁側で11.7cm、東壁側で16.9cmを測り、壁の高さは地形の傾斜に沿って変化するようである。壁際と床の接する部分はやや丸みを持っている部分もある。壁際には周溝や小孔は検出されてはいない。

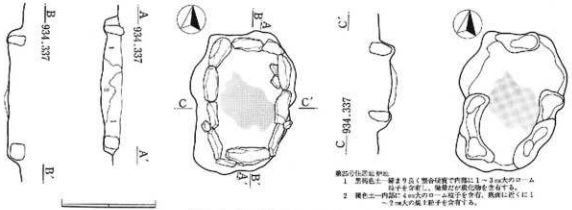
他の住居址との重複を持っていないために主柱穴配列を明確に把握することができた。それよるとP$_1$、P$_2$、P$_3$、P$_4$、P$_5$、P$_6$、P$_7$の７本が主柱穴に該当するものと考えられ、主柱穴構造は７角形を呈している。P$_3$は第210号土坑と重複関係を有しているが、土坑覆土を切る状態で構築されていることも土坑と住居址の重複関係の把握の決め手となった。P$_1$、P$_4$に重複が認められている他は建替えによる重複は確認され



第31図　第25号住居址（1／60）

なかった。P_1、P_4に認められた重複も重複しているものが浅く、主柱穴の重複と考えられないことより建替えは行われなかったものと考えられる。主柱穴は壁際に寄った位置に構築され、P_3のように壁と重複するものもある。柱穴の掘り方はしっかりし直に近い掘り方を有している。径は60cm～50cm前後で平面プランは不整円形もしくは楕円形を呈する。主柱穴の深さは$P_1$83.6cm、$P_2$61.8cm、$P_3$71.4cm、$P_4$76.9cm、$P_5$75.4cm、$P_6$67.5cm、$P_7$85.4cmであり、平均すると約74.6cmとなり深さが平均的である。P_1西側肩部には中期後半曽利Ⅰ式深鉢大型破片が逆位の状態で検出された。

主柱穴に囲まれた範囲中央部よりやや北側P_1に寄った位置に長方形石囲い炉址が検出された。今回の調査により得られた炉址の中でも整った形と構造を有し、石囲いも完存していた。炉址の掘り方は1.52m×



第32図　第25号住居址炉址（1／40）

1.1mのやや胴張りの隅丸不整長方形を呈し、２段構造等の掘り方はされてはいないが、全ての掘り方辺に炉石を据えるために掘られたと思われる溝状の掘り方が連結して検出された。石囲いは掘り方の縁辺に沿うようにほぼ全周する形で隙間がないように据えられている。炉石に用いられている石は長方形の形状を呈する板状の安山岩礫で、これを分割し用いている。北辺に２個・東辺に３個・西辺に４個炉石長手部を直に立てるように据えている。南辺は他の辺に用いられていた礫よりも角柱状の素材を用いており、平坦な面ができるように据えている。東・西辺の炉石の間には10cm前後の小礫が詰め込まれ炉石を固定し、また、東辺の炉石の下には炉石の高さ調整のために礫を詰め込んでいる。炉址構築は丹念に行われ、南東側の炉石が平坦に据えられていることよりこの部分が炊き口かと思われる。炉石の据え方の上面観や構造から炉址は長方形石囲い炉の典型といえる。炉底は小さな凹凸を有し61cm×43cmの範囲に厚さ７cmの焼土が検出された。

床面全体は割合堅緻であるが、特に北東側の一部に明瞭な部分が検出された。床面は小さな凹凸を有し、西側に傾斜する傾向が窺える。

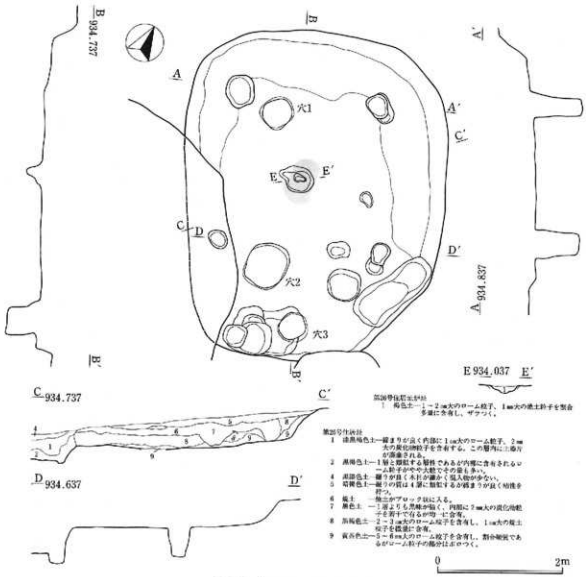
覆土は２層に分層できる。壁際周溝上には三角堆土と思われる明黒褐色土（第２層）が認められる。覆土は黒褐色土（第１層）で内部にローム粒子と炭化物粒子を若干含有する締まりの少ない割合ソフトな土層である。遺物は１層より中期後半曽利Ⅰ式（梨久保B式）、曽利Ⅱ式（縄文系と唐草文系が混在する状態）土器片が出土している。

遺物の出土状況　遺物は覆土内より曽利Ⅰ式に混在して曽利Ⅱ式土器片が得られている。土器片は総量で1.79kgが検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数８（19.5g）、その内訳は砕片２、裂片６が、その他の石器では打製石斧２、横刃型石器１、凹石Ⅰ類１が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。

第26号住居址（第33図・図版11）

検出状況　本址は調査区のQ－５・６、S－５・６グリッドで確認されたものである。住居址は山際北側の斜面部が緩斜面となり入り組み谷に向かう面に占地し、西側に第27号住居址が南側に第208号土坑が重複し、南側に第28号住居址が隣接する。南西側を第27号住居址により切られているために、平面プランの全容を把握することはできなかったが、検出された柱穴や北西・北東・南東側の壁より住居址の規模や構造を把握することができた。

遺構の構造　南西側を第27号住居址により切られているが、検出できた北西・北東・南東側の壁より推定すると、北西－南東方向に長軸を持つ楕円形に近い不整隅丸長方形の平面プランを想定することができる。規模を推定すると、長軸方向5.3m×短軸方向（4.14m）かと思われる。主軸方向はP_2、P_3の中間と炉址を通す軸線かと考えられ、この線を主軸線とするとN－25.5°－Wを示す。



第33図　第26号住居址（1／60）

住居址が南西方向に傾斜を持つ緩斜面に構築しているために壁は第27号住居址と重複している部分を除くと北西・北東・南東側に明瞭な壁を検出することができた。壁高は北西側で27.5cm、北東側で47cmを測り深い掘り方を持っている。壁の掘り方は明瞭でしっかりしているが、その立上りはやや彎曲する傾向を示している。壁と床面が接する部分は明瞭ではなく丸みを持ち立ち上がる傾向が窺える。

配列や深さより主柱穴と思われるP1、P2、P3、P4の4本が検出され、4本柱構造を想定できる。P1、P2には建替えによる重複が見られる。これら柱穴の土層観察より柱穴の建替えの状態を考えると、P1は南東方向にスライド移動、P2は南方向にスライド移動させて、その状態よりみると移動は大きな拡張に伴う建替えと言うよりも、柱の変更に伴うものと考えられる。

柱穴の掘り方はしっかりし径は30cm～40cm前後であるが、深さはP1 76.8cm、P2 56.1cm、P3 39.7cm、P4 47cmで平均すると約54.9cmであり、径の規模に比べて深く直に近い掘り方を有している。柱穴ではないが断面形が袋状を呈する所謂屋内貯蔵穴が3基（穴1～穴3）検出されている。穴2・穴3上部には貼り床がなされ、穴2の上には土器底部が逆位で遺存していた。

炉址は主柱穴に囲まれた中央部よりやや西側に寄った位置に構築されている。炉址の構造は74cm×45cmの焼土範囲に不整形の掘り方を有するものである。炉石等は検出されてはいず、石囲い等に関わる掘り方も検出されてはいない点を考慮すると、本炉址は石囲いを持たないものと考えられる。焼土範囲に深さ26.1cmの掘り方を有する点や本址の時期を強く意識すると、この部分に炉体土器が埋設されていた可能性も考えられ、この掘り方は炉体土器の抜き取り痕とも考えることができまいか。

床面全体は堅緻で緻密である。主柱穴を結んだ範囲で内帯と外帯に区分され、外帯がやや内帯に比べ高くなり不明瞭な壇状を呈する。内帯に比較して外帯は堅緻であるが小さな凹凸を有する。床面は全体的に炉址に向かい緩やかな傾斜を持つために断面が皿状となる。

覆土は5層に分層できる。壁際と床面上には5㎜～6㎜大のローム粒子を含有する黄茶色土（9層）が堆積し、この上面に水平に土層が堆積していくはずであるが、8層上面は掘り込み状窪んでいる部分が観察され、また、焼土（6層）が堆積する部分も認められたこと等を考慮すると、住居址が埋没していく過程で浅く窪んだ部分を何らかの形で利用していることを想定することができまいか。遺物は7・8層を中心に出土している。奥壁側床面上12cmより土偶頭部が出土している。

遺物の出土状況　土器片は4.13kgが検出され、その内容は中期前半猿沢式・新道・勝内Ⅰ式土器片が混在したような状態で検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数72（269.5g）、その内訳は素材剥2、砕片8、裂片11、ピエス・エスキーユ4、剥片Ⅰ類3、剥片Ⅱ類13、剥片Ⅲ類21、石鏃2、石鏃プランク3、ドリル2、スクレイパー3、打製石斧1、磨製石斧Ⅱ類1、横刃型石器1、砕片7が検出されている。本址は主柱穴配列や炉等の構造や検出された土器片よりみて中期前半猿沢式期に帰属しよう。

第27号住居址（第34図・図版12）

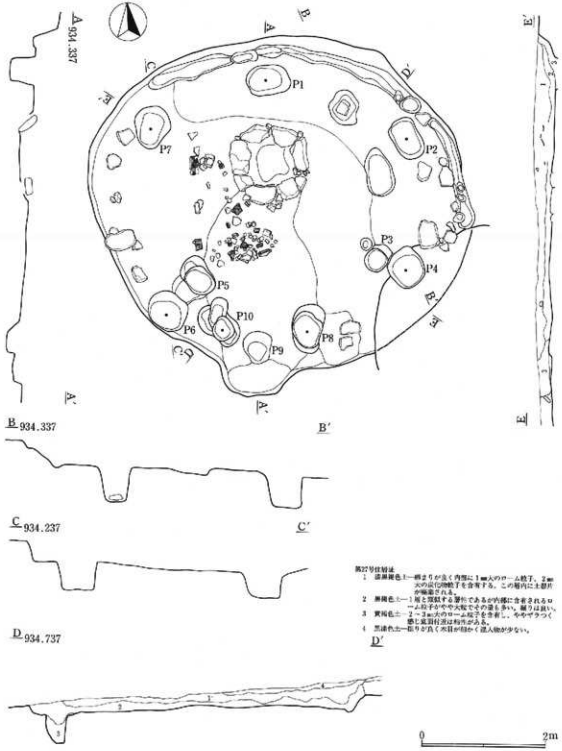
検出状況　本址は調査区のQ－4・5グリッドで確認されたもので、第26号住居址の確認作業に伴いその存在が明確となった。住居址は台地を東西方向に入り込む谷に向かう緩斜斜に占地し、東側に第26号住居址が南東側に第28号住居址が重複する。東側は第26号住居址を切っており、南東側は第28号住居址上に貼り床がなされていたことより住居址全体の範囲を把握することができた。また、この重複関係の把握が第28号住居址の時期を決定するための重要な用件となった。

遺構の構造　平面形プランは南－北方向につぶれる不整円形を基本とするが、南辺が北辺に比較してやや外反し突出する部分があり、この方向を入り口部とすると入り口部が張出すプランとなり、平面形は帆立貝状となる。規模は長軸6.1m×短軸5.74mで北西－南西方向に長軸を持つ横長のやや歪んだ不整円形プランを呈する。南側辺中央張出し部と奥壁中央を通す線上に炉が構築され、この線が主軸と考えられ、主軸方向はN－10.5°－Eを示す。

住居址西側は地形が西側に傾斜する関係から壁の立上りは不明瞭であり、南東側は第28号住居址覆土内に掘り込まれていたために確認することはできなかったが、割合明瞭に検出された北・北東側壁を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる傾向が窺える。最も高い部分である北側で30cmを測り、奥壁部分が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は北側から東側に掛けて全体の約1/3に巡っている。周溝は壁際に1条構築され、その溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく北側9.2cm、東側4.8cmを測り、北側から東側に至るにつれて浅くなる傾向が窺えた。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は東側の周溝に著しい。

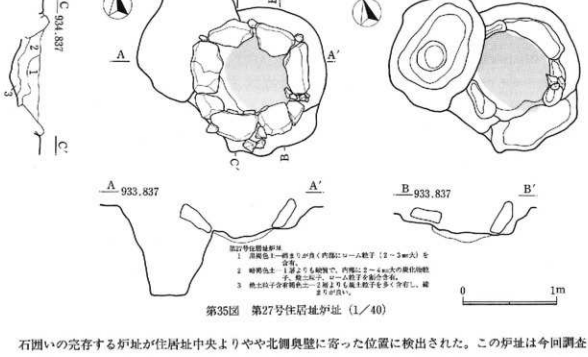
主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、P_4(P_3)、P_6(P_5)、P_7の5本が該当するものと思われる。P_3には重



第34図　第27号住居址（1／60）

複が認められる。重複ではないもののP1、P3、P7は平面形状が楕円形を呈し、これは同一地点で建替えが行われた結果であろうか。P3→P4、P5→P6のように移動し建替えが行われているものもある。P9の上面に貼り床が認められ旧柱穴と思われる。主柱穴の建替え等の状況から南側範囲が拡張されたことが判明した。主柱穴の位置は壁際に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP1 65.9cm、P2 47.6cm、P3 49.2cm、P4 56.1cm、P5 64.8cm、P6 43.6cm、P7 45.2cmである。南側の入り口部に関わると思われる柱穴

P_8、P_{10}が検出されている。これらの柱穴は張出し部に位置する浅い掘り方のP_9を挟むように構築され、いずれの柱穴も建替えによると思われる重複が認められる。深さは$P_8$66.1cm、P_{10}52.7cmを測り主柱穴と大差ない深さを有する。これらの柱穴は位置等から張り出した入り口部に関わるものと考えられる。



第35図　第27号住居址炉址（1／40）

石囲いの完存する炉址が住居址中央よりやや北側奥壁に寄った位置に検出された。この炉址は今回調査された住居址の炉址の中で第29号住居址に次ぎ整った形態のものであった。炉址は土坑と西側を重複するが、土坑を埋め戻しその上面に石囲いをしている。西側が他の遺構と重複しているために不明な部分があるが、掘り方は径1.5mの不整円形を呈している。掘り方は割合丹念で炉底周縁に炉石を据えるための溝状の掘り方が検出された。炉址掘り方の南辺には浅い掘り方が連結している。炉石は45cm～50cm大の形状が類似した板状安山岩礫を6点、これよりやや小振りの35cm大の板状安山岩礫を2点の合計8点を用いている。炉石は分割等の加工をせずに自然の面をうまく組み合わせて炉を構築している。西・北・東辺は炉石を斜状に据え、南辺は平坦な面ができるように炉石下に礫を詰めて調整をして炉石を据えている。炉石の状態よりみて南辺が炊き口と考えられる。炉址の構築は丹念で炉石間には詰め石が認められ、南東隅には柱状の角礫が立てられて検出された。この柱状礫は中期後半の炉址脇に立てられていることのある石棒に共通するものがあろうか。炉底は皿状の窪みを有し、88cm×67cmの範囲に厚さ9cmで焼土が確認された。

張出しを持つ入り口部に埋甕の埋設が期待されたが、埋甕は埋設されてはいず浅く皿状に窪んでいるだけであった。張出し部からやや内側に入った位置にP_9が検出された。P_9は径50cmの不整円形を呈し、深さは25.6cmを測り、覆土に埋め戻した状況や貼り床は認められなかったが、位置的関係よりみて埋甕ピットとして捉えることができようか。

直接ローム面を床としているために検出は容易であった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分に比べて、壁際の部分はやや高まった状態を呈し、この範囲が内帯に比べて堅緻であった。炉址の南側は入り口に向かってやや低く傾斜しており、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

東壁・西壁際の床面上には平坦な安山岩礫が雑然としてはいるものの、平坦な面を出すようにまるで据え

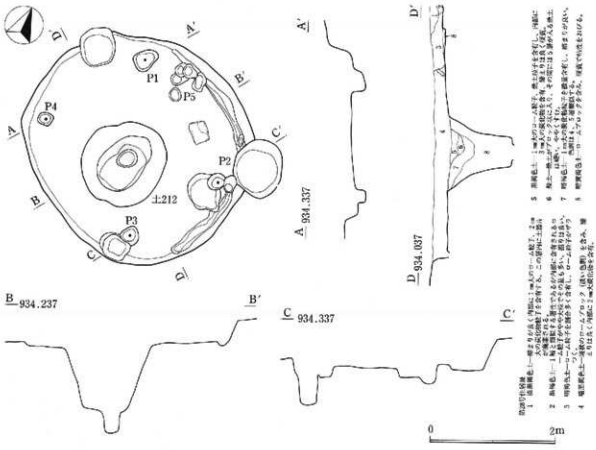
たような状態で検出されている。平坦なを一定の高さに揃えたような状況が東側に見ることができた。これらの礎はその位置や据え方等より床上に何らかの理由により人為的に据えられたものであろう。
西側の一部を除き全体的に堅緻で特に炉址南側範囲が顕著であるが、小さな凹凸を呈する。

覆土は3層に分層できる。第26号住居址沿い上面には漆黒色土が堆積し、この土層下に黒色土・黒褐色土が堆積する。遺物は2層を中心に検出される。遺物の出土状況は吹上パターンを呈し、2層内に廃棄されたような状態で検出されている。土器は完形のものは含まず、約1/3遺存の個体を8個体以上が廃棄され、その内容は中期後半唐草文系が主体となり曽利Ⅲ式が従属する。また、第26号住居址の遺物が混在して検出されている。器種は深鉢を主体とするが1個体鉢型土器が含まれている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は2層より土器片26.33kg(口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約22個体分)が検出されておりその量は多い。その他に黒曜石砕片・剥片等総数122(454g)、その内訳は素材粒1、砕片21、裂片25、ピエス・エスキーユ4、剥片Ⅰ類9、剥片Ⅱ類22、剥片Ⅲ類32、石鏃2、石鏃ブランク1、ドリル1、スクレイパー4、打製石斧3、磨製石斧Ⅱ類1、礫器Ⅲ類1、礫器Ⅳ類1、凹石Ⅰ類2、砕片1が検出されている。本址の覆土内からは曽利Ⅲ式の資料が得られているが、これらの資料は床面より浮いたⅡ層内の資料で、炉址内より得られた唐草文系土器や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第28号住居址(第36図・図版12)

検出状況　本址は調査区のP－5・6、Q－5・6グリッドで確認され、第26号・第27号住居址の検出に



第36図　第28号住居址(1/60)

伴いその存在が明瞭になった。住居址は台地を東西方向に入り込む谷に向かう緩傾斜に占地し、北西側に第27号住居址、東側に土坑中央部に第212号土坑が重複し、北側に第26号住居址が隣接する。北西側の範囲に第27号住居址の貼り床が検出され、第212号土坑の覆土内に本址の炉址が構築されていたことより、重複関係を把握することができたが、第26号住居址との関連については不明である。

遺構の構造　第27号住居址と重複関係を有するものの、本址上面に貼り床がなされていたことより平面形プランの全容を把握することができた。それによると北西一南東に長い楕円形を呈している。主柱穴配列や平面プランから主軸方向を想定するとN－55°－Wとなろう。

住居址は深い掘り方を有していたために、緩斜面に位置している割には明瞭な壁を検出することができた。壁高は北東側40.7cm、南東側19.1cm、南西側8.8cmを測り地形に沿って壁が傾斜することが観察できる。壁はやや内弯しながら外傾斜する。北東側の壁の構築が最も丹念に行われている。

周溝は北東・南東側の壁際に1条が検出された。周溝の掘り方は不明瞭で浅い部分が主体となり、断面はU字形を呈する。深さは北東側5.7cm、南東側10.4cmを測る。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_2、P_3、P_4の4本が検出され4本柱構造を想定できる。P_3には建替えによる重複が見られる。また、P_3は黄褐色土により埋め戻され、旧主柱穴の可能性がある。主柱穴は土層観察よりP_3は東側に柱を移動して建替えが、P_3は度重なる同位置での建替えを経た後、P_1移動している。この移動により住居址は大きく拡張されることとなる。柱穴の掘り方はしっかりし直に近い掘り方を有し、径は30cm前後である。主柱穴の深さは$P_1$25.3cm、$P_2$30cm・24.6cm、$P_3$19.8cm、$P_4$19.2cmで平均すると約23.9cmであり、北東辺が平均的であるのに対して南西辺は概して浅い。

炉址は第212号土坑覆土上面を掘り込んで構築されている。炉址の掘り方は径60cmの不整円形で深さ20cmを測り、掘り方中央部に厚さ12cmの焼土が堆積し、掘り方の北側に13cm大の安山岩礫が1個遺存しており、この礫を炉石と解釈すると石囲い構造の炉址を想定することができよう。

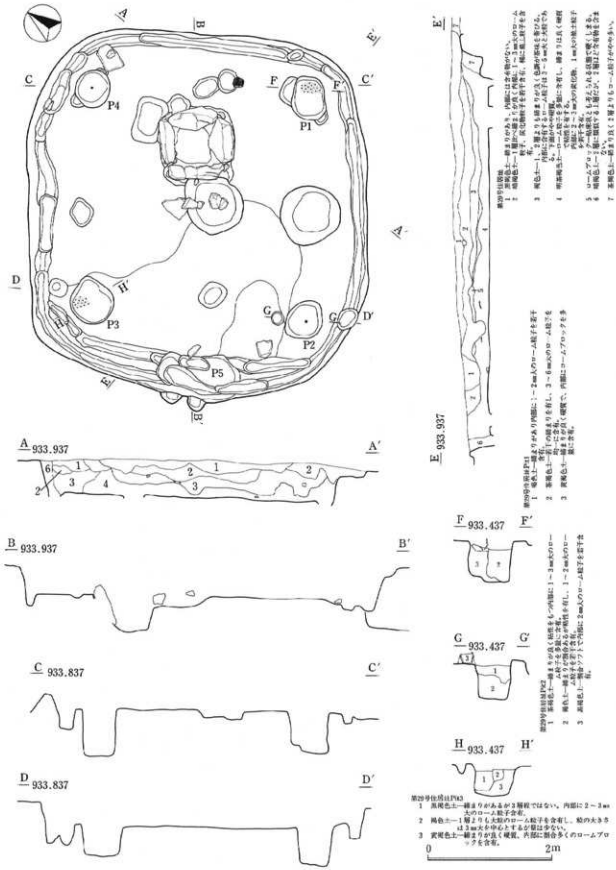
床面全体は割合堅緻で小さな凹凸を呈し、中央部に向かい緩やかな傾斜を有する。

遺物の出土状況　本址からは土器片の検出はなくその他に黒曜石砕片・剝片等総数43（124g）、その内訳は砕片9、剝片I類6、剝片II類11、剝片III類15、石鏃1、スクレイパー1、打製石斧1が検出されているが、本址の時期を決定し得るだけの資料は得られてはいない。しかし、住居址の状況よりみて中期前半に帰属するものであろうか。

第29号住居址（第37図・図版13）

検出状況　本址は調査区のB－4・5、C－4グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は今回の調査区内で最も遺構の重複が著しい地域である。住居址は台地中央部の平坦な部分から南側斜面に寄った位置に占地し、東側に第30号住居址、北側に第229号土坑が重複し、南側には第31号・第32号住居址が隣接する。本址は深い掘り方を持っていたために検出は容易で、重複関係の把握も明瞭にできた。本址は今回調査された住居址の内で最も深い掘り方を持ち、構築も丹念な典型的な整穴住居址であった。

遺構の構造　平面形プランは今回の調査により得られた住居址の中で最も整った形を有しており、典型的な隅丸方形プランである。規模は北東－南西方向5.92m、北西－南東方向5.47mを測り、北東－南西方向に長軸を持つ。その規模は今回得られた住居址の中で最も大きい。また、市域における同期の住居址の中でも大型の群に属する。隅丸方形プランを基本とするが、南西辺が他の辺と比較して中央部がやや外反する傾向が見られ、この部分がやや張出す様相を呈する。極端にこの部分を解釈すると南・北・西・東コーナー部が角張ることより、コーナー部の丸い5角形とも捉えることができる。南西辺中央張出し部と奥壁中央を通す



第37図　第29号住居址（1／60）

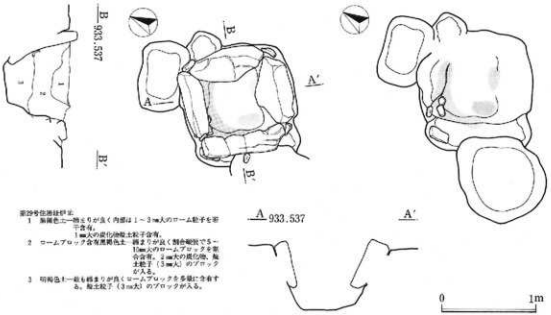
線上に炉が構築されておりこの線を主軸とすると、主軸方向はN－56°－Eを示し、他の住居址が南側を入り口部とするのに対して本址は西側に入り口部を有してやや特異な傾向が窺える。

住居址の掘り方は検出された住居址の内で最も明瞭で、高い壁高を有し、北東側44.8cm、南東側36.4cm、南西側28.6cm、北西側30.4cmを測り平均すると約35.1cmで、平坦な地形に構築されていたために壁高は平均的であるが、入り口部と思われる南西側が最も低い傾向を示す。壁の掘り方は丹念で、直線上に直角に近い形で立ち上がるが、入り口部と思われる南西側壁は他の部分に比較して壁の立上り方がやや外傾斜する傾向が窺える。

周溝は壁際を全周する形で1条巡り、入り口部と思われる南西側だけ2条の周溝が巡る。溝は丹念な構築がなされ、断面は明瞭なコ字形を呈し幅はほぼ20cm均一であり、掘り方は深く北東側14.6cm、南東側11.3cm、南西側14.2cm、北西側15.2cmを測り、全ての辺共に均一な深さを有する。周溝内には小孔は穿たれてはいないが、周溝底には若干ではあるが凹凸が認められ、特にその傾向は北側・南西側の周溝に著しい。南西側には2条の周溝が認められ、拡張の可能性も考えられたが、内側の周溝上に貼り床等が認められず、拡張により2条の周溝が生じたとは考えられず、2条とも同時に存在したものと考えられる。北西周溝上には廣製石斧と楕円形をした安山岩礫が並んでまるで周溝内に詰め込まれたような状況で検出されている。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4の4本が該当する。P1・P4には重複が認められ、特にP1のように北西側の旧柱穴を埋め戻し、柱を移動し建替えている状況が土層観察から窺えた。P1・P3には柱痕と思われる黒色土の亜下層が認められ、この層より柱の太さや建てられていた位置を想定すると、30cm～35cm前後の径を有する柱が、掘り方の中央より壁際に寄った位置に建てられていたことを看取することができる。P2・P4には柱の痕跡を示すような土層状況を観察することはできず、むしろ柱を抜き取り埋め戻したような状況が窺えた。主柱穴の位置は壁際・住居址のコーナー部に寄った位置に構築されているが、周溝とは重複してはいない。柱穴の掘り方はしっかりして直に近い立上りを有し、径は60cm～70cmの大きさを持ち、掘り方の大きさ比べて深さは浅く、P1 66.2cm、P2 62cm、P3 51.3cm、P4 74.2cmで平均すると約63.4cmであるが、P2・P3の西側柱穴は東側に位置する柱穴（P1・P4）に比較して浅めであった。P2北西脇に人為的に胴部下半を取り去った中期後半加曽利E2式土器深鉢が2cm床面より浮いたような状況で正位で設置されている。土器内には黒褐色土が充満している。やや検出の状況は異なるものの、本址と同様な状態で土器を遺存させている例が第4号住居址より検出されている。

炉址は今回調査されたものの中で最も大きく精巧な構造である。完存する石囲い炉址で住居址中央より東側奥壁に寄った位置に構築されている。炉の掘り方は北西－南東1.2m×北東－南西1.28mの隅丸方形を呈し、深さは57.5cmを測り大人が入り込めるだけの規模を有する。北側と南西側に浅い掘り方が重複しているが、これらの掘り方の上には貼り床がなされていたことより炉址に直接関わるものではない。炉内の掘り方は2段構成となっており、炉石を据えた際の掘り方が見られる。炉石に用いられている礫は安山岩角礫であるが、第23号・第27号住居址などの炉址に用いられていた角に丸みを持つ河原石ではなく、稜を持つ割合角張った礫を用い、ちょうど炉石の規格に合わせて掘り方を調整し、北西・北東・南東側に据えられている炉石は大型の1枚石を用い、大人2人がかりでも容易に動くようなものではなかった。炉石の据え方は焚き口と思われる南西辺は、他の辺に比べて形状の異なる柱状の角礫を用い、平坦に礫を据えるのに対して、他の辺は板状の角礫を底に近い形で斜状に立てて、構造的には切り炉縁上を呈する。炉石に用いられている礫の隅には15cm大の詰め石がなされ、焚き口部の炉石下には石を水平に保つための詰め石がなされる。炉底は皿状に窪み62cm×17cm、厚さ5cmで焼土が確認された。炉址内は3層に分層でき奥側炉石に密着するような形



第38図　第29号住居址炉址(1／40)

で吊手土器片が検出されている。なお、接合はしないが同一個体の破片が覆土上層より得られ、また、炉址内から鍔付有孔土器片が得られ、この資料も吊手土器と同様に覆土上層に同一個体破片が見られた。これらの資料は住居址の廃絶と埋没の関係について考えさせる興味深い資料である。

本来本址のような構造を有する住居址には埋甕が埋設されている例が多いが、本址においては埋甕を検出することはできなかった。しかし、入り口部と思われる南西辺には入り口部に関わると思われる掘り方が検出されている。南西辺の中央部はやや外反し、最も垂れる部分の外側に深さ14.4cmの対ピットが認められ、この対ピットに相対するように住居址内に平面形状が楕円形を呈するPが作られている。また、このピット周辺は深さ13cmの不整楕円形の掘り方が認められる。また、入り口周辺の周溝は他の部分に比較して2条の周溝や不規則な掘り方が確認されることなどより、これらの掘り方は壁高が高いため入り口部に設けられた梯子等に関わるものであろうか。

直接ローム面を床としているために検出は容易であった。床面は全面が堅緻で緻密であるが小さな凹凸を有する。本址に伴わない柱穴や土坑の上面には黄褐色土等により貼り床が丹念になされている。床面はほぼ水平に構築されているが、入り口に近い南西側範囲は他の部分に比べて若干の傾斜を有している。東側奥壁の中央よりやや北寄り周溝に掛かる状態で、44cm×31cm大の板状を呈した安山岩（鉄平石）が床上に据えられ、板状礫の上には13cm大の安山岩礫が置かれたような形で遺存していた。板状礫下には掘り方等は検出されてはいない。礫が人為的に据えられたような状況を呈していたことや、設置位置などを考慮すると、石壇に関わる構造物の可能性が考えられる。床面上からの遺物の検出は少量であったが、奥壁部に検出された第30号住居址の主柱穴の残存部を貼るように唐草文系土器大型破片が検出された。

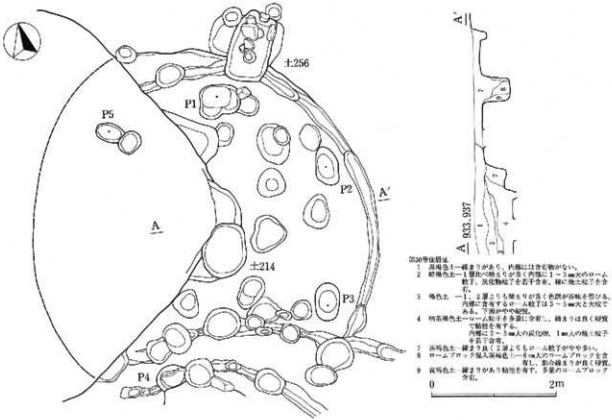
覆土は掘り方が深いこともあって他の住居址に比較して複雑な土層の堆積状況を示した。土層は6層に分層できる。壁際には三角堆土状の土層が観察できるが、焼土粒子等を含有する点を考慮すると、自然堆積荷より形成されたものとは考えられず、人為的に埋め戻されたような状況を示すものであった。また、床面上に堆積していた4層（明茶褐色土）もローム粒子を多量に含み、硬質な締まりの強い土層で焼土粒子を含んでおり人為的に埋め戻された土層と考えられ、4層上面にロームブロックを用いた貼り床が認められこの貼

り床範囲内に焼土範囲も認められたことなどを考慮すると、住居址の廃絶→4・6層による埋め戻し→4層上面にロームブロックを用いた貼り床、と言ったプロセスを復元することができ、廃絶住居址の窪みが再利用されていたことが窺えた。遺物は3層・4層内から中期後半の曽利Ⅳ式を中心とし、若干文様の崩れた唐草文系、加曽利E式系土器片が混在する状態で検出されている。この他に3層内を中心に黒曜石砕片・剥片が西側範囲に集中して検出されている。

遺物の出土状況　本址は掘り込みが深いこともあって重複する住居址の遺物等が混在する状態で土器片22.0215kg(口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約18個体分)が検出され、その量は多いが柱穴脇に設置されていた深鉢を除くと、一括性のない破片が主体を占める。その他に黒曜石砕片・剥片等総数273(149.5g)、その内訳は素材粒3、砕片38、裂片57、ピエス・エスキーユ18、石核7、剥片Ⅰ類48、剥片Ⅱ類69、石錐6、石錐ブランク13、ドリル2、スクレイパー12、打製石斧5、磨製石斧Ⅱ類2、礫器Ⅱ類1、凹石Ⅰ類10、凹石Ⅱ類2、砕片5、原石2が検出されている。本址は住居址の構造や検出された土器よりみて中期後半曽利Ⅳ式期に帰属させることができよう。

第30号住居址(第39図・図版14)

検出状況　本址は調査区のB－5グリッドで確認されたものである。住居址は南側斜面に向かう緩やかな斜面に構築されている。本址が占地する南側斜面部は調査区内で最も遺構の重複が著しい地区で、西側に第29号住居址が南側に第32号・第33号住居址、北側に第256号土坑が重複し、東側に第21号住居址が隣接する。西側を第29号住居址により大きく切られ、南側が著しく他の遺構と重複しているために平面プランの全容を把握することはできなかったが、検出された主柱穴や北・東側の壁より住居址の規模や構造を把握することができた。



第39図　第30号住居址(1／60)

遺構の構造　西側を大きく第29号住居址により、南側を第32号・第33号住居址により切られているが、検出できた北・東側の壁より推定すると、不整円形の平面プランを想定することができる。規模を主柱穴配列より推定すると、径5.6mの規模を想定することができようか。

住居址が南方向に傾斜を持つ緩斜面に構築しているが、上面が削平を受けており遺存している部分は北辺の一部だけである。検出できた北壁の壁高は11.3cmを測り外傾斜しながら直線状に立ち上がる。

周溝は壁際に全周する形で構築されていたと思われるが、重複が著しい部分については検出することはできなかった。周溝の幅は20cm～25cmと幅広であったが、深さは北側3.1cm、東側2.8cmと浅く不明瞭であったが、周溝内には小孔等は穿たれてはいなかった。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_2、P_3、P_4、P_5の5本が検出されているが、配列等を考慮すると6本柱構造を想定でき、検出できなかったものについては第29号住居址により破壊された可能性が強い。P_1、P_5には建替えによる重複が見られるが、大きな移動を伴う建替えではなく同位置でのもので、拡張等に伴う建替えとはその様相を異にしている。柱穴の掘り方は直に近い形でしっかりし、径は40cm前後の不整楕円形を呈し、深さは$P_1$67.4cm、$P_2$47.4cm、$P_3$53.6cm、$P_4$51.2cm、$P_5$52.8cmである。平均すると約54.5cmであり割合深い掘り方を持つ。P_1の東側には鉢型土器大型破片が遺存していた。

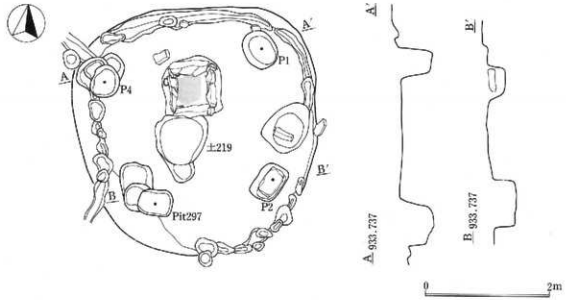
炉址は第29号住居址により切られており検出はされてはいない。

直接ローム面を床としているが、堅緻で緻密な面を検出することはできず、全面が軟弱な傾向を示し小さな凹凸を呈している。北東床面に径30cm大の球状を呈する礫が遺存していた。

遺物の出土状況　重複が著しいために土器片は混在した状態で検出されている。土器片は3.7cmが検出され、その内容は中期前半井戸尻式中期後半曽利II式土器片が混在したような状態で検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数17（36g）、その内訳は素材粒2、砕片3、裂片1、ピエス・エスキーユ3、剥片I類3、剥片III類3、石鏃ブランク2、打製石斧3、磨製石斧II類1、砕片3が検出されている。本址は主柱穴配列や検出された土器片よりみて中期前半井戸尻式期に帰属しよう。

第31号住居址（第40図・図版14）

検出状況　本址は調査区のA－4グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は今回の調査区内



第40図　第31号住居址（1／60）

で最も遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地中央部の平坦な部分から南側斜面に寄った位置に占地し、西側に第36号住居址、東側に第32号住居址、南側に第34号住居址が重複し、北側には第29号住居址が隣接する。また、住居址内には第219号土坑が重複する。検出された主柱穴配列や北・東側の周溝により本址の全容を把握することができた。重複関係は本址の周溝が第32号・第34号住居址を切り、また、本址の主柱穴が第36号住居址の周溝を切って構築されていることより把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・東側の周溝よりやや不整形の隅丸方形プランを想定することができる。規模は不明な部分もあるが、長軸3.96m×短軸3.84mで北一南方向に長軸を持つ縦長の南辺のやや歪んだ不整隅丸方形プランを呈する。南側辺中央部と奥壁中央を通す線上に炉が構築されておりこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－13.5°－Wを示す。

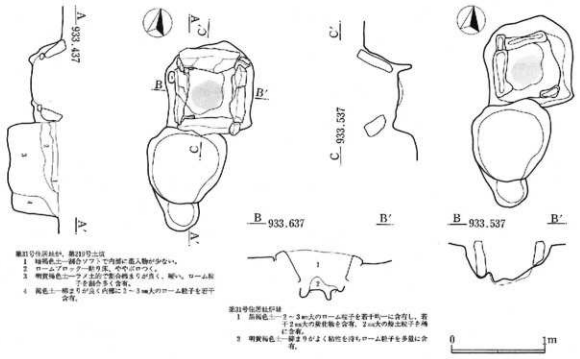
住居址が南側斜面に位置することより南側部分は流出し壁の立上りを検出することはできなかったが、北・北東側においては割合明瞭に壁の立上りが検出された。検出できたこの部分を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる傾向が窺える。最も高い部分である北側で12.8cmを測り、奥壁部分が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は西側に重複する第36号住居址部分と、南西部分が検出できないだけで、全体の約3/4を検出することができた。周溝は壁際に1条構築され、その溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく北側4.4cm、東側3.8cmを測り、北側から東側に至るにつれて浅くなる傾向が窺えた。周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は南・東側の周溝に著しい。

主柱穴は配列や深さよりP$_1$、P$_2$、P$_3$、P$_4$の4本が該当するものと思われる。P$_3$には重複が認められる。重複ではないもののP$_3$は平面形状が楕円形を呈し、これは同一地点で建替えが行われた結果であろうか。また、P$_4$は第34号住居址の主柱穴と重複する。最も重複関係の激しかったP$_3$の建替え状況を土層観察よりみると、南側がロームブロックにより埋め戻されていることより、北側に柱がスライド状に移動していったことが窺える。主柱穴の建替え等の状況から南西側範囲が若干拡張されたことが判明した。主柱穴の位置は壁際住居址のコーナー部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP$_1$44.2cm、P$_2$28.3cm、P$_3$42.3cm(36.2cm)、P$_4$54.2cmである。なお、P$_3$内には柱穴の掘り方に合う平坦な面を有する安山岩礫が据えられており、この礫は住居址廃絶時に柱穴内に詰め込んだものであろうか。P$_3$から中期後半曽利Ⅲ・Ⅳ式土器片が検出されている。

石囲いの完存する炉址が住居址中央よりやや北側奥壁に寄った位置に検出された。掘り方は西東0.9m×南北1mの不整方形を呈している。掘り方は割合丹念で炉底周縁に炉石を据えるための溝状の掘り方が検出された。なお、南側に第219号土坑と重複するが、土坑上面に貼り床をなし、覆土内から中期初頭の土器片が検出されたことより、本址に直接関わるものではないと考えられる。炉石は幅50cm大の形状が類似した稜線を有する板状安山岩礫（平石の範疇に含められるか）を4点を用いている。炉石は全ての辺を斜状に据えているが、南辺は他の部分に比べて傾斜が緩やかで、他の部分は南辺に比べると直に立つ状態で炉石が据えられている。炉石脇には10cm～15cm大の礫を詰めて炉石を固定している。炉址の形状は切り短縁状を呈する。炉底は皿状の窪みを有し、35cm×46cmの範囲に厚さ5cmで焼土が確認された。炉址内から曽利Ⅳ式土器片が検出されている。

直接ローム面を床としているために検出は容易であった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分が最



第41図　第31号住居址炉址(1／40)

も堅緻で緻密であった。炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜して、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

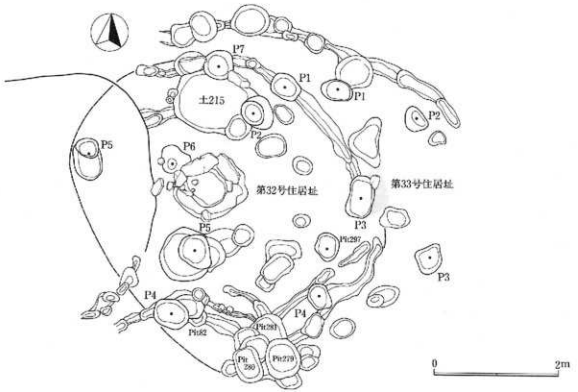
覆土は黒褐色土の単一層で、覆土の大半は地形が南側に傾斜するために土層の堆積は薄く、流出している状態であった。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から多様な土器片が検出されており、その量は2kgが検出されている。その内訳は中期前半新道式、中期後半曽利Ⅰ式（梨久保B式）、曽利Ⅳ式であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数29（910g）、その内訳は素材粒2、砕片4、裂片7、ピエス・エスキーユ2、剥片Ⅰ類4、剥片Ⅲ類8、石鏃1、スクレイパー1、打製石斧1、凹石Ⅰ類2、砕片2が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅳ式期に帰属しよう。

第32号住居址（第42図・図版14）

検出状況　本址は調査区のA－5グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は今回の調査区内で最も遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地中央部の平坦な部分から南側斜面に寄った位置に占地し、西側に第31号住居址、東側に第33号住居址、南側に第34号住居址、北側には第30号住居址が重複し、北西側には第29号住居址が隣接する。検出された主柱穴配列や北・東側の周溝、炉址により本址の全容を把握することができた。重複関係は本址の周溝が第33号住居址の炉址を切り、本址の主柱穴P_4が第34号住居址の周溝を切って構築されることより、第33号・第34号住居址より新しいことが確認でき、また、第31号住居址が本址を切り本址の主柱穴P_8上に貼り床をなすために第31号住居址よりも古いことが確認できた。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・東側の周溝よりやや楕円形気味の不整形の隅丸長方形プランを想定することができる。規模は不明な部分もあるが、主柱穴配列や周溝範囲より推定すると、長軸5.07m×短軸4.2mで北西－南東方向に長軸を持つ。短軸方向のP_3、P_4間の中点とP_1、P_8間の中点を通す線上



第42図　第32号住居址・第33号住居址（1／60）

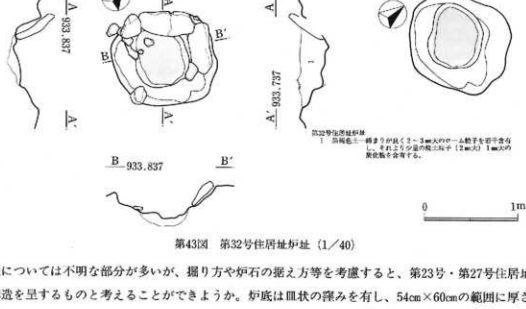
に炉が構築されこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－30.4°－Wを示す。

住居址が南側斜面に位置することや、著しい重複関係により壁を検出することはできなかった。

周溝は北・東・南側に検出され、全体の約3/4を把握することができた。北・南辺に２条、東辺に１条が構築され、主柱穴の建替え等を考慮すると、南北方向に拡張が行われたことが窺える。その溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく東側4.1cmを測り、北側から東側に至るにつれて浅くなる傾向が窺えた。北側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められ、特にその傾向は南・北側の周溝に著しい。

主柱穴は配列や深さよりP$_1$(P$_3$)、P$_3$(Pit277)、P$_4$、P$_8$の４本が該当するものと思われる。P$_4$、P$_5$には重複が認められ、重複ではないもののP$_2$、P$_4$は柱穴の移動が認められ、位置関係から見ると旧 P$_2$→新P$_1$、旧 Pit277→新 P$_3$へと主柱穴が外側に移動し、拡張が行われたことが窺えた。本址の拡張については周溝においても確認され、これらの事象を基に住居址の拡張を復元すると、西辺のP$_4$、P$_8$は同位置による柱の建替え、東辺は柱位置を外側に移動して拡張をし、この際に南北方向についても拡張がなされている。主柱穴の位置は壁際に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP$_1$51.7cm・P$_3$44.3cm、P$_8$45.5cm・Pit277 34.9cm、P$_4$37.4cm(26.8cm)、P$_5$30.2cm(28.6cm) である。

南西辺、南東辺炉石が抜き取られた炉址が住居址中央より若干北西側奥壁に寄った位置に検出された。掘り方は西－東方向が長い不整円形を呈し、その規模は東西1.13m×南北1.08mである。掘り方は２段構造となり、外側の掘り方に炉石を据えるようにし、内側は浅い皿状の掘り方となっている。炉石は幅50cm～60cm大の形状が類似した稜線を有する板状安山岩礫（平石の範疇に含められるか）が北西・北東辺に遺存していた。炉石は全ての辺を緩やかな斜状を呈するように据えている。炉石全てが遺存している訳ではないために



第43図　第32号住居址炉址（1／40）

炉構造については不明な部分が多いが、掘り方や炉石の据え方等を考慮すると、第23号・第27号住居址と同様な構造を呈するものと考えることができようか。炉底は皿状の窪みを有し、54cm×60cmの範囲に厚さ9cmで焼土が確認された。炉址内から中期後半曽利Ⅱ式土器片が検出されている。

直接ローム面を床としているが重複が著しいために検出は容易ではなかった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分が最も遺存状態が良く堅緻で緻密であった。炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜しており、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から多様な土器片が検出されており、その量は3.18kgが検出されている。その内訳は中期後半曽利Ⅱ式（唐草文系、曽利系）、曽利Ⅲ式であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数17（160ｇ）、その内訳は素材粒2、砕片9、石核1、剥片Ⅲ類4、石鏃1、打製石斧1、礫器Ⅲ類1、凹石2、砕片3が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第33号住居址（第42図）

検出状況　本址は調査区のA－5グリッドで確認されたものである。本址周辺は調査区の中でも遺構の重複が著しい地域であり、遺構確認の段階では本址の存在は確認されてはいなかった。第32号住居址の精査に伴い炉址と思われる焼土範囲が検出され本址の存在が明確になった。住居址は台地中央部の平坦な部分から南側斜面に寄った位置に占地し、西側に第32号住居址、南側に第34号住居址、北側には第30号住居址が重複し、東側に第21号住居址が隣接する。検出された主柱穴配列や北・東側の周溝、炉址により本址の全容を把握することができた。重複関係は第32号住居址の周溝が本址の炉址を、南側を第34号住居址が切っていることよりこれらの住居址よりも古いことが確認されているが、第30号住居址との重複関係については判然としない部分があるが、数少ない出土遺物より考えると、本址が第30号住居址よりも古いものと考えられる。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・東側の周溝よりやや楕円形気味の不整形円形プランを想定することができる。規模や主軸方向はは不明である。

住居址が南側斜面に位置することや、著しい重複関係により壁を検出することはできなかった。

周溝は北・東側に検出され、全体の約1/4を把握することができた。北側から東側に掛けて1条が構築されている。周溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく東側11.5cmを測る。北側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められた。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4、P5、P6、P7の7本が該当するものと思われ、これらには大きな重複や建替えは見られない。主柱穴の配置は不規則な7角形を呈している。柱穴の掘り方はしっかりしているものと、不明瞭な掘り方のものが混在する。深さはP1 46.1cm、P2 21cm、P3 15.6cm、P4 21.4cm、P5 84.1cm、P6 25.8cm、P7 41.8cmである。

炉石が抜き取られた炉址と思われる焼土範囲が住居址中央より南西側に寄った位置に検出された。焼土範囲では掘り方等を検出することができなかった。焼土は南－北方向が長い不整楕円形を呈し、その規模は85cm×40cmである。

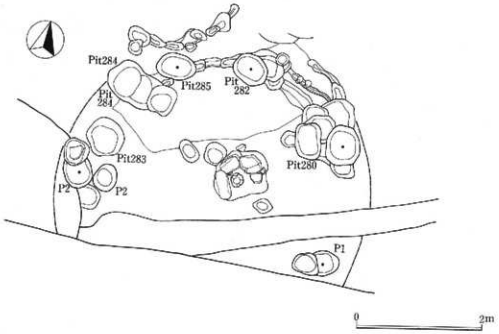
直接ローム面を床としているが重複が著しいために検出は容易ではなく、炉址の北側範囲にやや硬化している面が検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係が著しいために検出することができなかった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数5（15.5g）、その内訳は剥片Ⅰ類1、剥片Ⅱ類1、剥片Ⅲ類2、スクレイパー1が検出されている。本址は住居址の状態や重複関係よりみて中期前半に帰属しよう。

第34号住居址（第44図・図版15）

検出状況　本址は調査区のA－5グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地南側斜面に占地し、南側を調査区外に位置するが、この部分は畑地造成の際に階段状に造成され、本址の約半分は削り取られている。また、南側には近代の水道配管がなされているために、南側床面の大半は遺存してはいない。西側に第38号住居址、東側に第24号住居址、北側に第31号・第32号住居址が重複しており、その状況は魚鱗状を呈する。検出された主柱穴配列や北・東側の周溝、炉址により本址の概要を把握することができたが、平面プラン等の詳細については不明である。重複関係は本址の周溝が第33号住居址を切り、第38号住居址を埋め戻していることより新旧関係を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・東側の周溝より推定すると、南北方向にやや長い不整楕円



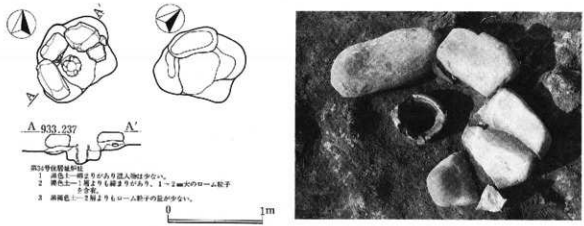
第44図　第34号住居址（1／60）

形の隅丸長方形プランを想定することができる。規模は不明である。主軸方向は不明であるが、Pit282を棟軸に関わる柱穴と考えると、Pit282と炉址を通す線が主軸と考えられ、主軸方向はN－15°－Wとなろうか。

住居址が南側斜面に位置することや、著しい重複関係により壁を検出することはできなかった。

周溝は北側に検出され、全体の約1/3を把握することができた。北辺に2条が構築されるが、北東側は3条となっている。柱穴の建替えや周溝のあり方を考慮すると、炉址を中心に同心円状に拡張が行われたことが窺える。その溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく北側3.4cmを測り、北側から東側に至るにつれて浅くなる傾向が窺えた。北側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められる。

主柱穴は配列や深さよりPit282、Pit279（Pit280）、P_1、P_2、Pit284（Pit258）の5本が検出されたが、調査区外にPit282の対辺の柱穴が位置していたと考えられ、6本柱構造が基本となるものと考えられる。Pit282、P_1には重複が認められ、重複ではないもののPit280、P_2、Pit285は柱穴の移動が認められ、位置関係から見るとIB Pit280→新 Pit279、IB Pit285→新 Pit284へと主柱穴が外側に移動し、拡張が行われたことが窺えた。本址の拡張については周溝においても確認されている。主柱穴の位置は内側に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはPit282 68.1cm、Pit279 53cm・Pit280 65cm、$P_1$21.3cm・46.3cm、$P_2$53.5cm・32.9cm、Pit284 57.3cm・Pit285 81.3cmである。Pit280から中期前半井戸尻式土器片、Pit278・Pit281・Pit284から中期後半曽利Ⅰ式土器片が検出されている。

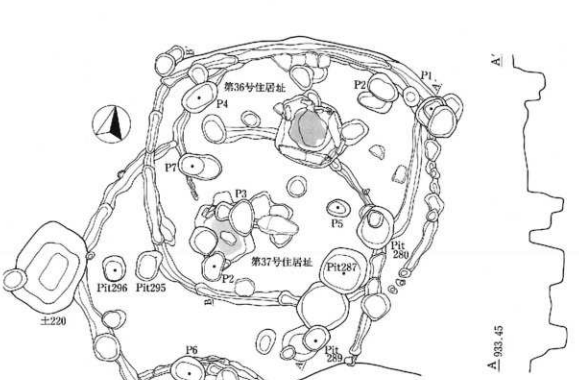


第45図　第34号住居址炉址（1／40）

南東辺の炉石が抜き取られた炉址が住居址中央に検出された。径86cmの不整円形を呈し、外帯に炉石を据えたと考えられる浅い掘り方を有する。炉石は幅30cm～45cm大の板状安山岩礫を炉址中央部を囲むように据えられている。炉石は全て平坦に据えられ、その配列はお花形を呈する。炉址の中央部には口縁部の一部と底部を欠損する曽利Ⅰ式深鉢を正位に埋設している。炉底には焼土は遺存してはいなかった。

直接ローム面を床としているが重複が著しいために検出は容易ではなく、そのほとんどが攪乱されている状態であったが、炉址北側の範囲に他よりも硬質な部分が検出された。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から多様な土器片が検出されており、その量は3.285kgが検出されている。その内訳は曽利Ⅰ式、曽利Ⅱ式（唐草文系）であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数37（376g）、その内訳は素材粒4、砕片10、裂片5、ピエス・エスキーユ2、剥片Ⅰ類4、剥片Ⅱ類6、剥片Ⅲ類3、石鏃2、スクレイパー1、打製石斧4、磨製石斧Ⅱ類3、石匙1、砕片2が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。



第46図　第36号住居址・第37号住居址(1／60)

第35号住居址

第35号住居址とした範囲は、重複関係を持っていた第36号住居址の精査に伴って、第36号住居址の拡張範囲であったことが判明した。そのために第35号は欠番とする。

第36号住居址（第46図・図版15）

検出状況　本址は調査区のA－3・4グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は今回の調査区内で最も遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地南斜面が傾斜を始めた部分に占地し、西側に第42号住居址、東側に第31号住居址、南側に第37号住居址が重複し、北東側には第29号住居址が、北西には第43号住居址が隣接する。また、住居址内には第1号集石が重複する。検出された主柱穴配列や全周する周溝、北側壁により本址の全容を把握することができた。重複関係は本址の周溝が第31号・第37号・第42号住居址を切っている点から、本址が新しい段階に帰属することが判明した。なお、本址南西範囲の覆土内から床面上に掛けて集石が構築され、この集石が最も新しい段階に帰属するものである。

遺構の構造　平面形プランは検出された周溝、主柱穴配列や北・西側の壁よりやや不整形の隅丸方形プランを想定することができる。規模は長軸4.82m×短軸4.3mで西－東方向に長軸を持つ横長のプランである。南側辺中央部と奥壁中央を通す線上に炉が構築されておりこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－18.5°

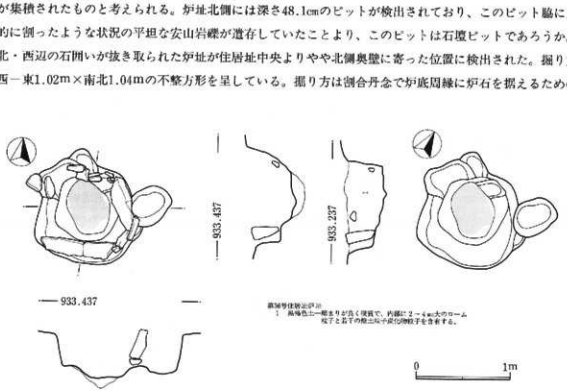
—Wを示す。

住居址が南側斜面に位置することより南側部分は流出し壁の立上りを検出することはできなかったが、北・西側においては割合明瞭に壁の立上りが検出された。検出できたこの部分を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる傾向が窺える。最も高い部分である北側で19.6cmを測り、奥壁部分が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は住居址を全周する形で巡り、東・西側には2条の周溝が巡る。周溝は短い溝が繋がるように構築されたものと、しっかりした溝の部分とに別れる。周溝の断面はU字形を呈し、幅は割合規則正しく、その掘り方は北側、東側の内側が最も丹念な構築となっている。深さは一様ではなく北側5.7cm、東側5.6cm、南側6cm、西側13.7cmを測り、西側が最も深い。東外側周溝は小孔が連なったような状態で、周溝底には凹凸が認められる。

主柱穴は配列や深さよりP_1(P_2)、Pit287 (Pit280)、P_3(P_4)、P_5の4ヶ所が該当するものと思われる。重複ではないもののP_5は平面形状が楕円形を呈し、これは同一地点で建替えが行われた結果であろうか。また、P_1は第31号住居址の主柱穴と重複する。P_5を除いた他の柱穴は拡張に伴う移動が認められ、配置やP_4の覆土上層にローム・ブロックや焼土粒による埋め戻しが認められ点等からP_2→P_1、Pit280→Pit287、P_4→P_3と考えられ、炉址を中心として北東・南・南西方向へ柱穴を移動することで拡張を測っていることが窺える。周溝の在り方を加味すると変則型の同心円状拡張とも捉えることができよう。主柱穴の位置は壁際住居址のコーナー部に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方は径が大きくしっかりし、深さはP_1 49.6cm・$P_2$38.3cm、Pit287 53.2cm・Pit280 60.6cm、$P_3$42.5cm・$P_4$37.1cm、$P_5$38.8cmである。P_3・P_4の上層には第1号集石が構築され、P_3内は上層が埋め戻されたような状態を呈し、黒耀石集積が検出された。この黒耀石集積はその状況より本址に帰属するものと思われ、本址が廃絶時にP_3の埋め戻しに伴って黒耀石が集積されたものと考えられる。炉址北側には深さ48.1cmのピットが検出されており、このピット脇に人為的に倒したような状況の平坦な安山岩礫が遺存していたことより、このピットは石置ピットであろうか。

北・西辺の石囲いが抜き取られた炉址が住居址中央よりやや北側奥壁に寄った位置に検出された。掘り方は西—東1.02m×南北1.04mの不整方形を呈している。掘り方は割合丹念で炉底周縁に炉石を据えるための



第47図　第36号住居址炉址 (1／40)

掘り方が検出された。炉石は幅60cm・80cm大の形状が類似した稜線を有する板状安山岩礫（平石の範疇に含めることができるか）が南・東辺に検出された。炉石は全ての辺が直立するように据えている。炉石脇には20cm大の平担な礫を詰めて炉石を固定している。また、炉石が抜き取られた部分には炉石を据えた際に調整用として用いられたと思われる礫が遺存した。炉石は完存してはいないが、炉址の形状は切り炬燵状を呈するものと思われる。炉底は皿状の窪みを有し、56cm×61cmの範囲に厚さ13cmで焼土が確認された。炉址内上層から中期後半曽利Ⅲ式深鉢口縁部片が検出されている。

直接ローム面を床としているために検出は容易であった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分が最も堅緻で緻密であったが、小さな凹凸を呈する。炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜している。

覆土は黒褐色土の単一層で、覆土の大半は地形が南側に傾斜するために土層の堆積は薄く、流出している状態であった。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から多様な土器片が検出され、その量は7.825kgが検出されている。その内訳は中期後半曽利Ⅰ式（梨久保B式）、曽利Ⅲ式、曽利Ⅴであった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数88（593g）、その内訳は素材塊5、砕片21、裂片3、ピエス・エスキーユ1、石核5、剥片Ⅰ類17、剥片Ⅱ類20、剥片Ⅲ類12、ドリル1、スクレイパー3が、その他の石器では打製石斧4、磨製石斧Ⅰ類1、礫器Ⅰ類1、凹石Ⅱ類1、磨石1、剥片3が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅲ式期に帰属しよう。

第37号住居址（第46図・図版15）

検出状況　本址は調査区のA－3・4グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地の南側斜面に寄った位置に占地し、西側に第42号住居址、東側に第31号住居址、南側に第38号住居址、北側には第36号住居址が重複している。検出されたほぼ全周する周溝や主柱穴配列、炉址により本址の全容を把握することができた。重複関係は本址の周溝上に第36号住居址の貼り床がなされ、本址の周溝が第42号住居址の炉址を切ることより、新旧関係を把握することができた。なお、第38号住居址との重複関係は明確にはならなかったが、住居址構造や出土遺物から新旧関係を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や周溝よりやや南西－北東方向に長い楕円形気味の不整円形プランを想定することができる。規模は不明な部分もあるが、主柱穴配列や周溝範囲より推定すると、長軸4.78m×短軸4.27mで北東－南西方向に長軸を持つ。主柱穴配列より北西側に位置するP_8が奥壁部の柱穴と考えられ、この柱穴とPit289、P_7間の中点を通す線上に炉が構築されこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－37°－Wを示す。

住居址が南側斜面に位置することや、著しい重複関係により壁を検出することはできなかった。

周溝は第38号住居址と重複する部分を除き、1条が全周する。周溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく、北側6.4cm、東側4.8cm、南側2cm、西側は8.9cmを測り、北側から南側に至るにつれて浅くなる傾向が窺える。南側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められる。

主柱穴は配列や深さよりP_8、Pit289、P_7、Pit296の4本が該当するものと思われ、主柱穴配列は梯形となる。P_8には重複が認められる以外は、単独である。主柱穴の位置は周溝寄りの位置に構築される。柱穴の掘り方は直に近くしっかりし、深さは$P_8$55.9cm、Pit289 55.2cm、$P_7$44.1cm、Pit296 52.7cmで、平均すると約52cmで、偏りが少ない。奥壁に位置するP_8は深さが28.2cmで、その位置より考えると棟軸に関わる

柱穴である可能性が考えられる。

炉石が全て抜き取られた炉址が住居址中央より若干北西側奥壁に寄った位置に検出された。掘り方は北西－南東方向が長い不整円形を呈し、その規模は南東－北西0.98m×南西－北東0.83mである。掘り方は　cmと割合浅く、北辺・南辺に不整形な掘り方が検出され、炉石を据える際の掘り方と思われる。炉石は遺存してはいないが、掘り方の北西隅に炉石の詰め石と思われる15cm大の礫が遺存していた。

炉底は割合平坦で、42cm×69cmの範囲に厚さ9cmで焼土が確認された。炉址上には第1号集石が構築されている。集石が炉址よりやや浮いた位置に構築されている点や、本址を切る第36号住居址の主柱穴上にも集石が掛かることより、第37号・第36号住居址が廃絶後集石が構築されたものと考えられる。

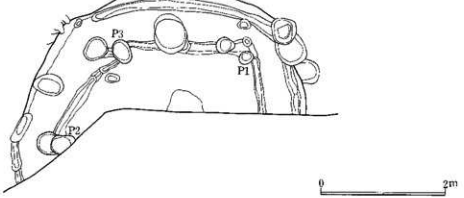
直接ローム面を床としているが重複が著しいために検出は容易ではなかった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分が最も遺存状態が良く堅緻で緻密であった。炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜しており、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から多様な土器片が検出されており、その量は3.692kgが検出されている。その内訳は中期後半曽利Ⅰ式、曽利Ⅱ式（唐草文系、曽利系）であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数27（230.5g）で、その内訳は素材粒1、砕片9、ピエス・エスキーユ1、剥片Ⅰ類8、剥片Ⅱ類7、スクレイパー1が、その他の石器では打製石斧1、凹石Ⅰ類1が検出されている。本址は覆土内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利Ⅱ式期に帰属しよう。

第38号住居址（第48図）

検出状況　本址はア－3・4グリッドで確認されたものである。本址周辺は調査区の中でも遺構の重複が著しく、遺構確認に難行した地域であったが、本址は他の遺構に比べて、掘り方が深かったために遺構確認段階においてその存在は明確であった。住居址は台地南側斜面に占地し、約1/2が調査区外となる。西側に第39号・第40号・第41号住居址が隣接し、東側に第34号住居址、北側には第37号住居址が重複しているが、本址の掘り方が深いためにその全容を把握し得た。重複関係は現象面で捉えると本址が重複関係を持つ住居址を切る状態であったが、本址の構造や出土遺物より見ると、重複する住居址の方が新しく、本址上面に貼り床等がなされていたと思われるが、地形の関係より検出することはできなかった。

遺構の構造　約1/2が調査区外に位置していることより、本址の全容を把握することはできなかったが、



第48図　第38号住居址（1／60）

主柱穴配列や周溝より推定すると、やや楕円形気味の不整形円形プランを想定することができよう。規模は不明であるが、主軸方向はP_3方向を棟軸と想定すると、N－36°－Wを主軸方向と考えることができようか。

北壁は深く硬質ローム層を掘り込んでおり、明確な壁を検出することができたが、地形の関係から南側に至るにつれて、壁が低くなる傾向が見られた。最も明瞭な掘り方を持つ北側奥壁で42cmを測り、その掘り方はしっかりとしており、直線上に外斜し立ち上がる。

周溝は北・東側に1条が検出された。周溝の掘り方は混合斧念で、周溝の断面はU字形を呈し、幅は規則的であるが、深さはそれほど深くなく北側5.5cmを測る。また、主柱穴を繋ぐように周溝が検出された。位置関係から考えて、間仕切りに関わるものであろう。北側が21.1cm最も深く、東側8.2cm、西側3.2cmと南

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、P_3が該当するものと思われ、これらの主柱穴配列より推定すると、6本柱構造を想定でき、その配列は6角形を呈するものであろう。主柱穴には大きな重複や建替えはP_3を除き見られない。柱穴の掘り方はしっかりしているが、径は小さくP_1は20cmしかない。深さは$P_1$44.3cm、$P_2$27.9cm、$P_3$36cmと柱穴によって深さにばらつきがある。柱穴ではないが袋状を呈する土坑が北奥壁側に検出された。この土坑はその様相より中期前半の住居址内に見られる貯蔵穴的なものであろう。

硬質ローム面を直接床とし、そのために全面が堅緻であるが、部分的に硬質ローム層内に含まれている軽石が露出して凹凸を呈している範囲もある。床面は主柱穴を結ぶ間仕切り様の周溝を区切りに、内帯と外帯とに区分され、外帯が内帯に比べてやや高く、内帯範囲は住居址中心部に向かって若干の傾斜を持つ。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は、遺構の重複関係から他の遺構からの遺物が混入する。その量は0.855kgが検出されている。その内訳は中期前半藤内Ⅰ式（所謂新巻類型を含む）が主体で、上層から曾利Ⅳ式が検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数23（81g）で、その内訳は砕片5、剥片Ⅰ類3、剥片Ⅱ類14、石鏃プランク1が、その他の石器では打製石斧1、礫器Ⅰ類1、凹石Ⅱ類1、凹石Ⅱ類1、剥片5が検出されている。本址は覆土内より得られた資料や住居址の状態より中期前半藤内Ⅰ式期に帰属しよう。

第39号住居址（第49図・図版16）

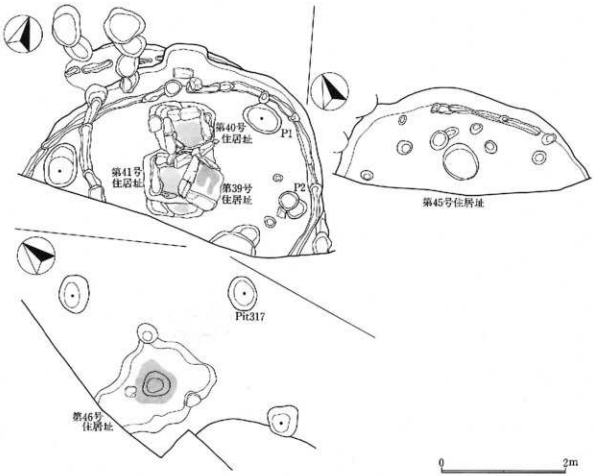
検出状況　本址はア－3グリッドで確認されたものである。住居址は台地南傾斜面に占地し、南側を調査区外に位置するが、この部分は畑地造成の際に階段状に造成され削り取られている。本址は今回調査された住居址の内で最も興味深い重複関係を有していた。本址の下層には第40号・第41号住居址が構築されており、それも本址の炉址下に重複して第40号・第41号住居址の炉址が検出され、3軒分の炉址が同位置に構築されていたことより炉址の変遷を把握することができた。このような重複関係を有していたことより住居址であることは判明したが、その全容については不明な部分が多い。

遺構の構造　本址に伴うと思われる掘り方等が検出されなかったために、平面プラン等については不明な部分が多いが、東辺に検出された柱穴と周溝より平面プランを想定すると、方形プランを基本とするものと考えることができようか。検出された炉址の軸線より主軸方向を想定すると、N－1°--Eとなる。

住居址が南側斜面に位置することや、第40号住居址の覆土内に掘り方を有する点などより壁を検出することはできなかった。

周溝は東・西側に検出されているがその全容は把握されてはいない。検出された周溝より全体を想定すると、1条が全周する形で構築されていたものと思われるが、北辺のものは第40号住居址覆土内に浅く掘り込まれていたためか検出することはできなかった。

周溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り



第49図　第39号・第40号・第41号住居址・第45号住居址・第46号住居址（1／60）

丹念ではなく東側3.9cm、西側20.4cmを測る。

主柱穴は配列や深さよりP$_2$の1ヶ所が検出されたが、調査区外にP$_3$の対辺の柱穴が位置していたと考えられ、また、北西側対辺の主柱穴は第40号住居址の床面にまで掘り込まれていなかったために検出されなかったが、炉址構造や周溝の在り方より4本柱構造が基本となるものと考えられる。P$_3$には重複が認められる。主柱穴の位置は周溝に寄った位置に構築される。柱穴の掘り方は径が小さく、やや貧弱な掘り方を有し、深さは42.2cm（39.3cm）を測る。

東辺の炉石が抜き取られた炉址が住居址中央に検出された。炉石は幅40cm～66cm大の板状・柱状安山岩礫を四角に据えている。炉石は北・西辺が直に立てるように、南辺は平坦に据えている。炉石の配列は切り炬燵状を呈する。炉底には焼土が遺存していたが、加熱により著しい硬化は見られなかった。

床面は第40号住居址の覆土内に構築されていたものと考えられ、第40号住居址が廃絶した後、その凹みを再利用して本址を構築しているが、覆土内にはロームを客土した貼り床や、黒色土の硬化面などは検出されてはいないことより、簡易な構築法が採られていたものと考えることができまいか。

遺物の出土状況　本址に直接関わると思われる出土遺物の検出はないが、炉址の状態や第40号住居址との重複関係よりみて中期後半曽利Ⅳ式期以降に帰属しよう。

第40号住居址（第49図・図版16）

検出状況　本址は調査区のアー2・3グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地南側斜面に占地し、南側を調査

区外に位置するが、この部分は畑地造成の際に階段状に造成され削り取られている。西側に第45号住居址、北東側に第42号住居址が隣接し、本址と同位置に第39号・第41号住居址が重複している。

重複関係は本址の炉址上に第39号住居址の炉址が構築され、また、本址の炉址が第41号住居址の炉址上に構築されていたことより、旧 第41号住居址→第40号住居址→新 第39号住居址と把握することができよう。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・西・東側の周溝よりやや不整形の隅丸方形プランを想定することができる。規模は不明である。炉址と主柱穴の位置関係より推定すると、東－西方向に長軸を持つ横長の北壁の歪んだ不整隅丸方形プランを呈するものと思われる。主柱穴間の中央と奥壁中央を通す線上に炉が構築されこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－27°－Wをする。

住居址が南側斜面に位置することより南側部分は流出し壁の立上りを検出することはできなかったが、北・北東側においては割合明瞭に壁の立上りが検出された。検出できたこの部分を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる傾向が窺える。最も高い部分である北側で13.2cmを測り、奥壁部分が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は壁際に全周する形で1条構築され、その溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則でその掘り方は余り丹念ではなく北側6.1cm、東側3.4cm、西側5.2cmを測り、全体的に浅い傾向にある。北側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められる。なお、北側奥壁の部分だけは他の部分とは異なり、壁際よりやや内側に周溝が構築され、周溝と壁の間にはある程度の空間を有し、この部分に右棒や中期後半曽利IV式大型破片が遺存し、その状況よりこの部分が何らかの場であったことが考えられ、右棒の検出より石塩等の奥壁祭祀の場と考えることができようか。

主柱穴は配列や深さよりP1、P3の2ヶ所が該当するものと思われ、これらの柱穴の配列より4本柱構造を想定できる。P3には重複が認められる。重複ではないもののP1は平面形状が楕円形を呈し、これは[illegible]地点で建替えが行われた結果であろうか。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP1 55.7cm、P3 66.6cmを測る。主柱穴ではないが、奥壁部分に周溝と重複し径30cm、深さ54cmの柱穴が検出された。この柱穴はその位置関係から規模の小さな石壇ピットであろうか。

右側いの完存する炉址が住居址中央より北側奥壁に寄った位置に検出された。掘り方は西－東0.95m×南北0.8mの不整方形を呈している。掘り方は割合丹念で炉底周縁に炉石を据えるための溝状の掘り方が検出された。炉石は幅50cm～60cm大の稜線を有する板状安山岩礫（半石の範疇に含められるか）を用いている。炉石は全ての辺が斜状に掘え、平面形状は切り短縁状を呈する。

炉底は若干皿状の窪みを有し、40cm×42cmの範囲に厚さ8cmで焼土が確認された。炉址内から曽利III式、加曽利E2式土器片が検出されている。

直接ローム面を床としているために検出は容易であった。床面の範囲は炉址を中心とした内側の部分が最も堅緻で緻密であった。奥壁と周溝に挟まれた範囲は他の部分よりもやや高く、炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜し、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

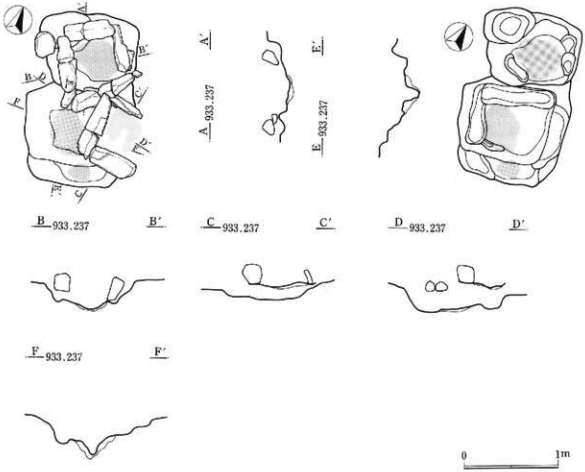
遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から、第39号・第41号住居址の遺物が混在している。土器片の総量は2.5kgが検出されている。その内訳は中期後半曽利III式、曽利IV式であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数10（47g）、その内訳は砕片3、剥片II類3、剥片III類3、スクレイパー1、打製石斧1、横刃型石器1が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期後半曽利IV式期に帰属しよう。

第41号住居址（第49図・図版16）

検出状況　本址は調査区のアー2・3グリッドで確認されたもので、第40号住居址とほぼ合致する形で重複する。本址はその重複状態より第40号住居址の旧状とも捉えることができるが、一応炉址の在り方や出土遺物の状況より別の住居とし番号を付した。

遺構の構造　本址で明確な構造が把握できるものは、炉址だけである。炉址の位置は第40号住居址炉址の南側に重複する形で検出された。全ての炉石は抜き取られている。炉址の掘り方は東－西0.92m、北－南1.05mの不整形な隅丸方形を呈する。掘り方の側縁には炉石を据えるための溝状の掘り方が巡る。南辺には浅い掘り方が付随し、この部分が炊き口に関わるものであろう。

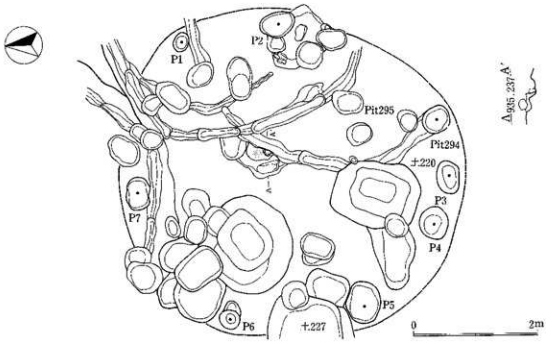
遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の重複関係から、第39号・第40号住居址の遺物が混在しており、分離することは難しいが、本址の土器片としたものの総量は0.645kgである。その内訳は中期後半曽利Ⅲ式（唐草文系が主体をなす）、曽利　式である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数5（26g）、その内訳は砕片1、裂片1、剥片Ⅲ類3が検出されている。本址は炉址内より得られた資料や住居址の重複より中期後半曽利Ⅱ式からⅢ式期に帰属しよう。



第50図　第39号・第40号・第41号住居址炉址（1／40）

第42号住居址（第51図）

検出状況　本址は調査区のA－3グリッドで、第36号・第37号住居址の精査に伴い確認されたものである。このグリット周辺は今回の調査区内で最も遺構の重複が著しい地域で、住居址の全容の把握には困難を極め、住居址の全容は検出された址柱穴と炉址により、その規模等を推定した。住居址は台地南斜面が傾斜を始めた部分に占地し、西側に第227号土坑、東側に第36号・第37号住居址、北側に第43号住居址、本址内部に第



第51図　第42号住居址（1／60）

220号土坑が重複し、南側には第40号住居址が隣接する。検出された主柱穴配列や炉址関係より大凡の全容を把握することができた。重複関係は本址の炉址を第36号・第37号住居址の周溝が切っていることよりこれらの住居址よりも古いことが確認できた。また、本址の主柱穴が第43号住居址の周溝を切っている点から、本址が新しい段階に帰属することが判明した。

遺構の構造　平面形プランは、検出された主柱穴配列や炉址との位置関係より、北東－南西方向にやや長い不整円形プランを想定することができる。規模は推定で長軸5.57m×短軸5.19mを想定できようか。入り口部に位置していると思われる主柱穴P_1、P_5と炉址上を通す線を主軸とすると、主軸方向はN－20°－Eを想定できようか。

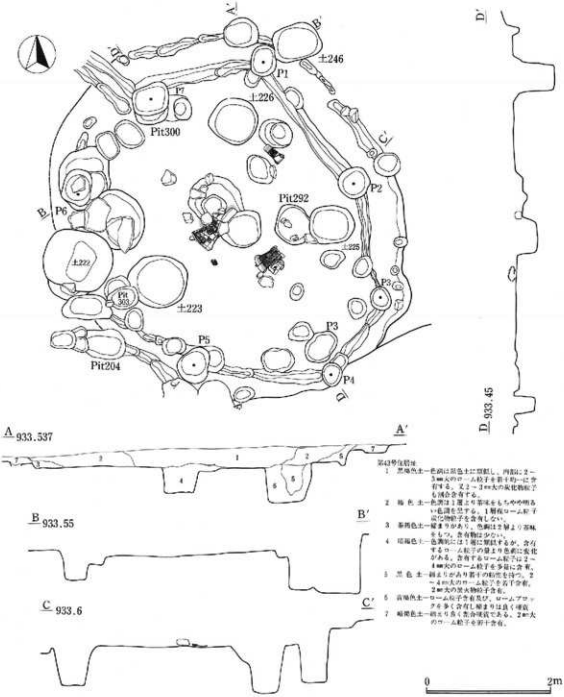
本址は掘り方が浅かったためか、全ての範囲が削平を受けて壁は遺存してはいなかった。周溝も検出されてはいない。

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、Pit294、P_3、P_4、P_5、P_6、P_7の8ヶ所が該当するものと思われる。これらの柱穴には建替え等による重複は認められない。柱穴の掘り方は径が不揃いでP_1、P_6のように径が20cm前後のものと、P_5のように径50cmと大きなものがある。深さは$P_1$36.2cm、$P_2$55.2cm、Pit294 46.6cm、$P_3$56.5cm、$P_4$53.5cm、$P_5$32cm、$P_6$50.3cm、$P_7$37.1cmである。

炉址はそのちょうど半分が第36号・第37号住居址により切り取られておりその全容については不明である。遺存していた炉石・掘り方・炉体土器からその構造を復元してみると、第20号住居址の炉址と同様な構造と考えられる。炉址の掘り方は不整円形の平面プランを呈し、掘り方脇に柱状の安山岩礫を半周に据えている。炉址中央部には底部を欠損する中期後半曽利Ⅰ式深鉢を正位に埋設し、炉体土器としている。炉体七器の北側には15cm×17cmの焼土範囲が検出された。

直接ローム面を床としていたと考えられるが、硬化した面や貼り床等は検出されてはいない。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は炉体土器だけで、その量は0.48kgである。本址は炉体土器よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。



第52図　第43号住居址（1／60）

第43号住居址（第52図・図版16）

検出状況　本址は調査区のA－2・3、B－2・3グリッドで確認されたものである。検出時には本址の外帯部を別の住居址と誤認し、第44号住居址の番号を付したが、完掘した結果別個の遺構でないことが確認できたため、第44号住居址番号を欠番とした。本址周辺は土坑等の遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めた。住居址は台地の平坦な部分に占地しているが、旧来より構築法が簡易であったためか、壁の掘り方等は判然としなかった。西側に第47号住居址が、南側には第42号住居址が重複し、本址内部には第222号・第223号・第225号・第226号土坑が構築されているが、検出されたほぼ全周する周溝

や主柱穴配列、炉址により本址の全容を把握することができた。重複関係は貼り床等は確認されてはいないが、出土遺物の内容から新旧関係を把握することができた。それによると旧 第43号住居址→新 第42号・第47号住居址と整理することができよう。

遺構の構造 第47号住居址と重複している北西側の範囲が判然としないが、平面形プランは主柱穴配列や遺存していた周溝や南東側の壁より推定すると、やや南東－北西方向に長い楕円形気味の不整円形プランを想定することができる。規模は不明な部分もあるが、主柱穴配列や周溝範囲より推定すると、長軸6.24m×短軸5.37mで、中型の規模に帰属しようか。主柱穴配列より南西側に位置するP_3、P_4が入り口部に位置する柱穴と考えられ、この柱穴と奥壁部のP_7を通す線上に炉が構築されこの線が主軸と考えられ、主軸方向はN－32°－Wを示す。

本址は西側に第47号住居址が、南側に第42号住居址が重複しているために、この範囲の壁を検出することはできなかったが、低く不明瞭ながら東側に壁の一部を検出することができた。この部分を観察すると、壁の掘り方は不明瞭で判然とせず、その立上りは緩やかな傾斜を持ち外反する。壁の床際はやや丸みを帯び、その断面はやや皿状を呈する。

周溝は断続する形で、2条が検出されている。外側の周溝は短い溝が繋がるように構築されており、内側の周溝は外側のものに比べて割合丹念な構築となっている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則であるが概して狭い。その掘り方は最も明瞭な北側で6.4cmを測り、北側から南側に至るにつれて浅くなる傾向が窺える。外側の周溝内には小孔が穿たれ、周溝底には凹凸が認められる。2条検出された周溝は、構築されている位置等から、住居址の建替えによるものではなく内側のものは主柱穴を繋ぐように構築されている点から間仕切りに関わるものと考えられる。

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2、P_3、P_4、P_5、P_6、P_7の7ヶ所が該当するものと思われ、主柱穴配列は不整形な7角形となる。主柱穴には大きな重複は認められず単独である。主柱穴の位置は壁寄りの位置よりやや内側に入った位置に構築されるが、P_3、P_4は他のものに比べてより壁際に構築される傾向が窺える。柱穴の掘り方は直に近くしっかりし、深さは$P_1$64.4cm、$P_2$78.5cm、$P_3$30.3cm、$P_4$34.4cm、$P_5$62.6cm、$P_6$45.9cm、$P_7$63.5cmを測り、平均すると約52.2cmであるが、P_3、P_4は平均値よりもかなり浅く他の柱穴とは相違が認められ、位置関係等を考慮すると入り口部に関わる柱穴と考えることができよう。また、奥壁に位置するP_7はその位置より棟軸に関わる柱穴である可能性が考えられる。柱構造とは直接関わりを持たないが、P_4の上面に黒曜石の集積が検出された。この黒曜石集積は13個（総重量162g、平均重量約12.5g）の割合粒揃いの素材粒より構成されている。検出状況より推定すると、住居址廃絶時に柱穴内に黒曜石を詰め込んだ状況を想定できようか。同様な住居址柱穴内に黒曜石を集積した例は棚畑遺跡第108号住居址に認められる。

第43号住居址内黒曜石集積
柱穴上に黒曜石の粒が13個詰め込んだような状態で検出された。
詰め込まれていた黒曜石は全て自然面を有しており、割合粒の揃ったものである。

直接ローム面を床とし、全面が硬化し検出は容易であった。炉址を中心とした内側の部分が最も遺存状態

が良く堅緻で緻密であった。床面は炉址を中心として皿状に浅く窪んでいる。

遺物の出土状況　本址の出土遺物の状況は吹上パターンを呈し、住居址内で最も大量の遺物が得られている。土器片の量は32.465kg(口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約26個体分)が検出されている。その内訳は中期前半藤内Ⅱ式、藤内Ⅱ式であり、斜行沈線文系・平出３Ａ系・焼町系土器片を含む。その他に黒曜石砕片・剥片等総数110（682.5ｇ）で、その内訳は素材剥９、砕片29、裂片20、ピエス・エスキーユ12、剥片Ⅰ類４、剥片Ⅱ類14、剥片Ⅲ類20、石鏃２、石鏃ブランク２、ドリル２が、その他の石器では打製石斧10、横刃型石器4、凹石Ⅰ類１、石皿1、剥片15が検出されている。本址は覆土内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期前半藤内Ⅰ式期に帰属しよう。

第44号住居址

第44号住居址とした遺構は、第43号住居址の精査の結果、第43号住居址の外側範囲であることが確認されたために、欠番とする。

第45号住居址（第49図）

検出状況　本址はアー１・２グリッドで確認されたものである。住居址は台地南側斜面に占地し、約2/3が調査区外となるが、調査区外は畑地造成の際に階段状の造成がなされ、旧状は遺存していない。本址は他の遺構に比べて、掘り方が深かったために遺構確認段階においてその存在は明確であった。北西側に第７号地下式坑が、東側には第39号・第40号・第41号住居址が隣接しているが、大きな他の遺構との重複は認められない。

遺構の構造　約2/3が調査区外に位置していることより、本址の全容を把握することはできなかったが、検出された北壁等から推定すると、やや南北方向に長い楕円形気味の不整形り形プランを想定することができよう。

北壁は深く硬質ローム層を掘り込み、明確な壁を検出することができたが、地形の関係から南側に至るにつれて、壁が低くなる傾向が見られた。最も明瞭な掘り方を持つ北側奥壁で27.3cmを測り、その掘り方はしっかりとし、直線上に外斜し立ち上がるが、床と接する部分はやや丸みを帯びる傾向が認められた。

周溝は北東壁側に貧弱なものが１条検出された。周溝の掘り方は貧弱で、周溝の断面は不明瞭なＵ字形を呈し、幅は不規則である。周溝は深くなく最も明確な部分である北側で5.3cmを測る。また、この周溝に連なるように小孔が４ヶ所検出された。

明確な主柱穴は検出されてはいないが、径が20cm～30cm前後で深さが20cm～30cmの坑が、壁よりやや内側に入った位置に検出され、位置関係から考えるとこれらの坑が主柱穴に関わるものであろうか。

硬質ローム面を直接床とし、そのために全面が堅緻であるが、部分的に硬質ローム層内に含まれている軽石が露出して凹凸を呈している範囲もあり、南側に向かい緩やかな傾斜を有する。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は少量である。土器片の総量は0.5kgが検出されている。その内訳は中期前半新道式、藤内Ⅰ式が検出されている。その他に黒曜石砕片・剥片等総数７（16.5ｇ）で、その内訳は裂片１、剥片Ⅲ類６が、その他の石器では剥片１が検出されている。本址は覆土内より得られた資料や住居址の状態よりみて中期前半新道式期から藤内Ⅰ式期に帰属するものと考えられる。

第46号住居址（第49図）

検出状況　本址はＡ－１グリッドに焼土範囲が検出され、この焼土を囲むように柱穴が検出されたことにより確認されていたものである。住居址の上面は耕作等により削平を受け、壁等を検出することはできなかった。また、本址の西側は農道により開削され、南側に第７号地下式坑が重複しているために、住居址の全容

を把握することはできなかった。

遺構の構造　本址に伴うと思われる掘り方等が検出されなかったために、平面プラン等については不明である。検出された主柱穴配列を考慮すると、円形プランを基本とするものと考えることができようか。

住居址上面が耕作等により削平され、壁や周溝を検出することはできなかった。

主柱穴は配列や深さよりP$_1$、Pit317、P$_2$の3ヶ所が検出された。

柱穴の掘り方は割合明確で、径は45cm前後でしっかりした掘り方を有し、深さはP$_1$58.9cm、Pit317 44.6cm、P$_2$45cmを測る。

炉石が抜き取られた炉址が主柱穴に囲まれた範囲のほぼ中央部に検出された。焼土範囲は64cm×71cmの不整形で、厚さは6cmを測る。この焼土を囲むように1.33m×1.64mの規模を持つ不整形な掘り方が検出されているが、この掘り方が炉址の掘り方となるものであろうか。石囲いは検出されてはいないが、炉石に関わったと考えられるような、径が15cm大の安山岩礫が2点掘り方脇と内部に検出された。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は少量である。土器片の総量は0.03kgが検出されている。その内訳は中期前半井戸尻式が検出されている。本址は出土した土器よりみて中期前半井戸尻式期に帰属するものと考えられる。

第47号住居址（第53図）

検出状況　本址は調査区のB－1・2グリッドで確認されたものである。このグリット周辺は遺構の重複が著しい地域であり、住居址の全容の把握には困難を極めたが、北側に明瞭な周溝が2条検出されたことにより、住居址の構造を把握することができた。東側に第43号住居址、住居址内部には第222号・第223号・第230号・第234号・第236号・第237号・第242号土坑が重複している。

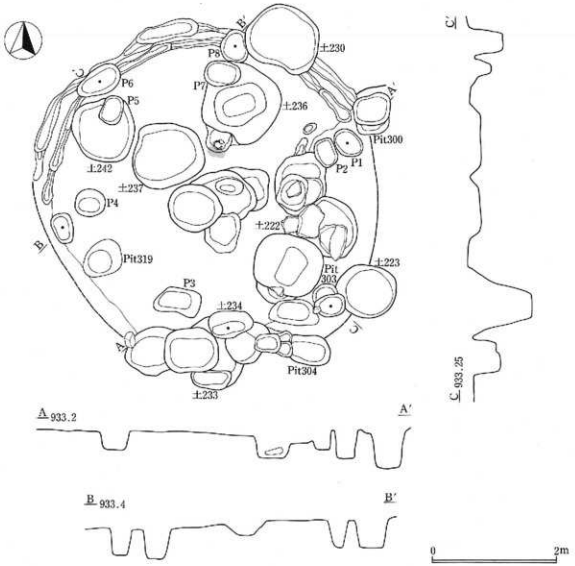
重複関係は本址の周溝が第43号住居址の壁を切って構築されていること、また、住居址内に構築された土坑の大半はロームブロックによる埋め戻しが認められたことより、旧 土坑群・第43号住居址→新 第47号住居址と把握することができよう。

遺構の構造　平面形プランは主柱穴配列や北・西・東側の周溝よりやや不整形の円形プランを想定することができる。規模は不明な部分もあるが、主柱穴配列より見て、東西5.53m、南北5.27mの規模を想定できる。Pit234、P$_8$方向に長軸を持ち、この軸線上に炉が構築されていることより、この線が主軸と考えられ主軸方向はN－3°－Wを示す。

住居址は台地の平坦な部分に構築されてはいるが、周辺は他の遺構との著しい重複関係を有していた点より、掘り方を検出することはできなかった。

周溝は北側範囲に2条が構築されているが、他の部分は他の遺構との重複等により検出することはできなかった。周溝は狭い溝が繋がるように構築され、断面はU字形を呈し、幅は不規則であるがその掘り方は丹念で、最も深い北外側で24.3cmを測る。内側の周溝は外側のものに比べ浅い傾向が窺える。周溝底には凹凸が認められる。内側周溝内には埋め戻しによると思われる黄褐色土が充満し、住居址が拡張されたことが窺えた。内側周溝内より中期前半井戸尻式土器片が検出されている。

主柱穴は配列や深さよりP$_1$(P$_2$)、Pit303、Pit234（P$_3$）、Pit320（P$_4$）、P$_6$(P$_5$)、P$_8$(P$_7$）の6ヶ所が該当するものと思われ、これらの柱穴の配列より6本柱構造を想定できる。大きな重複を示しているものは見られないが、Pit303の部分を除き、柱の建替えによる柱穴の移動が見られた。柱穴は外側に拡張された状態で、位置関係よりP$_2$→P$_1$、P$_3$→Pit234、P$_4$→Pit320、P$_5$→P$_6$、P$_7$→P$_8$と移動が行われたものであろう。柱穴の掘り方はしっかりし、深さはP$_1$63.4cm・P$_2$49.7cm、Pit303 38.7cm、Pit234 52.3cm・P$_3$46.1cm、



第53図　第47号住居址（1／60）

Pit320 40.5cm・$P_4$46.2cm、$P_5$61.4cm・$P_6$43cm、$P_7$44.3cm・$P_8$44.7cmを測る。

炉址は第236号土坑の南側に炉体土器とそれに伴う掘り方が検出された。この位置は住居址の中央部よりやや北側奥壁に寄った場所である。炉址と第236号土坑との重複関係は土坑がロームブロックにより埋め戻されていた点や、土坑覆土上部に焼土粒子が検出されたことより、土坑が埋め戻された後に炉址が構築されたことが確認できた。炉址の掘り方は径39cmの不整円形で、この掘り方の南端に炉体土器を正位に埋設している。炉体土器は中期後半曽利Ⅰ式深鉢胴部を用いている。炉体土器内には焼土は検出されなかったが、掘り方南側に15cm×29cmの範囲で焼土が検出されている。石囲い等は住居址上面が削平されていたためか検出できなかったが、他の住居址などの例によると、お花形の石囲い炉の構造となろうか。

直接ローム面を床としているために検出は容易であったが、上面を削平を受けているためか硬化した面等は検出することはできなかった。炉址の南側は地形の関係からか若干低く傾斜し、この部分は他の範囲よりも軟弱な傾向を示した。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は遺構の著しい重複状況を反映してか、その量は少量で、土器片の

総量で0.21kgが検出されている。その内訳は中期前半井戸尻式、後半曽利Ⅰ式であった。その他に黒曜石砕片・剥片等総数２（16ｇ）、その内訳は砕片２だけであった。本址は炉体土器よりみて中期後半曽利Ⅰ式期に帰属しよう。

第48号住居址（第54図）

検出状況　本址は調査区のＪ－７グリッドで確認されたものである。本址は台地中央部より北側に寄った斜面部に構築され、畑地造成の際に西側約2/3が削り採られ、東側の一部が検出できただけである。

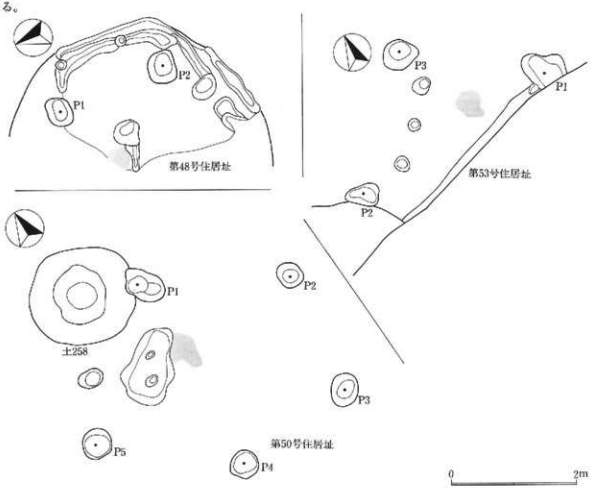
遺構の構造　検出できた東側範囲や主柱穴配列、炉址よりやや不整形の円形プランを想定することができる。規模は大半が削り採られているために不明であるが、主柱穴配列より推定すると、東西方向にややつぶれた直径が4.1m大の規模を想定できる。

本址は台地頂部に位置しているために、全面が耕作による攪乱が至っており、掘り方を検出することはできず、遺構の大半は削平のために遺存状態は極めて悪い状態であった。

周溝は東・南側範囲に変則的な形で２条が検出された。周溝は短い溝が繋がるように構築され、断面は幅広のU字形を呈し、その掘り方は不規則であるが、割合深く最も深い南外側で11.7cmを測る。

主柱穴は配列や深さよりP_1、P_2の２ヶ所が該当するものと思われ、これらの柱穴の配列より４本柱構造を想定できる。柱穴の掘り方はしっかりし、深さは$P_1$38.2cm、$P_2$34.5cmを測る。

主柱穴に囲まれた位置に炉址と思われる焼土範囲が検出された。焼土範囲は31cm×41cm、厚さ6.5cmを測る。

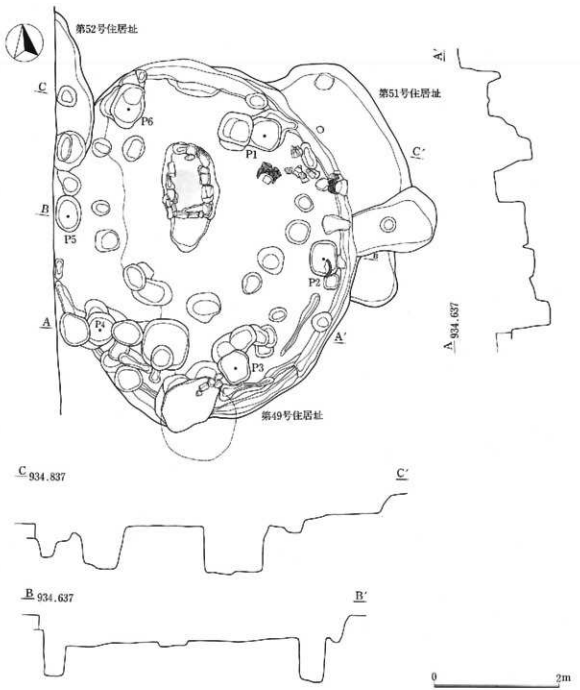


第54図　第48号住居址・第50号住居址・第53号住居址（1／60）

上面が削平を受けているために、石囲いや掘り方等を検出することはできなかった。

直接ローム面を床としているために検出は容易であったが、上面を削平を受けているためか硬化した面等は検出することはできなかった。炉址の西側は地形の関係からか若干低く傾斜している。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は中期後半の土器片を中心に総量は5.98kgが検出されている。その内訳は中期後半曽利Ⅱ式（縄文系が主体をなす）である。その他に黒曜石砕片・剥片等総数８（70ｇ）、その内訳は砕片３、ピエス・エスキーユ２、剥片Ⅰ類１、剥片Ⅲ類２が検出されている。本址は炉址周辺より得られた資料や住居址の重複より中期後半曽利Ⅱ式式期に帰属しよう。



第55図　第49号住居址（1／60）

第49号住居址（第55図・図版16）

検出状況　本址は調査区のK－6、T－6グリッドで確認されたもので、住居址は台地の最も平坦な面から緩やかに西側に傾斜する部分に占地する。東側に第51号住居址が西側に第52号住居址が重複する。東側は第51号住居址を切り、西側は第52号住居址により切られているが、ほぼ住居址全体の範囲を把握することができた。

遺構の構造　平面形プランは東－西方向につぶれる不整円形を基本とするが、南辺が北辺に比較してやや外反し突出する。この方向を入り口部とすると明瞭ではないが入り口部が張出すプランとなる。規模は長軸5.83m×短軸4.77m北－南方向に長軸を持つ縦長のやや歪んだ不整円形プランを呈する。南側辺中央張出し部と奥壁中央を通す線上に炉が構築され、この線が主軸と考えられ、主軸方向はN－1.3°－Eを示す。

住居址西側は地形が西側に傾斜する関係から壁の立上りは不明瞭であり、第52号住居址に切られていることもあり、確認することはできなかったが、割合明瞭に検出された東側壁を観察すると、掘り方はしっかりし直線状に立ち上がる傾向が窺える。最も高い部分である東側で40cmを測り、地形の関係から東壁部分が最も高くしっかりした壁体構造を有する。

周溝は調査区外に位置する西側を除き、壁際に全周する形で巡っている。南・南東側は周溝が壁際に２条構築され、内側の周溝は短い溝が繋がるように構築されている。周溝の断面はU字形を呈し、幅は不規則で、北側が最も幅広く、東壁下に構築されているものが最も丹念な構築法を採る。その掘り方は北側15.7cm、東側19.3cmを測り、東側から南側に至るにつれて浅くなる傾向が窺えた。

主柱穴は配列や深さよりP1、P2、P3、P4、P5、P6の６ヶ所が該当するものと思われる。P1、P3、P4、P6には重複が認められる。柱穴の土層観察よりP1は西側から東側に、P3は北側から南側、P4は東側から西側に移動し建替えが行われていることが把握でき、同心円状の拡張が行われたことが窺えた。柱穴の掘り方はしっかりして直に近く、深さはP1 42.5cm、P2 63.7cm、P3 40cm、P4 51.4cm、P5 51.3cm、P6 70.1cmである。主柱穴の内側に炉址を囲むよう主柱穴よりも径が小さく、深さが17cm～50cm前後の柱穴がほぼ環状に１周巡っていた。位置関係より内帯区画や主柱穴の補助穴とも考えられる。南側の入り口部には柱穴ではないがロームブロックにより埋め戻しのなされた袋状土坑が検出された。土坑上には貼り床がなされ径15cm大の安山岩礫が５個検出されている。土坑内部から中期後半曽利Ⅱ式土器片が検出されていることより、本址に伴うものと考えられ、入り口部の施設とすれば興味深いものがある。

第56図　第49号住居址炉址（1／40）

石囲いのほぼ完存する炉址が住居址中央よりやや北側奥壁に寄った位置に検出された。この炉址は第25号住居址のものと同様な構造を呈する。炉址の掘り方は1.21m×0.85mのやや胴張りの隅丸不整長方形を呈し、2段構造等の掘り方はなされてはいないが、全ての掘り方辺に炉石を据えるために掘られたと思われる溝状の掘り方が連結して検出された。石囲いは掘り方の縁辺に沿うように北西側を除き、他の部分は隙間がないように据えられている。炉石に用いられている石は長方形の形状を呈する板状の安山岩礫で、これを分割し用いている。南辺に2個・東辺に4個・西辺に3個以上・北辺に1個以上、炉石長手部を直に立てるように据えている。北東・南西隅の炉石の間には10cm前後の小礫が詰め込まれ炉石を固定している。炉址構築は丹念で、長方形石囲い炉の典型といえる。炉底は小さな凹凸を有し、42cm×61cmの範囲に厚さ7cmの焼土が検出された。炉址の南側には旧炉址に関わる掘り方が重複する。この掘り方はローム・ブロックや焼土粒等を含む黄褐色土で埋め戻されていた。住居址の拡張に伴って北側に炉址がスライドされたものであろう。

床接ローム面を床としているために検出は容易であり、小さな凹凸を有するものの全体的に堅緻で緻密であったが、西側は地形の関係より床面の硬化した範囲が流出し、軟弱な傾向を示した。

覆土は漆黒色土の単一層で、この土層内に吹上パターンの状態で土器が検出されている。遺物は北東壁際から炉址に向かって廃棄されたような状態で検出されている。土器は完形のものは含まず、約1/3遺存の個体を6個体以上が廃棄され、その内容は中期後半唐草文系が主体となり曽利II式が従属する。黒曜石剥片等の出土も多く、入り口部を中心とした範囲よりかなりの量がまとまって検出されている。

遺物の出土状況　本址よりの出土遺物は整土より土器片27.0635kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25kgの深鉢に換算して約22個体分）が検出されその量は多い。その他に黒曜石砕片・剥片184（424.5g）、内訳は砕片23、裂片33、ピエス・エスキーユ10、剥片I類18、剥片II類32、剥片III類64、石鏃3、スクレイパー1、打製石斧4、磨製石斧1、石匙1、横刃型石器1、礫器I類1、凹石1類2、剥片2、石棒1、軽石製品1が検出されている。本址の覆土内からは若干曽利III式の資料が得られているが、これらの資料は床面より浮いた上層内の資料で、炉址内より得られた唐草文系土器や住居址の状態よりみて中期後半曽利II式期に帰属しよう。

第50号住居址（第54図）

検出状況　本址は調査区のK－6・7グリッドで確認されたものである。住居址は台地の西側斜面部に占地し、北側に第258号土坑が重複し、土坑を切るように本址の主柱穴が構築されていることより、本址が土坑よりも新しいことが把握できた。全体が耕作により削平され平面プランを把握することはできなかったが、検出された柱穴、炉址より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　全体が耕作により削平されているために平面形プランを把握することはできなかったが、主柱穴配列より考えると円形プランを呈するものと考えられる。

住居址上面全体が、削平を受け壁や周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_2、P_3、P_4、P_5の5ヶ所が検出されているが、柱穴配列等から考えると第258号土坑と重複する位置に柱穴があったものと思われ、6本柱構造を想定できよう。柱穴の掘り方はしっかりしており径は50cm前後である。主柱穴の深さは$P_1$38.4cm、$P_2$50.7cm、$P_3$44.5cm、$P_4$40.4cm、$P_6$17.6cmある。地形に沿って削平されているためか西側辺の柱穴が浅い。

主柱穴に囲まれた範囲中央部よりやや北西に寄った位置に、53cm×59cmの範囲で焼土が検出された。この部分が炉址であると思われ、これは削平を受けたために炉底が辛うじて残った結果であろう。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　時期不明の土器片が0.02kg検出されているだけである。本址の時期を決定付ける資料は得られてはいないが、主柱穴配列等の構造よりみて中期前半に帰属しよう。

第51号住居址（第55図）

検出状況　本址は調査区のJ－6・7、K－6・7グリッドで確認されていたものである。住居址は台地の西側斜面部に占地し、西側を第49号住居址に切られ、南側に土坑と重複している。土坑上面に本址の貼り床らしい部分が検出できたために新旧関係を把握できた。約2/3が第49号住居址により切られているために、平面プランを把握することはできなかったが、検出された東壁より住居址であることが確認できた。

遺構の構造　第49号住居址により切られ、遺存している部分が全体の約1/3程度であるために、平面形プランを把握することはできなかったが、検出された東壁より不整円形プランを呈するものと考えられる。

遺存していた東壁を観察すると、高さは25cmを測りその掘り方は直線的で外傾する。

本址からは柱穴・周溝や炉址は検出されてはいない。

床面は凹合堅緻であるが、西側に傾斜する。

遺物の出土状況　第49号住居址の出土遺物に混入して若干の資料が得られている。本址は覆土中より若干検出された土器片より中期前半藤内1式期に帰属しよう。

第52号住居址（第55図）

検出状況　本址は調査区のK－5・6グリッドで確認されたものである。本址は第49号住居址の精査に伴って検出されたもので、その大半を調査区外とするために住居址の全容を把握することはできなかった。

遺構の構造　全体の約3/4が調査区外となり、平面プランや構造等の詳細を把握することができなかった。

検出された東壁は不明瞭で最も高い部分で12cmを測る。壁の掘り方は簡易で凹凸を有し、床際はやや丸みを帯びる。周溝は遺存しておらず不明である。

配列や深さより主柱穴と思われるものが南側隅に検出されている。深さは41.5cmを測り割合深い。

床面全体は軟弱で小さな凹凸を有し、西側に傾斜する。

遺物の出土状況　本址より得られている土器片は少量で、その量は0.1kgである。時期を決定付けるような資料は得られてはいないが、重複関係より第49号住居址よりも新しいことが判明し、中期後半曽利II式期以降に帰属しようか。

第53号住居址（第54図）

検出状況　本址の検出されたA－7グリッド周辺は畑地造成による削平が著しい部分で、また、南側を近代の水道管により攪乱されているために、その全容を把握することはできなかったが、炉址と思われる焼土範囲や主柱穴によりその概要を窺うことができた。

遺構の構造　本址の約半分は調査区外に位置してる。検出できた主柱穴配列より平面プランを想定すると、不整形の隅丸方形プランを想定できそうである。

全面が削平を受けているために壁や周溝は検出されてはいない。

配列や深さより主柱穴と思われるP$_1$、P$_2$、P$_3$の3ヶ所が検出されているが、柱穴配列等から考えると南側に柱穴があったものと思われ、4本柱構造を想定できよう。柱穴の掘り方はしっかりしており径は50cm前後である。主柱穴の深さはP$_1$52.1cm、P$_2$18.5cm、P$_3$38.6cmを測る。地形に沿って西側辺の柱穴が浅い。

炉址と思われる焼土範囲が、主柱穴に囲まれた範囲の中央よりやや北東寄りに検出されている。

遺物の出土状況　本址の時期を決定できるような資料は得られてはいないが、主柱穴構造等より中期後半曽利式期帰属できようか。

2．円形柱穴列

竪穴状とならず、柱穴が6角形等に配列される遺構が4基検出されている。柱穴配列の構造は削平を受けた竪穴住居址と同様な様相を呈するが、柱穴に囲まれた範囲内に炉址と思われる焼土範囲が検出できなかった点に相違が見られる。本遺構群が分布している範囲と、削平を受けた竪穴住居址の分布範囲は類似する傾向にあり、これらの点や柱穴配列に類似性が認められる点などを考慮すると、円形柱穴列とした群は竪穴住居址の掘り方の削平を受けたものの可能性が高い。

第1号円形柱穴列（第57図）

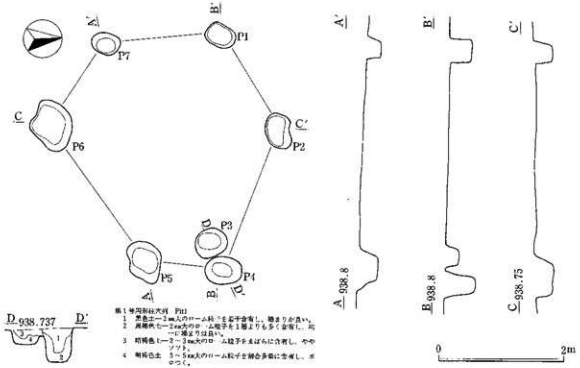
検出状況　本址は調査区のB－15・16、C－16グリッドで確認されたものである。本址は台地の南側斜面部に占地し、西側に第2号住居址、東側に第5号住居址が隣接する。

遺構の構造　本址はP_1、P_2、P_3・P_4、P_5、P_6、P_7の柱穴より構成され、これらの柱穴を結んだ平面プランは6角形を呈する。規模は東西方向4.2m、南北方向4.1mのほぼ円に近い形を呈している。P_2とP_6の配列がセンターより西側に寄る点より、柱穴配列は変形した6角形を呈する。

配列や深さより主柱穴と思われるP_1、P_2、P_4(P_3)、P_5、P_6、P_7の6本が検出されている。柱穴の掘り方はしっかりし径は35cm～40cm前後である。P_4、P_3以外には重複は認められなかった。P_4、P_3の場合土層状態よりP_3がP_4にスライドして建替えられたことが確認された。主柱穴の深さは$P_1$31.9cm、$P_2$29.4cm、$P_4$49.1cm($P_3$21.1cm)、$P_5$32.5cm、$P_6$27.8cm、$P_7$21.2cmであり、平均すると30.4cmで深さにはばらつきがある。柱が立てられていたと思われる底跡がP_4に認められた。掘り方ほぼ中央部に黒色土が垂直層となる部分が認められた。この土層を柱の底跡と仮定すると、柱の径は15cm前後のものとなる。P_4以外ではこのような土層堆積を観察することはできなかった。

主柱穴に囲まれた範囲中央部には加熱を受け硬化した面や、焼土、掘り方等は検出されてはいない。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。



第57図　第1号円形柱穴列（1／60）

遺物の出土状況　本址よりの検出遺物はない。

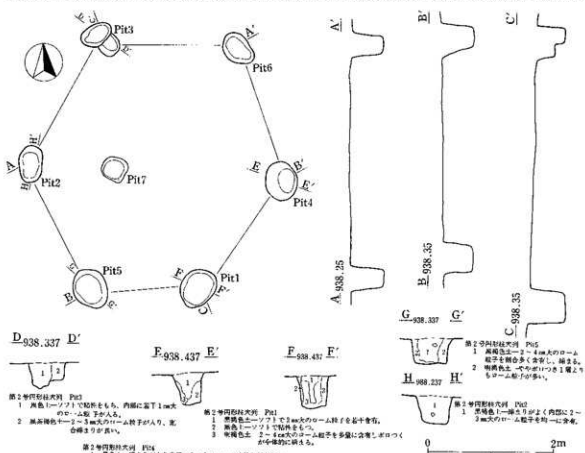
第２号円形柱穴列（第58図）

検出状況　本址は調査区のD－13、E－12・13グリッドで確認されたものである。本址は台地のほぼ中央部に占地し、北西側に第４号住居址が隣接する。

遺構の構造　本址はPit１、Pit５、Pit２、Pit３、Pit６、Pit４の柱穴より構成され、これらの柱穴を結んだ平面プランは６角形を呈しているが、検出された円形柱穴列の内では最も整った形を呈する。規模は東西方向4.4m、南北方向4.5mのほぼ円に近い形を呈している。Pit１、Pit５間が他の部分に比べて近接することより、柱穴配列は変形した６角形を呈する。

配列や深さより主柱穴と思われるPit１、Pit５、Pit２、Pit３、Pit６、Pit４の６本が検出されている。柱穴の掘り方はしっかりしており径は50　前後である。Pit３には建替えによると思われる重複が見られ、土層状態から内側から外側へスライドして移動が行われたことが窺えた。主柱穴の深さはPit１　58.9cm、Pit５　52.8cm、Pit２　49.1cm、Pit３　57.7cm(42cm)、Pit６　49.5cm、Pit４　52cmであり、平均すると53.3cmを測り、今回検出された円形柱穴列内で最も深い。柱が立てられていたと思われる痕跡がPit１、Pit４に認められた。掘り方ほぼ中央部に黒褐色土・黒色土が垂直層となる部分が認められた。この土層を柱の痕跡と仮定すると、柱の径は10cm～15cm前後のものとなる。Pit１、Pit４共に柱を埋め戻すようにローム粒子を割合多く含む明褐色土や茶褐色土が用いられている。

主柱穴に囲まれた範囲中央部には加熱を受け硬化した面や、焼土は検出されてはいないが、Pit２の東側

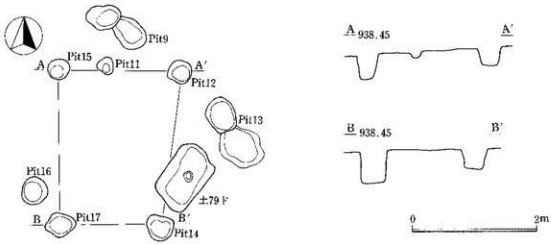


第58図　第２号円形柱穴列（1／60）

にPit 7が検出され、この柱穴の構築法等や位置関係より本址に伴う可能性が高い。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　本址を構成するPit 1より時期は不明であるが、縄文時代土器片が5点検出されている。



第59図　第3号円形柱穴列（1／60）

第3号円形柱穴列（第59図）

検出状況　本址は調査区のC－12グリッド周辺に、柱穴状の坑が密集することより何らかの遺構の存在が予測されたもので、構造等の状況より円形柱穴列の範疇に帰属させた。本址は台地の南斜面屑部に占地し、両側に第7号住居址が、北東側に第3号住居址が隣接する。

遺構の構造　本址は他の円形柱穴列のように整然とした柱穴配列を有さず、雑然とした状態で柱穴状の坑が8ヶ所（Pit12、Pit13、Pit14、Pit17、Pit16、Pit15、Pit10、Pit 9）が検出されたが、これらは一定の形で有機的に結び付けることができず、敢えて結び付けるならばPit12、Pit14、Pit17、Pit15が他のものよりも整然と並び、深さもあることより取敢えずこれらの柱穴を本址の構成柱穴と取り扱った。これらの柱穴を結んだ平面プランは4角形を呈している。規模は東西方向2.3m、南北方向2.8mの長方形を呈している。Pit17、Pit14間が他の部分に比べて近接することより、柱穴配列は変形した4角形を呈する。

柱穴の掘り方はしっかりしているが、径は35cm前後であり、割合小型の柱穴により構成される。主柱穴の深さはPit12 28.9cm、Pit14 35cm、Pit17 44.1cm、Pit15 35.2cmで、平均すると35.8cmを測る。

主柱穴に囲まれた範囲中央部には加熱を受け硬化した面や、焼土は検出されてはいない。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

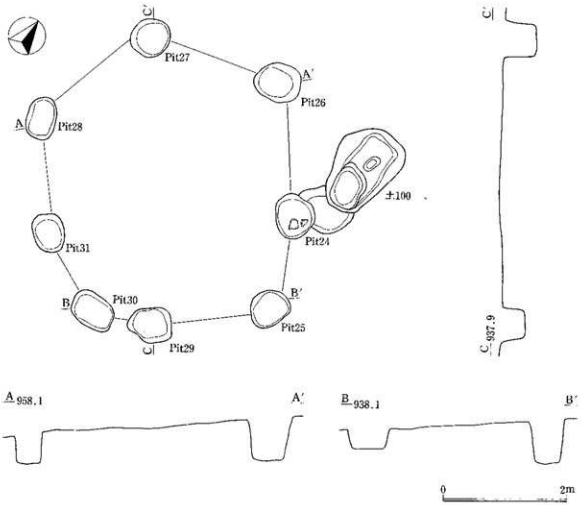
遺物の出土状況　本址よりの検出遺物はない。

第4号円形柱穴列（第60図）

検出状況　本址は調査区のD－11・12、E－11・12グリッドで確認されたものである。本址は台地のほぼ中央部に占地し、南西側に第8号住居址、北東側に第4号住居址、第2号円形柱穴列が隣接する。

遺構の構造　本址はPit26、Pit24、Pit25、Pit29、Pit30、Pit31、Pit28、Pit27の柱穴より構成され、これらの柱穴を結んだ平面プランは8角形を呈している。規模は東西方向5.2m、南北方向4.9mのほぼ円に近い形を呈している。Pit29、Pit30、Pit31間が他の部分に比べて近接することより、柱穴配列は変形した8角形を呈する。

配列や深さより主柱穴と思われるPit26、Pit24、Pit25、Pit29、Pit30、Pit31、Pit28、Pit27の8本が検



第60図　第4号円形柱穴列（1／60）

出されている。柱穴の掘り方はしっかりし径は60cm前後である。主柱穴の深さはPit26 60.4cm、Pit24 36.6cm、Pit25 69.5cm、Pit29 28.7cm、Pit30 31.2cm、Pit31 38.3cm、Pit28 47cm、Pit27 49.3cmであり、平均すると45.1cmを測る。

主柱穴に囲まれた範囲中央部には加熱を受け硬化した面や、焼土は検出されてはいない。

床面全体は耕作による削平を受け、硬化した面などは検出されなかった。

遺物の出土状況　本址を構成する柱穴より割合多くの土器片が得られている。Pit24より時期不明3、Pit25より中期前半井戸尻Ⅲ式2、Pit26より井戸尻Ⅲ式1、曽利Ⅰ式1、不明3が、Pit27より井戸尻Ⅲ式13、不明3が検出されている。これらの資料より本址は中期前半井戸尻Ⅲ式期から中期後半曽利Ⅰ式期に帰属するものと考えられる。

3．方形柱穴列

今回の調査により約260ヶ所にも及ぶ土坑が検出されている。これらの土坑内で有機的に結び付き、一定の本数により方形に囲む、巨大な柱穴の列より構成される遺構が4基検出されている。方形柱穴列を構成する柱穴は、竪穴住居址等の柱穴とはその規模に相違が認められる。一見土坑との識別が難しいために、遺構検出時においては単独の土坑と取り扱ったものが、最終的に方形柱穴列を構成する坑となっているものが大半を占める。

第1号方形柱穴列（第61図・図版20）

検出状況　本址は調査区F－9グリッドで確認されたものである。東から西に向かい緩やかに傾斜する尾根状台地が擬状に平坦に広がる部分の接点に占地し、西側に第10号・第11号住居址と南西側を第113号土坑と重複する。第11号住居址の東壁を精査の際に、列をなす土坑の存在が確認され、方形柱穴列の可能性が高かったが、第10号住居址と重複する部分に柱穴が欠落していたことより、方形柱穴列として認定するのに躊躇したが、第10号住居址床面に貼られて土坑が検出されたことより、本址の規模・構造が明確となった。

遺構の構造　本址は南北方向に長軸を持つ長方形の平面プランを呈している。長辺である東辺は6.81m、西辺6.82mを測り、ほとんど誤差がない。短辺の北辺は2.42m、南辺は2.45mと短辺もほとんど誤差がなく、平面形は歪みのない整った形を呈している。短辺と長辺の比率は1：2.8で、細長い長方形プランとなっている。

本址は第118号・第151号・第109号・第112号・第152号・第129号土坑の6ヶ所より構成される。土坑の深さは第118号土坑79cm、第151号土坑95.5cm、第109号七坑56.5cm、第112号土坑57.2cm、第152号土坑42.8cm、第129号土坑73cmを測り、平均すると67.3cmと割合深いが、平均値と各土坑の深さを比較して見ると、北側に位置するものが概して平均より深く、南側のものが浅い傾向が窺える。土坑の径は70cm～80cm前後で、掘り方は直に近い立上りを持ち、坑底は水平に近い。土坑には建替え等による重複は検出されてはいない。土坑の配列は第151号土坑と対辺の第152号土坑の並びに若干の相違があるだけで、割合整然とした配列となっている。土坑の土層状況はローム・ブロック等を含む黄褐色土等により埋め戻されているものが大半を占め、第151号土坑のように柱痕と思われる褐色土の垂直層が認められるものもある。

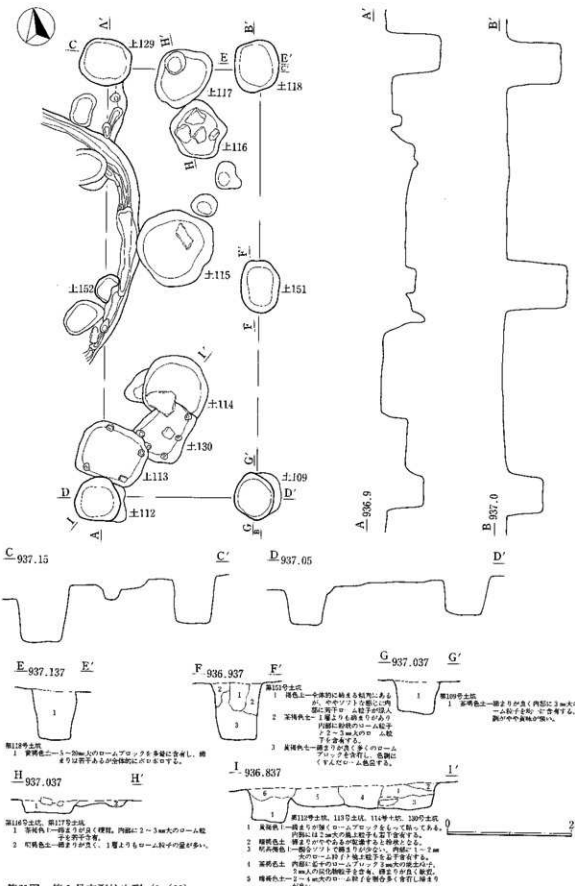
柱穴列に囲まれた範囲からは焼土、硬化した面等の検出はなく、遺物の出土状態等に特殊な状況を見出すことはできなかった。

遺物の出土状況　本址を構成する第118号土坑の覆土内より中期後半曽利Ⅰ式土器片2が出土しているが、的確に本址の時期を示してはいない。重複する第10号・第11号住居址等との重複関係より考えると、中期後半曽利Ⅲ式期以前に帰属するものと考えられる。

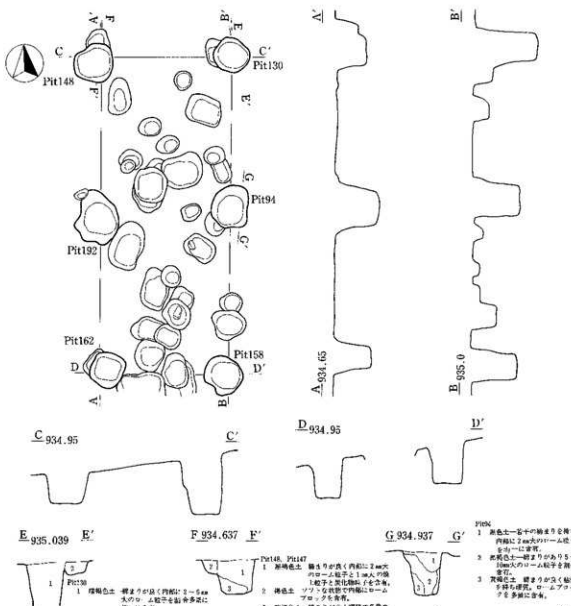
第2号方形柱穴列（第62図・図版20）

検出状況　本址は調査区G－6グリッドで確認されたものである。東から西に向かい緩やかに傾斜する割合平坦な台地中央部に占地し、周辺には数多くの土坑やピット状の坑が密集して検出されている。遺構検出時においては配列を明確に把握できなかったが、精査に伴い密集する坑の中に一定の規模を持ち、配列を有する坑が見られ、本址の存在が明確となった。

遺構の構造　本址は南北方向に長軸を持つ長方形の平面プランを呈している。長辺である東辺は5.03m、西辺4.9mを測り、西辺が13cm程短いが、大きな誤差はない。短辺の北辺は2.15m、南辺は1.96mで短辺もほとんど誤差がなく、平面形は歪みのない整った形を呈している。短辺と長辺の比率は1：2.4で、細長い長方形プランとなり、規模や平面プランは第1号方形柱穴列と類似する。



第61図　第1号方形柱穴列（1／60）



第62図　第2号方形柱穴列（1／60）

本址はPit130・Pit94・Pit158・Pit162・Pit192・Pit148の6ヶ所より構成される。本址を構成する坑をピットとして取り扱ったのは、周辺に位置するピットと平面規模に相違が見られなかったことに起因しいる。ピットの深さはPit130 93.3cm・Pit94 73.9cm・Pit158 71.6cm・Pit162 58.3cm・Pit192 60.9cm・Pit148 39.6cmを測り、平均すると66.3cmと割合深いが、平均値と各土坑の深さを比較して見ると、東辺に位置するものが概して平均より深く、西辺のものが浅い傾向が窺え各ピットの深さにばらつきがある。土坑の径は60cm～70cm前後で、掘り方は直に近い立上りを持ち、坑底は水平に近い。土坑には建替え等による重複は検出されてはいない。ピットの配列はPit94と対辺のPit192の並びに相違があるだけで、割合整然とした配列となり、特に四隅に位置するピットの配列は整然としている。ピットの土層状況はローム・ブロック等を含む黄褐色土等により埋め戻されているものもあるが、Pit130のように単一層のものもある。Pit94のように柱痕と思われる黒褐色土の垂直層が認められ、この層を囲むように埋め戻されたようなローム・ブロックを大量

に含有する黄褐色土が埋め込まれている。

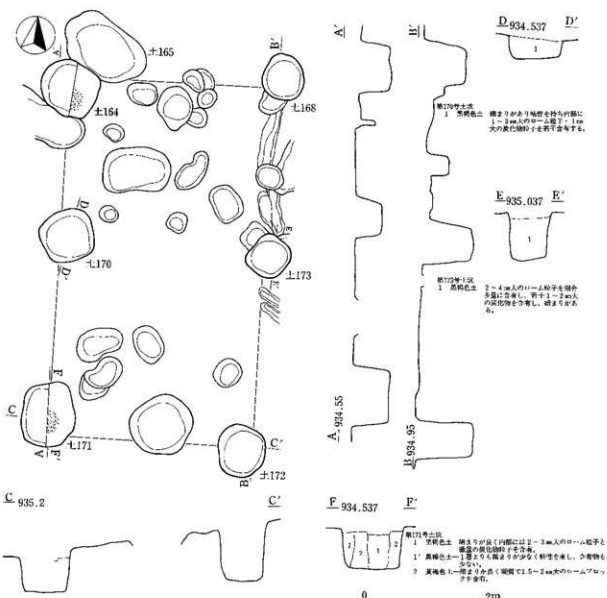
柱穴列に囲まれた範囲からは焼土、硬化した面等の検出はなく、遺物の出土状態等に特殊な状況を見出すことはできなかった。

遺物の出土状況　本址を構成するピット内より遺物の出土はなく、本址の時期は不詳である。

第３号方形柱穴列（第63図・図版20）

検出状況　本址は調査区Ｅ－６・Ｆ－６グリッドで確認されたものである。東から西に向かい緩やかに傾斜する割合平坦な台地中央部に占地し、周辺には数多くの七坑やピット状の坑が密集し、東側に第17号住居と重複する。第17号住居址西側を精査の際に、列をなす土坑の存在が確認され方形柱穴列として把握された。

遺構の構造　本址は南北方向に長軸を持つ長方形の平面プランを呈している。長辺である東辺は5.96m、西辺5.04mを測り、両辺が92cm程短い。短辺の北辺は3.49m、南辺は3.14mと短辺も35cmの誤差がある。そのために平面形には歪みが生じ、土坑の配列は長方形を呈するが、詳細に計測すると梯形に近い平面形を呈



第63図　第３号方形柱穴列（1／60）

する。短辺と長辺の比率は１：1.7で、方形に近い平面プランとなっている。柱穴に囲まれている範囲の面積は約18.2㎡を測る。

本址は第168号・第173号・第172号・第171号・第170号・第164号土坑の６ヶ所より構成される。土坑の深さは第168号土坑42.1cm、第173号土坑63.8cm、第172号土坑108.5cm、第171号土坑58.6cm、第170号土坑36cm、第164号土坑114.1cmを測り、平均すると70.5cmと割合深いが、平均値と各土坑の深さを比較すると、最大値と最小値の幅が大きく、各土坑によるばらつきが著しい。なお、北東隅と南西隅に位置するものが概して平均より深い傾向が窺える。土坑の径は70cm～100cm前後で、掘り方は直に近い立上りを持ち、坑底は水平に近い。土坑には建替え等による重複は検出されてはいない。土坑の土層状況はローム・ブロック等を含む黄褐色土等により埋め戻されているものが大半を占め、第171号・第164号土坑のように柱痕と思われる黒褐色土の垂直層が認められるものもある。

柱穴列に囲まれた範囲からは焼土、硬化した面等の検出はなく、遺物の出土状態等に特殊な状況を見出すことはできなかった。

遺物の出土状況　本址を構成する第164号・第172号・第173号土坑の覆土内より中期土器片が出土しているが、的確に本址の時期を示してはいない。第17号住居址を本址が切って構築されている点を考慮すると、本址は中期後半曽利Ⅳ式期以降に帰属するものと考えられる。

第４号方形柱穴列（第64図・図版20）

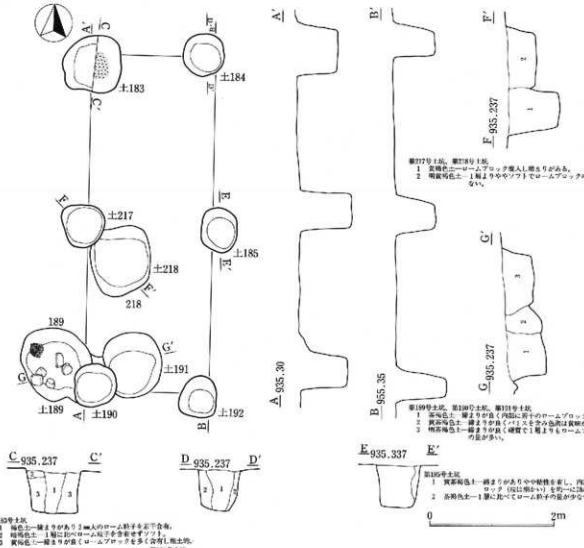
検出状況　本址は調査区Ｃ－７、Ｄ－７、Ｅ－７グリッドで確認されたものである。東から西に向かい緩やかに傾斜する沖積平坦な台地中央部から南側に架けて古地し、周辺には数多くの土坑やピット状の坑が密集し、南西側に第18号住居が隣接する。本址周辺は畑地造成の際に削平を受けており、ハードローム層が露出している状況であった。そのような状況にあったために遺構検出時から土坑の配列が認められ、本址の存在は明確であったが、南西隅の土坑が他の土坑と重複するためにこの部分だけが不明であった。

遺構の構造　本址は南北方向に長軸を持つ長方形の平面プランを呈している。長辺である東辺は5.48m、西辺2.61mを測り、西辺が37cm程短い。短辺の北辺は1.95m、南辺は1.96mと短辺には大きな誤差がない。長辺に誤差があるために平面形には歪みが生じ、土坑の配列は長方形を呈するが、詳細に計測すると梯形に近い平面形を呈する。短辺と長辺の比率は１：2.7で、細長い長方形プランとなっている。柱穴に囲まれている範囲の面積は約10.35㎡を測る。

本址は第184号・第185号・第192号・第190号・第217号・第183号土坑の６ヶ所より構成される。土坑の深さは第184号土坑68.9cm、第185号土坑70.8cm、第192号土坑81.9cm、第190号土坑72.6cm、第217号土坑77.7cm、第183号土坑66.5cmを測り、平均すると73.1cmと割合深く平均値と各土坑の深さを比較すると、大きなばらつきが見られない。なお、詳細にみると北辺に位置するものが概して平均より浅い傾向が窺える。土坑の径は70cm～90cm前後で、掘り方は直に近い立上りを持ち、坑底は水平に近い。土坑には建替え等による重複は検出されてはいない。土坑の土層状況は第171号・第164号土坑に柱痕と思われる褐色土の垂直層が認められるのに対して、第190号・第217号土坑では黄褐色土や黄茶褐色土により埋め戻されている状態が観察できた。

柱穴列に囲まれた範囲からは焼土、硬化した面等の検出はなく、遺物の出土状態等に特殊な状況を見出すことはできなかった。

遺物の出土状況　本址を構成する土坑内から直接帰属時期を示すような遺物の検出はなかったが、第190号土坑が、中期後半曽利Ⅱ式期に帰属する第189号土坑に切られている点より、曽利Ⅱ式期以前に帰属する。



第64図　第4号方形柱穴列（1／60）

4．土坑・ピット状遺構

土坑・ピット状遺構は地表面に掘り込まれた「穴」を指し、所謂土壙やピット、小竪穴、木の根による撹乱孔等を全て総称しており人為・自然を問わず遺構確認の段階において確認面下に掘り込みが確認できた「穴」全てについて番号を付し土坑・ピットとして取扱った。本来ならば「穴」の意味合いに応じてその名称も落し穴や竈壙、貯蔵穴等に区分して所見・報告しなければならないと考えられるが、今回得られたデーターからはこれらを明瞭に区分するだけの情報を得ることはできなかった。土坑とピットの区分については規模に依るところが大きいが、ピットと区分したものの中には土坑と判別しずらいものも含まれている。そのために土坑・ピットの規定が曖昧となっている部分もある。

土坑（第65・66・67・68図、図版21・22・23）

今回の調査において多くの土坑が検出され、番号を付したもので269を数える。これらの内の約29%にしか遺物が検出されておらず、大半のものについては時期を明確にすることができなかった。形状的に分類すると明らかに相違のあるグループが存在し、土坑と大きな一群として括られるものではなく、多種多様な坑のグループとして取り扱いたい。

土坑の分類　土坑を分類する際に大きな基準となるものは、坑の規模や構造（掘り方等）によるところが大きい。なお、規模特に上面形や深さの細かな数値については検出面の状況により異なりがあり、そのため概略的なまとめ方が適当であると思われる。また規模や構造の要件に土層の堆積状態や遺物の出土状況が加わる。特に坑の掘り方は土坑の役割に大きな影響を持っていたものと考えられ、細かな観察を必要とする要件である。これらの事柄を踏まえて代表的な群の土坑を図示し記述する。

第Ⅰ群　平面プランが円形を基本とする土坑群で、断面形等により5類に分類が可能である。本群の土層堆積状態を大きく分類すると、① ロームブロック等を含む黄褐色土などにより埋め戻されたような土層状況を示すもの、② 土層が分層できない単一層のもの、③ 壁際に崩落したような状況を示す所謂三角堆土を持つもの、④ 上半部がレンズ状堆積で、下半部は水平堆積を示し、ロームブロック等のローム系埋土が堆積するものがある。

第Ⅰ群1類（118・129・151・152他）　断面形が所謂巾着型・フラスコ型を呈する土坑で、構造的にはしっかりした掘り方、深さを有する。本群の土層状況は基本的には数層に分層される。特に壁際に壁が崩落して形成されたと思われる土層が堆積しており、自然堆積を思わせる状況のもの②③が主体を占める。土坑内に土器や礫を埋納したような状況の遺物の出土状態を示すものは少なく、坑底から上がった位置に堆積する土層上に破片がバラバラの状態で検出されるものがある。

第Ⅰ群2類（81・82・86・89他）　断面形が樽状を呈する土坑で、1類と同様にしっかりした掘り方、深さを有する。土層の堆積状況や遺物の出土状況は1類と同様な傾向にあるが、第114号・第115号・第189号・第191号土坑のように人為的に埋め戻した様相を示すものもある。

第Ⅰ群3類（9・18・37・75他）　1類のような深さを有する土坑ではなく、断面形が隅状を呈する。平面プランもやや不正形なものが含まれる。断面は坑底と壁際が明瞭とならず丸みを持つもの、ダラダラと立ち上がるものなどが見られる。坑底も凹凸を示し、その状況も軟弱な傾向を示すものが含まれる。掘り方もローム漸移層までしか掘り込まれておらず、そのため深さが浅いものがかなり含まれている。土層堆積は①②③が認められるが、量的には②③が主体を占める。平面プラン、坑の構築方法を見た場合1類などと比較すると貧弱な傾向を示す。

第Ⅰ群4類（3・5・8B・11他）　今回検出された土坑の内で最も特徴的な群である。平面プランは円形

若しくは不整円形を基調とする。断面形は上端が広がり中段より円筒形となる特徴的なもので、掘り方は深くしっかりし、最も深い第65号土坑で196.3cmを測る。坑底の形状が円形を呈するもの－A種、隅丸方形を呈するもの－B種が認められる。深さや構築法等より1類・2類・3類とは区別すべきものであろう。土層の堆積状態は④を示すものが主体を占める。

第Ⅰ群5類（32・95・245他）　平面プランや断面形・深さは4類と同様な傾向にあるが、中段より坑底に特徴を持つ。中段で大きく楕円形等に窄み、坑底は小判型となり、基本的には3類B種と類似するが、坑底に小孔が穿たれる点に特徴を持つ。坑底の小孔は1ヶ所のものが中心となる。土層の堆積状態は④を示すものが主体を占める。

第Ⅱ群　第Ⅰ群の平面プランが円を基調としていたのに対して、本群は楕円形若しくは隅丸長方形を基調にしている。本群には断面形に様々なバリエーションが認められる。

第Ⅱ群1類（2・4・6・7他）　上面の平面プランが小判型を呈するが、中段・坑底は半面プランから変化し隅丸長方形となる。断面は上面が広く漏斗状に広がり中段から垂直となる。深さは概して深いものが主体となる。坑底は平坦で、中央部に小孔が1ヶ所穿たれるものと－A種、1ヶ所以上の小孔を有するもの－B種とがある。土層の堆積は④が主体を占め、埋土中より遺物の検出がなされないものが主体を占める。

第Ⅱ群1'類（55他）　基本的な形状は1類と同様であるが、中段の平面プランが縦れた糸巻状の平面プランとなる特徴を持つ。1類に帰属するものの中にも胴部が若干縦れる傾向のものも見受けられる。土層堆積の状況も1類と類似する。

第Ⅱ群2類（11・26・34・41他）　上面の平面プランが長楕円形となり、1類と同様に中段で平面形が変化し、中段・坑底が細長い隅丸長方形となる。断面は上面が広く漏斗状に開くものと、上面の開口部を有しないものが認められるが、開口部を有しないものは概して浅い傾向が窺えることより、上面が削平されている可能性もあり得る。本類に帰属する第59号・第188号の平面プラン・断面形を詳細に観察し比較すると、中段から坑底までの深さ、開口部の幅等に相違が見られ、別類として分別しなければならないとも考えられるが、一応細長い形状を呈する類として取り扱っておく。坑底は半坦で複数の小孔が穿たれるものが主体を占める。土層の堆積は②③④が認められるが、④の状況を示すものは少数で、②③が中心となる。

第Ⅱ群3類（53A・53B・54A・54B他）　平面プランは1類と類似しているが、深さの規模に大きな相違がある。本類は深く、最も深い第54A号土坑で185.6cmを測る。開口部は大きく開き、中段で狭まり坑底に向かい垂下し坑底は平坦となる。断面形がラッパ状を呈するもので構築法はしっかりしている。中段から坑底に架けての平面プランは隅丸長方形を呈している。坑底には小孔を有してはいない。土層の堆積は④を示し、上面の平面プランの相違を除けば、第Ⅰ群4類B種と同じ群とすることができよう。

第Ⅱ群4類（36・38・77・79他）　Ⅱ群の中で最も簡易な構造を有する類である。平面プランが隅丸方形・隅丸長方形を呈し、断面形は深くなくその形状は箱形を呈する。ちょうど1類の上面が全て削平され、坑底周辺だけが遺存したような状態であるが、1類等の坑底規模に比べて本類は小規模な傾向にある。坑底は平坦で中央部に小孔が穿たれているが、1ヶ所のものが主体を占める。土層の堆積は②③が始どである。

第Ⅲ群　本群は楕円形若しくは隅丸長方形を基調にし、第Ⅱ群の範疇に帰属させることもできるが、断面形や構築法に相違が見られることより別の群として取り扱う。

第Ⅲ群1類（1・14・23・253他）　平面プランが不整楕円形を呈し、深さを有する土坑ではなく、断面形が皿状や盤状を呈する。断面は坑底と壁際が明瞭とならず丸みを持つもの、ダラダラと立ち上がるものなどが見られる。坑底も凹凸を示し、その状況も軟弱な傾向を示すものが含まれる。掘り方もローム漸移層まで

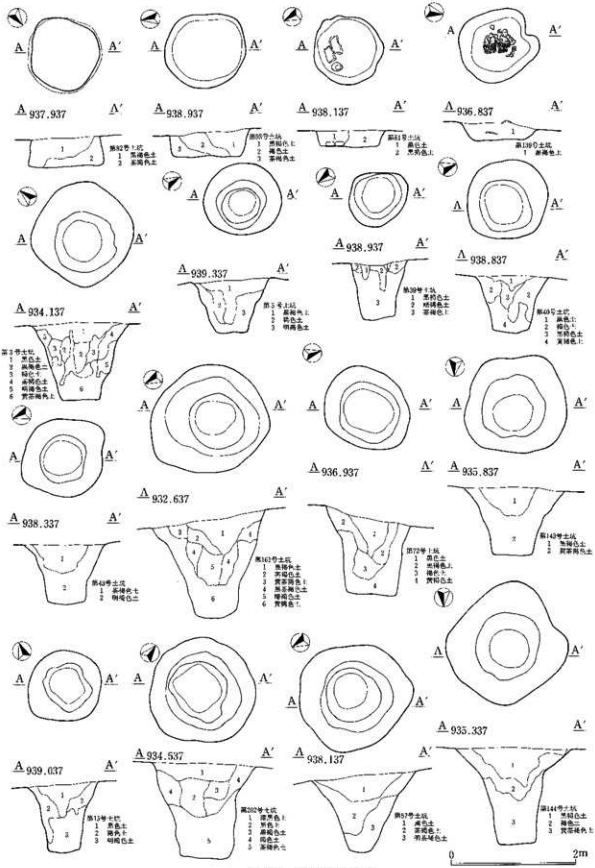
しか掘り込まれておらず、そのため深さが浅いものがかなり含まれている。土層堆積は①②③が認められるが、量的には②③が主体を占める。平面プラン、坑の構築方法はⅠ・Ⅱ群などと比較すると貧弱な傾向を示す。

土坑の遺物の出土状況と土坑の時期について　土坑の埋土より遺物を出土する例は本遺跡においては、全体の約29%に過ぎず、殆どの土坑が遺物を出土してはいない。遺物が検出されたものを観察すると、土器が人為的に埋置されたりする例は第139号土坑だけで、第139号土坑の場合中期前半発沢式深鉢の胴部2/3を被せるように土坑内に埋置している。この土坑以外では何れも一括性のないものであり、土層の堆積状況から自然堆積した際に土器等が流入した状況を示していた。また、土坑の類型により遺物を出土する頻度に異なりがみられた。最も遺物の検出が認められた類型は第Ⅰ群2類・3類で、他の類型では殆ど遺物は検出されず、稀に第253号土坑（第Ⅲ群1類）のようにヒスイ製垂飾を出土するようなものもあるが、第Ⅰ群4類・5類、第Ⅱ群1類から4類までのように遺物を殆ど含まないものが大半である。

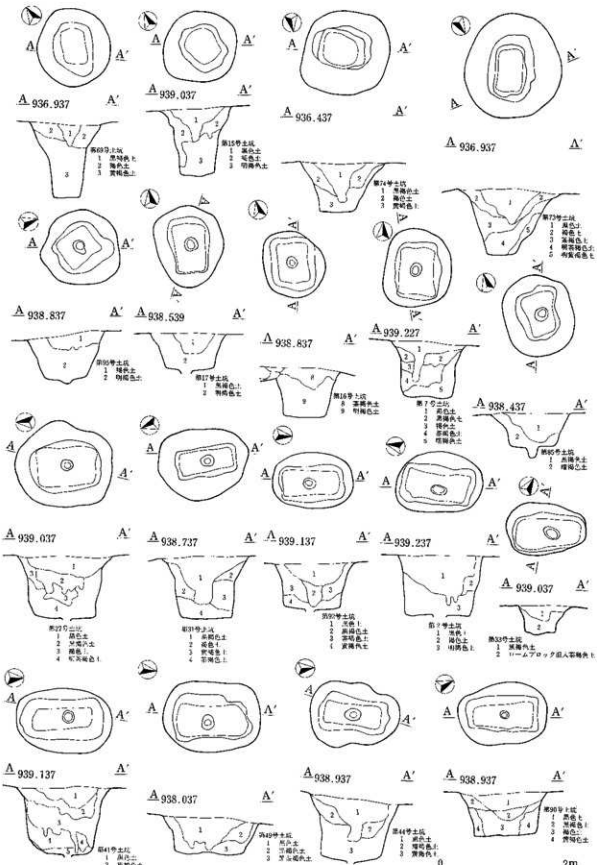
土坑内よりの出土遺物が少量なこともあり、その時期を決定する資料に欠けるものが大半である。しかし、土坑の類型によっては出土遺物等により、時期が判明しているものもある。第Ⅰ群1類から3類、第Ⅲ群1類などは出土遺物より中期前半から後半に架けての時期を特定できる。第Ⅱ群については遺物の出土がないために判然としない部分があるが、住居址等との重複関係より、第Ⅱ群1類から3類は中期前半以前、第Ⅱ群4類の一部が第2号住居址を切って構築される点より、中期後半曽利Ⅰ式期よりも新しい時期に帰属すると考えられる。

土坑の分布状態　今回の調査により得られた土坑は269基を数えるが、その量は遺跡規模を考慮するとその量は決して多い量とは言い難い。これらの土坑が調査区約6,000㎡の空間より検出されているが、土坑は調査区全体に満遍なく散在するのではなく、類型によりある程度のグループを有して分布していることが把握できた。調査区を地形から区分すると、山際から延びる制台狭い背状の尾根部（調査区東側範囲－Aブロック）と、台地の平坦部（調査区西側範囲－Bブロック）、台地縁辺部（調査区南西側台地斜面部範囲－Cブロック）、山際斜面部（調査区北側範囲－Dブロック）の4ブロックにゾーニングができる。このゾーンごとにより土坑の類型に偏在性が認められた。Aブロックでは第Ⅰ群4類・5類、第Ⅱ類1類から4類が主体となり、他の類型は従属する立場を有する。BブロックではAブロックとは類型構成に相違がみられ、第Ⅰ群1類から3類、Ⅲ群1類が中心となり他の群が少量従属する。CブロックでもBブロックと類似する傾向が窺えるが、第Ⅰ群1類から3類、Ⅲ群1類に重複して第Ⅰ群4類・5類、第Ⅱ類1類から4類が若干検出されている。Dブロックの傾向はAブロックと同様な傾向を示すことが把握できた。住居址群との関係を考えると、第Ⅰ群1類から3類、第Ⅲ群1類は住居址群に囲まれた広場状の範囲に集中する傾向が窺える。これらの所見から土坑と一概に一括した坑群は、分布域の観点からも一括されるものではなく多種多様のものを含んでいることが判明した。また、土坑の分布はある一定の配列を持ち分布域を構成しているものがあり、その傾向は第Ⅰ群4類、第Ⅱ類1類から4類に顕著に認められる。

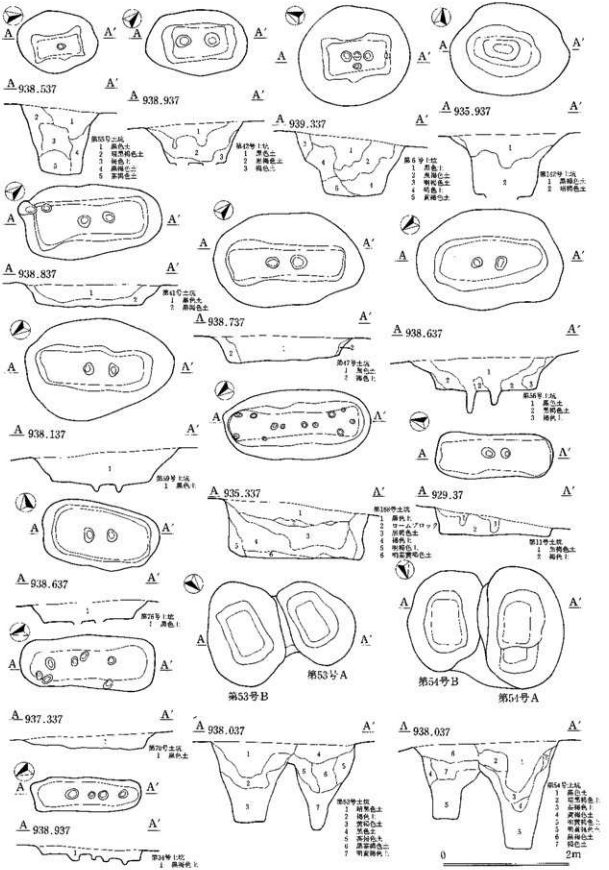
土坑の性格　以上のように分類できた土坑であるが、前述のように土坑は基本的には「穴」であり、その開け方によりその性格が様々に変容してくるものと思われる。今回の調査により得られた土坑について断面形や平面プランより3群10類に分類したが、構造や分布域を大雑把に見ると大きく土坑は2分割でき、第Ⅰ群1類から3類、第Ⅲ群1類のグループ（aグループ）と第Ⅰ群4類・5類、第Ⅱ群のグループ（bグループ）に分けることができ得る。aグループは遺物の出土状況や構造等から土壙・土壙・小竪穴と総称される群と考えられ、bグループは落し穴状土坑と考えられる。


A 937.937 A'
A 938.937 A'
A 938.137 A'
A 936.837 A'
A 934.137 A'
A 939.337 A'
A 938.937 A'
A 938.837 A'
A 936.937 A'
A 935.837 A'
A 938.337 A'
A 932.637 A'
A 939.037 A'
A 934.537 A'
A 938.137 A'
A 935.337 A'
0 2m

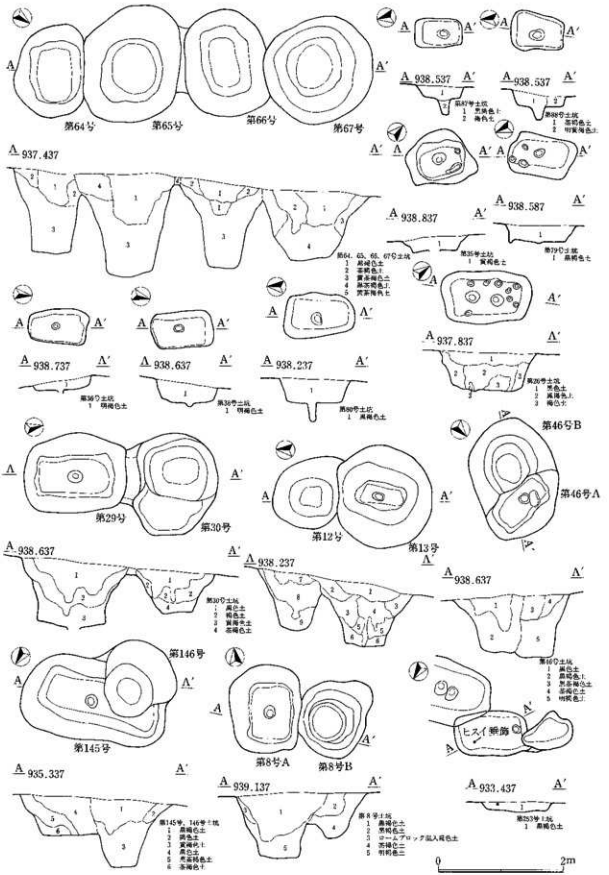
第65図　土坑(1)(1／60)


A 936.937 A'
第69号土坑
1 黒褐色土
2 褐色土
3 黄褐色土
A 939.037 A'
第15号土坑
1 黒色土
2 暗色土
3 明黄色土
A 936.437 A'
第74号土坑
1 黄褐色土
2 褐色土
3 黄褐色土
A 936.937 A'
第72号土坑
1 黒色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 明黄褐色土
5 褐黄褐色土
A 938.837 A'
第50号土坑
1 暗色土
2 明褐色土
A 938.539 A'
第17号土坑
1 黒褐色土
2 明褐色土
A 938.837 A'
第16号土坑
8 黒褐色土
9 明褐色土
A 939.227 A'
第7号土坑
1 黒色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 明褐色土
A 938.437 A'
第6号土坑
1 黒褐色土
2 暗褐色土
A 939.037 A'
第27号土坑
1 黒色土
2 灰褐色土
3 褐色土
4 明黒褐色土
A 938.737 A'
第31号土坑
1 黒褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 黒褐色土
A 939.137 A'
第52号土坑
1 黒色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 黄褐色土
A 939.237 A'
第1号土坑
1 黒色土
2 褐色土
3 明黄色土
A 939.037 A'
第33号土坑
1 黒褐色土
2 ローム・ブロック混入黒褐色土
A 939.137 A'
第41号土坑
1 黒色土
2 黒褐色土
A 938.037 A'
第49号土坑
1 黒色土
2 灰褐色土
3 茶色褐色土
A 938.937 A'
第44号土坑
1 黒色土
2 暗褐色土
3 黄褐色土
A 938.937 A'
第60号土坑
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 褐色土
4 黄褐色土
0 2m

第66図　土坑(2) (1／60)


A 938.537
A 938.937
A 939.337
A 935.937
A 938.837
A 938.737
A 938.637
A 938.137
A 935.337
A 929.37
A 938.637
A 937.337
A 938.037
A 938.037
A 938.937
第53号B
第53号A
第54号B
第54号A
0
2m

第67図　土坑(3)(1／60)


第64号
第65号
第66号
第67号
第46号B
第46号A
第29号
第30号
第12号
第13号
第146号
第145号
第8号A
第8号B
ヒスイ勾玉
0
2m

第68図　土坑(4) (1／60)

5．ピット状遺構

土坑よりも規模が小さい坑を総称してピット状遺構とし333の番号を付したが，最終的に本遺構の中には竪穴住居址・円形柱穴列・方形柱穴列に付随する柱穴が含まれており，そのため諸々の面で本遺構群の内容が不明瞭となっている部分がある。

ピット状遺構の規定と分類　規模が比較的大きく遺物等を出土する坑とは異なる，径が30cm～60cm，深さ20cm～60cmの竪穴住居址の柱穴と類似する坑の一群であり，土坑等とはその規模に相違があり分別することができる。平面プランは円形と楕円形を基調とするが，不整形なものも若干ではあるが含まれる。断面形はコップ状のものや円筒形を呈するものがあるが，全体のイメージは穴の様相を呈する。掘り方は概ねしっかりしているものが中心となるが，平面形が不整形なものを中心に深さが浅く掘り方が不明瞭なものが認められる。ピット内の土層は黒褐色土や褐色土の単一層が中心となるが，Pit201のように柱痕と思われる黒褐色土の垂下層が認められるものがあり，ピット状遺構の用いられ方を考える上で重要である。

ピット状遺構の分布　ピット状遺構は調査区の全域に散在するものではなく，ある一定の範囲に群を形成して構築されている。ピット群はG－6グリッド周辺に架けて分布する。この範囲は台地の最も平坦な部分で，ちょうど竪穴住居址群に囲まれた集落の広場の外周に相当する。この分布域は土坑の一部（第Ⅰ群1類から3類，第Ⅲ群1類）や方形柱穴列と重複する範囲である。ピット状遺構は密集する傾向が窺え，著しい重複関係を有するものが多い。これらのピット状遺構の分布は一見無秩序に構築されているようにも見受けられるが，詳細に分布状況を分析すると，小さな密集区がブロック状に散在し，集落域と広場域を連結するように構築されていることが窺え，構築域がある程度限定されていたものと考えられる。そのためにピット状遺構が密集する結果となったのであろう。

ピット状遺構の時期　覆土内より遺物が出土しているものは全体の約24％で，ピット状遺構内に竪穴住居址の柱穴が含まれている点を考慮すると，純粋なピット状遺構からの遺物の出土率は低いといえよう。ピット遺構から出土する遺物は土器片・石器・黒曜石剥片で，遺物の偏在性は認められず，また，1ヶ所のピット状遺構に集中することや人為的に埋置したものはなく，遺物が覆土に混在していたことより，ピット状遺構が埋没する段階で流入したような状態のものが全てであった。

ピット状遺構から出土した土器片より本遺構の時期をみると，中期前半猿沢式期のものから中期後半曽利Ⅴ式期のものまでの，中期全期に亘る土器片が検出されている。重複関係や検出された遺物の在り方よりピット状遺構は中期全期に亘って構築されていたことが窺えた。

ピット状遺構の性格　本遺構は一見すると単なる攪乱の密集などに見紛うような状態であるが，詳細に観察すると，座重なる重複によりクレーター状となっていることを看取することができる。今回本遺構の配列について考えてみたが，密集度が著しい点などから有機的に結び付けることはできず，配列を持つピットとしては捉えることができなかったが，重複関係の整理や規模等の整理により一定のまとまりを抽出でき得る可能性もある。土層観察によると，一部のピット状遺構に柱痕と思われるような土層の堆積が認められたことより，ピット状遺構＝柱穴とも解釈できようか。しかし，様々な規模を有する点や一定の配列がつかみにくい点などより，全てをピット状遺構＝柱穴とするのには無理があると思われる。

ピット状遺構は中期集落での検出例がかなりあり，市域においては棚畑遺跡[12]・中ッ原遺跡[13]・立石遺跡[8]などで報告されている。これらの遺跡においても本遺構は集落広場域と住居址域の接する部分に検出されていることより，本遺構が一定のゾーンに構築されることに意味のある遺構であることが窺え，広場域と密接な関わりを有していたものと仮定できようか。

6．独立土器・集石・遺物廃棄場

独立土器

B－3グリッド、ちょうど第29号住居址と第43号住居址に挟まれた位置より1ヶ所が検出されている。本址周辺にはピット状遺構や土坑が点在し、遺構検出時には土坑との識別が難しかった。径50cm大のやや不整円形プランの七坑状の掘り方を持ち、この掘り方のほぼ中央部に中期後半唐草文系深鉢の胴部下半を正位の状態で埋設している。掘り方と土器の間は黒色土が堆積し、人為的に埋め戻したような状況は観察できなかった。土器の内部には黒褐色土と土器胴部の一部が落ち込み、堆納物等は検出されてはいない。埋設されていた土器は曽利II式に帰属する深鉢型土器で、上半部を人為的に欠き、下半部のみを用いる。底部は完存し、穿孔等は行われてはいない。独立土器の掘り方は一見土坑状の掘り方で、深さは29cmを測るが、その掘り方はしっかりせず、壁が凹凸を呈する。

集石

A－3グリッド、第36号・第37号住居址の炉址上に検出された。集石は1.7m×0.9mの規模で角礫状や丸い安山岩を不規則に積み上げたような状態で検出された。集石を構成している礫は多種多様な形状を呈し、炉石に用いられたような板状の角礫や棒状の礫が雑然とした状態で検出されている。礫内には加熱のために亀裂が走り、破砕しているものが認められた。礫に押しつぶされるように中期後半曽利V式の深鉢片や両耳壺片が検出されている。第36号・第37号住居址との重複関係や礫内より得られた土器より本址は曽利V式期に帰属すると考えられ、集石の状態を考慮すると、住居址の覆土内に掘り込みがなされ、礫が投げ込まれたような状態が想定でき、集石に用いられている礫はその状況から周辺の炉石を転用した可能性を考えることができようか。

遺物廃棄場

調査区北側に位置する谷部の斜面、K－10・11・12、L－8・9、L－7グリッドの範囲に土器片や礫、石器等が集中する部分が検出された。検出当初は遺物の検出状況が住居址覆土内に廃棄された遺物の様相に近いこともあって、竪穴住居址の存在も考えられたが、含まれている土器片が一括性を持たず、幅広い時間幅を有する点や、斜面に位置すること、硬化した床面や掘り込み等が確認できなかったことより、竪穴住居址でないことが判明した。

遺物の集中範囲は、谷部の斜面の中段に帯状に、傾斜に沿って南東方向から北西方向に集中範囲が広がっている。遺物の集中を巨視的に見ると、大きく6ブロックに分離でき、ブロックごとに範囲に異なりがあり、ブロック4・ブロック5のように重複するものもある。これらのブロックに含まれている遺物は、中期後半の土器片を中心とするが中期前半や前期末の土器片も若干含まれており、一時期に本址が構成されたものではないことが窺えた。遺物集中内には土器片だけではなく、凹石や打製石斧等の石器、安山岩礫が混在したような状況で検出され、ブロック1からは土偶脚部破片と焼土範囲が検出されている。ブロックに含まれている土器片は一括性の少ないものが中心となり、そのほとんどを破片が占め、器形の窺えるような大型破片は一部のブロックに認められるだけである。時期的に出土層が分別できず、混在したような状況で土器片が検出されている。

遺物の出土状況から本址を谷部における遺物の廃棄場と位置付けたが、本遺跡の場合住居址覆土内に土器の廃棄が顕著に認められた例は5例だけである。これらの廃棄の現象と谷部の廃棄の場との関連についてどのような関連があるかについては今後の課題であるが、集落の場の問題と廃棄の問題を考える上に興味深いものである。

第３節　中世・近代の遺構

１．地下式坑

中世に帰属する地下式坑が７基検出されている。地下式坑内からは時期を特定できるような資料を得ることはできなかったが、第１号・第２号地下式坑内部に崩落した土層内から天目茶碗片・白磁碗片が検出されており、これらの遺物より中世に帰属するものとした。全ての地下式坑が天井部が崩落し、完全な形を呈してはいず、構造に不明な点がある。

地下式坑の分類　前述したが、天井部が崩落しているために完全な形を把握することはできなかったが、掘り込まれている坑の状況により、大まかに４群に分類することができそうである。

Ⅰ群（第１号・第２号・第３号地下式坑）　複数の坑が重複したような状況を呈する一群で、主坑を中心に浅い掘り方が見られる。主坑の断面はやや袋状となり、底との壁際は丸みを帯びる。壁には製作時の工具痕が明確に残り、第１号の場合先端がやや丸みを有する工具を用い、３段の調整が認められる。

Ⅱ群（第４号地下式坑）　２ヶ所の主坑が廊下状の横坑により繋がる特異な形状を呈する地下式坑である。主坑、廊下部共にロームの崩落が認められ、天井部を有していたと思われる。

Ⅲ群（第５号地下式坑）　主坑の上面観がＬ字形を呈する、二室を有するものである。東壁の入口部には横桟と思われるような横木が遺存していた。

Ⅳ群（第６号・第７号地下式坑）　天井部が全て崩落して、主坑のみしか遺存していないもので、構造的にはⅠ群と類似するが、Ⅰ群よりも坑の規模が大きく深いものが主体となる。

地下式坑をその上面観から大雑把に４群に分類したが、Ⅰ群とⅣ群はややその上部構造に相違があるが、同類のものと取り扱うことができようか。なお、Ⅱ群についてはあまり類例のない類型である。これらの類型差が用途による差か、時期による差かを把握することはできなかった。

地下式坑の分布　地下式坑は調査区内に一見散在しているような状況で展開しているが、その分布を構築されている地形的な位置より見ると、ある一定の分布域を形成していることを看取することができる。それによると地下式坑は、台地縁辺部の斜面に地形に沿うようにある程度の大きなグループを持ち構築されている傾向が窺え、グループごとに地下式坑の構造に差が認められる。調査区東側のグループ－ａグループはⅠ群より構成され、Ｃ－７、Ｃ－９グリッド周辺－ｂグループはⅡ群・Ⅳ群より、唯一台地内部に入り込んでいるⅠ－８グリッド－ｃグループはⅢ群、調査区西端－ｄグループはⅣ群が認められ、ある程度グループによる類型の偏在が認められる。この差は地点による用いられ方による差なのか、時期差、占有者差なのかを明確にするだけの資料を得ることはできてはいない。

最も地下式坑が密集している東側範囲は小規模な谷が収束する部分に該当し、この谷を利用すれば容易に塩沢の集落に降りることができ、本址の構築位置に興味深いものがある。また、地下式坑が台地中央部に位置せず、耕作地の隅に占地していることにも興味深いものがある。なお、東側に位置する地下式坑は近接関係にあり、第２号地下式坑と第３号地下式坑のように一部が重複しているものがあることより、今回検出された地下式坑が同時存在したものとは考えられず、ある程度の時間幅の中で構築されたものと考えることができる。

地下式坑の時期　本址の内部から時期を示すような資料は得られていないことを前述したが、構造等の在り方よりも中世に帰属するものと考えたい。また、第２号地下式坑の崩落した天井部の上層より天目茶碗片、白磁片が得られている点や、第５号地下式坑が陥没し、窪んだ部分に近世磁器が廃棄されていたことなどを

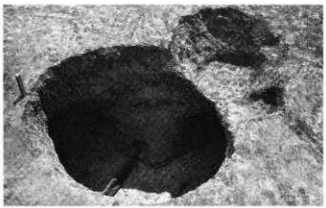
考慮すると、中世に帰属させることが妥当だと考えられる。

中世において本遺跡の位置する塩沢地区は諸々の歴史的な事象を有する地域である。第Ⅰ章第2節で記述したように16世紀を中心としての史跡が点在することより、本址もこの時期に帰属する可能性が高く、中世における山浦の集落を考える上に興味深いものがある。

2．地下室

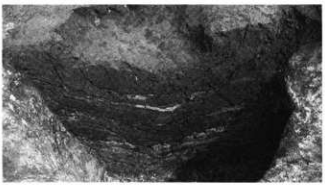
近代に帰属する地下室がA－15グリッドより検出されている。検出当初は開口部が地下式坑と同様な構造のために地下式坑として取り扱っていたが、精査の結果や地元耕作者等よりの聞き取りにより本址が地下式坑でなく、地下室であることが判明した。

地下室の構造は地下式坑と同様な構造を有するが、主坑は4方向に十字形に展開するやや特異な形状を呈する。完全には埋没しておらず、主坑の約半分が埋没していただけである。開口部より折れ主坑に至る壁面に㋮の陰刻が認められ、耕作者の屋号と合致する。耕作者の談によると、4軒でこの坑を掘ったとのことで、室の構造が4ヶ所に別れていたのも所有個所に起因するものではないかと考えられる。



第5号地下式坑
二つに別れた部屋を持ち、室の入口には横桟が落ち込んでいる

第5号地下式坑の内部
製作は丹念で約12人位が入れるだけのスペースを持っている



第5号地下式坑の土層堆積状態
天井部が崩落した後窪みを利用して近世に焚火が行われた痕跡が認められる

第4節　縄文時代の遺物

1．縄文土器の概要

今回の調査により得られた土器片は、総重量にして504.64kgを測り、そのほとんどを破片が占め復元できた個体は24個体と少ない。また、検出された縄文時代の遺構数に比較してみると、その量は多いとは言い難く、遺構に伴う土器も少なく、唯一器形が判明する資料は埋甕や炉体土器、吹上パターンを呈する覆土内の資料に限定され、住居址内のセットを考えられるような資料は得られてはいない。

時間的な制約や紙面の都合から、今回の調査により得られた土器片を資料化し、ここで図示することができないために、本節では遺物整理の段階で得られた縄文土器の概要について記述したい。

縄文土器の時期について　今回の調査により得られた縄文土器を時期により見ると、縄文時代前期初頭から後期前半までの土器が断続しながら検出されている。量的に多いものは中期後半の資料で、ほぼ中期後半の全てが揃っている。

縄文時代前期の土器の概要　前期の資料は断片的に前期初頭、前期中葉の資料が少量得られている。

前期初頭の土器群　1類(1)　第1号住居址から得られた前期初頭の資料が本遺跡における縄文時代の初見の土器である。繊維を多量に含有する縄文施文のもので、胎土中に多量の繊維を含有しているために焼成は脆弱である。器厚は厚手で裏面に指頭による整形痕が残る。施文されている縄文は原体が太く、その施文は不規則である。特徴等より花積下層式に比定できよう。

前期中葉の土器群　2類(2･3)　遺構外より前期中葉に帰属する繊維を含有しない縄文施文の一群が検出されている。裏面に整形痕を残留するものが見られる。3は縄文が羽状構成を採る。形式を特定できるだけの特徴的な施文は見られないが、縄文構成等より前期中葉に帰属する無繊維の縄文系と考えられる。3類(4･5)　不明瞭な縄文地文に浮線文が貼付される土器群が得られている。浮線上は細い棒状の工具により刻みが成される。その特徴より諸磯b式に帰属させることができる。

前期末・終末の土器群　4類(6)　半裁竹管状工具による割合ラフな平行沈線を地文としており、ボタン状の貼付文を持つ。その特徴より諸磯c式に帰属させることができる。5類(7･8)　口縁部に平圧隆線文を貼付するもと、縄文地文に結節浮線が貼付されるものが認められる。これらはその特徴より晴ヶ峯式に帰属される。図示はしていないが大歳山式の断片も得られている。

縄文時代中期の土器群の概要　中期の資料は初頭のものを除き量の過多はあるが、ほぼ前半、後半、終末の資料が得られ10の類型に分類できる。

中期前半の土器群　6群A(9)　角押し文を有する一群であるが、明瞭な隆帯による楕円区画などは見られず、施文される押し引文は単純な角押し文だけではなく、ペン先型押し引文が角押し文の内帯に施文される。楕円区画の省略やペン先型押し引文との併用より本類は猿沢式の新しい段階から新道式に帰属しよう。6類B(10･11)　幅広のペン先型押し引文が眼鏡状隆帯脇に施文される類で、浅鉢の資料を中心としている。7類(12)　棒状若しくは先端が丸みを帯びる篦状工具により、鋸歯状の沈線で区画を行い区画内に斜行沈線を充填する斜行沈線系と総称される類である。8類A(13)　キャタピラ文を有する類で底部に横位構成で施文される。8類B(14)　半裁竹管状工具による縦帯区画を基本とする。区画内は斜行等が充填される。8類C(15･16)　抽象的な意匠を隆帯等により表現し、玉抱き三叉文等が加わる。8類は施文等より藤内Ⅰ式に帰属させることができ、図示しないが第43号住居址よりまとまった資料が得られている。9類(17)　横帯区画文が発達し区画内には半裁竹管状工具による沈線が充填される。隆帯上には篦状工具による刻みがなされる。

井戸尻Ⅰ式に帰属しよう。図示していないが8・9類以外にも多様な中期前半の土器が得られている。例えば新巻類型や焼町土器・平出第三類A等も検出されている。

中期後半・終末の土器群 10類(18・19) 地文に縄文を施文し、蛇行する隆帯等を貼付したり、半裁竹管状工具により隆線を施文する。11類A (20) 簡状工具による区画内に綾杉状の意匠を充填する唐草文系の類である。11類B (21) Aと同様な文様構成を採るが区画に隆帯を用いている。11類C (24) 唐草文系の典型的な文様構成を採るが、充填される棒状工具による沈線の単位が弧状を呈し長い点に特長を持つ。12類(22) 口縁部が肥厚しこの部分に太めの沈線による渦巻が、口縁部下は櫛状工具による条線が地文として施文される。胴部は垂下沈線による分割がなされる。13類(23) 加曽利E2式に帰属する類である。14類(25) 棒状工具による沈線で縦コ字区画を描き、区画内には地文にラフな沈線が不規則に充填される。胴部は蕨手状の沈線により分割され、口縁部下には沈線による横位区画がなされる。15類(26) 口縁部下に一条の沈線が巡り、胴部は胴合太い蛇行沈線や垂下沈線により分割され、区画内には細い沈線が矢羽状構成で施文される。文様構成等より10類は縄文系の曽利Ⅱ式、11類は唐草文系曽利Ⅱ式に帰属する。12類は曽利Ⅲ式、14類は文様構成に崩れがあるが、口縁部文様帯が消失していない点などを考慮すると、曽利Ⅳ式終末に帰属できよう。15類は口縁部文様帯・胴部区画が消失し単純な器形、施文の簡素化などの観点から曽利Ⅴ式に帰属できよう。中期後半の土器は今回得られた資料の中心をなし、多種多様な資料が得られ今回図示したものはその中の一部である。図示はしていないが、梨久保B式や勝坂の条線を地文とし腕骨状沈線が垂下する唐草文系ものも含まれている。

縄文時代後期の土器の概要　今回の調査により少量後期初頭に帰属するものが検出されている。

後期初頭の土器群 16類(27) 不明瞭な沈線により雑に鉤の手状にも見える区画を施文する。表裏器面共に雑な横撫で整形が行われている。沈線による区画構成等より称名寺式に帰属しよう。17類(28) 棒状工具による3本単位の沈線により弧状の区画がなされ、区画内には縄文が充填される。文様構成から堀之内Ⅰ式に帰属できよう。

土器群の構成とその特徴　今回の調査により得られた土器群を文様等の要素から16の類型に分類したが、得られている土器群を時間軸で並べると、前期初頭から後期初頭まで全時期を通して存続するのではなく、断続的であることが窺える。前期の土器群・後期の土器群の量は中期のものに比べて少量であり、土器の量より考えると前期・後期は集落としての性格が稀薄であったと考えることができ、本遺跡と対峙するよせの台遺跡の在り方とは異なりが認めることができ、遺跡間の関係を考える上に興味深い事象である。

中期の土器群の在り方を霧ヶ峰南麓に位置する棚畑遺跡などの例と比較すると、量の過多はあるがほぼ同様な歩調を採っていることが窺える。しかし、詳細に見ると棚畑遺跡中期初頭Ⅰ・Ⅱ、中期中葉Ⅰの一部が欠落している。中期前半の土器群の在り方は棚畑遺跡[12]など同様であるが強いて比較すると、他地域から移入された異系統の土器群が稀薄な点に本遺跡の特徴がある。中期後半の土器群の構成は唐草文系、曽利系、加曽利E系の3系統が互いに影響を与えながら土器群を構成する。土器系統を量より比較すると、唐草文系が主体を占め曽利系、加曽利E系の順となり、棚畑遺跡などの霧ヶ峰南麓遺跡群で捉えられている傾向と類似する。時期的な変遷より捉えると、中期後半（古）では唐草文系が卓越し、中期後半（中）となるに従い曽利系が増加し、加曽利E系が追随し唐草文系は減少の一途をたどる。このような土器群の変遷傾向も棚畑遺跡などでも捉えることができる。今回は検出された土器群を概観してきただけで、詳細なる分類や編成作業を行ってはいないために、大まかな傾向を掴んだに過ぎず、今後土器を再検討することにより、より本遺跡の土器群の在り方が明確になるものであろう。

第69図　検出された土器（1/3・17は1/6）

2．石器の概要

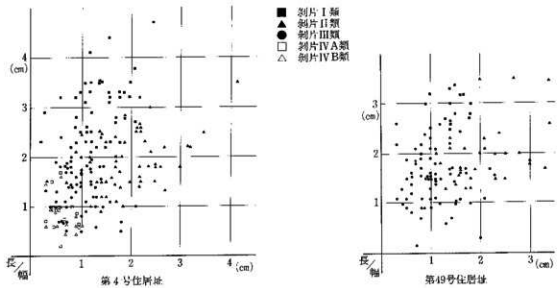
今回の調査により263点の石器が検出されている。これらの殆どは遺構内からの資料であるが、遺構の重複が著しかったことなどより、セットとしての石器組成を明確に把握することができなかったが、これらの石器の器種について概観すると、原材で分類でき黒曜石を素材とする石器では石鏃・ドリル・スクレイパー・石匙が認められ、黒曜石以外を素材とする石器では打製石斧・磨製石斧・石匙・横刃型石器・礫器・凹石・磨石・石皿・石棒が認められた。

石器・剥片等の分類とその性格　黒曜石以外を素材とする石器を器種別にその形状や特徴より細分すると、磨製石斧Ⅰ類 定角式のもの 磨製石斧Ⅱ類 棒状のもの 礫器Ⅰ類 素材礫の一端に剥離調整を加え刃部を作り出しているもの 礫器Ⅱ類 平坦な素材礫の周縁に調整剥離等を加え全体形状が円盤状を呈するもの 礫器Ⅲ類 素材礫に明確な剥離調整は行われてはいないが、敲打により礫の一端が潰れているもの 礫器Ⅳ類 素材礫に剥離調整がなされこれに敲打が加わるもの 凹石Ⅰ類 素材礫の面に孔を有するもので、片面だけのものと両面にあるものが認められる。凹石Ⅱ類 磨石と併用するものに類型化することができ、多種の石器が遺跡内で用いられていたことが窺えるが、他の中期集落に比較して石皿・石棒が少ないことを指摘できる。

今回の調査において1924点（7.876kg）にのぼる黒曜石製の石器・剥片等が検出されている。これらを分類すると、道具としての石器は石鏃・ドリル・スクレイパー・石匙が認められ。これらの石器に加えて石器の素材となる黒曜石剥片類・素材礫等も多量に検出されている。これらの黒曜石剥片類・素材礫等は剥離状況や形状等より見るとある程度の群を構成し、次のようにグルーピングが可能である。素材粒 全面に自然面を持ち、何らの剥離が行われていない状態のもので、形状は粒状のものと角柱状のものがある。砕片 素材粒に多方向から不規則な剥離がなされ、一部に自然面を残留するものもある。石核のように一定の剥片を剥離しようとするような意図が認められない。裂片 砕片よりも一層規則性のないばらばらとした状況を呈し、形状は多面体や一定性のない不規則なものとなる。ピエス・エスキーユ 両極打法による痕跡である階段状剥離等の特徴を残す特徴的な群で、両極打法による砕片と捉えられよう。石核 砕片や裂片のように剥離が不規則ではなく、一定性を持ち剥片剥離を目的としたもの。剥片Ⅰ類 縦長剥片を一括した。主要剥離面を有し表面に1・2条の稜が、剥片側辺に沿って平行に走る規則的なものが含まれている。打面は自然打面と調整打面が認められる。剥片Ⅱ類 形状はⅠ類ほど規則的ではなく、横長のもので、主要剥離面を有する。打面は点打面のものと自然打面のものが認められる。剥片Ⅲ類 Ⅰ・Ⅱ類と比較すると小型で形状も一定ではなく不規則なものである。主要剥離面を有し、表面には交互剥離等が見られ自然面を残留するものはない。剥片は薄く打面は点打面が中心となる。剥片ⅣA類 極小剥片の類型で、薄く主要剥離面を有し、表面には交互剥離が認められる。剥片の状況より石器生産の際に生じた剥片として捉えることができよう。剥片ⅣB類 ⅣA類と同様に極小剥片の類型であるが、形状が不整形で裂片を小型化したようなものも含まれている。

剥片などの分類により遺跡内で石器生産が行われていたことがある程度把握できた。剥片等の出土量から考えると、第4号・17号・29号・49号住居址内を中心に黒曜石製石器生産が行われていたことが予測できる。また、第4号・29号住居址から多量に検出された剥片Ⅰ類の在り方より、中期後半においても縦長状剥片を剥離技術が存続していたことが窺えた。福沢中原遺跡第5号住居址、新井下遺跡第17号住居址などの中期後半の住居址においても、剥片Ⅰ類がまとまって検出され、中期後半においても縦長状剥片生産が行われていたことを裏付けられる。

石器の組成と特徴　今回の調査により得られた石器の種類は13種に及び、打製石斧58、磨製石斧18、大型



第70図　第4号・第49号住居址出土の剥片類の大きさ

石匙2、横刃型石器12、礫器10、凹石43、磨石2、石皿3、石棒1（黒曜石以外を用いる石器）、石鏃44、ドリル13、スクレイパー55、小型石匙2（黒曜石を用いる石器）の量が得られている。石器の量は検出遺構が多かったのにも関わらず、その内容は貧弱で同地域に位置する棚畑遺跡などと比較すると、量や器種内容にかなりの差異があることが窺える。石器全体に対する器種の占有率を見ると、打製石斧が22.1%を占め最も多く、黒曜石製スクレイパー20.9%、石鏃16.7%、凹石16.3%となり、中期の集落としては黒曜石製石器の占有率が高いことに特徴を持ち、石器に加え黒曜石製の剥片類も多く、遺跡内で黒曜石を多用していたことが窺えるが、霧ヶ峰南麓に位置する駒形遺跡や一ノ瀬・芝ノ木遺跡などより得られている黒曜石と比較すると、その量は決して突出するものではなく、寧ろ霧ヶ峰南麓遺跡群内においては、本遺跡における黒曜石の検出量は少ないといえ、この点は本遺跡の性格を考える上に重要な用件となろう。

石器内で興味深い器種として、礫器Ⅱ類とした円盤状の礫器の存在がある。この石器は棚畑遺跡や霧ヶ峰南麓の遺跡を中心に検出例が多く、八ヶ岳山麓の遺跡群では見ることのできない特異な石器で、霧ヶ峰南麓を中心に分布することより、この地域特有の石器であると考えることができ、今後注意したい石器の一つである。

上の平遺跡遺構別石器等出土一覧表

遺構番号	黒曜石重量(g)	黒曜石総点数	素材剥	砕片	剥片	ピエス	石核	剥片I	剥片II	剥片III	剥片IVA	剥片IVB	石錐	石鏃ブランク	ドリル	スクレイパー	石斧
1号住居址	23	6		1		1		1		2			1				
3号住居址	334	46	3	11	9	4		3	5	9			2				
4号住居址	559	258	3	11	26	18		49	55	55	13	5	12	5		5	1
5号住居址	22	36							1		27	7				1	
6号住居址	3	1						1									
8号住居址	0.5												1				
9号住居址	60	15	1	2				1	4	1	4					2	
10号住居址	586.5	138	4	21	11	7		17	33	31			3	2	1	8	
11号住居址	19	4			1			2		1							
12号住居址	123	29		11	4	4			5	4			1				
13号住居址	123	37	1	2	8	3		4	7	7			1	1		3	
17号住居址	245	79	1	13	11	2	4	5	18	13	10					1	1
18号住居址	101	5	1		2				2								
19号住居址	60	3		1						2							
20号住居址	36	10		2	1	1		2		3				1			
21号住居址	70.5	19	3		6			2	6					1		1	
22号住居址	59.5	10				1	1	2	5					1			
23号住居址	267.5	73	3	4	16	4	3	9	16	12			1	1	2	2	
24号住居址	135.5	21	3	4		3	2	1	4	2			1			1	
25号住居址	19.5	8		2	6												
26号住居址	269.5	72	2	8	11	4		3	13	21			2	3	2	3	
27号住居址	454	122	1	21	25	4		9	22	32			2	1	1	4	
28号住居址	124	43		9				6	11	15			1			1	
29号住居址	149.5	273	3	38	57	18	7	48	69				6	13	2	12	
30号住居址	36	17	2	3	1	3		3		3				2			
31号住居址	910	29	2	4	7	2		4		8			1			1	
32号住居址	160	17	2	9			1			4			1				
33号住居址	15.5	5						1	1	2						1	
34号住居址	376	37	4	10	5	2		4	6	3			2			1	
35号住居址	25	4		3					1								
36号住居址	593	88	5	21	3	1	5	17	20	12					1	3	
37号住居址	230.5	27	1	9		1		8	7							1	
38号住居址	81	23		5				3	14					1			
39号住居址	160	30		4	2	1		7	10				1	1	2	2	
40号住居址	23	5		2					3								
41号住居址	26	5		1	1					3							
39,40,41	24	5		1						3						1	
43号住居址	682.5	110	9	29	16	12		4	14	20			2	2	2		
43号住居址ヤド	162	13	11		2												
45号住居址	16.5	7			1					6							
47号住居址	16	2		2													
48号住居址	70	8		3		2		1	2								
49号住居址	424.5	184		23	33	10		18	32	64			3			1	
合計	7876	1924	65	290	265	108	23	235	386	338	54	12	44	35	13	55	2

打製石斧	磨製石斧		石鏃	模刃	礫				匡				礫石	石皿	剥片	砕片	原石	石棒	軽石
	I類	II類			I類	II類	III類	IV類	I類	II類	III類	IV類							
										1				1					
2				1															
1	1														3	1			
	1	1		1															
4		1							1						2				
									1										
1																			
	1								3				1						
1	2			1					3										
															1				
									1						1				
									2										
1				1	2				1	1						2			
5							1		1	2			1	1	6	2			
2				1						1									
1		1		1											7				
3		1					1	1	2						1				
1																			
5		2				1			10	2					5	2			
3	1														3				
1									2						2				
1							1		2										
4		3	1												2				
1	3				1					1			1		3				
1									1										
1					1				1	1					5				
1																			
1				1															
10				4					1					1	15		1		
															1				
4			1	1	1				2						2			1	1
58	9	9	2	12	5	1	3	1	34	9			2	3	59	7	1	1	1

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第１節　上の平遺跡の縄文時代中期集落の概要

１．住居址の構造

住居址の構造　米沢上の平遺跡で今回の調査により検出された縄文時代中期の竪穴住居址は51ヶ所を数えるが、これら殆どが重複関係を有し、単独で検出されたものは11ヶ所に過ぎず、住居址の構造等について明確にし得たものは少数であるが、推定でき得る住居址も含めて住居址構造の諸属性（平面形・規模・主柱穴配置・主軸方向・炉址）について検討してみる。

住居址の平面プラン　検出された住居址の平面プランを大別すると、円形を基調とする住居址－Ⅰ群と、方形を基調とする住居址－Ⅱ群に分類することができる。

詳細にこれらの群を見ると、Ⅰ群は正円に近いもの－ａ類、不整円形－ｂ類、楕円形－ｃ類が認められるが、ｃ類の場合主軸方向等を加味すると、横長のもの－ｃ類①と、縦長のもの－ｃ類②に分類できる。Ⅰ群の類型を数量的に見ると、ａ類に帰属するものは皆無で、ｂ類・ｃ類が全を占める。

Ⅱ群は隅丸方形のもの－ａ類、隅丸長方形のもの－ｂ類が認められるが、ｂ類の場合主軸方向を加味すると、横長のもの－ｂ類①が全てである。

住居址の平面プラン類型を時期的な観点よりみると、中期前半（古）ではⅠ群ｃ類②（縦長の楕円形プラン、第43号住居址等）が主体を為し、中期前半（新）ではⅠ群ｃ類②（縦長の楕円形プラン、第12号住居址等）、中期後半（古）は中期前半（新）のⅠ群ｃ類②（縦長の楕円形プラン）からⅠ群ｂ類（不整円形プラン、第25号住居址）へと変化する。中期後半（中）で住居址の平面プラン類型はⅠ群ｃ類①（横長楕円形）へと変化する。これが中期後半（新）になるとⅠ群からⅡ群へと大きく変化し、Ⅱ群ｂ類、Ⅱ群ａ類が主体となる。本遺跡に認められた住居址の平面プラン類型の変遷である縦長楕円形→不整円形→方形の図式は他の遺跡においても認められる現象である。住居址の平面プランの変遷で興味深い段階は中期後半（中）から中期後半（新）への変化で、円形基調から方形基調への変化が如何なる要因によって生じるものか大きな問題であろう。

住居址の規模　今回の調査により検出された住居址はその多くが重複関係を有し、規模を的確に把握し得たものは少なく、その大半が主柱穴配列等により推定し、26ヶ所のデーターを得ることができた。単純に住居址の面積だけで分類すると、10㎡以下－Ａ群、15㎡以下－Ｂ群、20㎡以下－Ｃ群、20㎡以上－Ｄ群の四群に分類することができそうである。規模別の軒数はＡ群－１、Ｂ群－５、Ｃ群－11、Ｄ群－８であり、Ｃ群が44％を占める。Ｃ群を構成する殆どの住居址が拡張が行われていた点を考慮すると、Ｂ群からＣ群へと変化したことが考えられ、Ｃ群の基本はＢ群にあり、基本的な住居址の大きさは15㎡以下と考えることができよう。拡張されたものを除き最大の規模を有した住居址は第43号住居址である。住居址の平面プランより規模を考えると、円を基調とするⅠ群が方形を基調とするⅡ群に比べて大型のもの（Ｃ群）が主体を占め、Ⅱ群の場合Ｂ群・Ｃ群が主体となる傾向が窺える。稀に第29号住居址のような大型のものが見受けられ、規模より考えると第29号住居址の在り方は特異なものとして取り扱うことができよう。

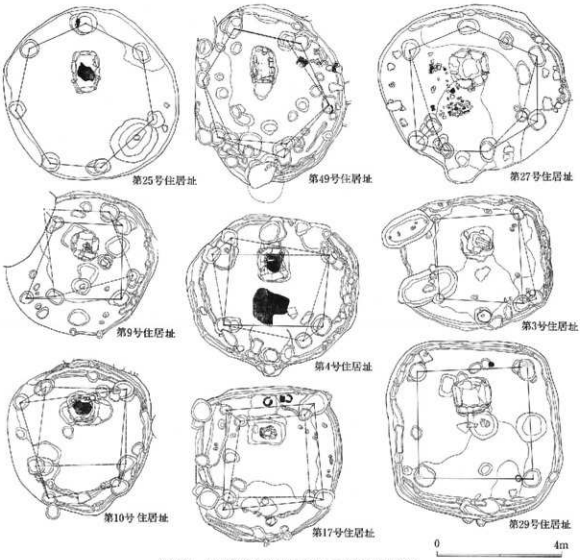
主柱穴配列と建替え　住居址内には上屋構造等に関わった思われる諸々の坑が検出されている。柱を支えたと思われる柱穴、特に中心となる配列について推定倒所も含めると42ヶ所のデーターが得られている。そ

れによると、4本柱－a群（3号・4号・29号・31号・36号等）、5本柱－b群（8号・16号・27号等）、6本柱－c群（2号・12号等）、7本柱－d群（20号・25号・43号等）、8本柱－e群（42号）の5タイプが認められる。件数より見るとa群が主体となりd群が続き、b・c・e群は従属する立場を採る。

a群は柱穴間を結ぶ形状は梯形を呈するものが多く、横長のものと縦長のものが認められ、前者が主体を占める。b群はa群の変形した形状で、主軸に向かって奥壁部に柱穴を配し柱穴間を結ぶ形状は5角形を呈する。検出例はそれほど多くはない。c・d・e群は一括のグループとして取り扱えそうなものである。

主柱穴配列と平面プランの関係を考えてみると、a群は方形を基調とする群に包括され、b・c・d・e群は円形を基調とする群に属する。主柱穴配列の差異は住居址の上屋構造に密接に関わっていたものと考えられ、拡張等にも影響を与えているようである。

主柱穴の建替えは主柱穴配列の在り方や平面プランに密接な関係を有しているものと考えられ平面形がⅠ群の場合炉址を中心として同心円状に大きく柱穴を移動するもの－①が中心となるのに対して、Ⅱ群の場合同位置で柱穴が重複するもの－②（この場合住居址の面積は大きく拡張はされない）と、主軸方向に直行する横軸方向にスライド状に拡張が行われるもの－③が認められる。Ⅰ群の拡張の場合面積が割合増大するの



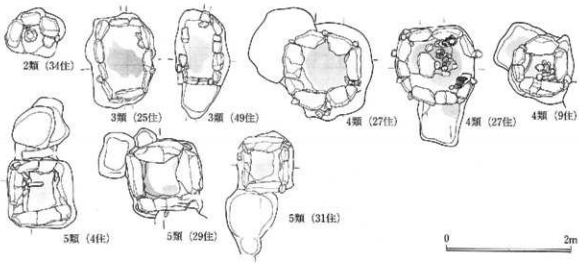
第71図　中期後半の竪穴住居址の主柱穴と建て替え

に対して、②・③は①に比べてそれほど大きな面積増加になってはいない。

主軸方向と入口部　主軸方向が明確に捉えられた住居址は中期後半に帰属する21ヶ所である。得られたデーターよりみると、南北方向に主軸を有しているものが主体を占め、稀に東西方向に主軸を有しているもの（14号・29号）がある。

入口部に埋甕や浅い皿状のピット等の施設を有していた住居址は９ヶ所で、その内訳は埋甕を有しているもの６ヶ所、浅い皿状ピットを有するもの３ヶ所であった。埋甕は第17号住居址に新旧に伴うものが認められたが他の住居址では建替え等は認められても１ヶ所だけの埋設であった。埋甕は深鉢（曽利系３、唐草系１、加曽利Ｅ系２）を用い、正位に埋設するものが８ヶ所で主体を占める。第13号住居址のものを除き、全て底部下半を欠除するものである。３ヶ所の埋甕上に石蓋が認められ、全て板状安山岩を蓋石として用いている。入口部に何らかの施設を有していた住居址の平面プランは入口部がやや張り出す形を呈し、第４号・第27号住居址が典型的な形状を呈する。入口部には埋甕やそれに類する施設に伴うように対ピットが第３号・第４号・第27号・第29号住居址に認められ、第29号住居址の場合外側に入口に関わったと思われる対ピットが検出され、入口の構造等を考える上に重要である。また、興味深い入口部施設としては第49号住居址の入口部に構築された袋状土坑の存在である。類例を聞かない施設で完全に埋め戻されていたことに意味があるように思われる。埋甕や入口部の施設が見られるようになるのは中期後半（中）からで、住居址の平面観が円形基調より方形基調に変化し始めた段階からである。

炉址の構造　今回調査が行われた住居址の殆どに炉址が検出されている。石囲いや埋設土器が取り除かれ焼土しか検出できなかったものが主体を占めるが、掘り方などより推定すると石囲い炉の構造を想定できよう。炉址構造が明確になった住居址は21ヶ所を数える。石囲い構造より分類すると　１類　小型の方形石囲い。（43号）２類　平面観は不整円形で炉石は平坦な河原礫をお花形に据え、炉中央に土器を埋設したもの。（20号・42号）３類　平面観は長方形を呈し、掘り方の傾縁に分割した河原礫や平坦な礫を立てるように設置したもの。（25号・49号）４類　２類と同様に平面観は不整円形を呈し、掘り方傾縁に平坦な河原礫を斜状に並べる。石囲いの状態はやや２類とは異なり、四角形を基調とし、胴張りながら辺を意識し石囲いを行い、炉石の固定に小さな礫を詰めるなどの構造が顕著となり、後出する切り垣燵状の石囲い炉の緒言的な様相を呈する。（９号・23号・27号・32号）５類　掘り方の平面観は隅丸方形を基調とし、掘り方の辺に沿って、平坦



第72図　中期後半の炉址の類型

な板状の割合角のある礫を直立するように組んでいる。（3号・4号・10号・17号・21号・29号・31号・36号・39号・40号）以上のような類型を呈する炉址が検出されている。八ヶ岳山麓における中期の炉址形態の変遷については多くの論考がなされており、今回得られたデーターもこれらの例に追従する。基本的な炉址の構造が大きく変化する段階は5類の深い切り炉燒状の炉址の出現からである。4類の段階でもその萌芽は認められるものの、炉石を斜状に並べる様相が2類の延長に位置付けられることより大きな変化として捉えられない。石囲い構造の様相から2類の延長上に4類が位置すると考えることができるが、3類の長方形石囲い炉の出現は突然であり、出自について問題がある。

中期後半の住居址の平面観と炉址構造・構築位置を関連付けて考えると、平面観が円形基調の住居址の場合2・3・4類の炉址が認められ、その位置は2類がほぼ住居址中央、3・4類は住居址中央よりやや奥壁寄りに移動する傾向が窺える。5類は方形基調の住居址に認められる。炉址の軸線を住居址の軸線と合わせているものが殆どで、構築位置もより奥壁側に寄り、奥壁と炉址の間隔が狭くなる類向が窺える。このような平面観の変化と炉址位置の変化は、住居址内空間の在り方にも影響を与えたものと考えられ、円形の場合炉址を中心とした円形の空間構造であったものが、方形へと変化するに従い奥壁部を除き前庭部・側縁部の3方向から囲む空間構造へと変化していったことが考えられる。このように住居址が円形基調から方形基調へと変化していく段階で、主柱穴構造・入口部の構造・炉址の構造と住居址内空間の在り方が大きく変換することが窺えた。

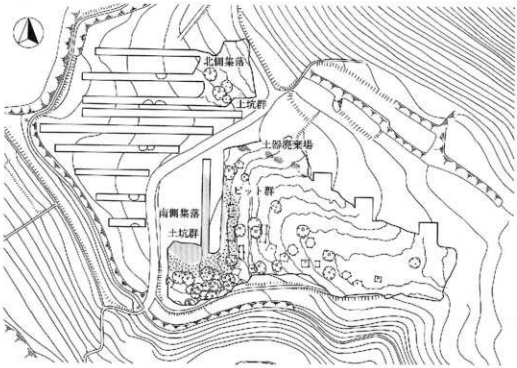
2．集落の形態と規模

集落の立地　第Ⅰ章第1節1で遺跡の立地している地形の概要について記述しているとおりに、本遺跡は孤立したテーブル状の台地に展開する。このテーブル状の台地は詳細に微地形を観察すると、台地平坦部を分割するように小規模な入り組み谷が東西方向に走っている。この小規模な谷により遺跡は南側範囲と、北側範囲に分割されている。分割されている範囲の規模を比較すると、南側範囲が北側範囲に比べて広く全体の約2/3を占め平坦で、北側は台地の派生する山続きとなり狭く、南側範囲に比較して緩斜面となる。

集落のかたち　今回の調査は遺跡全体面積の約1/2を調査したに過ぎず、集落全体の様相については不明な部分があるが、今回の調査により得られた成果をもとに縄文中期集落の展開を想定してみたい。

調査が遺跡全体の範囲に及んでいないために詳細に集落のかたちを把握をし得てはいない。しかし、記録保存が成された範囲（遺跡の東側範囲）と、埋土保存された範囲（遺跡の西側範囲）の結果を合わせて考えると、遺跡内での集落の展開は大きく分けて二つに分けることができる。台地南側範囲（南側集落）の平坦部に環状を呈する集落が展開し、入り組み谷を隔てた北側範囲（北側集落）は環状とならず地形に沿って、帯状に集落が展開していることが把握できる。南側集落は環状部分とこの東外側に環状集落に付随する形で、帯状に集落が展開している。集落規模は南側集落が大きく、北側集落が付随するような状況を呈する。

南側集落と北側集落は入り組み谷を隔てて対峙している。南側集落は台地南側周縁を巡るように台地平坦部を広場として、これを囲むように直径約40mの環状を呈し、試掘部分に確認された住居址も含めて43ヶ所の住居址より構成されている。（時間関係等を考慮しない。）南側集落の住居址の在り方を詳細に見ると、大きく南群と北群より構成されているようである。南側集落を環状展開の集落と取り扱っているが、完掘したわけでないいために便宜的な部分があり、例えば開口部の有無等に今後の課題を残している。この環状部に尾のように東側に5ヶ所の住居址が付随する。これに対して北側集落は明確な広場を有せず、集落形が一定化していないが、詳細に住居址の分布を見ると大きく東群と西群に分けることができ7ヶ所の住居址より構成される。このように南側集落、北側集落共に小さなブロックの集合体が結集して集落の全体形を形作って



第73図　上の平遺跡の集落のかたち（1／1,500）

いることが窺える。

遺構の構成　南側集落の遺構の構成と北側集落の遺構構成を比較すると、南側集落は竪穴住居址・方形柱穴列・土坑・ピット状遺構からなるのに対して、北側集落は竪穴住居址と土坑だけ構成されている。これらの遺構の配置も南側集落の場合は、外帯に住居址、その内側に土坑群が展開する。土坑群と住居址群の換する位置にはピット状遺構や方形柱穴列が構築されている。北側集落の場合南側集落のように一定のゾーニングはなされてはおらず、土坑群が住居址群の近辺に若干の群を構成して構築されているだけである。南側集落の場合遺構が一定の計画の基に配されていたことが窺え、環状集落の基本的な遺構のゾーニングがなされていることを看取ることができる。

集落の時期的変遷　検出された住居址の時期的変遷を概観して見ると、中期において集落が構成され始める段階は中期前半からで、一部が断続しながらもほぼ中期後半までの遺構が検出され７期に区分される。

第Ⅰ期　中期前半塩沢式期に帰属する。第５号・８号・26号住居址が本期に該当する。住居址の分布は南側と、北側に見られるが、規則的な配列は認められず、散在する形を呈する。本期に帰属する土坑は第139号土坑で、住居域から離れた北側谷に面して構築されるが、群を呈している様相は示してはいない。ピット群内からも本期に帰属する遺物が検出されることより、ピット群もⅠ期から構築されたものと考えることができよう。北側谷に形成されている土器廃棄場も本期から利用されたようであるが、検出される土器の量より見ると、その利用頻度は低かったと想像できる。

第Ⅱ期　中期前半藤内Ⅰ式期に帰属する。第24号・28号？・38号・43号・45号・51号住居址の６ヶ所が本期に帰属する。住居址の分布は南側と北側に認められ、南側の場合台地南側周縁部に等間隔で並び、Ⅰ期に見られなかった南側集落の北側谷に面した範囲にも住居址が構築されるようになる。本期に帰属する土坑は把握されてはいないが、ピット群の一部に本期に帰属するものが認められ、Ⅰ期からⅡ期へとピット群が継続されていることが窺える。土器廃棄場もⅠ期より継続している。

第Ⅲ期　中期前半井戸尻式期に帰属し、第12号・15号・16号・22号・30号・46号・50号住居址の７ヶ所が帰属する。住居址の分布は南側集落だけに限定され、その配列は一定の距離を有し半環状に巡る。本期の住居址配列が後の時期の集落形の基本となり踏襲される。

第Ⅳ期　中期後半曽利Ⅰ式期に帰属し、第２号・18号・20号・25号・34号・42号・47号住居址の７ヶ所で、南側と北側の両方に住居址が点在する。南側集落の北側谷に面した範囲に住居址が絶められないことより、集落の形が環状にならない可能性もある。しかし、住居址に囲まれた中央部のピット群や土坑群は継続する。

第Ⅴ期　中期後半曽利Ⅱ式期で、第４号・９号・23号・27号・32号・37号・48号・49号住居址の８ヶ所の住居址が帰属し、最も住居址数が増加する時期である。集落の形も整った環状となり、ピット群・土坑群・土器焼棄場等の遺構全てが機能している。Ⅳ期に続き北側にも住居址が展開している。

第Ⅵ期　中期後半曽利Ⅲ式期に帰属し、第３号・６号・10号・14号・19号・21号・36号・41号住居址の８ヶ所が南側を中心として帯状に台地南縁肩部に沿うように展開する。中央広場の在り方については不明な部分が多く言及することはできない。

第Ⅶ期　中期後半曽利Ⅳ式期に帰属し、第７号・13号・17号・29号・31号・40号住居址の６ヶ所がⅥ期と同様な配列で展開する。しかし、住居址の位置関係から考えると、同一期に帰属する第29号・31号住居址が近接位置に構築されている点より、時期決定を見直すかまたは第Ⅳ期内で小期が存在するのか今後の課題とし、現段階では同一時期のものとして取り扱っておく。

以上７期の集落の時期的変遷を示してきたが、最も本遺跡が大きな時期はⅣ・Ⅴ期であり、この時期に整った環状集落を呈することを把握することができた。また、南側集落と北側集落は住居址分布や住居址の変遷より別個の集落と捉えることができ、集落の形や遺構の構成差より南側集落が主で北側集落が従の関係を有していたものと想定できる。上記の点を踏まえて浅い谷を挟んで対峙する南・北の集落の相互関係と、集落の動きをまとめると、第１期 南・北集落共に大きな格差がなく、集落形にも相違がない点在集落を形成する。第Ⅱ期 集落は南・北に別れている状況が継続するが、南側の集落が主体となる。南側の平坦な部分に２グループの住居址群が展開する。第Ⅲ期 北側集落が南側に集約し、南側は環状集落が整い始める。第Ⅳ期 北側に再度集落が展開するが、主体は南側である。第Ⅲ期に見られた南側集落の北側グループは消失し住居址の分布は一定の分布域を形成するようになる。第Ⅴ期 基本的な集落の形状は第Ⅳ期の踏襲である。第Ⅳ期の住居址と本期の住居址の位置関係から住居址の移動を想定してみると、北側集落では第25号→第27号、南側では第42号→第37号・第34号→第32号・第20号→第23号と仮定することができ、この他に第４号・第48号・第49号のように新たに展開する住居址群もあり、集落全体としては拡大する傾向にある。第Ⅵ期　北側集落は南側に集約され、南側集落の環状の全体形も崩壊する。住居址の移動を考えると、集落は縮小の方向に向かっている。この時期が住居址の平面形や施設に大きな変化が見られる画期で、第Ⅲ期から第Ⅴ期まで発展的に継続してきたものが、変換する時期として本期を捉えることができよう。第Ⅶ期 基本的な形は第Ⅵ期の継続であり、集落は縮小の一途をたどる。集落の推移についてその概要を述べてきたが、時間的な制約等より出土遺物や住居址の構造的な面より集落を分析し、その推移を考えることができなかった。今後このような面も踏まえて本集落を再考する必要があろう。

３．周辺遺跡との相互関係と本遺跡の性格

周辺の遺跡　霧ヶ峰南麓には多くの遺跡が立地、それらが霧ヶ峰南麓から流れ下る河川による扇状地単位で大きな遺跡群を構成していることを第Ⅰ章第２節に記述しているが、それによると本遺跡は藤原川・前鳴川による扇状地グループに帰属している。これらの遺跡が相互にどのような関係を有していたかを現段階の

資料より把握することは難しいが、近接している唯一発掘調査例のあるよせの台遺跡の例と、存続時期の差や遺構の構成差の比較を行ってみたい。

よせの台遺跡は早期前半の押型文・早期後半条痕文・絡条体圧痕文がかなりの量検出されているが、本遺跡においてはこの時期の資料は検出されてはいない。前期初頭では本遺跡に若干の足跡が認められ、前期前半神ノ木式期から諸磯c式期にかけてはよせの台遺跡が中心となる。両遺跡共に中期初頭の様相は不鮮明である。中期前半から中期後半曽利Ⅰ式期では本遺跡が中心となり、それ以降ではよせの台遺跡・本遺跡共に存続しているが、中期最終末から後期初頭にかけてはよせの台遺跡が主流となる。以上の状況を整理すると、早期前半・後半 よせの台遺跡→前期初頭 上の平遺跡→前期前半～前期末 よせの台遺跡→中期前半～中期後半曽利Ⅰ式期 上の平遺跡→中期後半 よせの台遺跡・上の平遺跡→中期終末 よせの台遺跡となり、近接関係にある遺跡が相互関係を保ちながら動きを持っていることを把握することができた。

遺構の構成より両者の遺跡を比較して見ると、よせの台遺跡の場合前期に土坑・住居址を持つ集落が形成されるのに対して、上の平遺跡では単独住居しか検出されていない。中期前半になると上の平遺跡にも土坑・ピット状遺構・方形柱穴列・住居址を持つ集落が営まれ、この集落は環状を基本としたある程度の計画性を持つものである。上の平遺跡は中期後半まで中期前半のかたちが継続され、中期終末に至るにつれ縮小傾向となる。これに対してよせの台遺跡は中期後半から再生する集落で土坑・方形柱穴列・住居址より構成されている。このように中期後半ではよせの台遺跡・上の平遺跡が併存していたことが理解でき、規模的にも同等の集落が宮の下水源を挟んで対峙していた様子を想定することができよう。

本遺跡の性格を如実に現している事象の把握はできてはいない。検出された黒曜石の在り方に着目すると、黒曜石剥片類には石器・剥片生産を行っていたと考えられる部分が多く含まれていることより、本遺跡の生業において黒曜石製石器生産がある程度のウエイトを占めていたものと想定できた。しかし、霧ヶ峰南麓の他の遺跡に比較すると、本遺跡の黒曜石の消費量は決して突出する量ではなく、寧ろその量は少ない。遺跡の存続期間や遺物の在り方より考えると本遺跡は、藤原川・前鳴川による扇状地グループの内で中心となると思われる、一ノ瀬・芝の木遺跡を支える集落であった可能性を指摘することができようか。今後詳細なる遺構・遺物の分析を通し改めて本遺跡の性格等について考えなければならない。

第２節　上の平遺跡の落し穴状土坑について

１．検出された土坑の概要

土坑の概要　検出された269基に及ぶ土坑について第Ⅳ章第２節４で規模や構造（掘り方等）より10の類型に分類してきた。その際に穴の開け方（構築方法や構造等）により２群のグループが存在することを指摘し、その在り方より土坑・土壙・小竪穴の群と、落し穴の群と性格付けを行っている。今回の調査により得られた成果は単に縄文時代中期集落の在り方だけではなく、落し穴群の展開に興味深い所見を得ることができた。

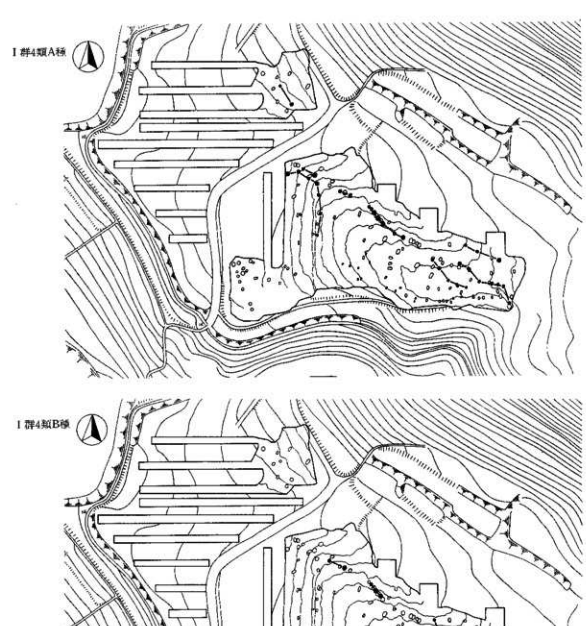
市域において落し穴と思われる遺構が検出されている遺跡は城の平遺跡23基、よせの台遺跡２基、棚畑遺跡２基、古田城跡３基、与助尾根南遺跡２基、床滑遺跡３、稗田頭Ａ遺跡５基、稗田頭Ｂ遺跡13基、中原遺跡１基、上見遺跡12基、阿久尻遺跡５基、天狗山遺跡26基、中ツルネ遺跡１基、大悦南遺跡12基の14遺跡で、これらの遺跡で落し穴がある程度の数で群をなし、狩り場と思われるような状況が把握された遺跡は、日本において落し穴群が最初に発見報告された城の平遺跡、稗田頭Ａ遺跡、稗田頭Ｂ遺跡、上見遺跡、天狗山遺跡、大悦南遺跡がある。今回上の平遺跡において検出された落し穴は検出数やその配列等から、市域において最も大規模なものであることが判明した。この落し穴についてその平面観や分布と配列等について考え、縄文時代における狩猟活動の一端を把握してみたい。

土坑の分類　土坑は構造等より10類型に分類され、その内の８類型が落し穴とでき得るものである。平面観や構造等より円形基調のⅠ群４類Ａ種、Ⅰ群４類Ｂ種、Ⅰ群５類、方形基調のⅡ群１類Ａ種、Ⅱ群１類Ｂ種、Ⅱ群２類、Ⅱ群３類、Ⅱ群４類の８類型に分類されたが、落し穴に帰属するとした土坑はその構造から見ると、大きく二群に分割できそうである。落し穴の大きな特徴としての坑底に掘り込まれている逆茂木状の杭を立てたと思われる小孔に着目すると、小孔を有する一般的な一群と（Ⅰ群５類・Ⅱ群１類Ａ種・Ⅱ群１類Ｂ種・Ⅱ群２類・Ⅱ群３類－Ａグループ）、小孔を有しない一群（Ⅰ群４類Ａ種・Ⅰ群４類Ｂ種・Ⅱ群３類－Ｂグループ）が検出この一群はあまり類例のないものであり、他の落し穴との関わりやその役割について興味深いものがある。

Ⅰ群４類Ａ種は32ヶ所、Ⅰ群４類Ｂ種は14ヶ所、Ⅰ群５類は７ヶ所、Ⅱ群１類Ａ種は47ヶ所、Ⅱ群１類Ｂ種は８ヶ所、Ⅱ群２類は12ヶ所、Ⅱ群３類は６ヶ所、Ⅱ群４類は18ヶ所総数にして144ヶ所にのぼる落し穴状土坑が検出されている。Ａグループは落し穴状土坑の約63.9％を占め、Ｂグループが従属する。Ⅱ群１類Ａ種が全体の約32.6％を占め、続いてⅠ群４類Ａ種が約22.2％を占めこの二類型だけで全体の半分を占め、この両者がＡグループとＢグループの代表となる。

Ⅰ群４類Ａ種・Ⅰ群４類Ｂ種・Ⅱ群３類（Ｂグループ）土坑の在り方　Ｂグループは坑底に小孔を有しない一群で、巨大な柱穴を思わせる構造を有している。検出当初これらの土坑が規則的に隣接して構築されていた点や、深さが他の落し穴と思われるものに比べて深い点などの要素より落し穴とは認識せず、巨大な柱穴列の可能性を考えていたが、明瞭な柱痕がない点や柱穴にしては掘り方が深すぎる点などより、積極的に柱穴とする根拠を見出せずにいた。全体の調査が進行するにつれ分布域が落し穴と合致することなどが確認され、柱穴とするよりも寧ろその深さや、掘り方等より落し穴の一類型である可能性が高くなった。

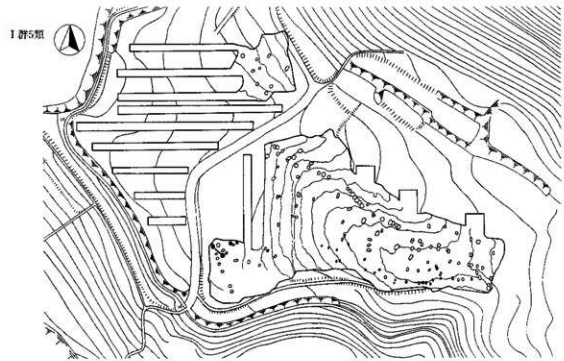
Ａグループの規模等を概観すると、Ⅰ群４類Ａ種は規模は上面径が約１m前後のものを中心とし、深さの平均が126.4cm。Ⅰ群４類Ｂ種は上面径等の規模はⅠ群４類Ａ種と同様で深さの平均は126.5cmを測る。Ⅱ群３類も平面規模は上記の群と同様な傾向を示しているが、深さの平均が他の類型よりも深く154.4cmを測り、

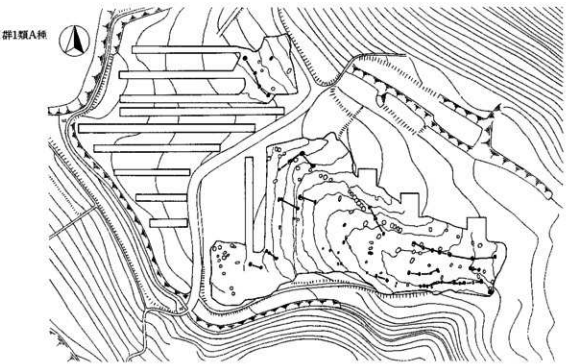


第74図　落し穴状土坑分布図（1）

Aグループは他のグループよりも深く巨大なものとして捉えることができる。掘り方は開口部が大きく開く形を基本とし、中段部で直に掘り込まれる例が殆どで、底から容易に這い上がれないような構造となっている。II群3類の断面は小孔の有無、深さの点だけを除けばII群1類A・B種と大過ないような状況である。

これらの特徴的な類型について、落し穴群の分析が行われた神奈川県霧ヶ丘遺跡[17]の類例を見ると、G型、H型と分類されている群や、小薬氏・小島氏[18]の提唱する仮称「207タイプ」土坑に本グループは帰属していると思われる。本グループのような落し穴は県内においては類例の希少なもので、飯山市下境大原遺跡[19]、宮



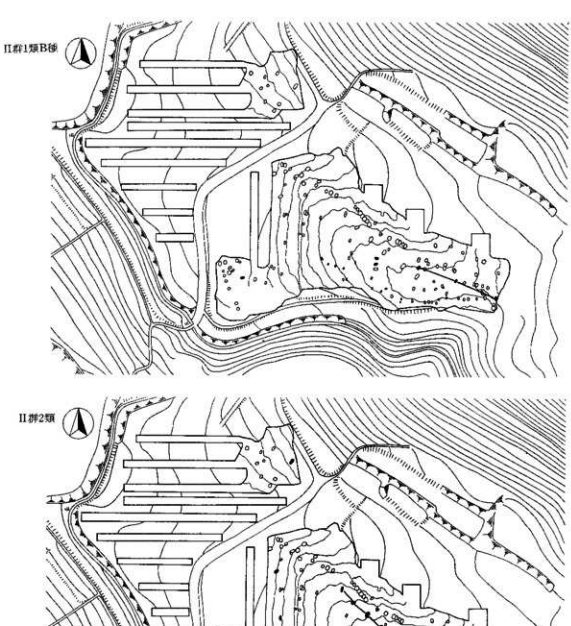


第75図　落し穴状土坑分布図（2）

士見町御射山西遺跡[20]に検出されているが、木遺跡のように配列を把握できた例はない。近県では新潟県岩原Ⅰ遺跡[21]などで木遺跡と同様な様相で落し穴が検出されており、本類型の分布等を考える際に興味が深い。

落し穴状土坑の配列　8類型に分類した落し穴状土坑について同類型同志についてその配列と分布を見てみたい。

Ⅰ群に帰属する落し穴状土坑内で中心となるⅠ群4類A種は、台地の中央よりやや北側に寄った位置に東西方向に走行する谷に面する北側斜面肩部に、台地の輪線に沿った形で位置する。東側の谷の最も奥まった



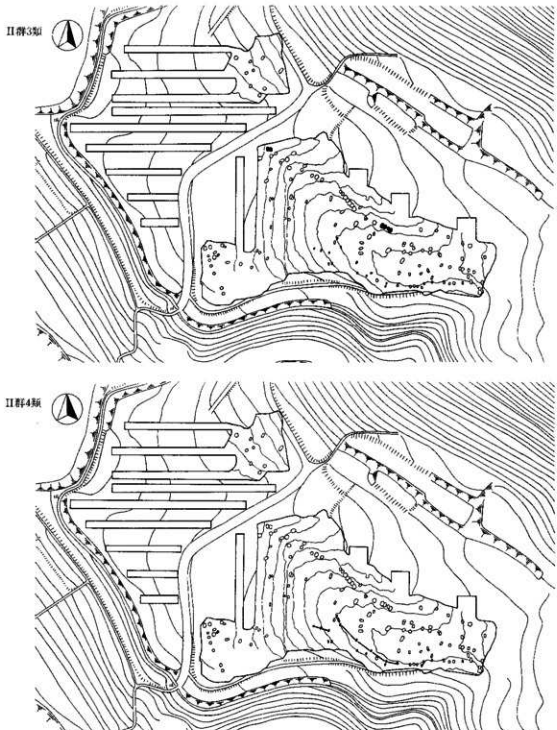
第76図　落し穴状土坑分布図（3）

位置には3列の配置が認められる。また、谷を挟んで対峙する北側山裾斜面にもほぼ並走する形で1列の配置が認められる。土坑は約3m～10m間隔で配されており、最も長い列で約34mに及ぶものが認められ、一定の計画の基に土坑が配されている様相を呈する。

I群4類B種はI群4類A種と同様な配置に1条新たに台地西縁辺を巡るように1条の列が認められる。

I群5類は明確な分布を示してはいないことより、他の群と組み合って展開する可能性が考えられる。

II群1類A種は落し穴状土坑の配列の中で最も複雑な配列を有する。基本的な配列はI群4類A種と同様



第77図　落し穴状土坑分布図（4）

に谷に沿った形で位置し、分布域も同様な傾向を示すが、新たに調査区東側台地南側縁辺に２列が構築され、ちょうど尾根状台地の最も縊れた部分を挟むような構成を採っている。最も長い列で約35mを測り、土坑間の距離は６m～８mとⅠ群４類A種列よりもやや土坑配列が密になっている。また、２ヶ所で一組となるような配列を示すものがかなり見られる。

Ⅱ群１類B種は調査区東側の尾根状台地の頂部に近い位置に占地し、１条の列をなす。列は長さ約33mで土坑間の距離は15m～17mを測り、かなり疎の状態で土坑が配される。

Ⅱ群2類の分布はⅡ群1類B種に類する範囲に占地する。土坑群内で最も尾根状台地の頂部に位置し、その配列は検出された土坑群のうちで最も整った形を有したものが1条配されている。列の長さは64mを測り、土坑間の距離は約7m前後でその配列には規則的な計画性を看取することができる。

Ⅱ群3類は列等は形成しないが、その占地はⅠ群4類A種、Ⅰ群4類B種と同様な位置関係に展開していることや土坑の形状等を考慮すると、本類はⅠ群4類A種、Ⅰ群4類B種等と組合わさって構成されていた可能性が考えられる。

Ⅱ群4類は他の類型とはやや異なる分布域を示し、台地南側斜面肩部に1条の列をなし占地する。列の長さは約40mを測り、地形に沿って弧状に並ぶ。土坑間の距離は制合不規則で、3m～8mの間隔を持つ。Ⅱ群1類A種の一部にも本類と同様な占地・配列を示すものがあるが、これらの列を構成する土坑を再検証すると、坑底規模や深さに類似性が認められるものが見られ、上面が削平され坑底のみが残ったものを本類としている可能性もあり得る。

以上のように各類型の配列状況について記述してきたが、配列の特徴をまとめると次のようになる。

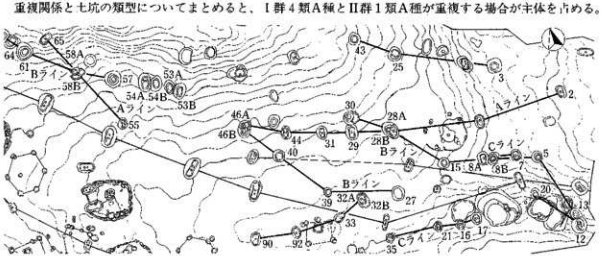
1、土坑は類型差によりその配列に相違が見られ、類型ごとに組合わさって列をなす傾向がある。

2、土坑の配列は尾根状台地の長軸方向に沿うように列をなし、方形基調の土坑の長軸方向は配置列の方向に直行する場合が多い。

3、土坑の配列は台地中央部に入り込む谷を意識し、この谷を囲むように構成される列と、尾根状台地の頂部に尾根の軸線に沿って構成される列、台地南側斜面に巡る列、台地西側斜面に巡る列の4タイプが認められ、各タイプが組み合わさって全体を構成しているものは少なく、類型別による配列の偏在性が認められ、Aグループとした群は谷を意識しているのに対して、Bグループの一部は台地斜面部に新たなる展開をみせるものが存在する。

落し穴状土坑の重複と時期落し穴状土坑はその殆どが単独で、落とし穴状土坑同志で重複関係を有するものは土坑は8号A・8号B、12号A・12号B、28号A・28号B、32号A・32号B、46号A・46号B、53号A・53号B、54号A・54号B、58号A・58号B、64号・65号・66号・67号、145号・146号の12ヶ所で極めて少ない。重複関係を整理することで時期が把握でき、同時存在の落し穴を抽出することができ得る。落し穴状土坑に重複が認められることや、数多くの土坑が割合雑多に分布することより、落し穴はかなりの時間幅の中で構築されたことが窺える。

重複関係と土坑の類型についてまとめると、Ⅰ群4類A種とⅡ群1類A種が重複する場合が主体を占める。



第78図　落し穴状土坑の配列とその重複関係（1／400）

このことはⅠ群4類A種とⅡ群1類A種が同時存在していなかったことを示し、時間差があることが考えられる。また、興味深い重複関係は64号から67号までのⅠ群4類A種とⅠ群4類B種が交互に重複している関係で、土層堆積の状況からⅠ群4類A種がⅠ群4類B種を切って構築されていることが判明している。53号A・53号Bの重複関係はⅡ群3類同志での重複で、同類型内で時間差があることを示している。また、これらの類型が同位置に隣接し繋がるように構築されていることを考慮すると、Ⅰ群4類A種とⅠ群4類B種は時間的に近い段階に構築された可能性を示しているのではないか。

落し穴状土坑内での重複関係の類例を挙げてきたが、この重複関係を落し穴群の配列に反映させることで、落し穴列の時間的配列を復元してみると、Ⅱ群1類A種で構成される配列Aライン（2号・4号・28号B・29号・31号・44号・46号B、55号・58号B・63号）が最も早く構築された可能性が高い。続いてⅠ群4類B種による列（64号・66号等）、次にBライン（13号・5号・8号・15号・28号A・30号、57号・58号A・61号・65号・67号）、Cライン（7号・8号A、12号・20号・17号・16号・21号・35号）の4段階の変遷を辿ることができる。この配列変遷を立地位置より見ると、北側谷部に面した斜面を中心に展開するものが、徐々に台地南側斜面屑部に移動して来ることを看取することができる。

落し穴の構築された時期を明らかにするような伴出遺物の検出はなく、他の遺構との重複関係等から時期を類推しかない。住居址との重複関係・集落との位置関係を整理してみると、第2号住居址を切ってⅡ群4類が構築される点、第3号・4号住居址に貼り床がなされたⅡ群1類A種・Ⅱ群1類B種が存在する点などを考慮すると、落し穴の構築時期にはかなりの時間幅があったことが窺え、落し穴に類型差・配列差・分布域差を時期的な差とも考えることができよう。

他の遺構との重複関係や配列位置・集落との関係より落し穴状土坑の時期を整理すると、集落が構成された段階の中期には物理的に落し穴が構築されていたとは考えがたい。土坑の重複関係から最も早い段階に構築されたものは北側谷に面した群を想定でき、1期 Ⅱ群1類A種によるAライン、2期 Ⅰ群4類B種による列、3期 Ⅰ群4類A種によるBライン、4期 Ⅱ群2類のライン、5期 Ⅱ群1類A種によるCライン、6期 Ⅱ群4類の台地南側斜面屑に展開するラインの6期を想定できる。これらの時期を特定する資料は得られてはいないが、遺跡より得られている土器の時期等より類推すると、前期初頭以前に1・2・3期が構築されている可能性が高い。6期は第2号住居址との関係から中期以降に構築された可能性が考えられる。以上のように類推できた結果より落し穴群は前期初頭以前に構築されていた群、前期前半以降から中期初頭以前までに構築された群、中期後半以降に構築された群と大まかに3段階の時期を設定することができよう。

まとめ　今回の調査により検出された落し穴状土坑は、様々な類型を呈しているが同類型同士で配列をなし、一定の構成を採っていることが把握された。落し穴の配列は獣道を意識し配列される場合と、落し穴猟の方法に関係を持っている場合とが考えられるようで、今回検出されたものの内北側谷部に面して並列した落し穴は、位置・配列等より考えると、獣道を通る動物が自然に落ちるのを待つような非積極的な狩猟に用いられたものとは考えにくく、深い穴を数多く計画的に配することや谷状地形との関係より、動物を巻狩式に追い込む猟に用いられた可能性が高い。なお、台地南側斜面屑部に位置する群は前者の例とはややその様相に変化が見られることより、獣道に配された落し穴の可能性が高い。

今回落し穴状土坑を8類型に分類した。土坑の形状差は狩猟対象動物の差、時間差と考えられ、今回の検出例からは、異なる類型のものが重複関係を有する点などより、類型差を時間差として捉えることができそうである。また、AグループとBグループのように大きな構造差を集団差として捉えることもできよう。今後種々の問題、規模の問題等を含めて再検討する必要があろう。

第VI章　結　語

米沢地区の霧ヶ峰南麓は古くより考古学調査が盛んに行われた地域で、柳畑遺跡、駒形遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡などの市域においても規模の大きな遺跡が、舌状地単位に遺跡群を構成しており、縄文時代の生活領域などを考える上に重要な地域として認識されていた。また、古くより膨大な量の黒曜石製石鏃や石器類の採集がなされていることより、背後に位置する和田峠付近より産する黒曜石を用いて石器製作を行った地域との捉え方がなされており、縄文時代の生業を考える上にも重要な地域として認識されていた。

今回の調査において上の平遺跡がほぼ中期全期を通じて存続していた集落であったことが判明し、台地上を東西に走る浅い谷を隔て南側集落と北側集落の2群より構成される環状集落であることが判明し、台地内で谷を隔てて時期により住居址の展開に差があることが判明した。また、仮定の段階ではあるが、周辺に位置するよせの向遺跡と密接な関係を有し、相互関係を保ちながら互いに時期的な動きを持っていることを想定でき、大きな遺跡群の一端を両遺跡が荷っていたと考えることができよう。

本遺跡をその立地環境等より、黒曜石製石器生産に関わる遺跡と想定されていた。実際調査により黒曜石剥片類等に石器生産に関わる資料が得られており、ある程度のウエイトを黒曜石製石器生産が占めていたことが判明したが、量的な部分を周辺に位置する他の遺跡と比較すると、黒曜石の消費量が多くないことより、本遺跡が中心的な集落ではなく、中心的集落の支村と考えることができよう。遺物の量や遺跡の存続時期幅等を考慮すると、本遺跡周辺では一ノ瀬・芝ノ木遺跡が主村と考えられ、本遺跡は深くこの遺跡と関わっていた可能性が考えられる。今後双方の遺跡の関係について遺構や遺物を通して再考しなければならない。

この地が単に縄文時代の集落だけではなく、落し穴群の存在から狩猟の場であったことも窺えた。落し穴は単独や少数のものではなく、計画的に多くの落し穴が配列されている点より、集団による巻狩的な集団猟がこの地において行われていたことが窺え、集団の狩り場領域であったことが判明した。想像を豊かにするならば藤原川・前鳴川による扇状地グループ領域に属する狩場の可能性が考えられ、扇状地付近全体の内の一端の組織を本遺跡が占めていたものと考えることができる。末端的なことではあるが、今回検出された掘り方が深く坑底に小孔を有さない特異な落し穴状土坑の検出があったが、本土坑は検出例の希少なもので、出自も含めて注目したい遺構であり、本遺跡の特異性を現しているものとも考えることができよう。

今回の調査により上の平遺跡の一端を垣間見ることができた。それによると縄文時代前期初頭以前に落し穴を用いた集団の狩場として利用され、中期に入り集落が形成され、集落が終焉を迎えると共に再度狩場にこの地が転ずることを把握できた。

今回論及できなかった集落内構成の問題、遺物の問題、周辺遺跡との関連等も含めて再検討を加える余地が充分にあり、今後資料の蓄積や詳細な分析を踏まえ上の平遺跡の持っている意義について考えなければならない。

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	挿図写真	上端規模 (m) 長軸	短軸	下端規模 (m) 長軸	短軸	長軸方向	深さ (cm)	坑底ピット数	坑底ピット深さ (cm)			中段	土坑類型	出土遺物	備考
第1号土坑	D-25	1.74	0.78	1.52	0.56	N 71° W	18	1	1.8				III群1類		
第2号土坑	C-24	1.38	0.98	1.00	0.41	N-5.5°-W	107.9	1	14.4			有	II群1類A種		
第3号土坑	D-23	1.53	1.52	0.54	0.53	N-2°-W	149.2					有	I群4類A種		
第4号土坑	C 22	1.50	1.04	0.94	0.33	N-1°-E	123.8	1	16.8			有	II群1類A種		
第5号土坑	B-23	1.25	1.18	0.43	0.40	N-3°-W	113.1					有	I群4類A種		
第6号土坑	A-24	1.79	1.60	0.90	0.30	N-19°-W	108.3	3	18.4	5.4	14.1	有	II群1類B種		
第7号土坑	B-23	1.27	1.10	0.73	0.55	N-2°-W	141.9					有	II群1類A種		
第8号A土坑	C-22	1.44	1.13	0.82	0.63	N-9.5°-E	128.4					有	II群1類A種		
第8号B土坑	C 22	1.23	1.06	0.50	0.47	N 16°-E	108.8					有	I群4類A種		
第9号土坑	B-21	1.10	1.00	0.87	0.80	N-59°-W	26.7						I群3類		
第10号土坑	B-21	0.88	0.82	0.69	0.65	N-1°-W	10.0	2	14.0	13.9			I群2類		
第11号土坑	B-23	1.85	0.70	1.75	0.49	N-7°-W	57.1	2	19.2	17.9			II群2類		
第12号土坑	A 24	1.16	1.03	0.3	0.29	N-40°-W	91.7						I群4類A種		
第13号土坑	A 24	1.65	1.50	0.68	0.27	N-89° W	122.6					有	II群1類A種		
第14号土坑	C-24	1.23	1.02	1.00	0.82	N 70°-E	34.6						III群1類		
第15号土坑	C 21	1.28	1.17	0.55	0.47	N-70° E	88.8					有	I群4類A種	中期後半管利3	
第16号土坑	A-21	1.07	0.99	0.65	0.49	N-3°-E	76.3	1	11.8			有	II群1類A種		
第17号土坑	A-22	1.30	1.10	0.80	0.50	N-2.5°-E	66.2	1	12.2			有	II群1類A種	大甘茶碗片1	
第18号土坑	B 22	1.10	0.86	0.56	0.54	N 71° E	86.3						I群3類		
第19号土坑	A-22	0.90	0.44	0.76	0.40	N-6.5°-W	21.7	1					II群4類		
第20号土坑	B-23	1.05	0.90	0.53	0.45	N-70°-W	77.4					有	II群1類A種		
第21号土坑	A-21	1.05	0.97	0.55	0.37	N-2.5° E	69.0	1	21.7			有	II群1類A種		
第22号土坑	E 22	1.91	1.32	1.20	0.60	N 26° W	87.2	1	35.2			有	II群1類B種		
第23号土坑	E 22	1.37	1.13	1.11	0.75	N-4°-W	40.0	1	10.7				III群1類		
第24号土坑	E-22	1.70	1.00	1.43	0.63	N-49° W	49.1						II群1類		
第25号土坑	E-21	1.50	1.38	0.72	0.69	N-13.5° E	89.5					有	I群4類A種		
第26号土坑	C-21	1.42	0.85	0.10	0.56	N-22°-E	53.7	2	17.2	14.7			II群2種		
第27号土坑	B-20	1.52	0.42	0.92	0.62	N-2° W	109.7	1	25			有	I群4類A種		
第28号A土坑	D-20	1.62	1.34	0.45	0.40	N 23° W	124.3					有	I群1類A種		
第28号B土坑	D-21	1.80	1.07	1.00	0.50	N 3°-W	117.7	1	44.5			有	II群1類A種		
第29号土坑	D-20	1.62	1.29	0.54	1.10	N-2.2°-E	94.8	1	40.5			有	II群1類A種		
第30号土坑	D-20	1.16	0.95	0.59	0.40	N-5°-E	93.6					有	I群4類A種		
第31号土坑	D-19	1.49	1.14	0.86	0.37	N-1.5°-E	62.4	1	30.6			有	II群1類A種		
第32号A土坑	B-20	1.14	0.87	0.80	0.43	N 3°-E	95.0	1	3.4			有	II群1類A種		
第32号B土坑	B-22	1.23	1.16	1.05	0.90	N-2°-E	73.4	1	3.4				I群5類		
第33号土坑	B-19	1.23	0.80	1.03	0.45	N-40° W	45.0	1	6.9			有	II群1類A種		
第34号土坑	B 20	1.77	0.57	1.60	0.37	N-19.5° E	18.3	4	15.1	10.7	10.3	11.4	II群2類		
第35号土坑	A-20	1.07	0.86	0.66	0.46	N 23°-E	66.3	1	11.1			有	II群1類A種		
第36号土坑	A-19	0.93	0.56	0.85	0.43	N-5°-W	26.3	1	6.5				II群4類		
第37号土坑	A-19	1.20	0.95	0.97	0.87	N 5°-W	22.5						I群3類		
第38号土坑	A 19	1.02	1.60	0.83	0.41	N-9°-W	42.3	1	14.6				II群4類		

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模(m) 長軸	上端規模(m) 短軸	下端規模(m) 長軸	下端規模(m) 短軸	長軸方向	深さ(cm)	坑底ピット ピット数	坑底ピット深さ(cm)				中段	土坑類型	出土遺物	備考
第39号土坑	C 19	1.00	0.75	0.55	0.50	N-0.5°-W	77.1						有	Ⅰ群4類A種		
第40号土坑	D 18	1.40	1.31	0.65	0.59	N-14°-W	103.0						有	Ⅰ群4類A種		
第41号土坑	C-17	2.20	1.16	1.72	0.47	N-36°-E	35.0	2	47.8	26.6			有	Ⅱ群2種		
第42号土坑	D-18	1.63	1.05	0.85	0.47	N-27°-E	58.7	2	26.8	25.4			有	Ⅱ群1類B種		
第43号土坑	F-20	1.47	1.30	0.62	0.55	N-8°-W	87.9						有	Ⅰ群4類A種		
第44号土坑	D-18	1.44	0.97	0.93	0.34	N-5°-E	93.5	1	28.6				有	Ⅱ群1類A種		
第45号土坑	D-18	1.53	1.29	0.60	0.43	N-30°-E	136.6						有	Ⅰ群4類B種		
第46号A土坑	E 18	1.43	0.76	0.84	0.38	N-88°-E	87.4	1	35.2				有	Ⅱ群1類A種		
第46号B土坑	D 17	1.43	1.36	0.48	0.39	N-13°-E	108						有	Ⅰ群4類A種		
第47号土坑	D-16	2.40	1.80	1.50	0.40	N-40.5°-E	42.5	2	31.4	30.2			有	Ⅱ群2種		
第48号土坑	E-18	1.29	0.89	1.07	0.70	N-9°-W	25.9	1	5.8				有	Ⅲ群1類		
第49号土坑	F 19	1.58	1.14	1.10	0.47	N-5°-W	68.4	1	33.6				有	Ⅱ群1類A種		
第50号土坑	F-18	1.05	0.91	0.84	0.83	N-69°-W	92.0	1	53.2				有	Ⅰ群4類B種		
第51号土坑	F-17	1.38	1.28	0.95	0.85	N-7.5°-E	25.6						有	Ⅲ群1類		
第52号土坑	F 17	1.82	1.30	1.45	1.02	N-18.5°-E	23.3							Ⅲ群1類	中期後半加曽利E系1	
第53号A土坑	F-16	1.45	1.02	0.63	0.35	N-63°-E	122.8						有	Ⅱ群3類		
第53号B土坑	F-16	1.70	1.23	0.70	0.43	N-16°-E	113.1						有	Ⅱ群3類		
第54号A土坑	F-16	1.98	1.20	0.98	0.42	N-18°-E	185.6						有	Ⅱ群3類	中期後半曽利系2	
第54号B土坑	F 16	1.63	1.10	0.75	0.45	N-15°-E	150.5						有	Ⅱ群3類		
第55号土坑	E 15	1.22	1.00	0.66	0.28	N-5°-E	115.8	1	37.2				有	Ⅱ群1類A種		
第56号土坑	E-15	2.32	1.62	1.60	0.63	N-28°-E	60.1	2	38.5	22.3			有	Ⅱ群2種	中期後半唐草文系1	
第57号土坑	F-15	1.72	1.70	0.57	0.55	N-16.5°-W	163.3						有	Ⅰ群4類A種		
第58号A土坑	G 14	0.98	0.84	0.48	0.35	N-48°-E	125.7							Ⅰ群4類A種		
第58号B土坑	G-14	1.55	0.82	0.16	0.15	N-38.5°-E	57.2	1	34.8					Ⅱ群1類A種		
第59号土坑	F-14	2.37	1.54	1.63	0.55	N-32°-E	48.4	2	36.3	46.2			有	Ⅱ群2種		
第60号土坑	G 15	1.35	1.34	0.88	0.80	N-46°-W	59.5							Ⅰ群3類	前期末諸磯c1	
第61号土坑	G 13	1.93	1.69	0.65	0.58	N-10.5°-W	185.4						有	Ⅰ群4類A種		
第62号土坑	G-12	2.05	0.94	1.68	0.63	N-68°-E	38.6	2	12.4	37.9			有	Ⅱ群2種		
第63号土坑	G 14	1.50	0.80	1.07	0.50	N-37°-E	37.8	1	25.0				有	Ⅱ群1類A種		
第64号土坑	H-13	1.50	1.13	0.86	0.57	N-24°-E	165.6							Ⅰ群4類B種		
第65号土坑	H 13	1.91	1.53	0.82	0.70	N-42°-E	196.3						有	Ⅰ群4類A種		
第66号土坑	H-13	1.22	1.31	0.80	0.45	N-26.5°-E	165.4						有	Ⅰ群4類B種		
第67号土坑	H-13	1.76	1.63	0.65	0.60	N-51°-W	171.3						有	Ⅰ群4類A種		
第68号土坑	I 12	1.26	1.17	0.60	0.38	N-10°-E	143.2						有	Ⅰ群4類B種		
第69号土坑	I-12	1.30	1.10	0.52	0.50	N-19°-E	146.0						有	Ⅰ群4類A種		
第70号土坑	H-11	2.16	0.80	1.80	0.45	N-7°-E	50.3	4	14.1	44.7	16.1	31.2		Ⅱ群2類	中期後半唐草文9	
第71号土坑	H-11	1.24	0.95	1.02	0.65	N-11.5°-E	11.3						有	Ⅲ群1類		
第72号土坑	J-11	1.44	1.23	0.80	0.65	N-26°-E	160.3						有	Ⅰ群4類A種		
第73号土坑	J-10	1.68	1.55	0.68	0.40	N-37°-E	194.5						有	Ⅰ群4類B種		
第74号土坑	J 10	1.37	1.36	0.56	0.48	N-51.5°-W	117.1						有	Ⅰ群4類A種		
第75号土坑	H-14	1.14	1.10	0.85	0.82	N-18.5°-E	44.6							Ⅰ群3類		

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模（m）		下端規模（m）		長軸方向	深さ	坑底ピット			中段	土坑類型	出土遺物	備考
		長軸	短軸	長軸	短軸		(cm)	ピット数	坑底ピット深さ	(cm)				
第76号土坑	E-14	1.88	1.00	1.52	0.75	N-70°-W	26.3	2	47.9	46.1	有	II群1類B種		
第77号土坑	B-15	1.00	0.67	0.79	0.53	N-34°-E	42.5	1	40.2			II群4類		
第78号土坑	B-14	0.98	0.62	0.75	0.37	N-13.5°-E	62.5	1	22.4		有	II群1類A種		
第79号土坑	C-14	1.05	0.85	0.85	0.40	N-13.5°-E	33.3	1	31.0			II群4類		
第80号土坑	D 12	1.10	0.71	0.90	0.46	N-1.5° W	36.1	1	38.4		有	II群4類		
第81号土坑	E-11	1.11	1.09	0.93	0.90	N-71.5°-W	32.2					I群2類	不明1	
第82号土坑	E-11	1.24	1.17	1.23	1.23	N-5°-E	57.5					I群1類	前期末諸磯c1 中期初頭1 不明6	
第83号土坑	E-12	1.28	0.60	1.10	0.40	N-17.5° N	27.5	1	35.2			II群4類		
第84号土坑	B-14	0.82	0.62	0.59	0.40	N-22.5°-E	61.0	1	21.5		有	II群4類		
第85号土坑	B-13	1.31	1.12	0.40	0.66	N-5°-W	56.4	1	33.2		有	II群1類A種		
第86号土坑	A 16	0.86	0.75	0.76	0.66	N-32°-W	101.4					I群2類		
第87号土坑	A-16	0.76	0.47	0.37	0.38	N 3°-E	21.5	1	28.9			II群4類		
第88号土坑	A-16	0.85	0.55	0.72	0.47	N-3°-E	23.3	1	35.9			II群4類		
第89号土坑	A-16	0.88	0.85	0.65	0.61	N-5°-W	67.1					I群2類		
第90号土坑	B-17	1.42	1.00	0.95	0.37	N 12°-E	64.6	1	26.0		有	II群1類A種		
第91号土坑	A-19	1.00	0.85	0.81	0.52	N-6°-E	81.4				有	II群4類		
第92号土坑	B-18	1.30	0.90	0.92	0.40	N-5°-W	46.7	1	29.9		有	II群1類A種		
第93号土坑	A-18	1.31	1.20	1.14	0.98	N-2.5°-E	43.3					I群2類		
第94号土坑	A-18	1.20	0.58	0.99	0.48	N-9°-W	35.2	1	14.4			II群1類A種		
第95号土坑	A-18	1.25	1.22	0.56	0.53	N-34°-E	55.0	1	27.9			I群5類		
第96号土坑	A-19	1.20	0.80	0.92	0.38	N-1°-E	51.5	1	9.5			II群1類A種		
第97号土坑	C 12	0.90	0.82	0.72	0.64	N 17.5°-E	54.8					I群2類		
第98号土坑	D-14	2.05	1.00	1.58	0.61	N-69°-E	72.0				有	II群1類A種		
第99号土坑	D-14	1.70	0.92	1.47	0.50	N-68°-E	64	2	54.0		有	II群1類B種		
第100号土坑	E-12	1.45	1.00	1.23	0.50	N 2.5°-E	47.5				有	II群1類A種		
第101号土坑	C 11	0.95	0.51	0.81	0.40	N-18°-E	33.4	1	31.2			II群4類		
第102号土坑	C-12	1.08	0.62	0.90	0.40	N 5°-W	38	1	23.4			II群4類		
第103号土坑	C 11	0.98	0.94	0.80	0.70	N-17°-E	70.5					I群2類		
第104号土坑	D-11	0.85	0.58	0.45	0.34	N-5°-E	63.8				有	II群4類？		
第105号土坑	D-10	0.82	0.57	0.51	0.34	N-12.5°-E	54.1	1	12.7		有	II群4類		
第106号土坑	D-9	1.40	1.30	1.00	0.90	N-7.5°-E	57.8					I群2類	中期初頭11、不明8	
第107号土坑	E 10	1.15	0.52	0.87	0.66	N-11.5° W	11.3	2	27.7	31.5		II群1類B種		
第108号土坑	E-9	0.70	0.68	0.60	0.55	N 7° W	24.9	1	22.0			I群1類		
第109号土坑	E-9	0.76	0.65	0.60	0.55	N-5°-E	57.9					I群2類		
第110号土坑	E 8	1.12	1.10	0.63	0.60	N-7° E	69.6					I群2類	不明1	
第111号土坑	D 9	1.24	1.00	1.01	0.81	N-14° E	52.1					I群2類		
第112号土坑	E-8	0.73	0.72	0.52	0.48	N-81°-W	54.3					III群1類		
第113号土坑	E-9	1.10	0.89	0.88	0.75	N-61°-E	31.9					I群2類	中期後半曽利II2	
第114号土坑	E-9	1.03	1.02	0.89	0.80	N-63°-W	46					I群2類	中期前半井戸尻1 中期後半唐草文系7	
第115号土坑	F-9	1.23	1.21	0.94	0.89	N 20.5°-E	69					I群2類	中期後半唐草文系2 不明1	
第116号土坑	F-9	0.88	0.80	0.67	0.66	N-39°-W	22.6					I群2類	中期後半曽利III2 不明1	

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模(m) 長軸	上端規模(m) 短軸	下端規模(m) 長軸	下端規模(m) 短軸	長軸方向	深さ(cm)	坑底ピット ピット数	坑底ピット 深さ(cm)	中段	土坑類型	出土遺物	備考
第117号土坑	F-9	1.04	0.84	0.86	0.66	N 41°-E	7.4				I群3類	不明3	
第118号土坑	F-9	0.87	0.76	0.66	0.54	N 13.5°-E	80.0				I群1類	中期後半曽利I2	1号方形
第119号土坑	H-8	1.36	0.93	1.10	0.70	N-46°-W	30.1				III群1類	不明3	
第120号土坑	H-8	0.86	0.80	0.62	0.55	N 15°-E	45.3			有	I群2類		
第121号土坑	H-9	1.50	0.63	1.37	0.46	N-17.5°-E	32.7	1	39.5		II1類A種	不明2	
第122号土坑	G-8	0.88	0.84	0.46	0.43	N 49°-W	61			有	III群1類		
第123号土坑	G-9	1.23	1.17	0.96	0.84	N-20°-E	21.9				III群1類	前期末諸磯c1	
第124号土坑	H-9	0.69	0.66	0.50	0.47	N-87°-E	47.8	1	4.8		I群3類	中期後半曽利I2 不明2	
第125号土坑	G-8	1.12	0.69	0.83	0.37	N-25°-E	71.2	1	36.9	有	II群1類A種		
第126号土坑	E-8	1.01	0.90	0.87	0.68	N-6°-E	22				III群1類		
第127号土坑	H-8	1.58	0.70	1.32	0.56	N 16.5°-E	60.7	1	55.6	有	II群1類A種		
第128号土坑	G-10	1.12	0.95	0.82	0.70	N-9.5°-W	16.6	1	26.6		III群1類	中期後半曽利II6 不明28	
第129号土坑	F-9	0.83	0.74	0.67	0.57	N 75°-W	83.8				I群1類		1号方形
第130号土坑	E-9	0.77	0.72	0.62	0.56	N-37° E	76.2				III群1類		
第131号土坑	F-8	1.25	0.98	0.61	0.57	N 21°-W	76.5				III群1類		
第132号土坑	G-8	0.94	0.60	0.80	0.45	N-85.5°-E	87	1	34		II群4類		
第133号土坑	C-9	1.35	1.25	1.15	1.00	N 32°-E	73.8				I群2類	中期後半加曽利E14 曽利IV4	
第134号土坑	C-8	1.13	1.02	0.94	0.82	N 80°-W	41.4				III群1類		
第135号土坑	C-8	1.16	1.12	0.84	0.86	N-12°-W	76.9				I群3類		
第136号土坑													
第137号土坑	J-8	1.27	1.16	0.43	0.42	N 12°-E	88.9			有	I群4類A種		
第138号土坑	I-8	1.64	1.33	0.97	0.92	N-76°-E	66.1				I群2類	不明1	
第139号土坑	I-12	1.27	1.20	1.05	0.80	N-32.5°-W	11.2				I群3類	中期前半藤内I16	
第140号土坑	J-9	1.36	1.26	0.65	0.33	N-11.5° E	79.2			有	II群3類		
第141号土坑													
第142号土坑	K-9	1.88	1.50	0.28	0.15	N-50.5° W	127.9				II群1類A種		
第143号土坑	K-8	1.63	1.52	0.65	0.58	N-89°-E	105.3			有	I群4類A種		
第144号土坑	K-8	2.00	1.94	0.64	0.60	N-8°-E	160.5				I群4類A種		
第145号土坑	K-7	2.33	1.30	1.73	0.53	N-65°-E	46.7	1	32.4	有	II群1類A種		
第146号土坑	K-7	1.25	1.15	0.43	0.37	N-7.5°-W	93.3			有	I群4類A種		
第147号土坑	L-8	0.81	0.69	0.50	0.47	N-4° E	19.7				I群3類		
第148号土坑	L-8	1.14	0.93	0.89	0.70	N 86.5°-E	43.9				I群2類	中期後半曽利II2	
第149号土坑	L-8	2.20	1.23	0.90	0.40	N-63°-E	127.2	1	42.2	有	II群1類A種		
第150号土坑	L-7	1.39	0.37	0.77	0.71	N 6.2° W	47.2			有	I群2類		
第151号土坑	E-9	0.85	0.60	0.61	0.41	N-8°-E	95.5				I群1類		1号方形
第152号土坑	E-8	0.46	0.45	0.37	0.35	N-68°-W	7.2				I群1類		1号方形
第153号土坑	H-7	1.01	0.92	0.67	0.63	N-12° E	96.4			有	I群3類	不明2	
第154号土坑	G-7	0.92	0.87	0.79	0.67	N-12.1°-E	21.4				I群2類		
第155号土坑	G-7	1.25	1.12	1.00	0.89	N-86°-E	51.3				I群2類	中期後半曽利IV4 不明8	
第156号土坑	G-7	1.06	1.04	0.82	0.81	N-4° E	43.2				I群2類		
第157号土坑	H-7	1.18	0.95	0.77	0.47	N-26.5°-E	62.7	1	18.4	有	II群1類A種		

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模 (m) 長軸	上端規模 (m) 短軸	下端規模 (m) 長軸	下端規模 (m) 短軸	長軸方向	深さ (cm)	坑底ピット ピット番	坑底ピット 坑底	坑底ピット ピット深さ	坑底ピット (cm)	中段	土坑類型	出土遺物	備考
第158号土坑	H-6	1.65	0.67	1.52	0.61	N 29° E	23	1	34.7				II群1類A種		
第159号土坑															
第160号土坑	H-6	0.96	0.92	0.82	0.76	N-61°-W	52.5						I群2類	中期後半曽利V27 不明13	
第161号土坑	H-6	0.90	0.78	0.75	0.52	N-45°-W	19.2						I群2類	不明1	
第162号土坑	G-6	0.87	0.81	0.72	0.64	N 86.5°-E	62.2						I群2類	中期後半曽利V2 不明7	
第163号土坑	F-6	1.23	0.77	0.82	0.57	N-0°-W	55.5					有	III群1類		
第164号土坑	F-6	0.91	0.90	0.76	0.73	N-7°-W	64.7						I群2類	不明1	3号方形
第165号土坑	F-6	1.29	0.90	0.95	0.74	N-44°-W	53.8						III群1類	不明1	
第166号土坑	I-7	0.83	0.72	0.66	0.62	N 14°-E	35.6						I群3類	中期後半曽利II4 不明6	
第167号土坑	H-7	1.44	1.29	1.03	0.95	N-21°-E	36.9						I群3類		
第168号土坑	H-7	0.75	0.66	0.57	0.54	N 7°-W	143						I群2類		
第169号土坑	F-5	1.03	0.62	0.89	0.43	N-62°-W	37.1						III群1類	不明2	
第170号土坑	E-6	0.90	0.88	0.68	0.67	N 9° E	48.1						I群2類		3号方形
第171号土坑	E-6	1.03	0.84	0.86	0.70	N-5°-W	63.6						I群2類		3号方形
第172号土坑	E-6	0.82	0.80	0.70	0.58	N 12° E	193.5						I群2類	中期初頭2	3号方形
第173号土坑	E-6	0.65	0.61	0.54	0.51	N-31°-E	67						I群2類	不明2	3号方形
第174号土坑	F-6	0.38	0.34	0.30	0.24	N 0°-W	16.5						II群2類		
第175号土坑	E-6	0.59	0.57	0.45	0.44	N-61°-W	29.7						I群2類	不明4	
第176号土坑	D-6	0.67	0.55	0.45	0.44	N 70° W	46.3						I群3類	中期前半藤内1 平出3A1	
第177号土坑	D-6	0.96	0.64	0.69	0.53	N-68°-W	31						I群3類	不明2	
第178号土坑	D-6	0.68	0.47	0.50	0.27	N-15°-E	51.3						I群3類	不明1	
第179号土坑	D-6	1.16	1.13	0.55	0.48	N 50.5°-E	76.5	1	23.9			有	I群5類	中期前半井戸尻III6 不明11	
第180号土坑	D-6	1.05	1.00	0.60	0.57	N-47° E	98.1					有	I群2類	不明1	
第181号土坑	C-6	0.86	0.77	0.71	0.68	N 49° W	70.3						I群2類	中期後半曽利11 不明4	
第182号土坑	C-6	0.96	0.90	0.62	0.41	N 57.5°-E	109.4	1	34.4			有	II群1類A種		
第183号土坑	D-7	0.94	0.91	0.70	0.67								I群2類		4号方形
第184号土坑	D-7	0.69	0.66	0.44	0.42	N-4°-W							I群2類		4号方形
第185号土坑	D-7	0.72	0.60	0.47	0.46	N-3°-W	65.8						I群2類		4号方形
第186号土坑	C-6	1.23	1.07	0.74	0.89	N-55°-W	65.8						I群2類		
第187号土坑	C-6	0.87	0.84	0.72	0.70	N-10°-W	61.5						I群2類		
第188号土坑	R-7	2.35	1.12	2.08	1.36	N-36°-E	101.	4	21.1	13.2	26.1	15.7	有	II群2類	
第189号土坑	D-7	1.17	1.04	0.88	0.75	N-6° W	66.3						I群2類	中期後半唐草文系13	
第190号土坑	C-7	0.76	0.68	0.55	0.48	N 80°-E	77.6						I群2類		4号方形
第191号土坑	D-7	1.05	0.91	0.76	0.68	N-15°-W	51.2						I群2類		
第192号土坑	C-7	0.66	0.60	0.40	0.36	N-0.5°-W	81.9						I群2類		4号方形
第193号土坑	B-7	1.14	1.24	1.07	1.03	N 4.5°-E	71.6						I群2類	中期後半曽利II3 不明4	
第194号土坑	Q-7	1.02	1.00	0.76	0.72	N-55°-W	47.4						I群2類	中期前半斜行沈線系1 不明3	
第195号土坑	Q-7	1.10	1.07	0.73	0.72	N-8° W	54.6					有	I群2類		
第196号土坑	Q-7	0.89	0.78	0.65	0.60	N 82°-W	40.5						I群2類		
第197号土坑	Q-6	0.65	0.49	0.54	0.36	N-41° E	18.6	1	13.7				III群1類		
第198号土坑	Q-6	0.89	0.79	0.65	0.64	N-7°-W	57.1						I群2類		

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模（m）		下端規模（m）		長軸方向	深さ	底ピット				中世	土坑類型	出土遺物	備考
		長軸	短軸	長軸	短軸		(cm)	ピット数	底ピット深さ（cm）						
第199号土坑	R-6	1.56	1.04	1.20	0.85	N-29°-W	33.4					有	III群1類		
第200号土坑	D 2	1.63	0.97	1.37	0.67	N-87° W	36.3					有	III群1類		
第201号土坑	T-6	1.79	1.10	1.56	0.80	N-29° E	55.8	1	49.3			有	II群1類A種		
第202号土坑	S-5	1.72	1.70	0.69	0.64	N-17° E	162.4					有	I 群4類A種		
第203号土坑	S-5	1.38	0.64	0.76	0.50	N 33° K	28.8	1	51.6				II群1類A種		
第204号土坑	S 4	1.37	0.82	0.98	0.65	N-65° E	22.1						III群1類		
第205号土坑	S-4	1.20	1.117	0.90	0.89	N 69°-W	27.3						I 群3類		
第206号土坑	S 4	1.17	0.86	0.76	0.45	N-58° E	28						I 群3類		
第207号土坑	S-3	1.75	1.39	0.82	0.40	N 38°-E	103.7	1	41.6			有	II群1類A種		
第208号土坑	Q-6	1.66	1.65	0.65	0.64	N-19.5°-E	186.3					有	I 群4類A種		
第209号土坑	R 4	0.74	0.63	0.36	0.32	N-26° E	59.1					有	I 群3類	不明2	
第210号土坑	R-4	1.56	1.30	0.75	0.30	N 51° E	116.1	1	27.8			有	II群1類A種		
第211号土坑	P 5	1.01	0.92	0.67	0.60	N-82°-E	48.3					有	I 群2類		
第212号土坑	P-5	1.45	1.32	0.73	0.45	N-18°-E	114.1	1	38.6			有	II群1類A種		
第213号土坑	Q-4	1.00	0.82	0.80	0.55	N 86°-E	43.3						III群1類		
第214号土坑	B-5	0.91	0.74	0.77	0.62	N-20° E	49.6						III群1類		
第215号土坑	A-4	1.32	0.97	1.06	0.84	N 73.5°-W	44.9						I 群2類		
第216号土坑	A-6	0.96	0.93	0.75	0.73	N-4°-E	84.8					有	I 群2類	不明6	
第217号土坑	D-7	0.70	0.64	0.57	0.59	N-8°-W	80.9						I 群2類		4号方形
第218号土坑	D-7	1.10	0.97	0.84	0.77	N-6°-W	51.8						I 群2類		
第219号土坑	A-4	0.85	0.82	0.77	0.64	N 10°-E	51.7						I 群2類		
第220号土坑	7'-3	1.37	1.05	0.47	0.30	N 17° E	109.8					有	I 群4類B種		
第221号土坑	A-2	1.56	1.46	0.62	0.41	N-62°-E	113.9					有	I 群4類B種		
第222号土坑	B-2	1.16	1.11	0.60	0.46	N-31°-E	106.4						I 群4類B種		
第223号土坑	A 2	0.92	0.85	0.73	0.72	N-11°-W	60.2						I 群2類		
第224号土坑	B-2	0.99	0.76	0.84	0.59	N 35°-W	25						I 群2類		
第225号土坑	B 3	0.72	0.61	0.57	0.47	N 86°-W	58						I 群2類		
第226号土坑	B-3	0.80	0.76	0.65	0.60	N-85°-E	68.3						I 群2類		
第227号土坑	A 2	1.53	1.37	0.99	0.95	N-76°-E	76					有	I 群2類		
第228号土坑	A 2	0.95	0.72	0.66	0.50	N 45° E	44.4					有	I 群2類	不明1	
第229号土坑	C 4	1.36	1.31	0.68	0.42	N 86° W	30.3	1				有	II群1類A種	不明1	
第230号土坑	B 2	1.16	1.01	1.06	0.83	N 59° W	79.3						I 群2類	中期前半戸尻III3 不明2	
第231号土坑	A 2	0.85	0.47	0.66	0.40	N-7°-W	60.6						III群1類	中期前半8	
第232号土坑	A-2	1.04	0.55	0.87	0.40	N-0.5°-E	28.8						III群1類		
第233号土坑	A 2	0.61	0.30	0.50	0.17	N-0.1°-E	38.5						III群1類	中期後半曾利2 不明1	
第234号土坑	A-2	0.70	0.44	0.52	0.17	N 13° W	52.3						III群1類	中期前半井戸尻III3	
第235号土坑	7'-2	0.95	0.70	0.80	0.56	N-45°-E	44					有	III群1類	不明1	
第236号土坑	B-2	1.38	1.32	0.53	0.30	N 68° E	93.7					有	I 群4類B種	不明3	
第237号土坑	B-2	1.16	1.06	0.99	0.75	N-75°-E	24						I 群2類	中期後半曾利12 不明2	
第238号土坑	B-3	1.05	0.98	0.72	0.67	N 0.1° E	35.5						I 群2類		
第239号土坑	B-3	0.78	0.67	0.56	0.47	N-81°-W	29						I 群3類		

上の平遺跡土坑一覧表

遺構番号	検出位置	上端規模 (m)		下端規模 (m)		長軸方向	深さ	底面ピット				中段	土坑類型	出土遺物	備考
		長軸	短軸	長軸	短軸		(cm)	ピット数	底ピット	深さ	(cm)				
第240号土坑	C 2	1.37	1.15	0.52	0.51	N 54.5° E	98.7					有	I群4類B種		
第241号土坑	D-3	1.05	1.03	0.89	0.85	N 11° E	112	1	24.5				I群3類		
第242号土坑	B 1	1.09	1.02	0.90	0.84	N 16° E	23.3						I群2類	中期後半曽利II1 加曽利EI 不明2	
第243号土坑	B 1	1.03	0.82	0.60	0.47	N-17°-E	89.9						I群2類	中期後半曽利II2 唐草文系3 不明8	
第244号土坑	D 2	1.50	1.46	0.52	0.50	N 49° W	98.5					有	I群4類B種		
第245号土坑	D-3	1.39	1.35	0.77	0.71	N-24°-E	112	1	24.5			有	I群5類		
第246号土坑	B-3	0.75	0.54	0.65	0.50	N-76°-E	93						I群3類		
第247号土坑	C-3	0.97	0.91	0.74	0.72	N-72°-W	30						I群2類		
第248号土坑	C 3	1.95	0.89	1.55	0.64	N 88° E	28.7	2	34.4	32.9			II群1類B種		
第249号土坑	C-3	1.01	0.92	0.72	0.71	N-16°-E	33.7						I群3類		
第250号土坑	D-2	1.02	0.80	0.75	0.39	N-1°-E	99					有	II群2類		
第251号土坑	D-2	1.76	1.03	1.47	0.62	N-70°-E	36.7	3	31	35.2	32.7	有	II群2種		
第252号土坑	C-2	1.71	1.66	0.66	0.43	N-39.5°-E	71.9	1	29.3			有	I群5類		
第253号土坑	D-2	1.15	0.72	0.99	0.50	N-52°-E	8						III群1類		
第254号土坑	D-1	1.62	1.56	0.80	0.55	N-39.5° E	60.8	1	34.4			有	I群5類		
第255号土坑	D-6	1.10	0.89	0.65	0.34	N-28°-E	86.1	1	23.8			有	II群1類A種		
第256号土坑	B 5	1.11	0.71	0.89	0.54	N-27°-E	31.9	1	42.7			有	II群1類A種		
第257号土坑	L-7	1.29	1.24	0.66	0.62	N-5°-W	115.8					有	I群4類A種		
第258号土坑	L 6	1.74	1.63	0.46	0.42	N-89.5°-W	103.6					有	I群4類A種		
第259号土坑	L-6	1.51	1.38	0.508	0.205	N 4° E	181.5					有	II群3類		
第260号土坑	L 6	1.83	1.32	0.60	0.45	N-2.5°-W	179.2					有	II群3類		
第261号土坑	K 6	1.91	1.90	0.47	0.45	N-16°-W	129.1					有	I群4類A種		
第262号土坑	D-2	1.20	0.77	0.99	0.56	N-41°-E	11.1	1	13.4				II群1類A種		
第263号土坑	B-3	0.56	0.47	0.42	0.33	N 80° E	36.3						I群2類		
第264号土坑	T-6	2.10	1.07	1.93	0.77	N 45.5° E	37.3	3	36.5	16.5	37.9		II群2種		
第265号土坑	D 3	1.42	0.77	0.70	0.64	N-47°-W	15.0	2	7.3	3.6			II群2類		
第266号土坑	C 8	0.83	0.79	0.55	0.55	N-1.5°-W	43.3	1	29.5				I群3類		
第267号土坑	F 12	1.05	0.70	0.95	0.56	N-19°-E	64.0	1	36.0				II群1類A種		
第268号土坑	D 17	0.70	0.53	0.63	0.40	N-37°-W	26.2	1	11.8				II群4類		
第269号土坑	J-6	1.40	0.85	1.20	0.64	N 42° E	46.0	1	65.9				II群1類A種		

註

(1) 藤森栄一　1969「茅野市寄の台の土器」信濃考古28 長野県考古学会

(2) 茅野市教育委員会　1978『よせの台遺跡』

(3) 武藤雄六　1965「長野県茅野市北大塩一本木発見の双口土器」『信濃Ⅲ17—8』信濃史学会

(4) 米沢考古学クラブ　1973『古道—霧ケ峰南部における先史時代の黒曜石運搬ルートと考えられる古道の調査—』

(5) 鳥居龍蔵　1924『諏訪史第1巻』信濃教育会諏訪部会

(6) 宮坂英弌　1948『原住民族の遺蹟—八ケ岳山麓尖石遺跡の研究—』

(7) 宮坂虎次　1986「第2章縄文時代第1節概説・霧ケ峰山麓の遺跡 16上の平遺跡」『茅野市史上巻』茅野市教育委員会

(8) 小池岳史　1984「Ⅲ発掘された遺構と遺物 1縄文時代の遺構と遺物 (1)住居址」『立石遺跡』茅野市教育委員会

(9) 石井 寛・他　1990「4.遺構とその出土遺物 (1)縄文時代の住居址とその出土遺物 c.後期の住居址とその出土遺物」『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター

(10) 斎藤幸恵　1986「第1章先土器時代第5節2先時代の変遷」『茅野市史上巻』茅野市教育委員会

(11) 功刀 司　1994「八ケ岳および八ケ岳山麓における先時時代資料」『公報 36』諏訪考古学研究会

(12) 棚畑遺跡発掘調査団　1990『棚畑』茅野市教育委員会

(13) 小池岳史　1983「第Ⅲ章発掘された遺構と遺物 (2)縄文時代の遺構とその出土遺物」『中ッ原遺跡』茅野市教育委員会

(14) 藤森栄一　1965「井戸尻の文化 住居と集落の変遷」『井戸尻』中央公論美術出版

(15) 桐原 健　1971「和田遺跡東地区に見られる縄文中期集落の問題点」『長野県考古学会誌第11号』長野県考古学会

(16) 折井 敦　1977「八ケ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」『長野県考古学会誌第28号』長野県考古学会

(17) 今村啓爾　1973「第2部考察編 霧ケ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ケ丘』霧ケ丘遺跡調査団

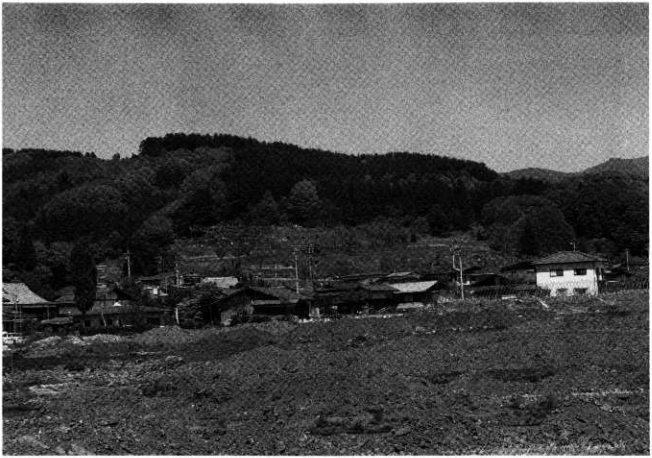
(18) 小薬一夫・小島正裕　1994「仮称「207タイプ」土坑について」『東京考古12』東京考古談話会

(19) 常盤井智行・他　1992「第2章遺構BⅡ類土坑」『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告 —鳴沢頭・鳴沢頭・カサササ野池・休場・下境大原遺跡—』飯山市教育委員会

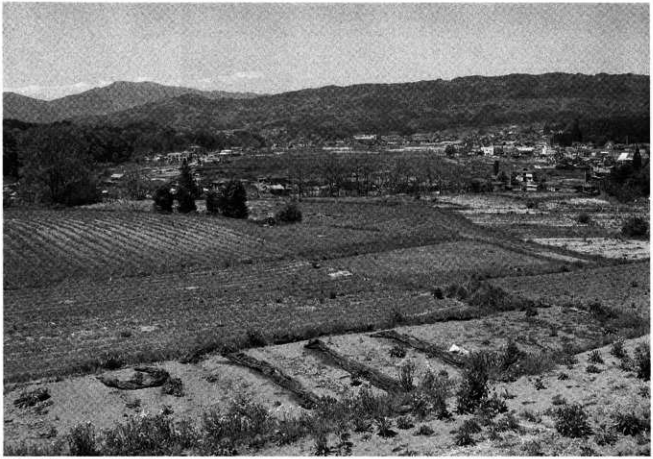
(20) 青沼博之・他　1981「第2節御射山西遺跡 3遺構」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その4・富士見町その3—』長野県教育委員会

(21) 佐藤俊幸・他　1992「第Ⅲ章岩原Ⅰ遺跡3.遺構A.陥穴状土坑」『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原Ⅰ遺跡 上林塚遺跡』新潟県教育委員会

図　　版



(1)遺跡遠景（南西方向から）



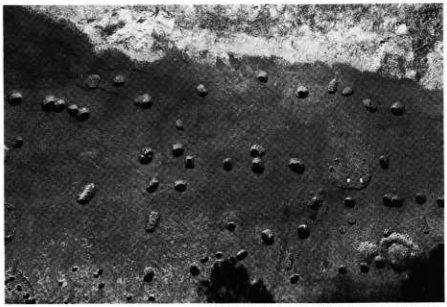
(2)遺跡近景（北東方向から）

図版　2

(1)調査区東側全景（西側から）
幅の狭い尾根状台地に
土坑が点在している。

(2)調査区中央部全景（北側から）
南側から北側方向へ数多く
の坑が密集している。

(3)調査区西側全景（東側から）
南側斜面に沿って竪穴住居
址や土坑の重複が著しい。



(1)調査区東側に点在する土坑
台地の長軸方向に沿って土坑群が規則的に並んでいる。

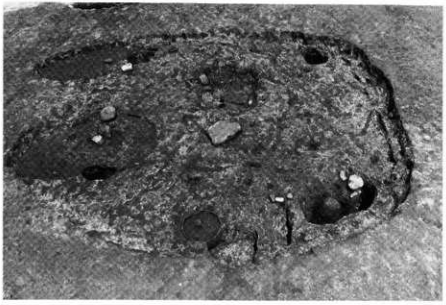
(2)調査区東側に点在する土坑
大型の土坑が北側斜面に沿って一列に並んでいる。

(3)調査区東側に点在する土坑
調査区の東側から西側に規則的に土坑が並ぶ。

図版　4

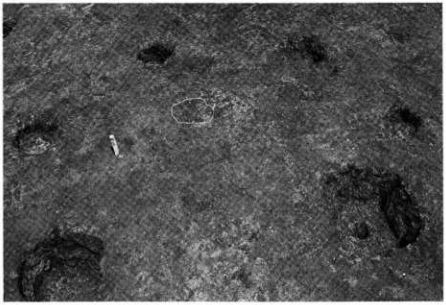
(1)第１号住居址（北側より）

(2)第２号住居址（南側より）

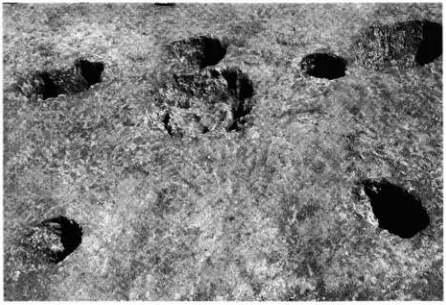


(3)第３号住居址（南側より）

(1)第４号住居址（南側より）

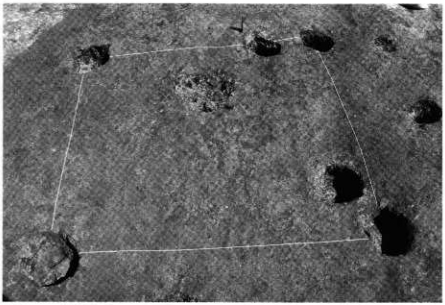


(2)第５号住居址（南側より）



(3)第６号住居址（南側より）

図版　6



(1)第７号住居址（南側より）

(2)第８号住居址（南側より）

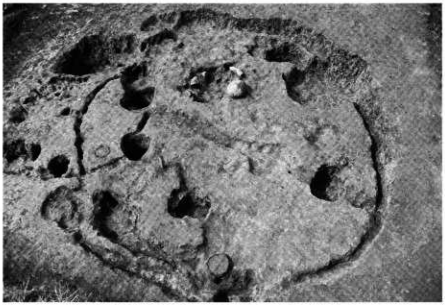
(3)第９号住居址（南側より）

(1)第10号住居址（南側より）

(2)第11号住居址（西側より）

(3)第12号住居址（西側より）

図版　8



(1)第13号住居址（南側より）

(2)第14号住居址（南側より）

(3)第17号住居址（西側より）

(1)第18号住居址（南側より）

(2)第19号住居址（東側より）

(3)第20号住居址（東側より）

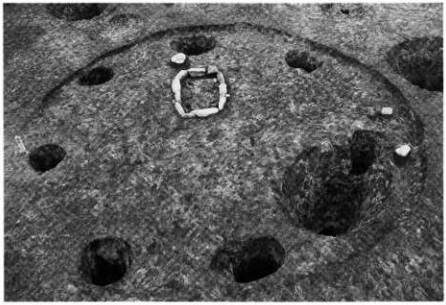
図版　10

(1)第21号住居址（東側より）

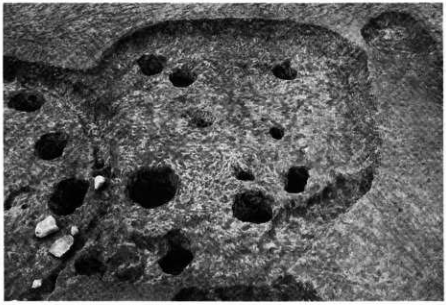
(2)第22号住居址（東側より）

(3)第23号住居址（東側より）

(1)第24号住居址（東側より）



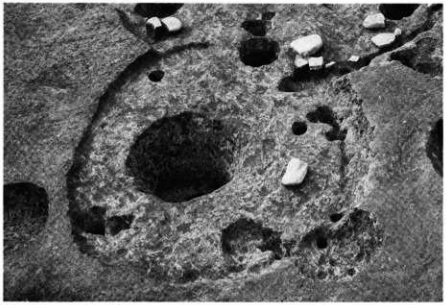
(2)第25号住居址（南側より）



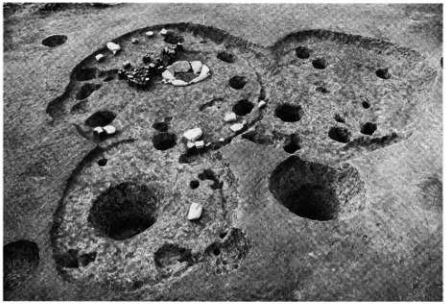
(3)第26号住居址（南側より）

図版　12

(1)第27号住居址（南側より）

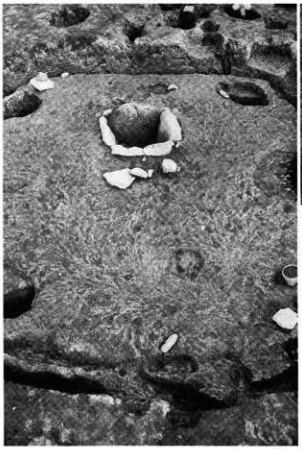


(2)第28号住居址（南側より）



(3)第26号住居址から第28号住居址の重複（南側より）

(1)第29号住居址（西側より）



(2)第29号住居址入口部より奥壁（西側より）

(3)第29号住居址主柱穴（西側より）

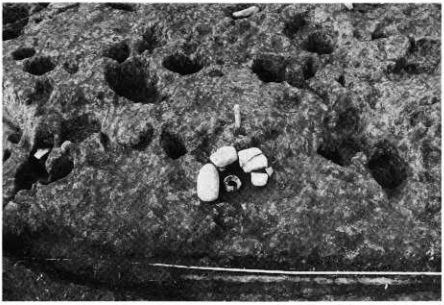
(4)第29号住居址北側周溝（西側より）

図版　14

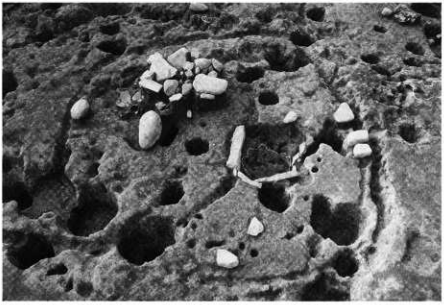
(1)第30号住居址（北側より）

(2)第31号住居址（西側より）

(3)第32号住居址（南側より）



(1)第34号住居址（南側より）

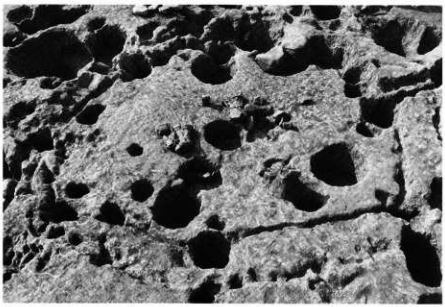


(2)第36号住居址（東側より）

(3)第37号住居址（東側より）

図版　16

(1)第39号住居址から第41号住居址
（南側より）



(2)第43号住居址（東側より）

(3)第49号住居址（西側より）

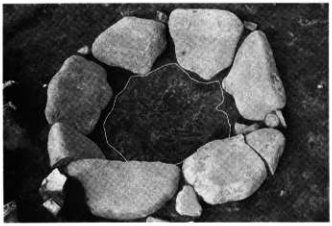
(1)第12号住居址炉址（西側より）

(2)第20号住居址炉址（北側より）

(3)第25号住居址炉址（南側より）

(4)第49号住居址炉址（北側より）

(5)第23号住居址炉址（東側より）



(6)第27号住居址炉址（南側より）

(1)第32号住居址炉址（南側より）

(2)第９号住居址炉址（東側より）

(3)第４号住居址炉址（南側より）

(4)第21号住居址炉址（南側より）

(5)第29号住居址炉址（西側より）

(6)第36号住居址炉址（東側より）

(7)第39号から第41号住居址炉址（西側より）

(8)第３号住居址埋甕（東側より）

(1)第4号住居址埋甕（東側より）

(2)第10号住居址埋甕（西側より）

(3)第13号住居址埋甕（東側より）

(4)第14号住居址埋甕（西側より）

(5)第17号住居址埋甕No.1（東側より）

(6)第17号住居址伏甕（南側より）

(7)第4号住居址伏甕（南側より）

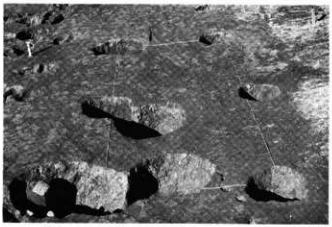
(8)第29号住居址伏甕（西側より）

(1)第１号方形柱穴列（北側より）

(2)第２号方形柱穴列（南側より）

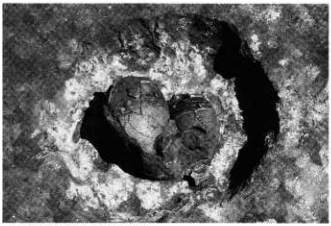
(3)第３号方形柱穴列（南側より）

(4)第３号方形柱穴列（南側より）



(5)第４号方形柱穴列（南側より）

(6)第４号方形柱穴列（南側より）

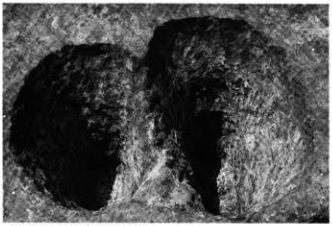


(1)第139号土坑（東側より）

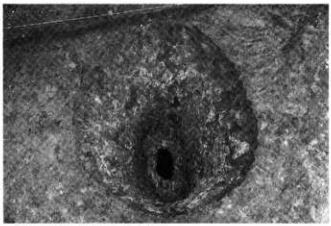
(2)第253号土坑（西側より）

(3)第68・69号土坑（北側より）

(4)第66・67号土坑（北側より）



(5)第54号土坑（北側より）



(6)第142号土坑（西側より）

(7)第６号土坑（北側より）

(8)第55号土坑（北側より）

図版　22

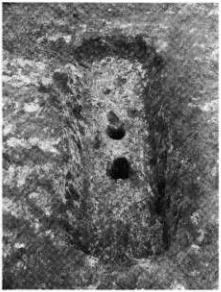
(1)第４号土坑（北側より）

(2)第44号土坑（北側より）

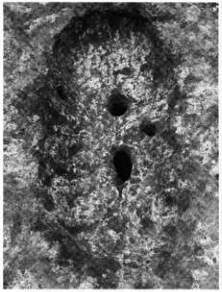
(3)第49号土坑（北側より）

(4)第42号土坑（北側より）

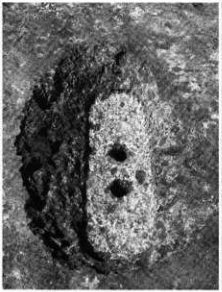
(5)第77号土坑（東側より）



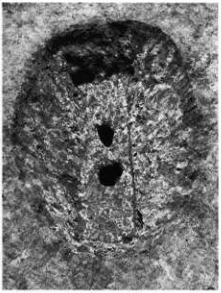
(6)第11号土坑（北側より）



(7)第62号土坑（北側より）



(8)第59号土坑（北側より）



(9)第47号土坑（北側より）

(1)第188号土坑（南側より）

(2)第188号土坑（南側より）

(3)第29・30号土坑（北側より）

(4)第53・54号土坑（西側より）

(5)第53・54号土坑（西側より）

(6)第64号から第69号土坑（西側より）

(7)第64号から第69号土坑（西側より）

(8)第4・28・29・31・44号土坑（北側より）

(9)台地南斜面に展開する土坑群（西側より）

図版　24

(1)遺構検出作業

(2)土坑の掘り下げ作業

(3)発掘作業に携わった方々

報告書抄録

ふりがな	うえのたいら いせき
書名	上の平遺跡
副書名	平成6年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	守矢昌文
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL0266-72-2101
発行年月日	西暦1995年 3月 20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上の平（うえのたいら）	長野県茅野市 米沢 上の平	20214	26	36度 1分 56秒	138度 12分 32秒	19940524～ 19941222	6,341.8	県営圃場整備事業に伴う発掘調査

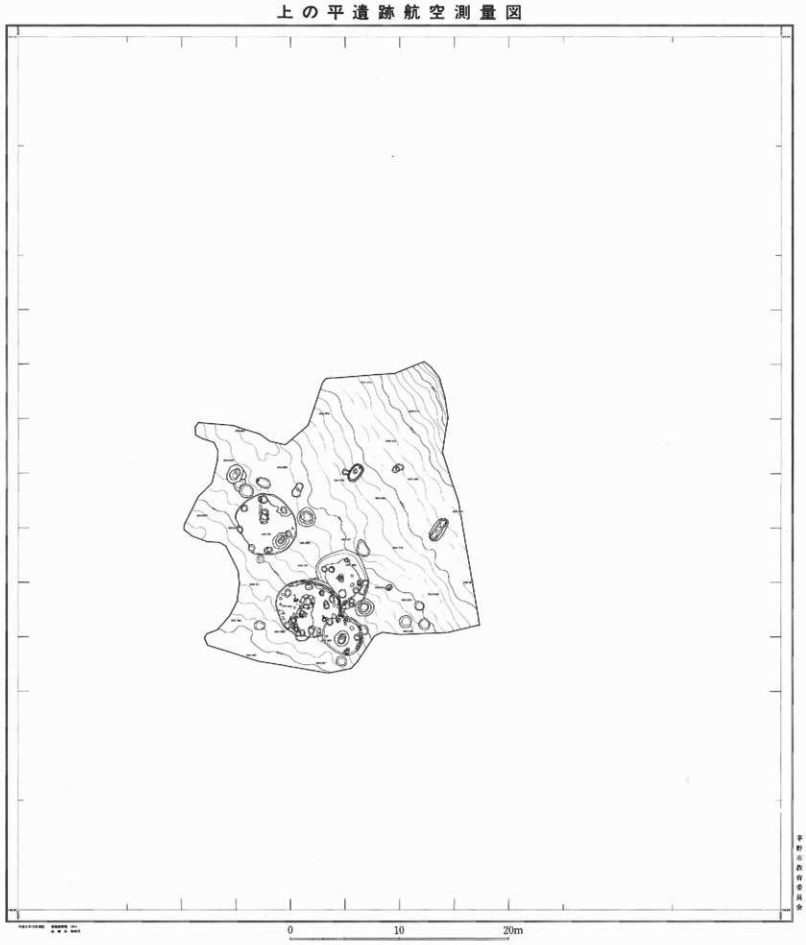
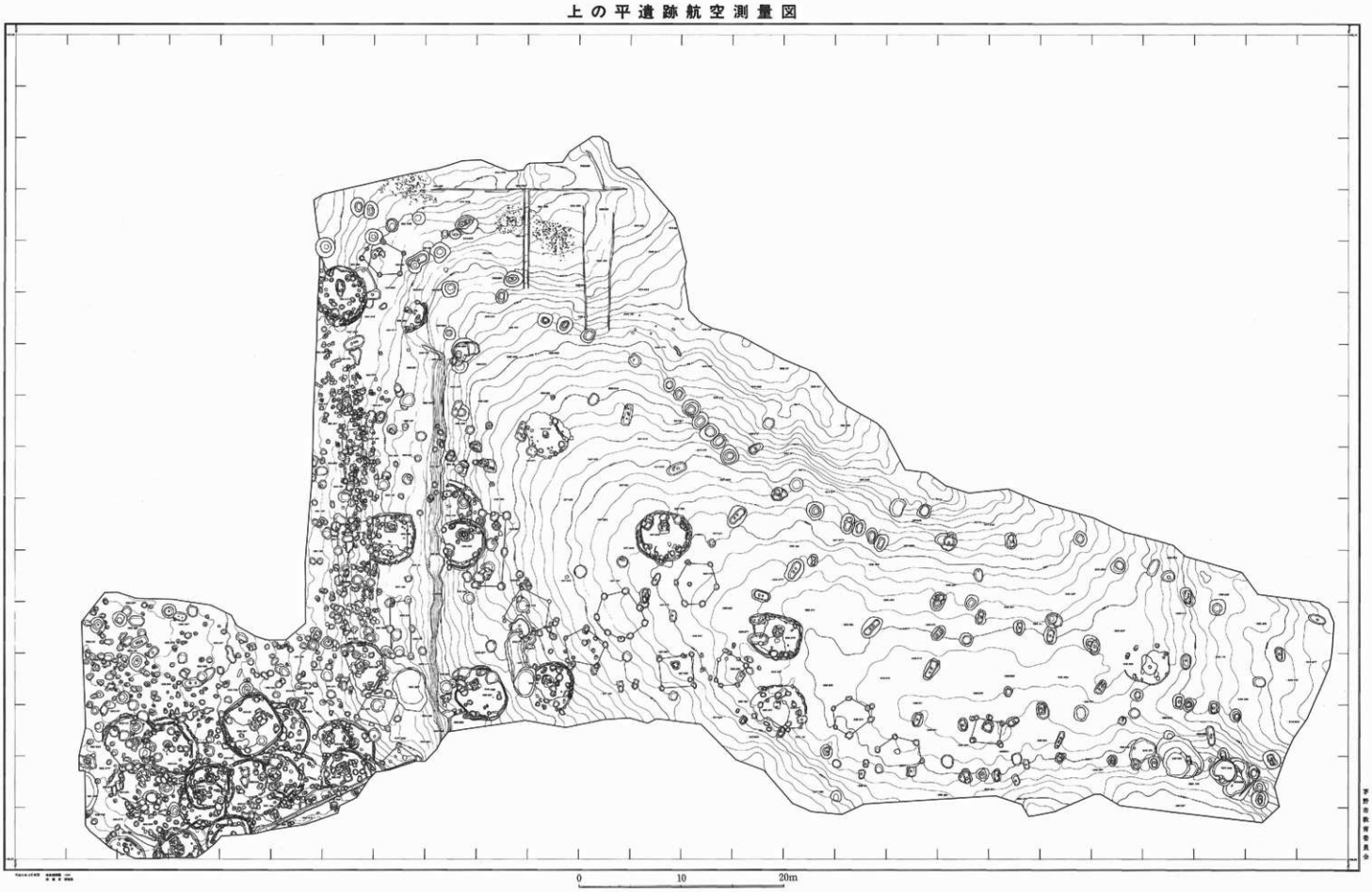
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上の平	集落址	旧石器		彫器・剥片	旧石器時代の散布地
		縄文	竪穴住居51軒	中期後半土器	縄文時代中期の集落址
			土坑269基	黒曜石製石器	
			ピット群	打製石斧	
		中世	地下式坑7基	白磁・天目茶腕	

上の平遺跡

——平成6年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成7年3月16日　印刷
平成7年3月20日　発行
編集　茅野市教育委員会
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原2丁目6番地1号（0266）72 2101（代）
印刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5（0262）44-0235

上の平遺跡航空測量図



上の平遺跡航空測量図